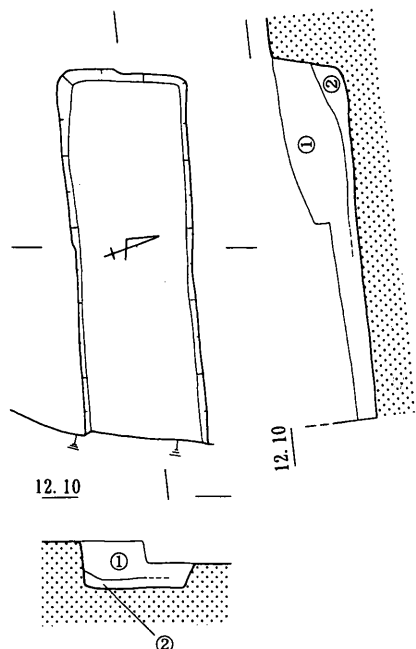
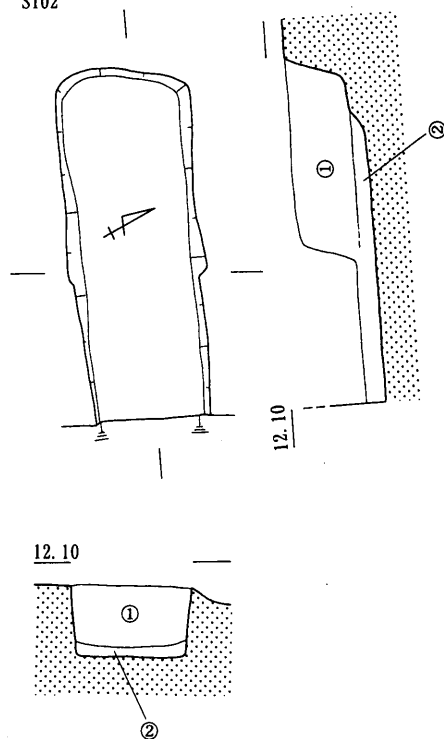


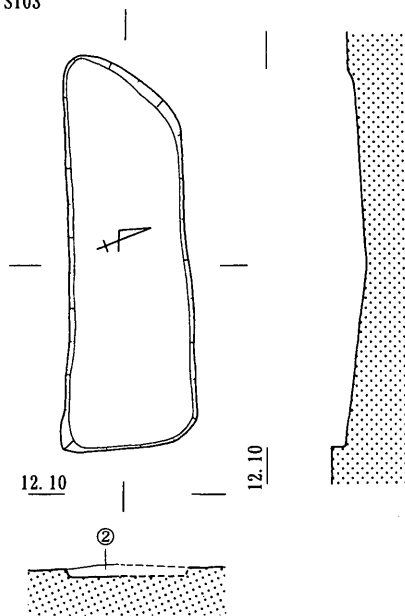
ST01



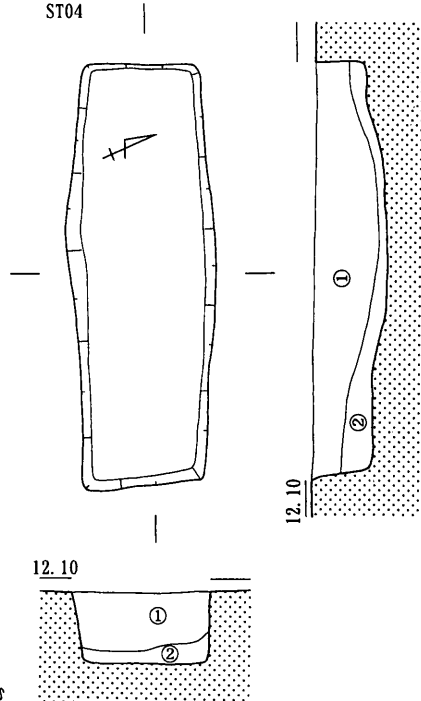
ST02



ST03



ST04



- ① 黒褐色弱粘質土 3mm程度の黄褐色弱粘質土ブロックを含む
- ② 黒褐色弱粘質土 黄褐色弱粘質土を若干含む



第270図 IV区 第1面ST01~04平・断面図(1/40)

c mを測る。主軸方向はN-69°-Wである。出土遺物はない。埋土は2層に区分される。黒褐色粘質土であり、地山ブロックを含む。②層は底場の形状に合わせて同程度の厚さで堆積する。土坑墓の時期は冒頭での検討より中世と考える。

#### S T 05 (第 271 図)

旧F2区(東)の北東隅で検出した土坑墓である。S T 07を切る。平面形は整った長方形である。断面形は壁がほぼ直に落ち、底場は平坦である。東側に向かってごく緩やかに下る。規模は長径1.80 m、短径76 c m、深さ26 c mを測る。主軸方向はN-59°-Wである。出土遺物はない。埋土は2層に区分される。黒褐色系粘質土であり、①'層に地山ブロックを含む。土坑墓の時期は冒頭での検討より中世と考える。

#### S T 06 (第 271 図)

旧F2区(東)の北東隅で検出した土坑墓である。S T 07を切る。平面形は整った長方形であり、西側が幅広となる。断面形は壁がほぼ直に落ち、底場は平坦である。東側に向かってごく緩やかに下る。規模は長径1.80 m、短径80 c m、深さ28 c mを測る。主軸方向はN-50°-Wである。出土遺物はない。埋土は2層に区分される。黒褐色系粘質土であり、①'層に地山ブロックを含む。土坑西側が幅広で底場レベルも高いため西頭位と考えられる。土坑墓の時期は冒頭での検討より中世と考える。

#### S T 07 (第 271 図)

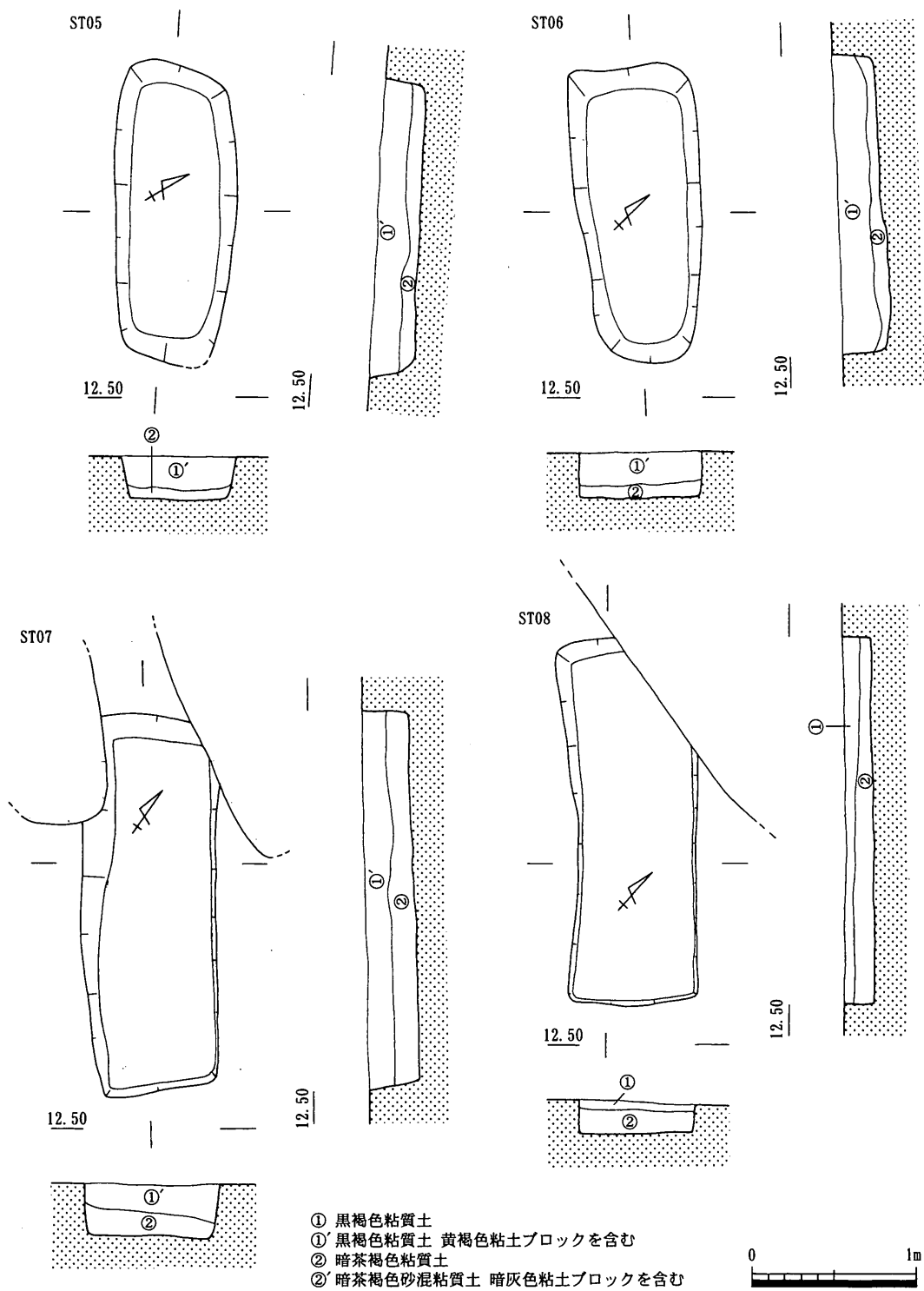
旧F2区(東)の北東隅で検出した土坑墓である。S T 06に切られる。平面形は整った長方形であり、西側が幅広となる。断面形は壁がほぼ直に落ち、底場は平坦である。東側に向かってごく緩やかに下る。規模は長径2.32 m、短径84 c m、深さ32 c mを測る。主軸方向はN-39°-Wである。出土遺物はない。埋土は2層に区分される。黒褐色系粘質土であり、①'層に地山ブロックを含む。土坑西側が幅広で底場レベルも高いため西頭位と考えられる。土坑墓の時期は冒頭での検討より中世と考える。

#### S T 08 (第 271 図)

旧F2区(東)の北東隅で検出した土坑墓である。平面形は整った長方形であり、東、西端が幅広となる。断面形は壁がほぼ直に落ち、底場は平坦である。東側に向かってごく緩やかに下る。規模は長径2.22 m、短径80 c m、深さ20 c mを測る。主軸方向はN-41°-Wである。出土遺物はない。埋土は2層に区分される。黒褐色系粘質土である。土坑墓の時期は冒頭での検討より中世と考える。

#### S T 09 (第 272 図)

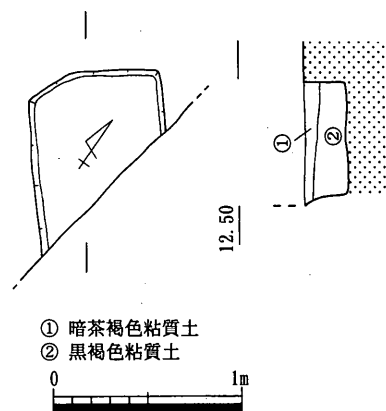
旧F2区(東)の北東隅で検出した土坑墓である。南部が調査区外に延びるが、平面形は整った長方形と推定される。断面形は壁がほぼ直に落ち、底場は平坦である。規模は長径80 c m以上、短径70 c m以上、深さ22 c mを測る。主軸方向はN-36°-Wである。出土遺物はない。埋土は2層に区分される。黒褐色系粘質土である。土坑墓の時期は冒頭での検討より中世と考える。



第271図 IV区 第1面ST05~08平・断面図(1/40)

ST 10 (第 273 図)

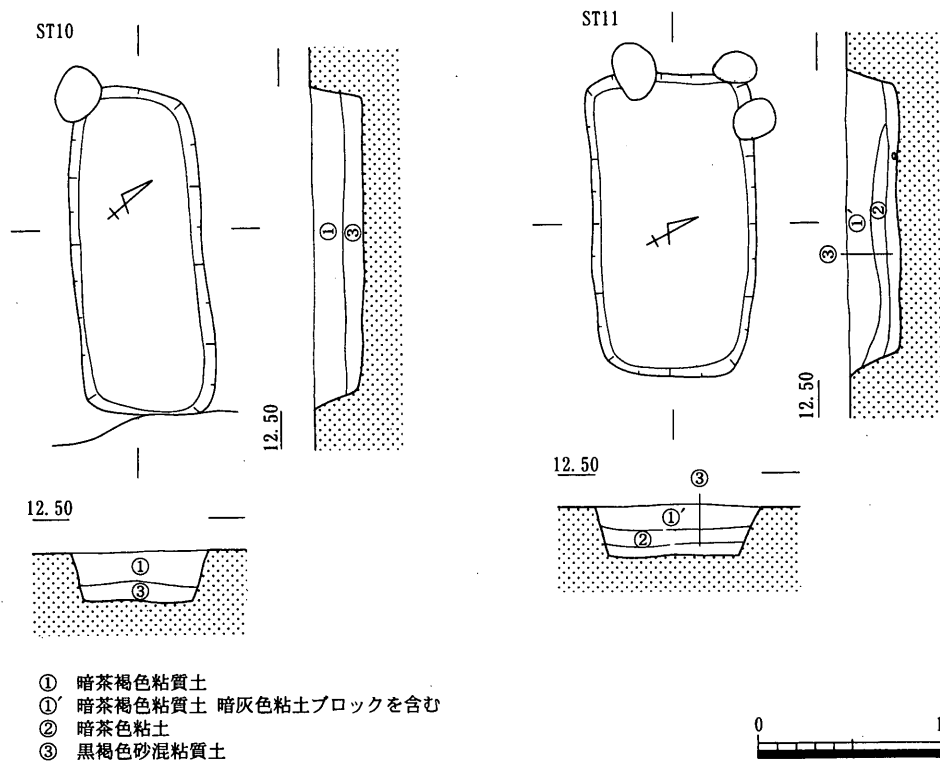
旧 F 2 区 (東) の北西部で検出した土坑墓である。平面形は整った長方形であり、東側が幅広くなっている。断面形は壁がほぼ直に落ち、底場は平坦である。西側に向かってごく緩やかに下る。規模は長径 1.72 m 以上、短径 72 cm、深さ 28 cm を測る。主軸方向は N-50°-W である。出土遺物はない。埋土は 2 層に区分される。黒褐色系粘質土である。土坑東側が幅広で底場レベルも高いため東頭位と考えられる。土坑墓の時期は冒頭での検討より中世と考える。



第272図 IV区 第1面ST09  
平・断面図(1/40)

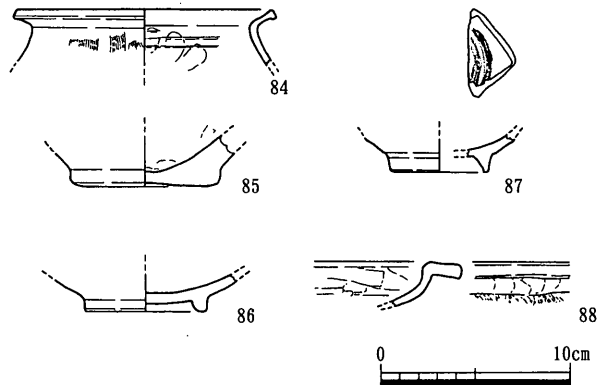
ST 11 (第 273 図)

旧 F 2 区 (東) の北西部で検出した土坑墓である。平面形は整った



第273図 IV区 第1面ST10・ST11平・断面図(1/40)

長方形である。断面形は壁がほぼ直に落ち、底場は平坦である。規模は長径 1.60 m、短径 88 cm、深さ 28 cm を測る。主軸方向は N-61°-W である。出土遺物はない。埋土は 2 層に区分される。黒褐色系粘質土である。土坑墓の時期は冒頭での検討より中世と考える。



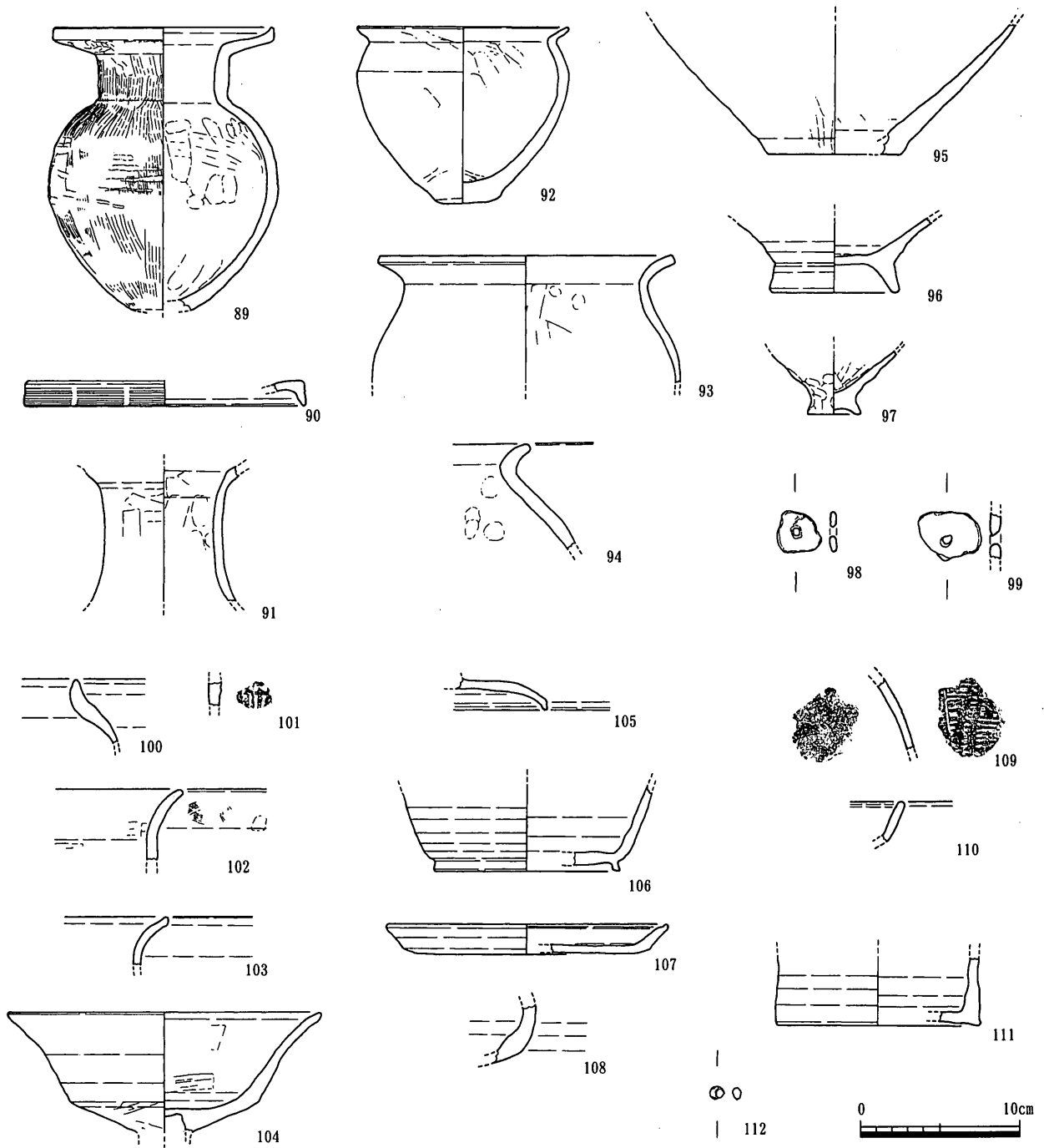
(5) 包含層出土遺物 (第 274 ~ 276 図)

機械掘削、上面精査、包含層など遺構外から出土した遺物を図化した。以下では旧調査区ご

第274図 IV区 第1面包含層出土遺物(1) (1/4)

とに説明する。84～88は旧E3区で出土した遺物である。84、85は弥生土器である。84は甕である。口縁端部を肥厚させ、外面にハケ目が見られる。86は黒色土器A類椀である。断面方形の小さい高台をもつ。87、88は近世遺物である。87は陶器碗である。88は瓦質土器焙烙である。口縁部直下外面に顕著な指オサエが見られる。

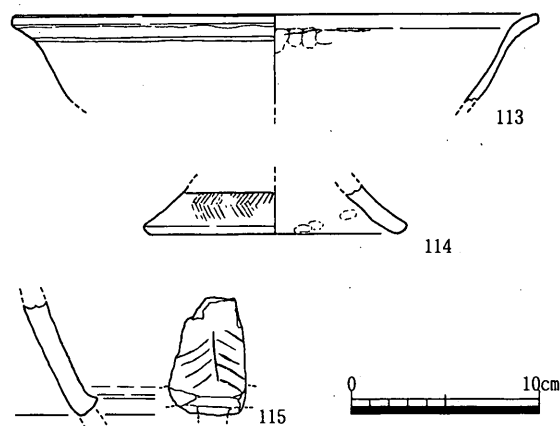
89～112は旧F1区で出土した遺物である。89～99は弥生土器である。89は壺である。外面は頸部から体部上半にかけてハケ目、体部下半はタタキ後ハケ目を施す。体部内面はヘラケズリを施す。底部は欠くが丸味を帯びる。91は長頸壺である。外内面に板ナデが見られる。92～94は甕である。92は外内に、93は内面に板ナデを施す。97は台付鉢である。外面に著しい指オサエが見られる。



第275図 IV区 第1面包含層出土遺物(2) (1/4)

98、99は紡錘車である。100、102～104は布留系の土器である。100は小型丸底壺である。口縁部がほぼ直立し、口縁、体部境界が肥厚する。101は韓式系土器の平底鉢片である。長方形の整然とした格子目タタキが外面に見られる。104は高杯である。内湾する長い口縁部をもち、内面にハケ目を施す。105～109は古代の須恵器（105～107は8世紀代）である。105は杯蓋である。外面を回転ヘラケズリし、つまみ部分を欠く。106は杯身である。高台が体、底部境界に位置する。底部外面はヘラケズリする。107は皿である。口縁端部内面を小さくくぼませる。108は壺の体部下半である。110は古代の土師器杯である。111は近世のサヤ鉢である。体部外面は被熱による器表面のガラス化のため褐色の照りが見られる。底部外面に離れ砂が付着する。成重遺跡の東側にある谷遺跡（19世紀前半の陶器窯を検出）で多量に用いられた窯道具である。

113～115は旧F2区（西）で出土した遺物である。113は布留系の鉢である。114、115は弥生土器の高杯脚である。114は綾杉状の記号文を横方向に施す。115は2段透かしであり、綾杉状の記号文を縦方向に施す。



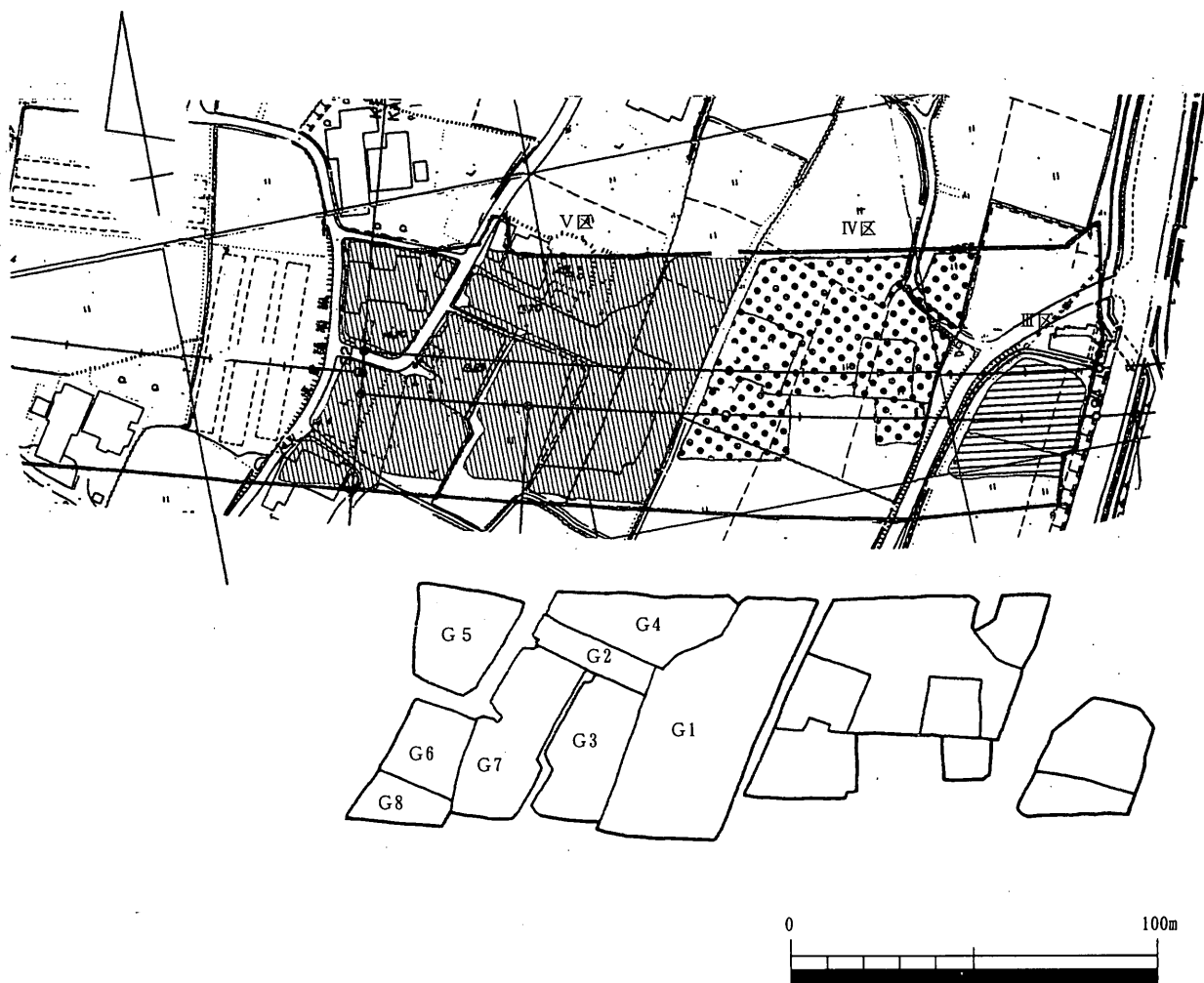
第276図 IV区 第1面包含層出土遺物(3)(1/4)

## 第6節 V区の調査成果

### (1) 調査区の概要

V区は成重遺跡の調査対象地のうち西端に位置する。地形的には西側にある湊川により形成された自然堤防上にある。調査区西では段丘崖が南北に延び、以西では氾濫原が広がる。また東部のIV区へ向かってゆるく傾斜しており、V区が微高地となっている。他の調査区と同様、南から北にごくゆるやかに傾斜する。

遺構面は2ないし3面確認した。ここでは第1遺構面に掘削された古墳時代～近世の遺構を報告する。(古墳構築面は中世遺構面より下位であるがここでは合わせて第1面の遺構として報告する。) 主要な検出遺構は以下のとおりである。古墳時代後期の横穴式石室2基、古代の焼成遺構(炭窯?) 1基、中世の掘立柱建物19棟・柵列・土坑群、近世の掘立柱建物1棟・砂糖竈1基。遺構分布を見ると中世の遺構が東側(旧G1～G3区)に、近世の遺構が西側(旧G4～G8区)に集中する。



第277図 V区 新旧調査区割り図(1/2000)

## (2) 古墳時代の遺構・遺物

### 古墳

#### 1号墳(第279～286図)

横穴式石室を主体とする円墳である。

立地と現状 旧G1区の中央部に位置し、同時期の2号墳が東側に隣接する。1、2号墳周囲の遺構面レベルは12.6～12.7mを測り、通常古墳より低位にある。またG1区は南北32mを測るが、遺構面の比高差は50cmしかない。

盛り土、石室はほとんど削平され、西側上面には中世の柱穴、溝などが掘削されている。また2号墳では盛り土上面に中世遺構面ベース土が堆積している。よって中世期には墳丘が大きく破壊され(てい)たと考えられる。だが、石室内の埋土は固くしまった粘質土であり、水平堆積することから古墳崩壊以前の堆積土であると考えられる。

墳丘 規模は周溝を含めると南北11.4m、東西10.4mを測る。盛り土は最大でも高さ約30cmが残存するのみである。以下では墳丘の構築方法を説明するが、そのためB-B'、C-C'断面を使う。まず古墳の構築位置に整地土兼盛り土(9、15層)を敷く。この上から墓坑を掘削し(B-B'断面の石室西側では遺構面上から墓坑を掘り込んでいる。上位の盛り土は残存していないが、遺構面レベルが石室東側の9層の上面レベルと一致するためこの部分では整地土が存在しないと考えられる。)、内部に基底石を据える。この時基底石に沿って7、8層を裏込めするが、両層を床面にも敷く。(裏込め兼床面形成土)その後7層上に6層を敷く。B-B'ラインでは6層が石室内にも施され基底石を固定するが、主に墳丘盛り土である。石室内では7層上にさらに5層を敷き、床面を平坦にする。この床面上に礫床が形成される。盛り土の構築単位は残存状況が悪いため不明であるが、いずれも固く突き固められている。

周溝 周溝の平面形はやや角張る円形を呈する。幅30cm～1m、深さ10～20cmを測り、断面形は浅い逆台形を呈する。底場は平坦である。埋土は黄褐色系、暗褐色系の粘質土である。出土遺物は後述する。

墓坑 墓坑掘り方は南側から見ると羽子板状を呈する。断面形は東西方向で逆台形を呈し、底場は平らである。南北方向でも微妙な起伏はあるが、底場はほぼ平坦である。規模は南北7.6m、東西の最大幅3.0mを測る。盛り土上から掘り込んでおり、深さ20cmを測る。

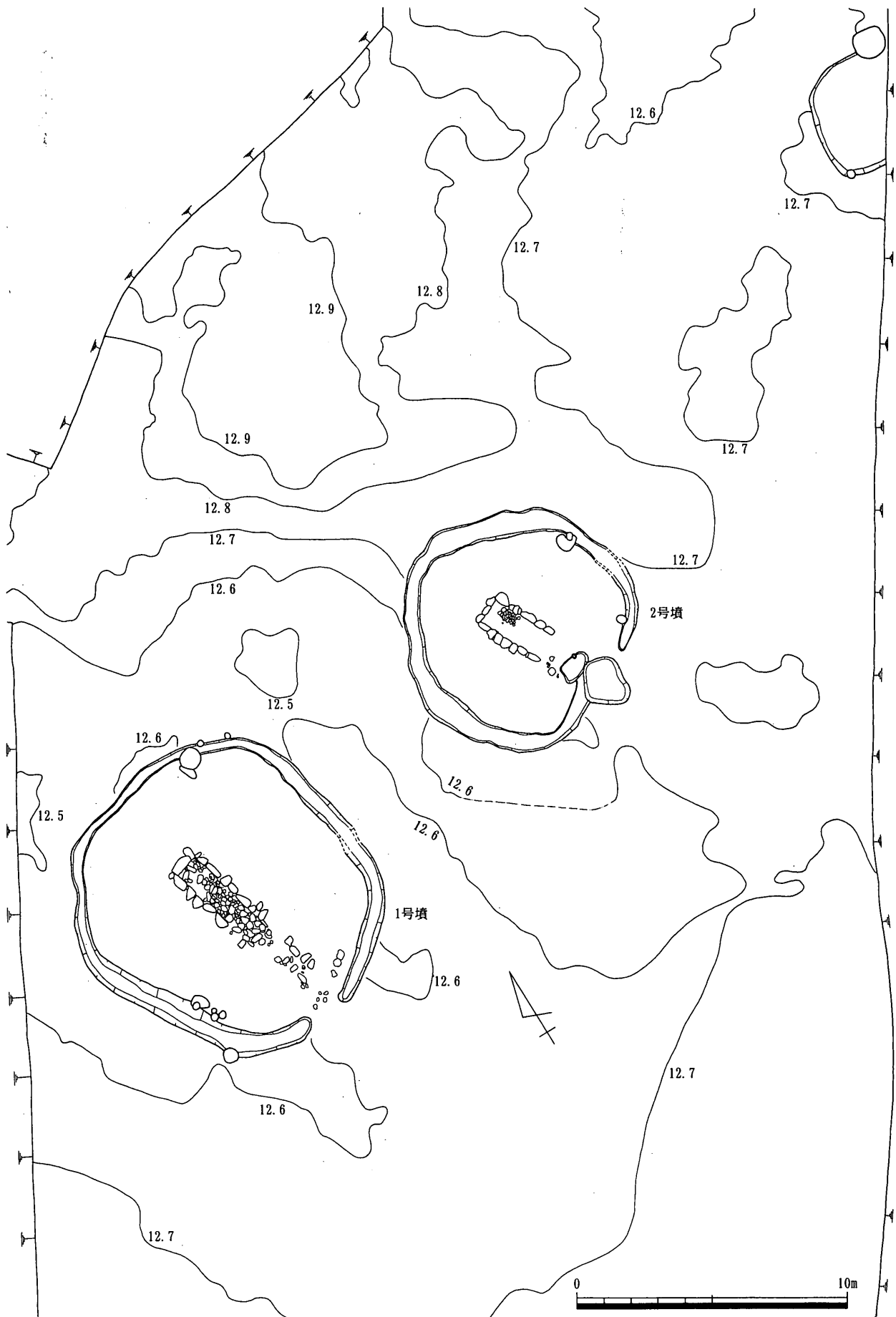
石室 南側に開口し、主軸方向はN-15°-Wである。著しい削平により遺存状況は極めて悪く、概ね基底石しか残存しない。羨道では基底石もほとんど失われるため石室形態は不明である。だが、奥壁より3.5mの位置に仕切石(長さ約50cm、厚さ15cmを測る大きな砂岩礫で床面直上に据えられる。1次礫床より上面レベルも高い。)があり、玄室と羨道を区分できる。石室各部の計測値は全長6.4m、玄室長3.6m、玄室奥壁幅90cm、羨道長2.6mである。玄室の平面形はほぼ長方形であるが、東側壁は羨道側に向かって少しずつ狭まる。

奥壁は2石で構築する。西側に85cm×40cm、厚さ36cmの大振り(の)礫を横方向に、東側に

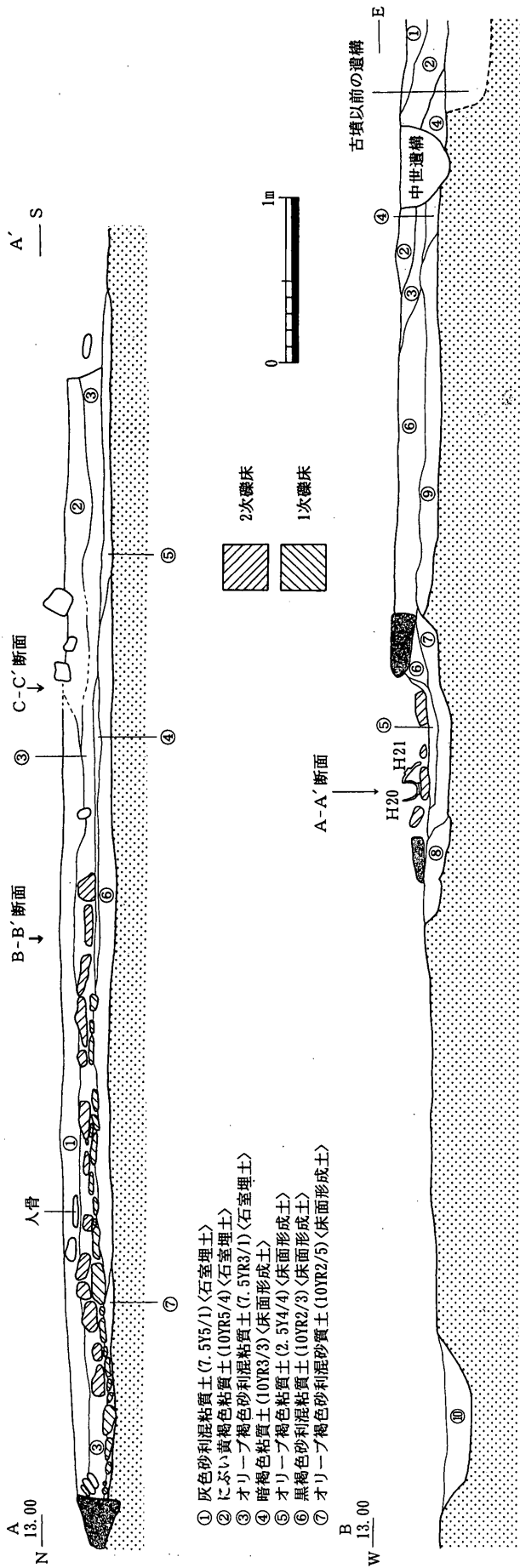




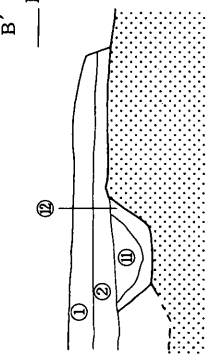
第278図 V区 第1面遺構配置図(1/400)



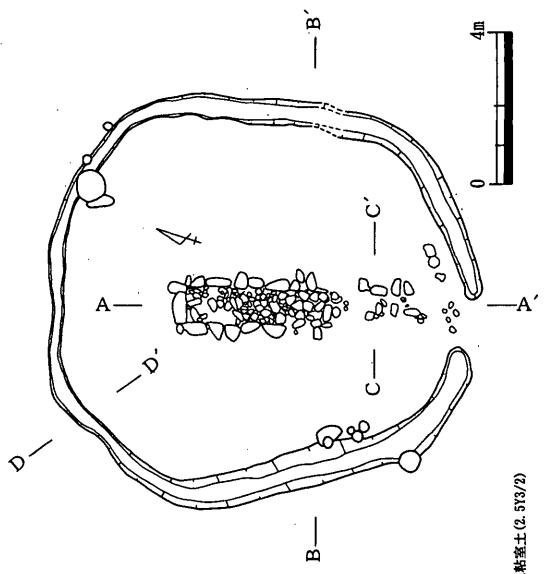
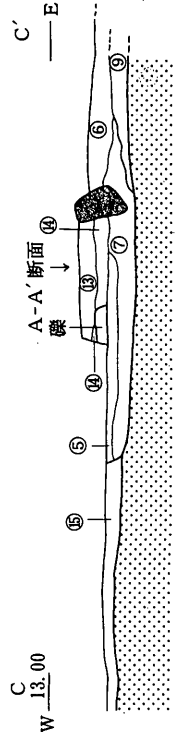
第279图 V区 第1面1·2号墳配置图(1/200)



- ① 灰色砂利混粘質土 (7.5Y5/1) <石室埋土>
- ② にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4) <石室埋土>
- ③ オリーブ褐色砂利混粘質土 (7.5YR3/1) <石室埋土>
- ④ 暗褐色粘質土 (10YR3/3) <床面形成土>
- ⑤ オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/4) <床面形成土>
- ⑥ 黒褐色砂利混粘質土 (10YR2/3) <床面形成土>
- ⑦ オリーブ褐色砂利混砂質土 (10YR2/5) <床面形成土>

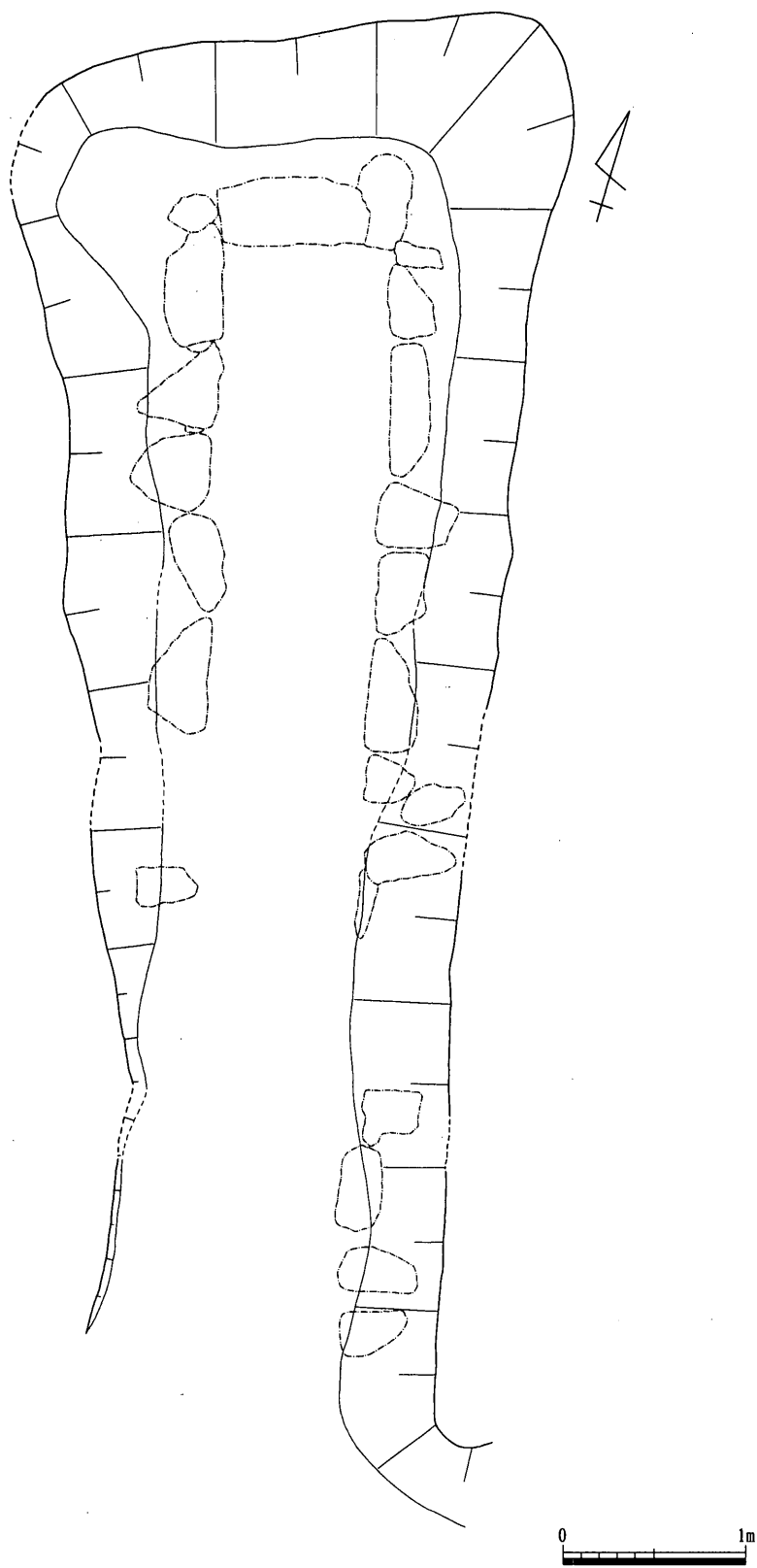


- ① 黒褐色砂利混粘質土 (10YR3/2)
- ② 暗褐色砂利混粘質土 (10YR3/4)
- ③ 褐色砂利混粘質土 (10YR4/4) <盛土>
- ④ 暗オリーブ褐色砂利混粘質土 (2.5Y3/3) <盛土>
- ⑤ 暗褐色粘質土 (10YR3/3) <床面形成土>
- ⑥ オリーブ黒色砂利混粘質土 (7.5Y3/2) <盛土・墓底石裏込め>
- ⑦ 黒褐色粘質土 (10YR2/3) <床面形成土>
- ⑧ 暗褐色砂利粘質土 (10YR3/3) 地山ブロックを多く含む<墓底石裏込め>
- ⑨ にぶい黄褐色砂利混粘質土 (10YR4/3) <盛土>
- ⑩ 暗オリーブ褐色微砂粘質土 (2.5Y3/3) 黒褐色粘質土ブロックを含む<周溝>
- ⑪ 暗オリーブ褐色砂利混粘質土 (2.5Y3/2) 地山ブロックを含む<周溝>
- ⑫ にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) <周溝>
- ⑬ にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4) <石室埋土>
- ⑭ オリーブ褐色砂利混粘質土 (7.5YR3/1) <石室埋土>
- ⑮ 暗オリーブ褐色粘質土 (2.5Y3/3) <盛土、この上から墓堀り込み>



① 暗オリーブ褐色砂利混粘質土 (2.5Y3/2)

第280図 V区 第1面1号墳土層断面図(1/40, 1/200)



第281图 V区 第1面1号墳墓墳平面図(1/40)

50 cm×30 cm、厚さ 28 cmの礫を縦方向に据える。玄室側壁は長さ 25～70 cmと大きさに幅があるが、概ね 40 cm以上の礫を、羨道側壁は 20～40 cmと小振りの礫を用いる。これらの礫は玄室西側壁の 1 点を除き、砂岩である。

## 床面

### 〔1次礫床、棺台と出土遺物、棺配置〕

〈1次礫床〉先述の通り基底石を据え、床面を形成（第 280 図 A-A' ライン 4～7 層）した後 1 次礫床を敷く。礫床直下の床面上で出土遺物はない。礫床は全て平らな砂岩礫を使用している。奥壁から南北 3.1 m の範囲に敷いており、仕切石までは延びない。（仕切石付近に見られる床面直上の礫床は 2 次礫床と考える。詳細は後述する。）

礫敷きの状況は奥壁側と羨道側で異なる。奥壁側の南北 1.4 m の範囲では 10 cm 前後と小振りの礫が多く、上面レベルは 12.6～12.65 m を測る。ややレベル差があるが、第 280 図で示される通り奥壁側に向かって緩く傾斜するため、面は揃っている。一方羨道側の南北 1.7 m の範囲では 15 cm 前後とやや大振りの礫がほとんどであり、上面レベルはほぼ 12.7 m とやや高く、平坦である。両者の境界部では 30 cm 弱の大きな礫が並び、この境界を意識しているように見える。こうした差異は奥壁側の範囲が 1.4 m とやや狭いものの玄室内で異なる埋葬区画として利用された可能性を示す。

1 次礫床に伴う遺物は両者の境界より約 40 cm 南側で須恵器杯身（5）が出土した。床面よりやや浮くが口縁部を上位に向けており、ほぼ原位置を保つと考える。先の埋葬区画を前提とするとこれに伴う埋葬は玄室南側で行われたと考えられる（第 284 図棺 A）。

〈棺台〉棺台は奥壁際の西寄りで確認した。1 次礫床上に 20～40 cm の礫が長方形を呈するように規則的に配置されている。規模は南北約 2 m、東西約 60 cm を測る（第 284 図棺 B）。礫の上面レベルはほぼ 12.75 m と一定である。棺台に関連する遺物として須恵器高杯（10、11）、人骨がある。

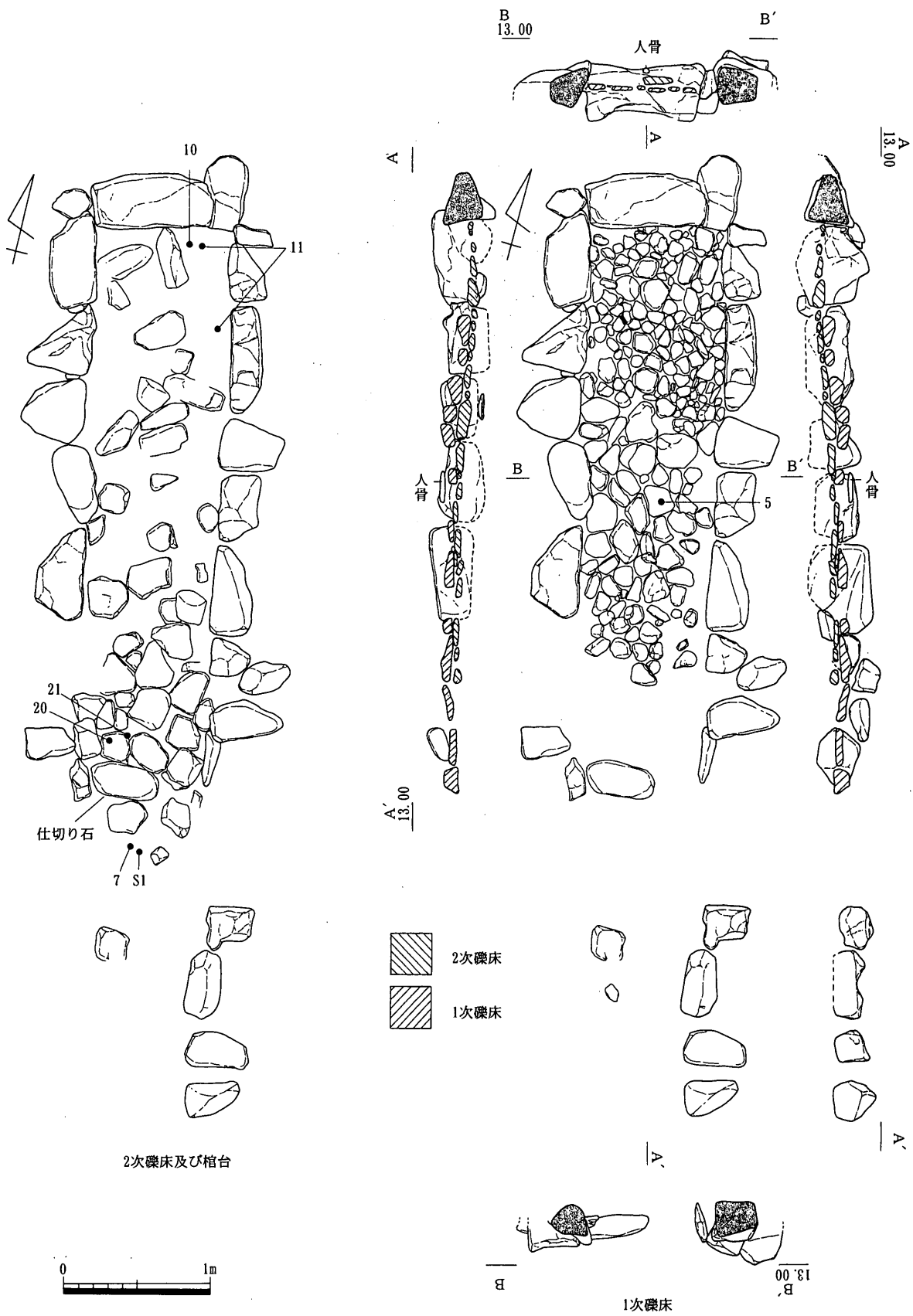
高杯は奥壁と棺台の礫に接する位置でまとまり、10 が横向きに、11 が口縁部を下位にして出土した。1 次礫床からは浮いている。出土状況、位置から棺台上の埋葬に伴い片付けられたと考える。人骨は棺台内の南寄りで 2 本が石室の主軸と方向を揃え、棺台の上面レベルより数 cm 浮いて出土した。出土位置、レベルより棺台内の埋葬に伴い、上腕骨であると考え。また棺台レベルからの浮きは腐朽した木棺の底板の厚さを反映すると考える。なお 1 次礫床に伴うとした杯身はほぼ床面直上で出土し、人骨より下位のレベルにあるため棺台には伴わない。

### 〔2次礫床と出土遺物、棺配置〕

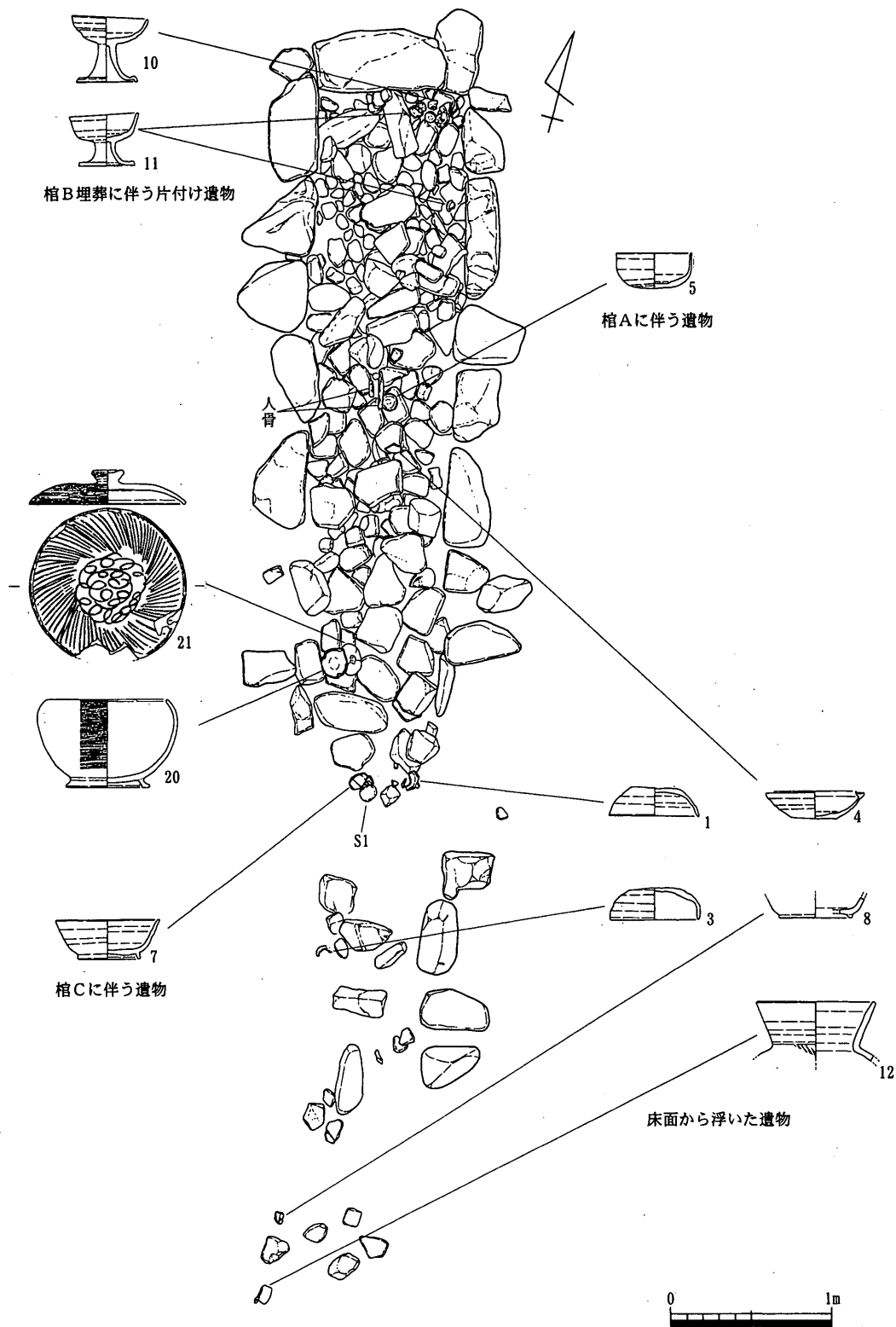
2 次礫床は北側では 1 次礫床上に直に礫を重ねて形成する。一方南側の仕切り石付近では床面直上に礫を敷く。先に後者を 2 次礫床と見るとしたが、次の 2 点による。①北側の 2 次礫床と同様に 25～40 cm 程度の大振りの礫が整然と並ぶ。②上面レベルは 12.75～12.8 m と同じで、1 次礫床より高い。このように見ると範囲は棺台のすぐ南側から仕切り石のすぐ南側までとなり、南北 1.9 m を測る。

この場合仕切り石がどのような状態にあったかが問題となるが、上面レベルは 12.8 m と他の 2 次礫床と同程度である。よってこの段階では 2 次礫床の一部として扱われたと考える。

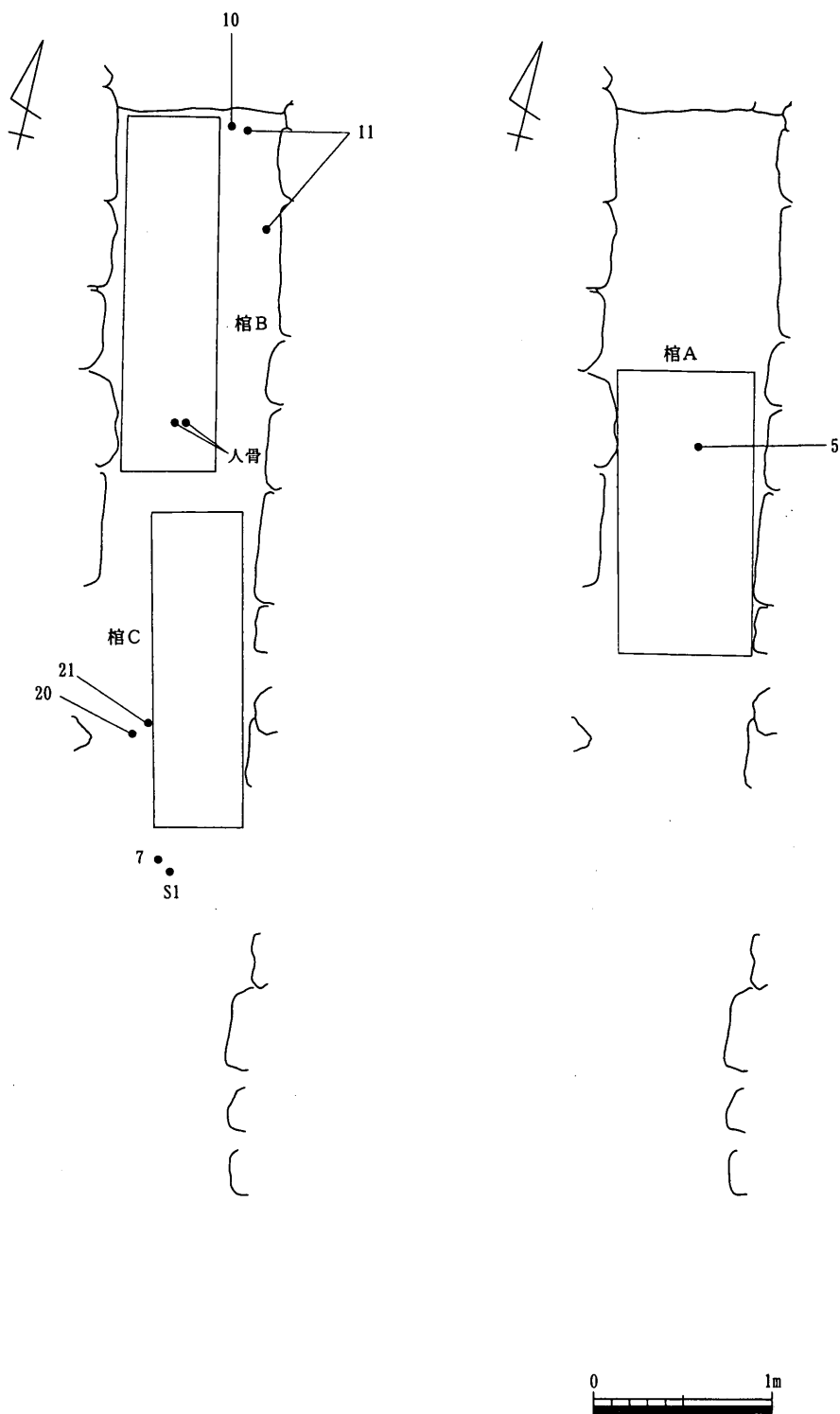
2 次礫床に伴う遺物として須恵器杯身（7）、土師器蓋（21）、鉢（20）がある。7 は 2 次礫床が途切れてすぐの位置でほぼ床面直上から出土し、原位置を保つと考えられる。20、21 は 2 次礫床上面にへ



第282図 V区 第1面1号墳平・立面図(1/40)



第283図 V区 第1面1号墳遺物出土状況図(1/40)



第284図 V区 第1面1号墳棺配置推定図(1/40)



ばりついて出土し、原位置を保つと考えられる。また 21 が 20 にもたせかけたような出土状況を示すことから本来は鉢の上に蓋をかぶせて副葬されたと考えられる。これらの出土位置から 2 次礫床の東側が空白部となり、その範囲は南北 2 m、東西 60cm を測る。後述するとおり遺物は同時期の所産とできること、空白部の規模からここに埋葬が行われたと考える（第 282 図棺 C）。

#### 出土遺物

1～18 は須恵器である。1～3 は杯蓋である。口径は 10 cm 前後と小さく、ヘラ切りする。TK217 併行期と考えられる。4、5 は杯身である。4 は立ち上がりが小さく口縁部よりわずかに上位にある。底部をヘラ切りする。TK217 併行期と考えられる。1～4 は石室内から出土したが、床面から浮いており 2 次的な移動を受けている。ただ古墳出土遺物では最古の形式であり、この時期から埋葬が行われたと考えられる。5 は口縁部がほぼ直立し箱型の器形を呈する。6 は杯蓋である。羨道開口部で出土している。扁平なつまみをもつ。7 世紀後半と考えられる。7、8 は杯身である。7 は高く外に踏ん張る高台をもつ。8 は 7 より小さい高台が外側に付く。後出的な形態である。8 は開口部付近で床面から浮いて出土した。7、8 は 7 世紀後半と考えられる。9～11 は高杯である。10、11 は短脚の無蓋高杯であり、10 は椀形の、11 は箱型の杯部を持つ。12～18 は甕である。12 は羨道開口部で床面から浮いて出土した。周溝検出中に出土した 13、14 と胎土、色調から同一個体と考える。18 は内面に青海波文が見られる。

19～21 は土師器である。19 は杯である。20、21 は畿内産土師器の模倣形態であり、酷似する精良な胎土で製作されている。20 は鉢である。外面にヘラミガキを密に施す。また高台を持つ。21 は扁平なつまみを持つ。外面に密にヘラ磨き、内面中央にらせん状ミガキ、その外縁に放射状ミガキを施す。

22～27 は鉄器である。22 は鉄族である。23 は刀子である。周溝より出土している。24 はヤリガンナである。周溝の上面精査で出土した。25～27 は鉄釘である。25 は周溝掘削中に出土した。

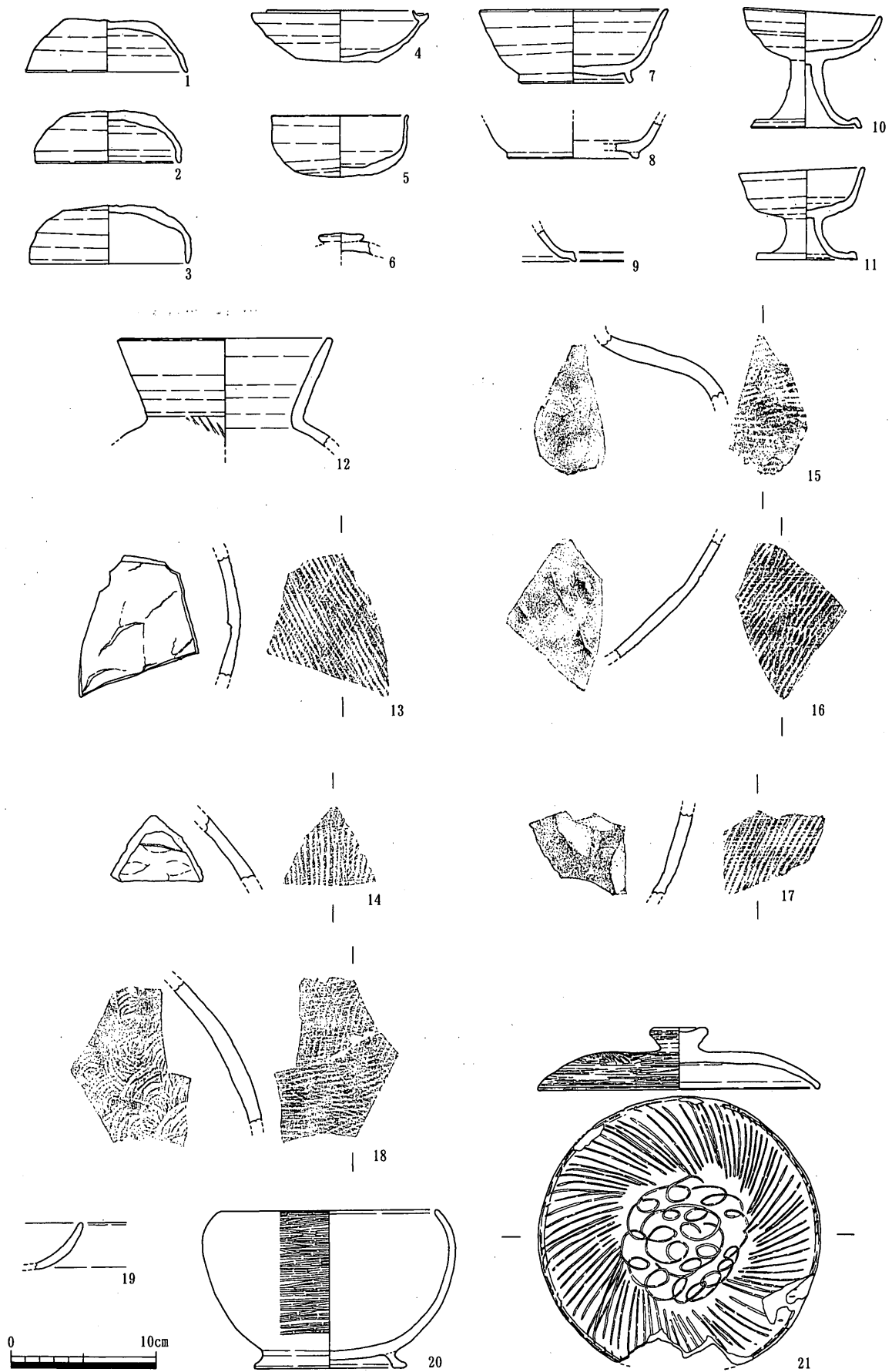
#### 埋葬順序

1 号墳では各礫床、棺台の直上で出土した土器、人骨があり、一部はまとまる。これについて礫床上にしまりのよい粘質土が水平堆積し、古墳の崩壊以前に堆積したことを想定したことから埋葬時の原位置や片付け位置をほぼ保つと考えた。そしてこれらの出土状況、礫床、棺台の範囲から棺の配置（棺 A～C）を推定した。最後に棺の配置順序を検討する。棺 A は 1 次礫床上の埋葬である。TK217 併行期以降 7 世紀後半にも見られる須恵器杯身（5）が伴う。棺 B は 1 次礫床上に形成された棺台上の埋葬である。須恵器高杯（10、11）は TK217 併行期以降 7 世紀後半にも見られる形態である。（註）このように副葬された須恵器は複数形式に渡り継続する形態であるためこれから前後関係を決められない。だが、位置的に重複する埋葬であるのに棺台が残存すること、棺 B に伴う人骨より下位で 5 が出土することから棺 A → 棺 B と言える。

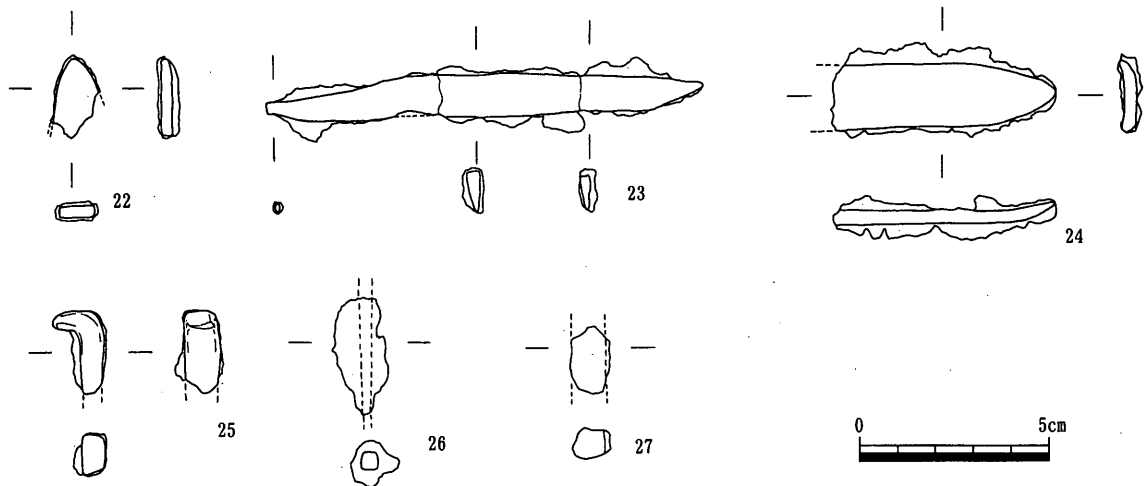
棺 C は 2 次礫床上の埋葬であり、7 世紀後半の須恵器杯身（7）、飛鳥Ⅳ併行期の土師器蓋（21）、鉢（20）が伴う。棺 C が羨道側に位置すること、2 次礫床の範囲が 1 次礫床を拡張し、仕切石を越えるのは配置から見て棺台上の埋葬に規制されたためと見られることから棺 B → 棺 C と考える。以上から棺 A → 棺 B → 棺 C となり最低 2 回は追葬が行われたと考える。

（註） 信里芳紀 2002 「第Ⅴ章 まとめ 第 1 節 小谷窯跡出土須恵器の編年」

『高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小谷窯跡・塚谷古墳』香川教育委員会（財）香川県埋蔵文化財調査センター



第285图 V区 第1面1号墳出土遺物(1) (1/4)



第286図 V区 第1面1号墳出土遺物(2) (1/2)

2号墳(第279、287～291図)

1号墳と同じく横穴式石室を主体とする円墳である。

立地と現状 旧G1区の中央部に位置する。1号墳が西側に隣接し、立地的には1号墳と同じである。盛り土、石室はほとんど削平され、直上に中世遺構面ベース土が堆積していた。よって中世期には墳丘、石室が現状まで破壊され(てい)たと考えられる。だが、石室内の埋土は固くしまる。よって古墳の崩壊以前に堆積していたと考えられる。

墳丘 盛り土は高さ10cm程度しか残存しないが土層断面では土坑に切られる南側以外で墳裾を確認できる。これにより墳丘径は推定6mを測る。

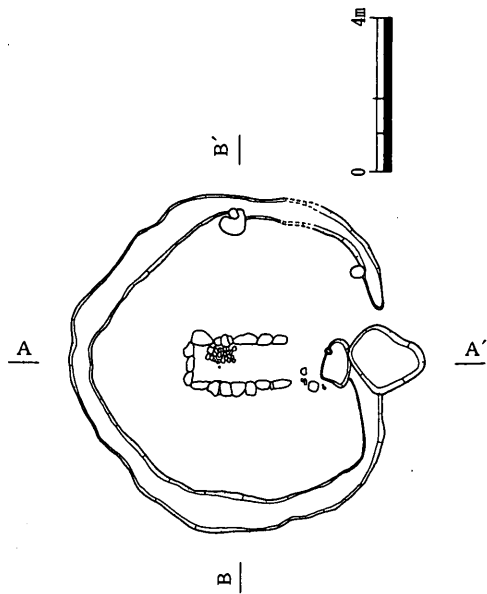
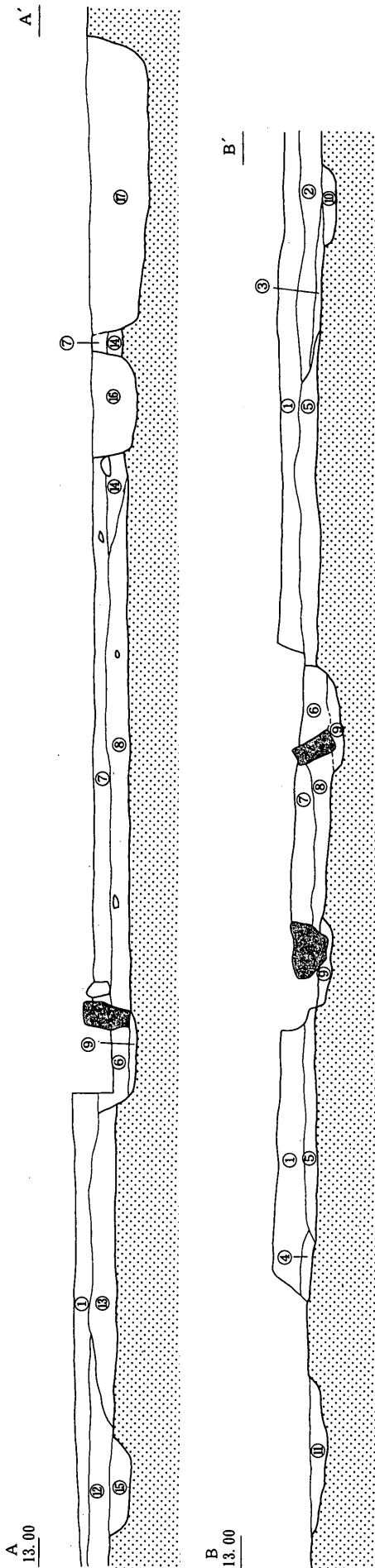
周溝 周溝の平面形は北側ですぼまり、五角形を呈する。幅40cm～1m、深さ10～15cmを測り、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黄褐色系、暗褐色系の粘質土である。出土遺物は混入した弥生土器の高杯(33)などがあるのみで、古墳に伴う時期の遺物は見られない。

墓坑 墓坑掘り方は平面形がほぼ長方形で南、北部でやや膨らむ。規模は南北4.4m以上、東西2.2mを測り、南側で浅くなり途切れる。墳丘の削平度が不明であるが盛り土を行った後で掘り込まれている。確認できる掘り込みは深さ20cmを測る。墓坑床面は周縁部に沿って幅40～60cmほどが溝状に掘り下げられ、内側の輪郭に沿うように基底石が設置される。基底石を安定させるための掘り方と考えられる。

主体部 周溝が途切れる南側に開口する。主軸方向はN-28°-Wである。著しい削平により遺存状況は極めて悪く、南側では基底石もほとんど残存しない。このため羨道の状況が不明である。ただ周溝との配置から石室長は4m以下、基底石の掘り方形状から開口部側で開く石室形態であると考えられる。

奥壁は約40cmの礫を3石用いて構築している。側壁構築にも40～60cmと類似した規模の礫を使用している。側壁では部分的に2段の石積みが見られる。構築礫は西側壁の2石以外は砂岩である。

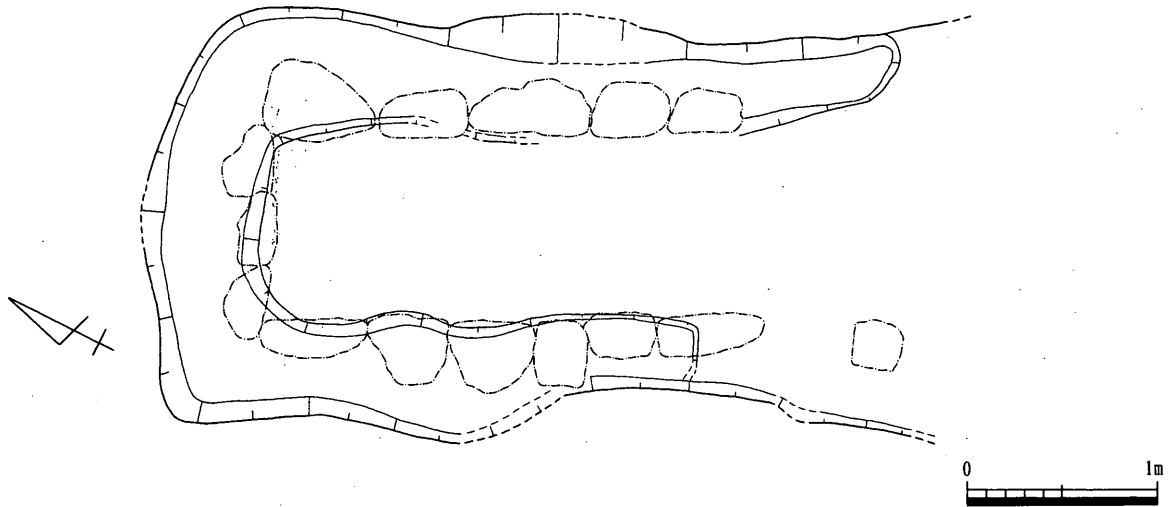
床面、礫敷き 石室北東部の床面上で拳大の平らな砂岩礫が整った長形状に集中して確認された。(以



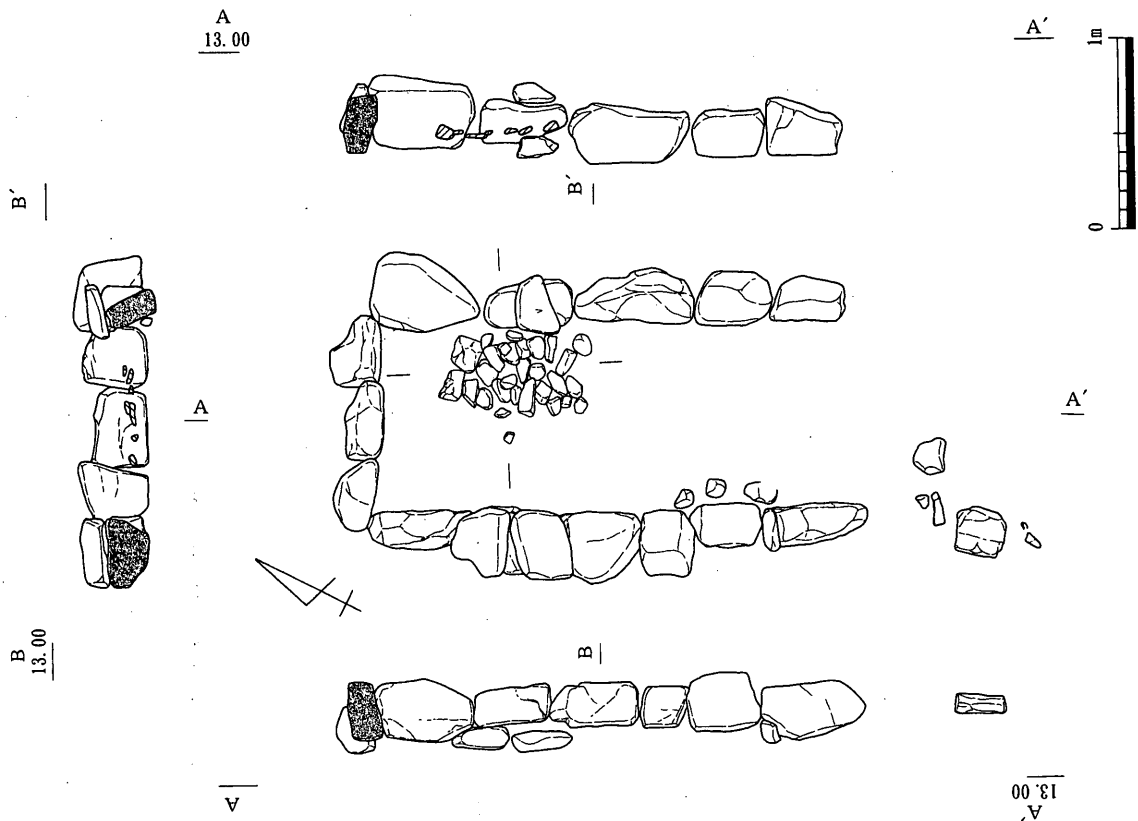
- ① 暗褐色粘質土 (10YR3/4) <中世遺構面>
- ② 褐色砂利混粘質土 (10YR4/4) <流土>
- ③ 褐色粘質土 (7.5YR4/4) 黄褐色粘質土ブロックを含む<流土>
- ④ 褐色粘質土 (10YR4/4) <流土?>
- ⑤ にぶい黄褐色砂利混粘質土 (10YR4/3) <盛土>
- ⑥ オリーブ褐色砂利混粘質土 (2.5Y4/6) 黄褐色粘質土ブロックを含む<基底石蔵込め>
- ⑦ 暗褐色粘質土 (10YR3/4) <石室埋土>
- ⑧ 暗褐色粘質土 (10YR3/4) <床面形成土>
- ⑨ 黄褐色粘質土 (10YR5/6) 暗褐色粘質土をブロック状を含む<基底石堀り方>
- ⑩ 黄褐色砂利混粘質土 (10YR5/8) <同溝>
- ⑪ 暗褐色砂利混粘質土 (10YR3/4) <同溝>
- ⑫ にぶい黄褐色砂利混粘質土 (10YR6/3) <流土>
- ⑬ 暗褐色砂利混粘質土 (10YR3/3) <盛土>
- ⑭ 褐色粘質土 (10YR4/6) <床面形成土>
- ⑮ 灰黄色砂利混粘質土 (2.5Y6/2) <同溝>
- ⑯ 灰黄褐色砂利混粘質土 (10YR4/2) <土坑>
- ⑰ 黒褐色砂利混粘質土 (10YR3/2) <土坑>



第287図 V区 第1面2号墳土層断面図 (1/40, 1/200)



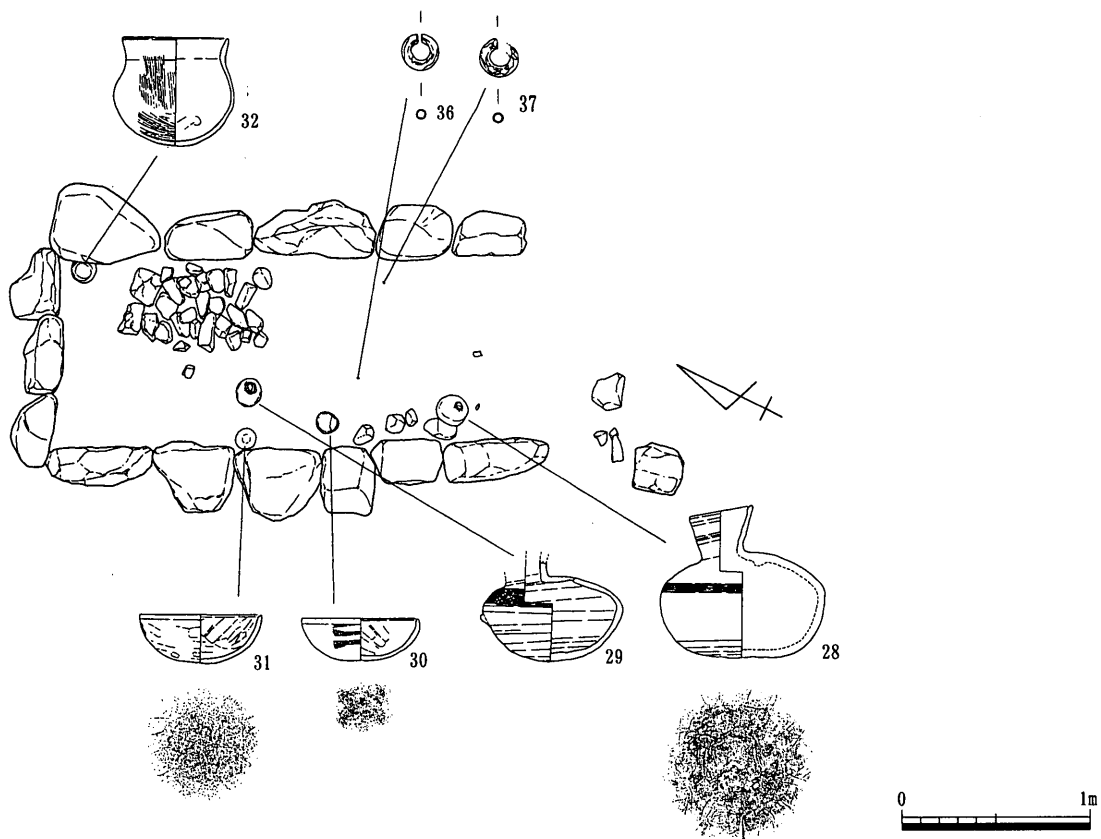
第288図 V区 第1面2号墳墓墳平面図(1/40)



第289図 V区 第1面2号墳平・立面図(1/40)

下、「礫敷き」と仮称。) 礫敷きの範囲は南北 80 c m、東西 40 c mを測り、上面のレベルが揃う。北側に土師器甕が近接して出土する。大人用の棺台とするには規模が小さく、礫床が剥ぎ取られた残骸の可能性もある(下記のB群が床面から浮いていることはこうした攪乱と矛盾しない。)が、性格は不明である。

遺物出土状況 遺物は2ヶ所に分かれて見られる。石室の北東隅では土師器甕1点(A群)が床面直上で、



第290図 V区 第1面2号墳遺物出土状況図(1/40)

西側壁沿いではほぼ完形の須恵器平瓶2点、土師器杯2点（B群）が床面から約10cm浮いて出土した。31はひっくり返っていたがそれ以外は口縁部を上位に向けて出土した。完形に近いこと、まとまることからある程度埋葬時の位置を反映していると考えられる。またB群に近接して耳環2点が約50cmの間隔を開け、ほぼ床面直上で出土した。配置、出土レベルからほぼ原位置を保つと考える。

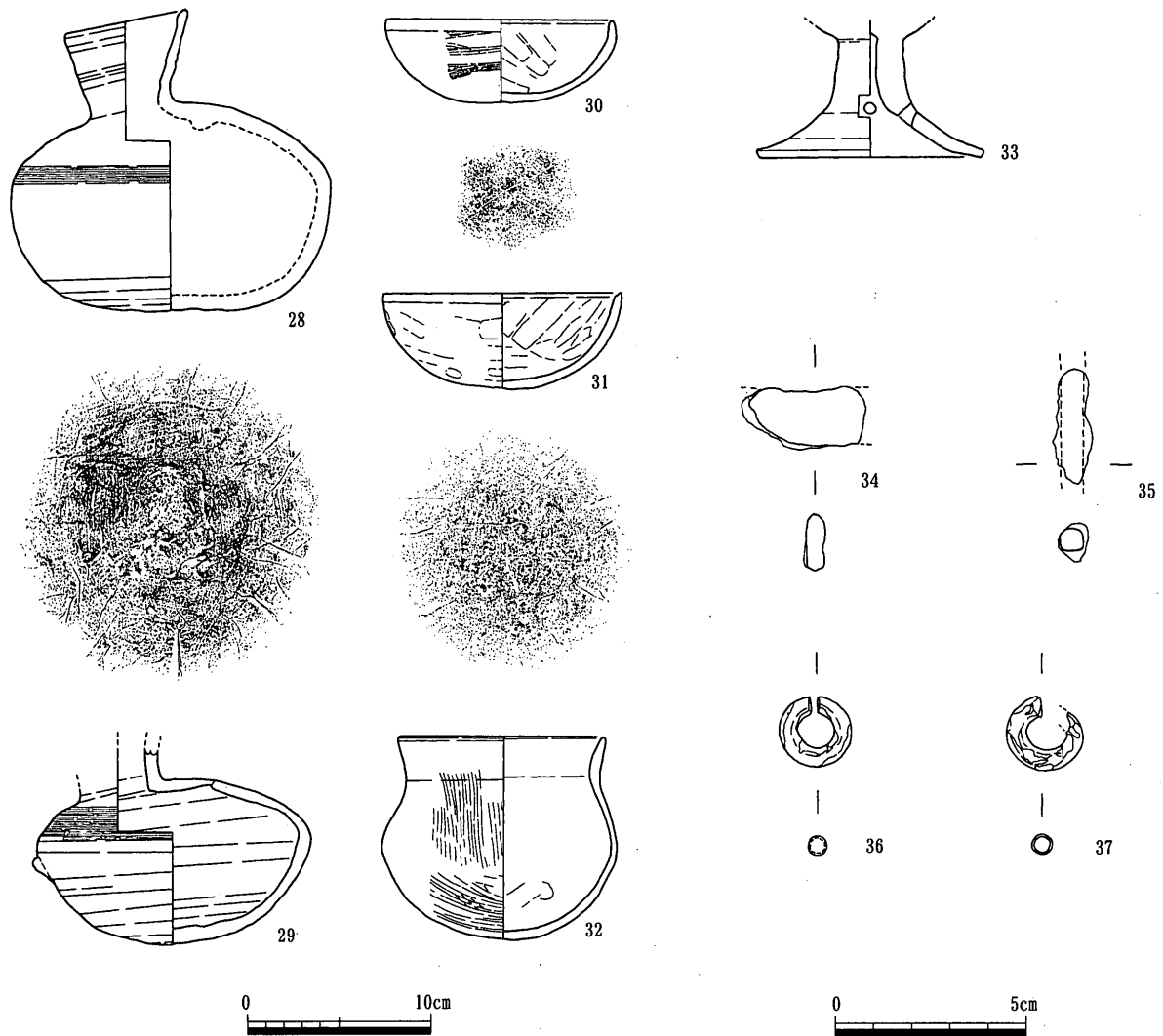
これらから見た棺配置であるが耳環2点が原位置を留めていると見ると頭位方向が南、北どちらでも2m弱のスペースはある。ただ玄室と羨道の境界が不明であるものの北頭位と見れば石室規模より羨道に及ぶと考えられる。なお頭位がどちらでもB群と近接することからB群はこの埋葬に伴う可能性が高い。

#### 構築方法

以上の内容から2号墳の構築過程を以下のように考える。まず古墳の構築位置に整地土兼盛り土（5、13層）を敷く。この上から墓坑を掘削し、基底石の掘り方を溝状に掘り込む。基底石を掘り方に据え、9層と裏込め（6層）で固定しつつ床面形成土（8層）を敷き詰める。その上には部分的に礫を敷く（礫敷き）。上部の石室、墳丘構築過程については不明である。

#### 出土遺物

28、29は須恵器平瓶である。28は体部の高さがあり、丸みを帯びる器形である。底部は平底であり、外縁部を4分割してヘラケズリを施す。TK217併行期ごろである。29は体部がやや扁平であり、肩が張る。底部は丸底である。形態的には28より後出する。30～32は土師器である。30、31は杯である。共に底部は丸みを帯びる。30は外面に横方向のヘラミガキが見られる。31は外内面とも板ナデを施す。



第291図 V区 第1面2号墳出土遺物(1/4, 1/2)

32は甕である。外面頸部以下に粗いハケメが見られる。34、35は鉄器である。34は刀子の基部、35は鉄釘である。36、37は金銅製の中空の耳環である。径2cmと同サイズであり、出土位置からもセットになると考えられる。

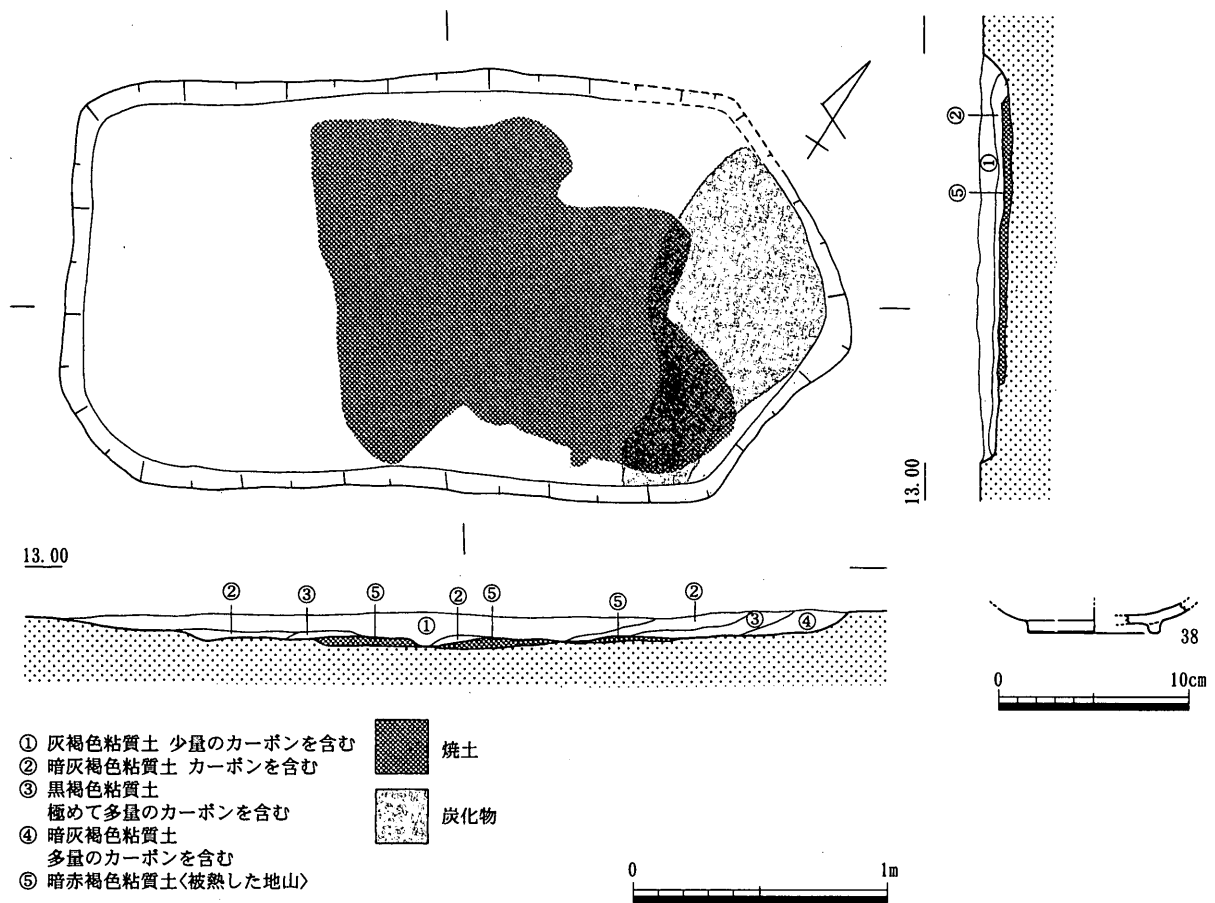
以上の床面状況、出土遺物の配置、時期からはTK217 併行期ごろに埋葬が行われたとしかいえず、追葬の有無は不明である。

#### 古代の遺構・遺物

##### 土坑

##### S K 01 (第 292 図)

旧G1区南東部で検出した土坑である。平面形は長方形で東部に張り出す。断面形は浅い皿状を呈し、床面はごく緩やかに西側へ下がる。S K 02を切る。規模は長径3、15 m、短径1、65 m、深さ12 cmを測る。主軸方向はN-50°-Eである。床面では被熱と炭化物の集中が見られる。被熱は中央東側で広がるが、程度は弱く固結していない。炭化物は西側でも散在するものの東側の張り出し部付近に偏る。出土遺物は黒色土器A類の椀(38)がある。断面方形の小さい高台をもつ。12世紀代と考えられる。38より土坑の時期は12世紀前半と考えられる。



第292図 V区 第1面SK01平・断面図(1/30), 出土遺物(1/4)

遺構の性格については、規模、形態、埋土下に多量の炭を含むことから炭窯の可能性はある。県内でも炭窯を集成しその意義が論じられて(註1)いるが、この考察において徳島県の炭焼き窯の分類(註2)が適用されている。これによると平安時代から中世の炭窯は3型5類に分類される。SK01は窯の1方向に突出部をもち、窯本体との境にピットをもたないI型b類に類似し、突出部に向かって床面が傾斜する点でも一致する。ただ菅原氏は突出部に煙道を想定しているが、SK01では突出部付近に炭化物が集中し、焼土も近接して見られる。よって炭窯ならば突出部が焚き口であると考え。炭窯の用途として菅原氏は製鉄に供給するためとしているが、旧G1区のSK08でフイゴ、SK10でスラグが出土している。ただどちらも14世紀代の遺構であるため両者が混入でなければ関連付けることはできない。

なお県内、徳島県の事例のいずれでも近接して丘陵があり、炭用材の入手が容易な立地である。だがSK01から近接する丘陵までは東に約300mと離れている。

### SK02 (第293図)

旧G1区南東部で検出した土坑である。平面形は整った長方形、断面形は逆台形を呈し、床面はほぼ平坦である。SK01に切られる。規模は長径2.07m、短径1.65m、深さ21cmを測る。主軸方向はN-43°-Wである。出土遺物はない。SK01に切られることから土坑の時期は古代と考える。

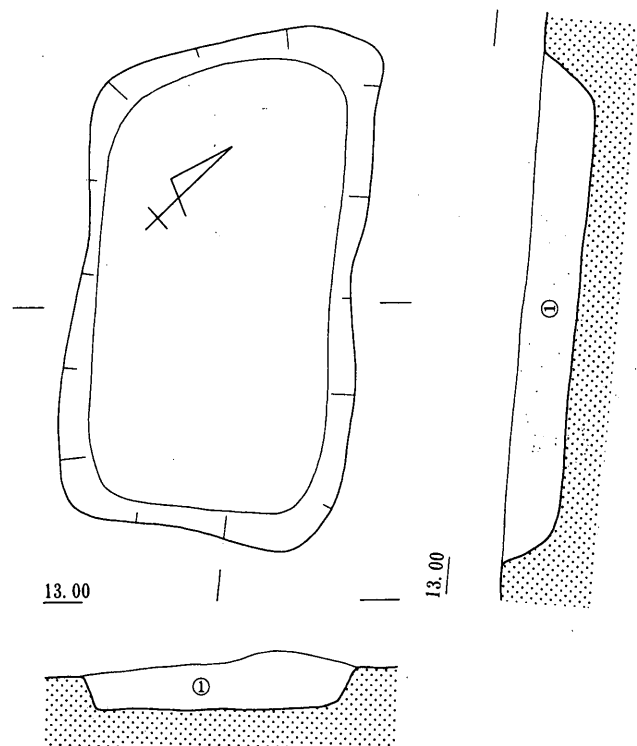
(註1) 松本和彦 2001「第5章まとめ第4節 炭焼き窯について」

『国道193号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 岡清水遺跡』香川県教育委員会 (財)香川県埋蔵文化財調査センター

(註2) 菅原康夫 1991「遺物をもたない遺構—伏焼木炭窯に関する予察—」

『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.2』(財)徳島県埋蔵文化財センター





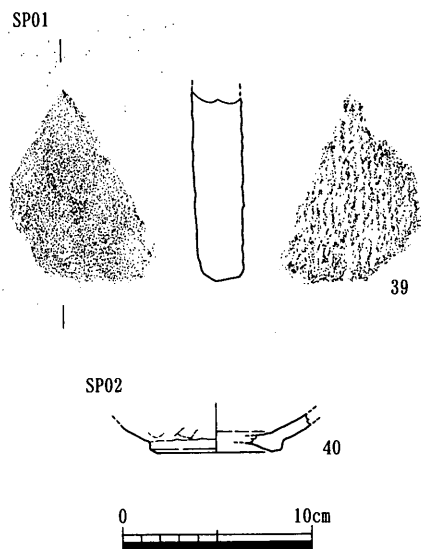
① 暗茶褐色粘質土



第293図 V区 第1面SK02平・断面図(1/30)

柱穴出土遺物 (第 294 図)

V区で検出した掘立柱建物、柵列を構成しない古代の柱穴出土遺物を図化した。39は平瓦である。凸面に粗い縄目タタキを施す。40は黒色土器A類の椀である。外面を板ナデし、低い高台をもつ。12世紀代と考えられる。



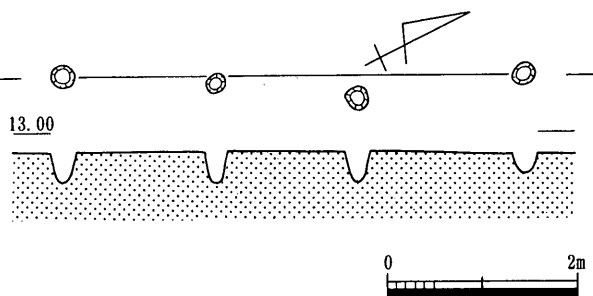
第294図 V区 第1面SP01・SP02出土遺物(1/4)

#### (4) 中世の遺構・遺物

柵列

S A01 (第 295 図)

旧G1区の南西部で検出した柵列である。規模は3間(4.7m)である。主軸方向はN-27°-Eである。柱穴の平面形はほぼ円形であり、径30cm前後、深さ24~32cmを測る。埋土は灰褐色砂混粘質土である。伴う建物は復元できず、出土遺物はない。柵列の時期は埋土より中世と考える。



第295図 V区 第1面SA01平・断面図(1/80)

SA02 (第 296 図)

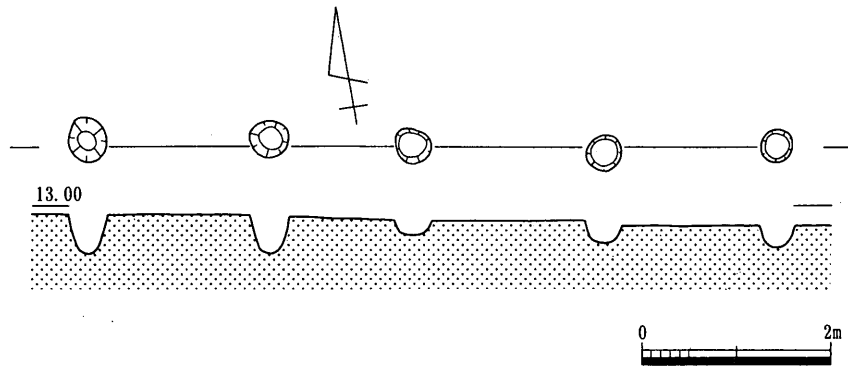
旧G1区の北部で検出した柵列である。規模は4間(6.52m)である。主軸方向はN-29°-W

である。伴う建物は復元できない。柱穴の平面形はほぼ円形であり、径 36～48 cm、深さ 24～32 cm を測る。出土遺物は土師器小皿、杯細片、須恵器鉢、壁土、焼け礫がある。柵列の時期は遺物より中世と考える。

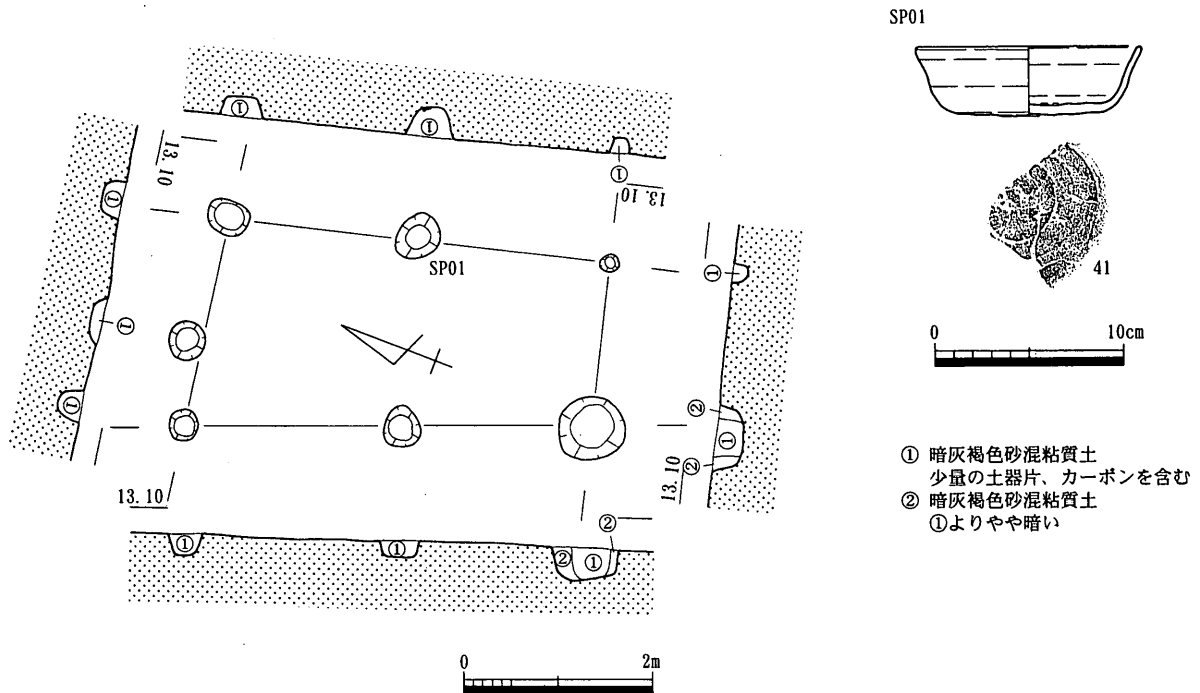
建物

S B 01 (第 297 図)

旧 G 1 区の北部で検出した側柱建物である。規模は梁間 2 間×桁行 2 間 (1.8 × 3.7 m、6.66 m<sup>2</sup>) である。主軸方向は N - 27° - W である。柱穴の平面形は円～楕円形であり、径 10～70 cm、深さ 17～36 cm を測る。出土遺物は土師器の杯 (41)、瓦器椀、土師質土器土釜脚、亀山焼甕、壁土がある。41 は口縁部がほぼ直立する箱形の器形を持ち、器壁と底、体部の境界が薄い。14 世紀代と考える。建物の時期は 41 より 14 世紀代と考える。



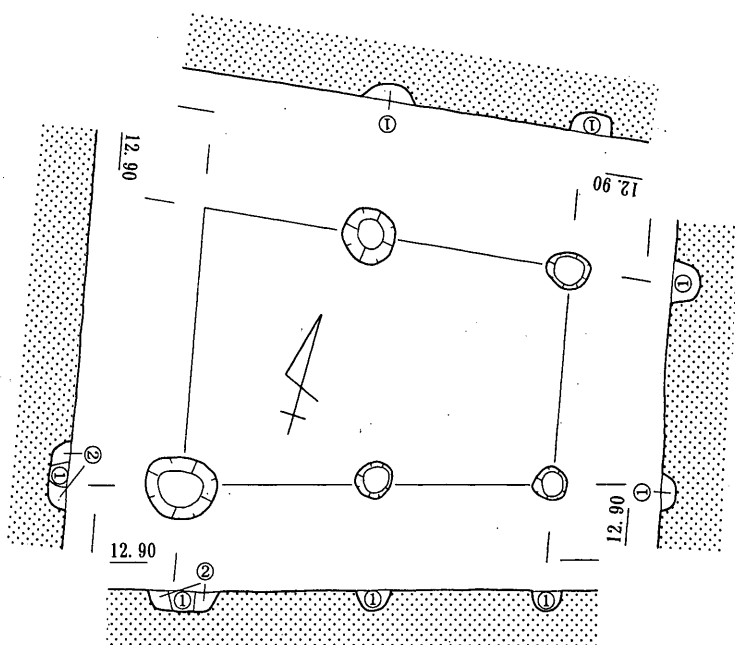
第296図 V区 第1面SA02平・断面図(1/80)



第297図 V区 第1面SB01平・断面図(1/80), 出土遺物(1/4)

S B 02 (第 298 図)

旧 G 1 区の北部で検出した側柱建物である。S B 13 と重複する。規模は梁間 1 間×桁行 2 間 (1.7 × 3.4 m。5.78 m<sup>2</sup>) である。主軸方向は N - 61° - E である。柱穴の平面形は円～楕円形であり、径 32 ~ 80 c m、深さ 25 c m 前後を測る。出土遺物はない。建物の時期は埋土より中世と考える。



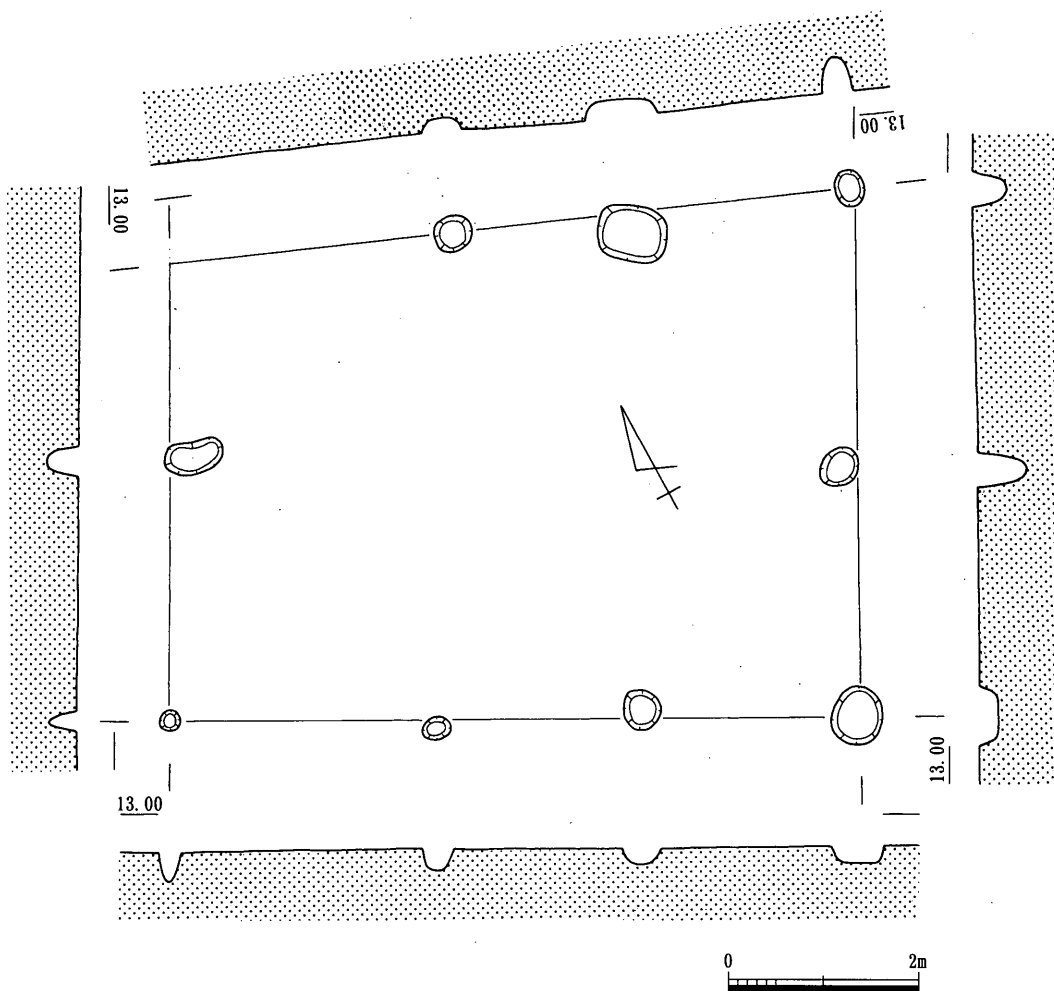
- ① 暗灰褐色砂混粘質土
- ② 暗灰褐色砂利混粘質土



第298図 V区 第1面SB02平・断面図(1/80)

S B 03 (第 299 図)

旧 G 1 区の南部で検出した側柱建物である。規模は梁間 2 間×桁行 3 間 (5.1 × 6.9 m。35.92 m<sup>2</sup>) である。主軸方向は N - 63° - W である。柱穴の平面形は円～楕円形であり、径 20 ~ 77 c m、深さ 16 ~ 36 c m を測る。出土遺物は土師器杯の小片がある。

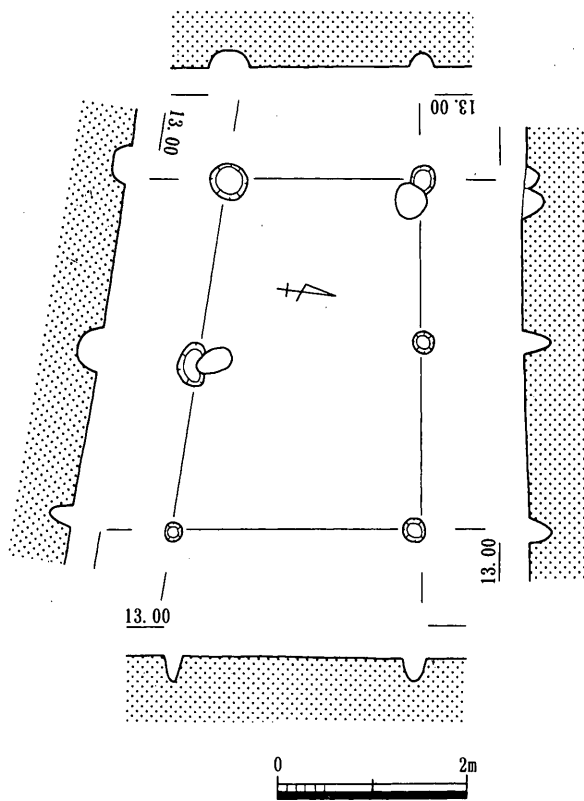


第299図 V区 第1面SB03平・断面図(1/80)

建物の時期は出土遺物より中世と考える。

#### S B 04 (第 300 図)

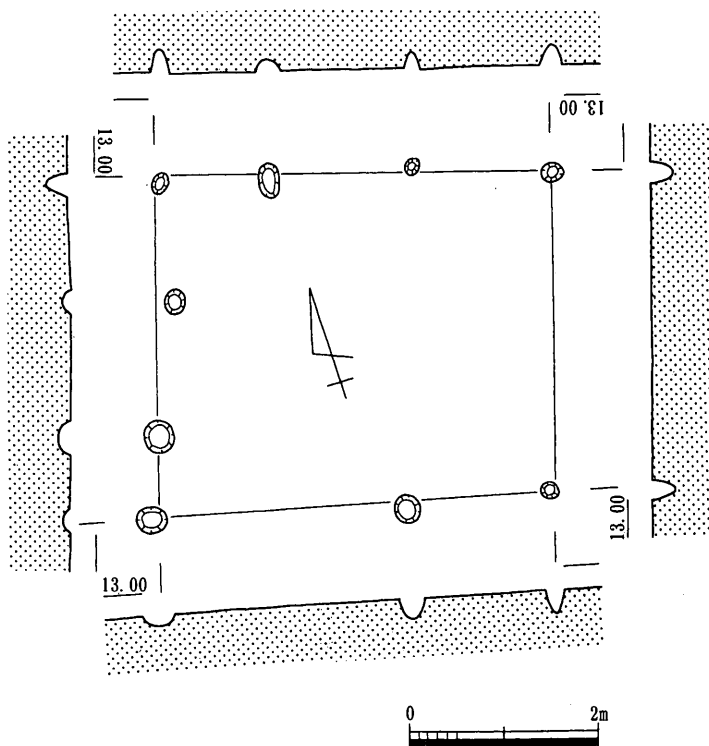
旧G 1 区の南部で検出した側柱建物である。規模は梁間 1 間×桁行 2 間 (2.3 × 3.4 m、8.61 m<sup>2</sup>) である。主軸方向はN-84°-E である。柱穴の平面形は円～楕円形であり、径 24～48 cm、深さ 15～35 cm を測る。埋土は暗灰褐色砂混粘質土であり、出土遺物はない。建物の時期は埋土より中世と考える。



第300図 V区 第1面SB04平・断面図(1/80)

#### S B 05 (第 301 図)

旧G 1 区の南部で検出した側柱建物である。規模は梁間 3 間×桁行 3 間 (3.3 × 3.9 m、12.87 m<sup>2</sup>) である。主軸方向はN-71°-W である。柱穴の平面形は円～長楕円形であり、径 20～32 cm、深さ 12～24 cm を測る。埋土は暗灰褐色砂混粘質土であり、出土遺物はない。建物の時期は埋土より中世と考える。



第301図 V区 第1面SB05平・断面図(1/80)

#### S B 06 (第 302 図)

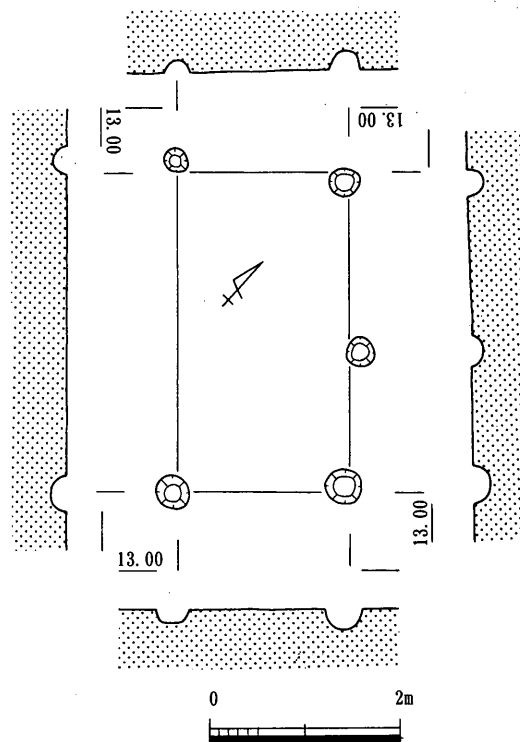
旧G 1 区の南西部で検出した側柱建物である。規模は梁間 1 間×桁行 2 間 (1.5 × 3.1 m、4.65 m<sup>2</sup>) である。主軸方向はN-45°-W である。柱穴の平面形は円形であり、径 28～40 cm、深さ 12～17 cm を測る。埋土は暗灰褐色砂混粘質土であり、出土遺物はない。建物の時期は埋土より中世と考える。

#### S B 07 (第 303 図)

旧G 1 区の中央部西端で検出した側柱建物である。規模は梁間 3 間×桁行 3 間 (3.0 × 3.4 m、10.2 m<sup>2</sup>) である。主軸方向はN-27°-W である。柱穴の平面形は円、長楕円形であり、深さ 8～24 cm を測る。埋土は暗灰褐色砂混粘質土であり、出土遺物はない。建物の時期は埋土より中世と考える。

S B 08 (第 304 図)

旧 G 1 区の北西部で検出した側柱建物である。規模は梁間 1 間×桁行 2 間 (1.4 × 2.7 m, 3.91 m<sup>2</sup>) である。主軸方向は N - 65° - E である。柱穴の平面形は円、長楕円形であり、深さ 16 ~ 40 cm を測る。埋土は暗灰褐色砂混粘質土であり、出土遺物はない。建物の時期は埋土より中世と考える。



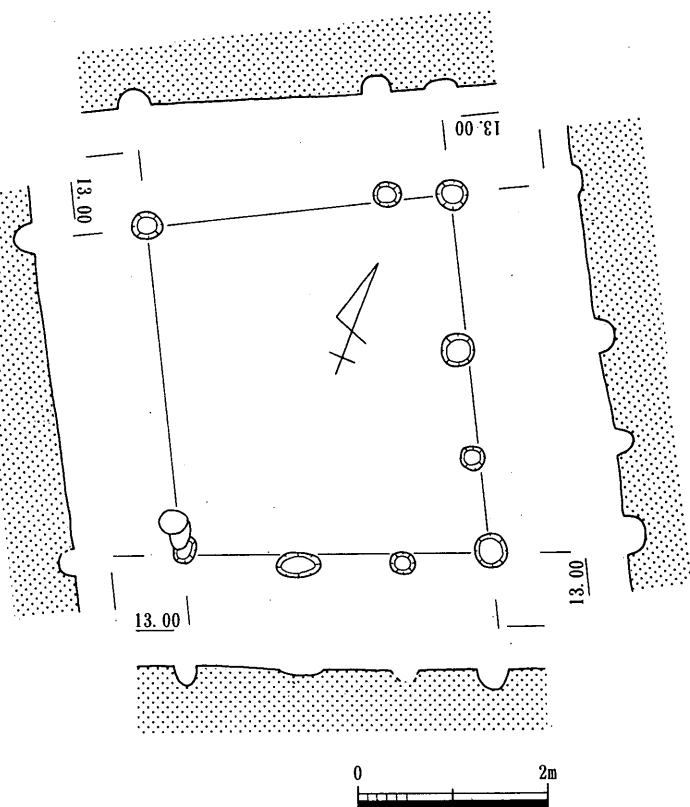
第302図 V区 第1面SB06平・断面図(1/80)

S B 09 (第 305 図)

旧 G 1 区の北西部で検出した側柱建物である。SPO1 が 14 世紀後半の SK12 を切る。規模は梁間 1 間×桁行 2 間 (1.2 × 2.2 m, 2.64 m<sup>2</sup>) である。主軸方向は N - 45° - W である。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ 15 ~ 42 cm を測る。出土遺物は土師器の小皿 (42)、杯、東播系捏鉢、壁土、焼け礫がある。42 は外傾度が強く、短い口縁部をもつ。底部を糸切りする。建物の時期は切り合いより 14 世紀後半以降と考える。

S B 10 (第 306 図)

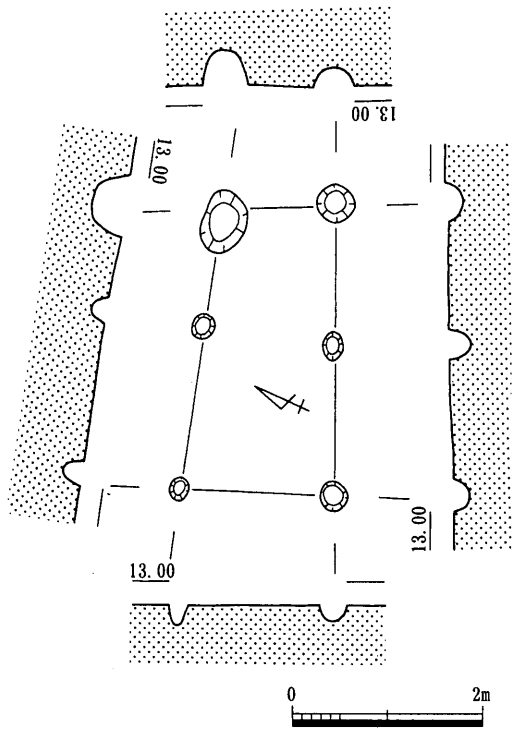
旧 G 1 区の北部で検出した側柱建物である。SPO3 が 14 世紀後半の SK04 に切られる。規模は梁間 1 間×桁行 2 間 (2.9 × 5.2 m, 15.08 m<sup>2</sup>) である。主軸方向は N - 23° - E である。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ 5 ~ 38 cm を測る。出土遺物は土師器杯、土師質土器土釜 (43) がある。43 は短い口縁部とつばをもつ。15 世紀後半 ~ 16 世紀前半と考える。建物の時期は 43 より 15 世紀後半 ~ 16 世紀前半と考える。



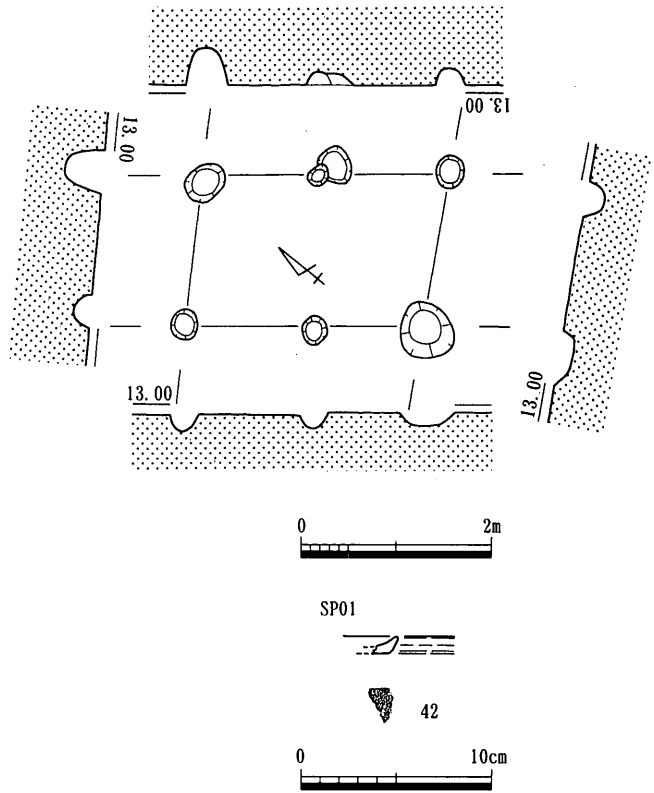
第303図 V区 第1面SB07平・断面図(1/80)

S B 11 (第 307 図)

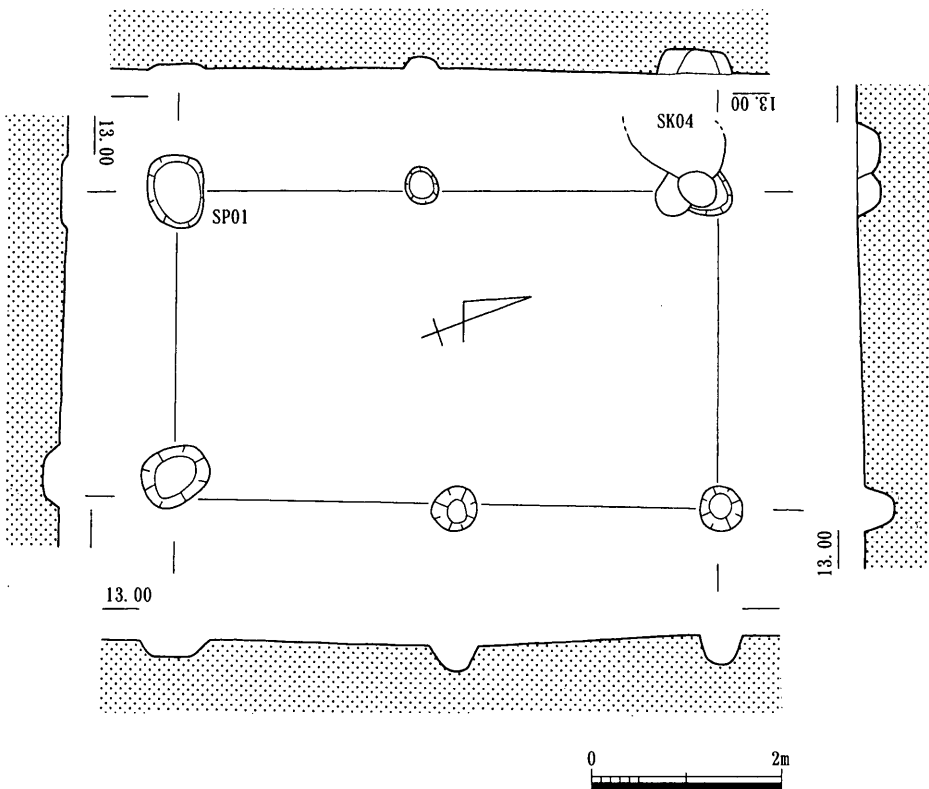
旧 G 1 区の北部で検出した側柱建物である。規模は梁間 2 間×桁行 2 間 (3.8 × 4.8 m, 18.24 m<sup>2</sup>) である。主軸方向は N - 50° - E である。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ 12 ~ 16 cm を測る。埋土は暗黄褐色砂混粘質土であり、出土遺物はない。柱穴規模が 30 cm 弱と小さく、近接する SB12、13 と類似した主軸を持つため建物の時期は中世と考える。



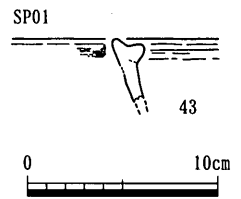
第304图 V区 第1面SB08平·断面图(1/80)

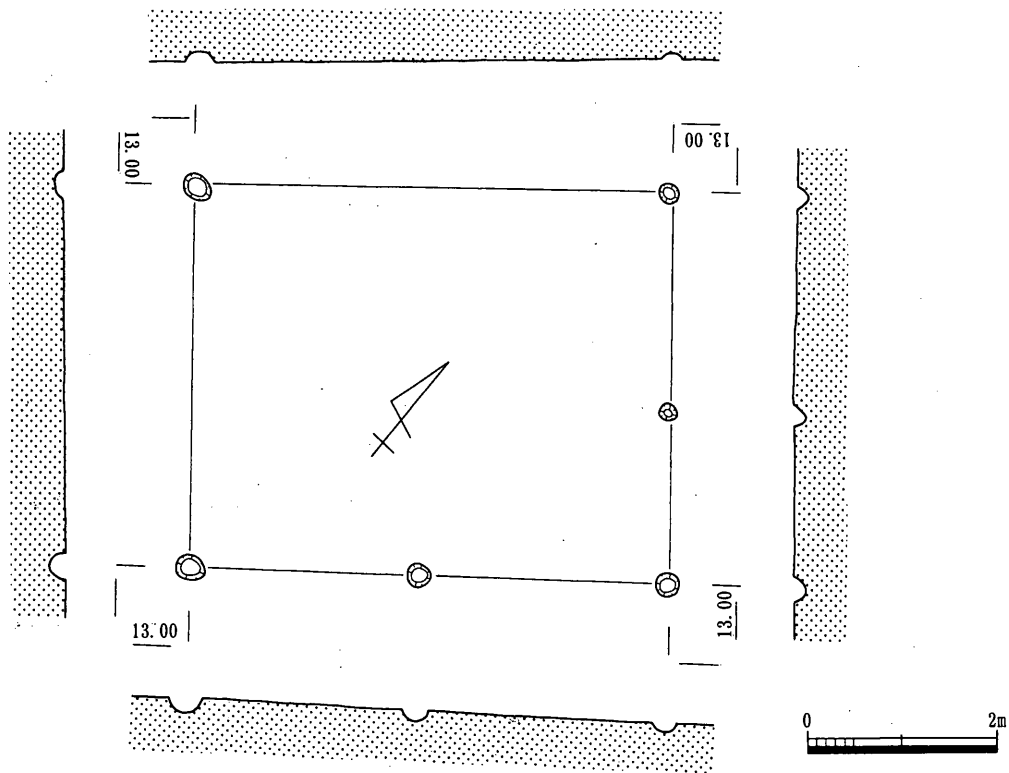


第305图 V区 第1面SB09  
平·断面图(1/80), 出土遺物(1/4)

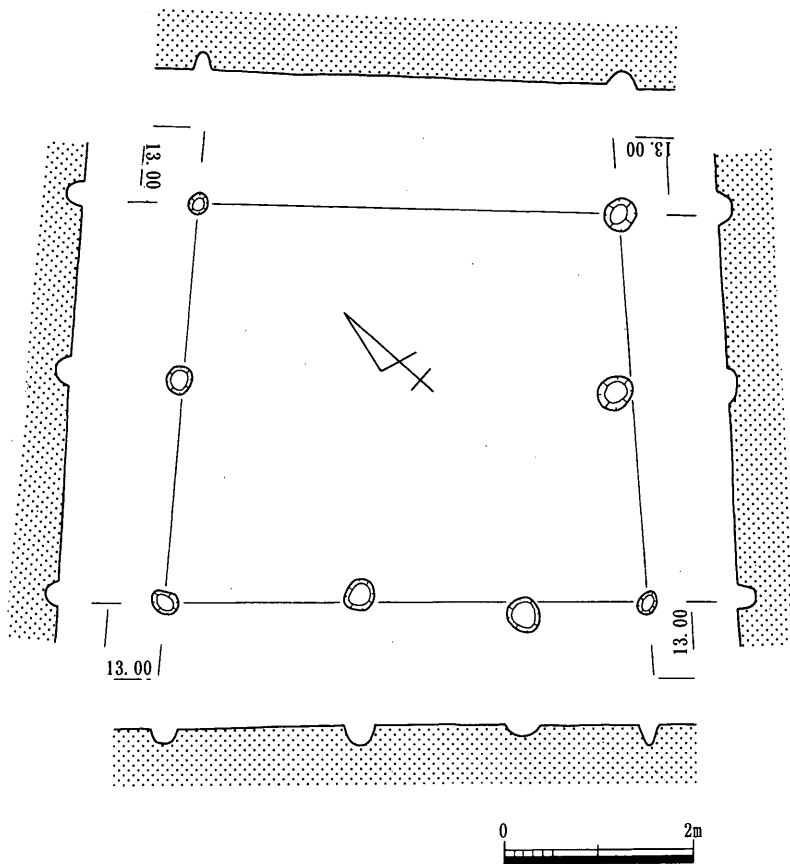


第306图 V区 第1面SB10平·断面图(1/80), 出土遺物(1/4)





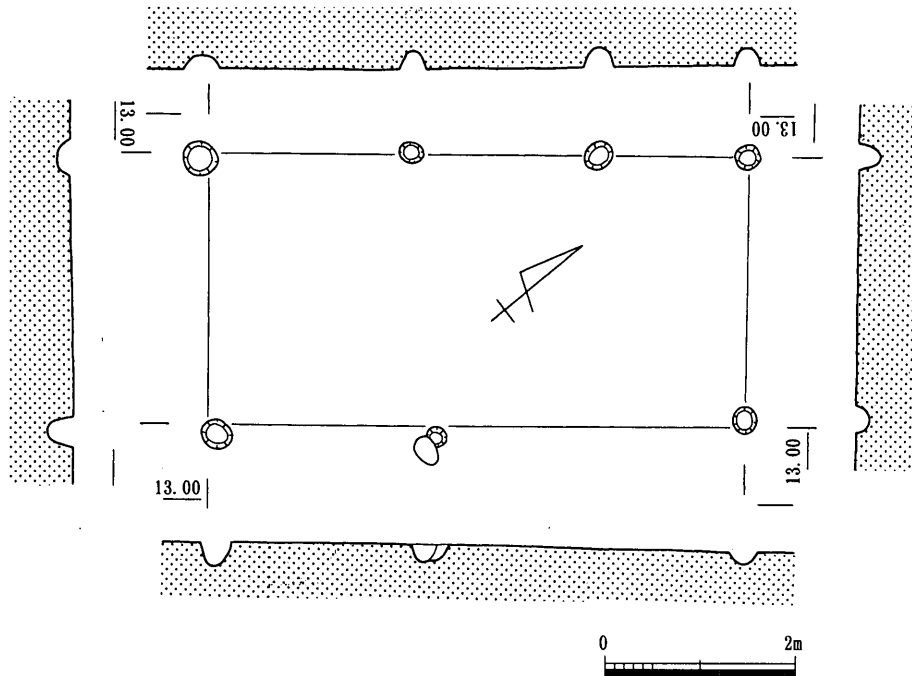
第307图 V区 第1面SB11平·断面图(1/80)



第308图 V区 第1面SB12平·断面图(1/80)

S B 12 (第 308 図)

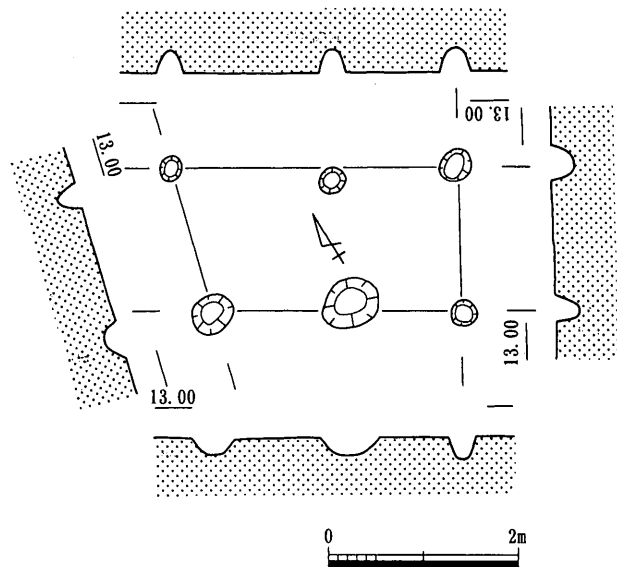
旧G 1 区の北部で検出した側柱建物である。規模は梁間 2 間×桁行 3 間 (4.0 × 4.8 m。19.85 m<sup>2</sup>) である。主軸方向は N - 50° - E である。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ 16 ~ 24 cm を測る。埋土は暗黄褐色砂混粘質土であり、出土遺物はない。近接する SB11、13 と類似した主軸を持つため建物の時期は中世と考える。



第309図 V区 第1面SB13平・断面図(1/80)

S B 13 (第 309 図)

旧G 1 区の北部で検出した側柱建物である。規模は梁間 1 間×桁行 3 間 (2.6 × 5.5 m。14.3 m<sup>2</sup>) である。主軸方向は N - 35° - E である。柱穴の平面形は円形であり、深さ 11 ~ 28 cm を測る。埋土は暗黄褐色砂混粘質土であり、出土遺物はない。近接する SB11、12 と類似した主軸を持つため建物の時期は中世と考える。

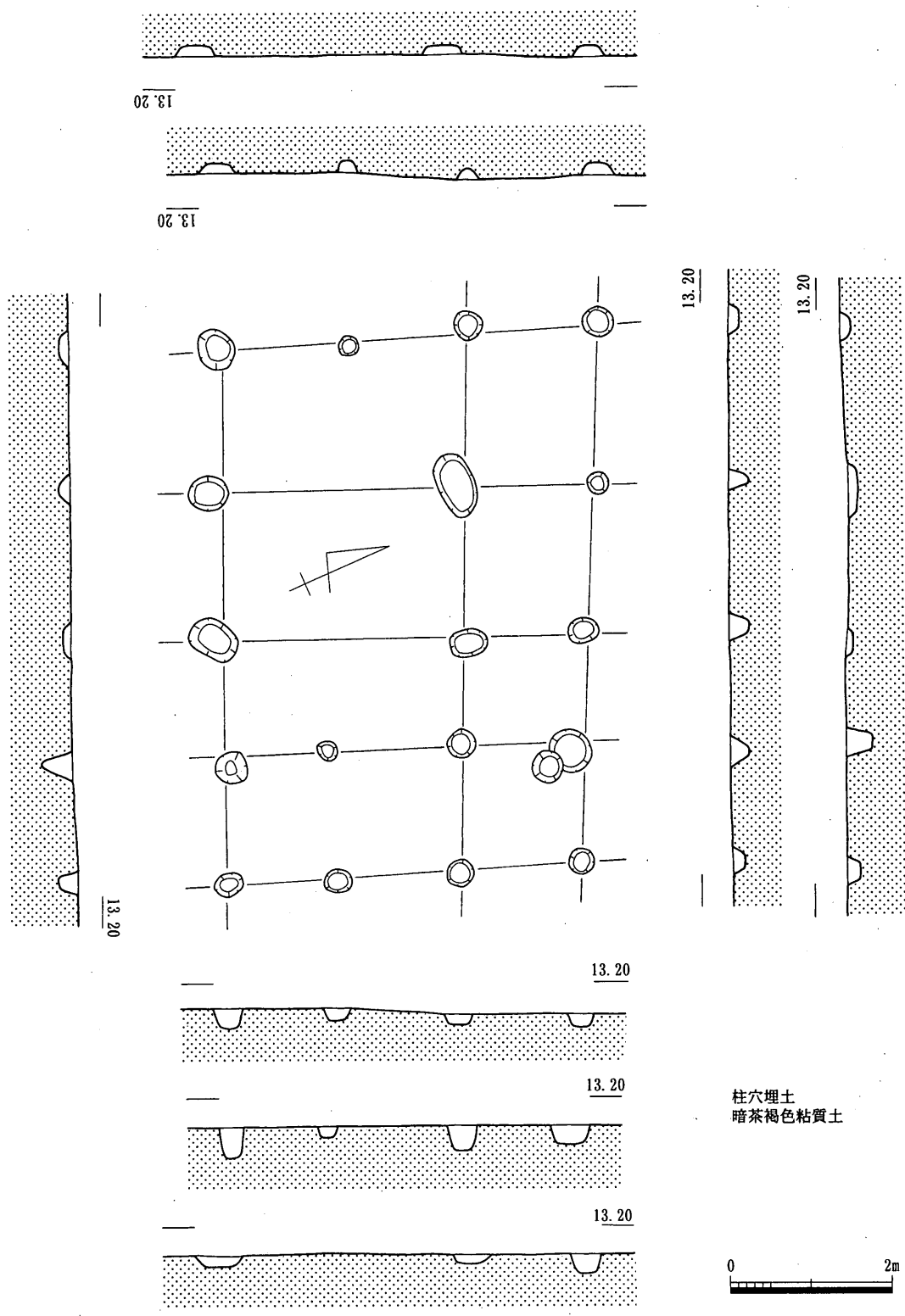


S B 14 (第 310 図)

旧G 1 区の東部中央で検出した側柱建物である。規模は梁間 1 間×桁行 2 間 (1.3 × 2.7 m。3.51 m<sup>2</sup>) である。主軸方向は N - 29° - W である。柱穴の平面形は円形であり、深さ 20 ~ 25 cm を測る。埋土は暗灰褐色砂混粘質土であり、出土遺物はない。埋土より建物の時期は中世と考える。

第310図 V区 第1面SB14平・断面図(1/80)





第311図 V区 第1面SB15平・断面図(1/80)

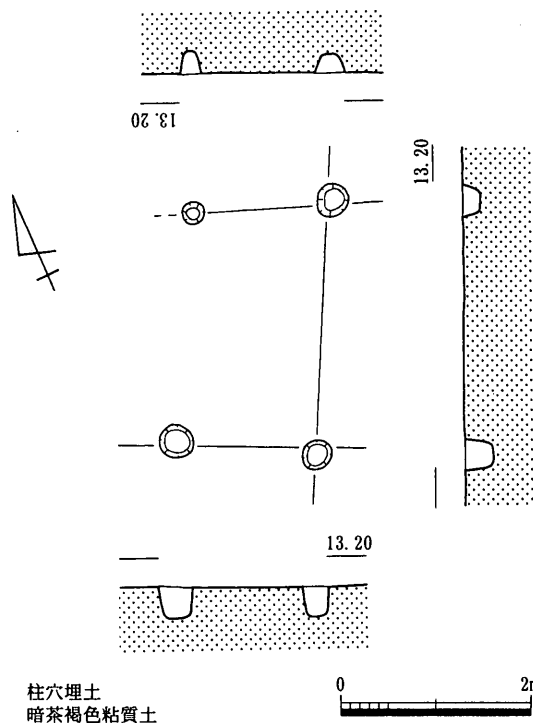
S B 15 (第 311 図)

調査区南壁沿い中央部の旧G 3区で検出した掘立柱建物跡である。梁行3間×桁行4間で建物の主軸

方位はN-67°-Wである。東西両端の梁行筋は中央部分の梁間筋に比べて若干歪んでいる。また南から2列目の桁行には中央部の2つの柱穴は検出されなかった。建物の平面形は長方形で、梁行3間で4.6m、桁行4間で6.5m、建物面積は29.9㎡≒9.1坪の規模である。柱穴の平面形は円形のものが多いが、一部楕円形や隅丸方形に近いものもある。柱穴の埋土は暗茶褐色粘質土である。

S B 16 (第312図)

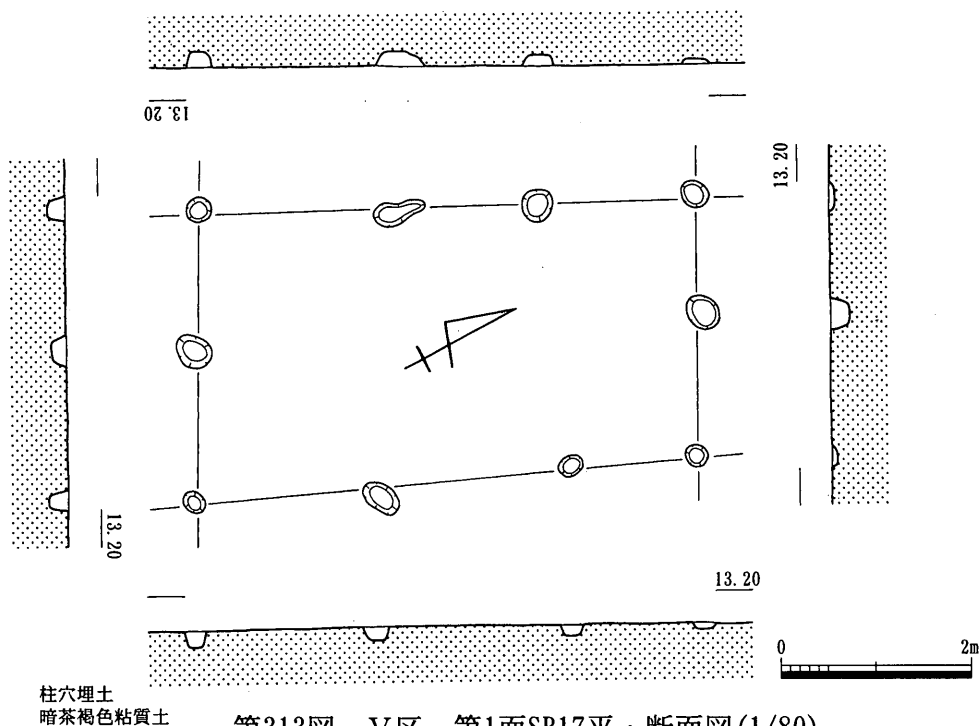
S B 15の北西約6mの位置で検出した掘立柱建物跡であるが、調査区外に続いたため全体は検出できなかった。柱穴は4穴しか検出されなかったため梁行1間×桁行2間以上、あるいは梁行1間×桁行1間と考えられる。前者の場合は梁行1間で2.5m、桁行の柱間は1.5mになる。後者の場合は梁行1間で1.5m、桁行1間で2.5mになる。梁行1間×桁行2間以上と考えた場合の建物の主軸方位はN-66°-Wとなる。柱穴の平面形は円形で、埋土は暗茶褐色粘質土である。



第312図 V区 第1面SB16平・断面図(1/80)

S B 17 (第313図)

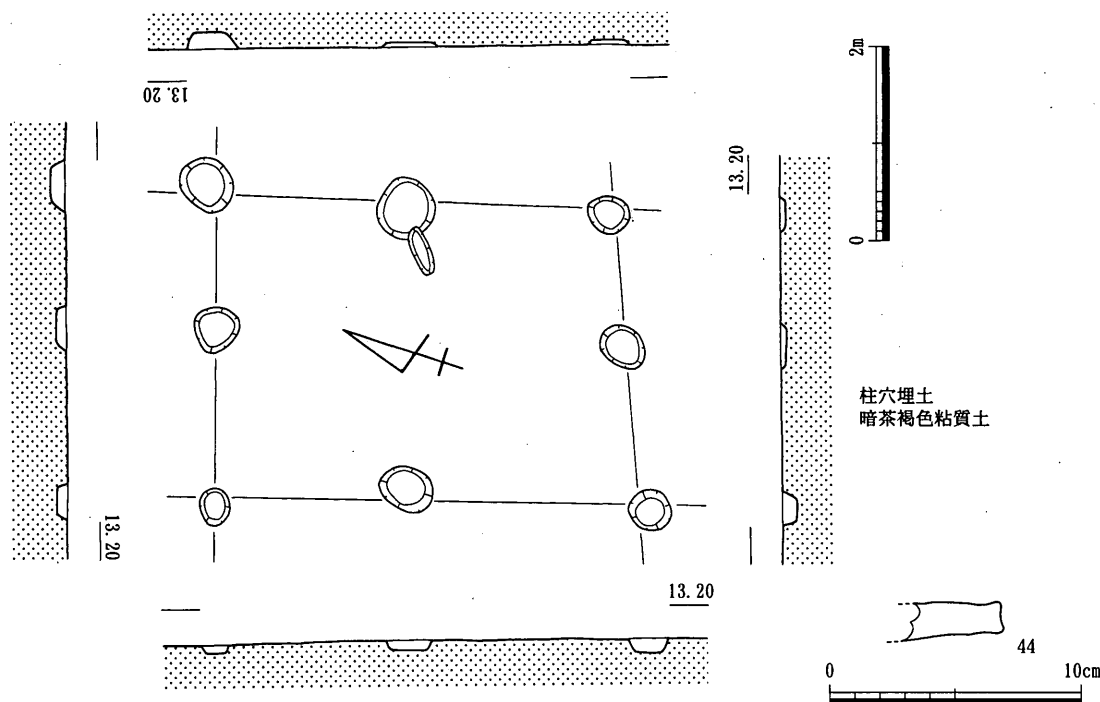
S B 15の北東約9mの位置で検出した掘立柱



第313図 V区 第1面SB17平・断面図(1/80)

建物跡である。

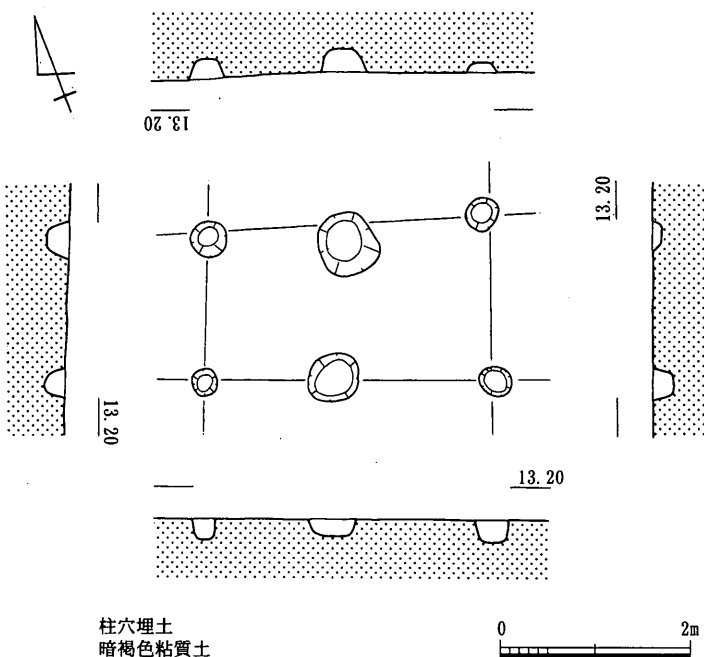
梁行2間×桁行3間で建物の主軸方位はN-26°-Eである。北端の梁行は南側に比べて短くなっている。建物の平面形は長方形で、梁行2間で2.8～3.0m、桁行3間で5.3m、建物面積は梁間を平均値で2.9mとすると15.4㎡≒4.7坪の規模である。柱穴の平面形は円形であるが、一部楕円形のものもある。柱穴の埋土は暗茶褐色粘質土である。



第314図 V区 第1面SB18平・断面図(1/80), SB18内SP01出土遺物(1/3)

S B 18 (第 314 図)

S B 17 に隣接して検出した掘立柱建物跡である。梁行2間×桁行2間で建物の主軸方位はN-17°-Wである。南端の梁行は若干歪んでいる。建物の平面形は長方形で、梁行2間で3.0～3.2m、桁行2間で4.2～4.4m、建物面積は梁間と桁行の平均をとると13.3㎡≒4.0坪の規模である。柱穴の平面形は円形であるが他の建物に比べてやや大きめである。埋土は暗茶褐色粘質土である。建物の柱穴(S P 01)から土師質釜の罫(44)の破片が出土している。



第315図 V区 第1面SB19平・断面図(1/80)

S B 19 (第 315 図)

S B 15 の北西約3mの位置で検出した掘立柱建物跡である。梁行1間×桁行2間で建物の主軸方位はN-69°-Wである。建物の平面形は

長方形で、梁行1間で1.6 m、桁行2間で3.0 m、建物面積は4.8 m<sup>2</sup>≒1.5坪の規模である。柱穴の平面形は円形であるが中央のものは他の柱穴に比べて大きめである。埋土は暗褐色粘質土である。

## 溝

### S D 01 (第316図)

調査区北壁沿いの中央やや東寄りの旧G 4区で検出した溝である。全体は検出しておらず、調査区外から調査区内に直線的に6.0 mほど伸びて収束する。幅は1.2～1.6 mで深さは0.3 m前後で、埋土は暗灰茶色砂混じり粘質土の単一層である。

45～47は埋土中から出土した遺物で、45・46は土師質の鍋、47は瓦質の釜で口縁部端部は内傾し、やや下向きの小さな鐔が巡る。

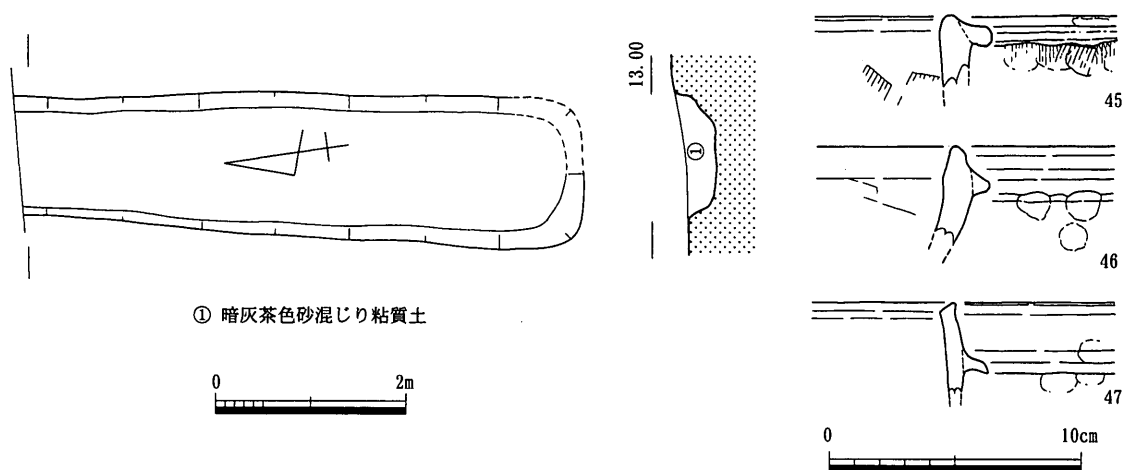
## 土坑

個別の土坑について報告する前に類似した性格をもつと考えるS K 03、05、06、12、13について述べる。

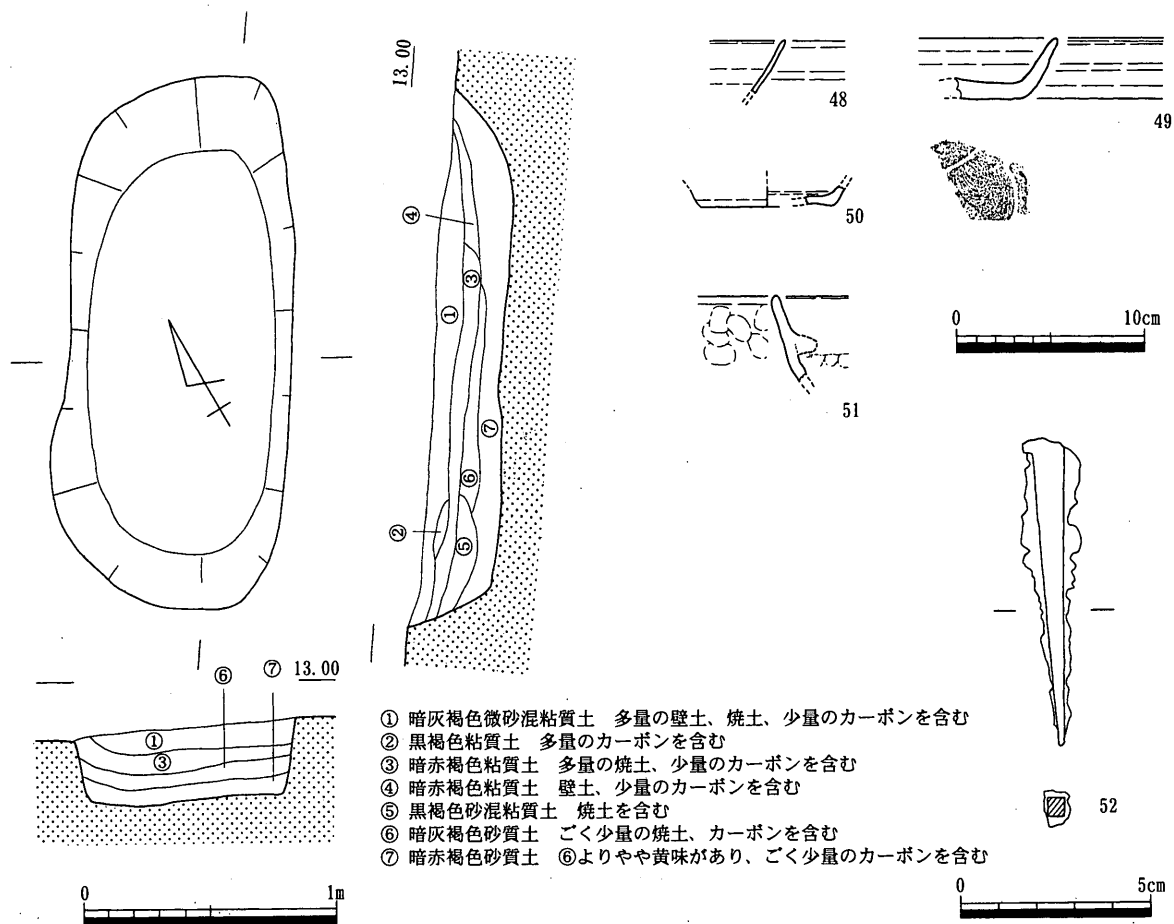
これらは旧G 1区北部で近接して検出した土坑群である。主軸が類似し、ややルーズだが列状をなす。土坑の平面形は方形を基調とし、規模は1、2 m～2 mと概ね類似する。また出土量に多寡があるが、壁土、焼礫片、焼土、炭が廃棄されている。近接するSA02、SB09構成柱穴ではこれらが出土するが、他の遺構では見られない。以上の配置と遺構形状、規模、出土遺物の類似性から土坑群が近接した時期に形成されたと考える。なお出土遺物の内容からこれらの遺構には壁土を含むゴミが燃やされたあと、廃棄されたと考えられる。

### S K 03 (第317図)

調査区旧G 1区西部中央で検出した土坑である。平面形は長方形であり、西側でやや膨らむ。断面形は逆台形を呈する。規模は長径2.04 m、短径96 cm、深さ30 cmを測る。主軸方向はN-35°-Eである。埋土は7層に分けられるが1～6層には壁土、焼土、炭を含み、7層にはこれらを含まない。よって7層が自然堆積したあと、1～6層を廃棄したと考える。出土遺物は土師器杯(48～50)、



第316図 V区 第1面SD01平・断面図(1/80), 出土遺物(1/3)



第317図 V区 第1面SK03平・断面図(1/30), 出土遺物(1/4, 1/2)

土師質土器土釜(51)、鉄釘(52)などがある。48は器壁が薄く、硬質である。49、50は口縁部がやや外傾し、底部を糸切りする。51は短いつばをもつ。14世紀後半と考える。土坑の時期は51より14世紀後半と考える。

S K 04 (第318図)

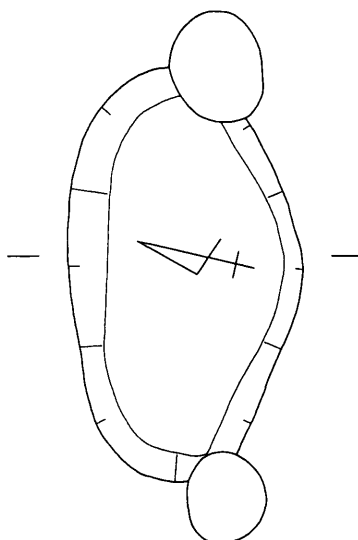
旧G1区北部で検出した土坑である。平面形は楕円形であり、南側でやや膨らむ。断面形は逆台形を呈する。SB10に切られる。規模は長径1.62m、短径93cm、深さ18cmを測る。主軸方向はN-78°-Eである。出土遺物は青磁碗(53)、土師質土器土釜(54)、焼礫などがある。53は外面に2条の片切彫の凹線を施す。54は細く、短いつばをもつ。14世紀後半と考える。土坑の時期は54より14世紀後半と考える。

S K 05 (第319図)

旧G1区中央西部で検出した土坑である。平面形はややいびつな長方形である。断面形は西側で緩い傾斜となるが、他の部分ではほぼ直立する。SB09に切られる。規模は長径1.41m、短径1.11m、深さ21cmを測る。主軸方向はN-35°-Eである。中央部で焼粘土塊が出土した。出土遺物は土師器杯(55、56)、鉄釘(57)、壁土、焼礫などがある。55は口縁部がやや外傾し、底部を糸切りする。13世紀後半～14世紀代と考える。56は底部を糸切りする。14世紀代と考える。57は断面方形を呈し、先端部を欠く。土坑の時期は56より14世紀代と考える。

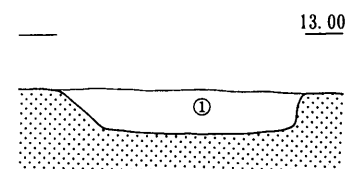
S K 06 (第 320 図)

旧 G1 区中央西部で検出した土坑である。北部が調査区外に延びるが、平面形はややいびつな楕円形と考えられる。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1.2 m、短径 78 cm、深さ 18 cm を測る。主軸方向は N - 30° - E である。出土遺物は土師質土器土釜 (58)、壁土、焼礫などがある。58 は口縁部に対し、短いつばをもつ。つばの先端はとがる。14 世紀後半と考える。土坑の時期は 58 より 14 世紀後半と考える。

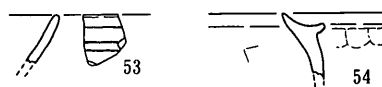


S K 07 (第 321 図)

旧 G1 区東部で検出した土坑である。平面形はややいびつな円形である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 90 cm、短径 72 cm、深さ 21 cm を測る。出土遺物は土師質土器土鍋 (59) がある。59 は口縁部が大きく外反し、外内面とも板ナデを施す。土坑の時期は 59 より中世と考える。



① 暗灰褐色粘質土 土器片を少量含む



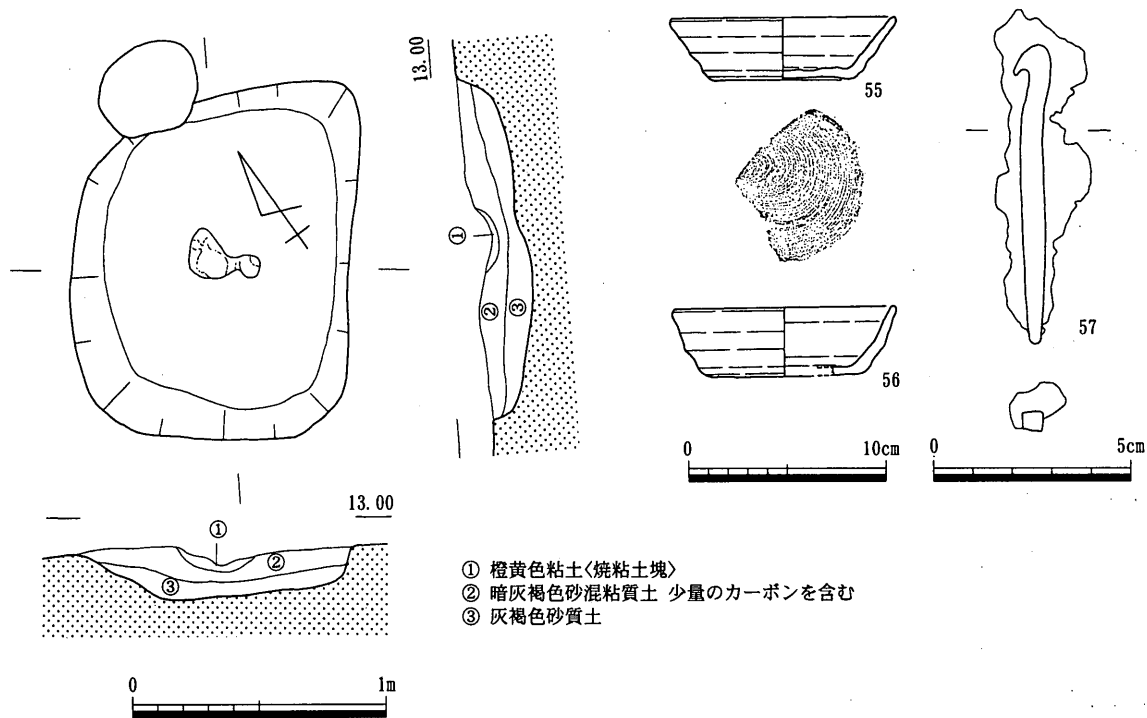
第318図 V区 第1面SK04平・断面図 (1/30), 出土遺物 (1/4)

S K 08 (第 322 図)

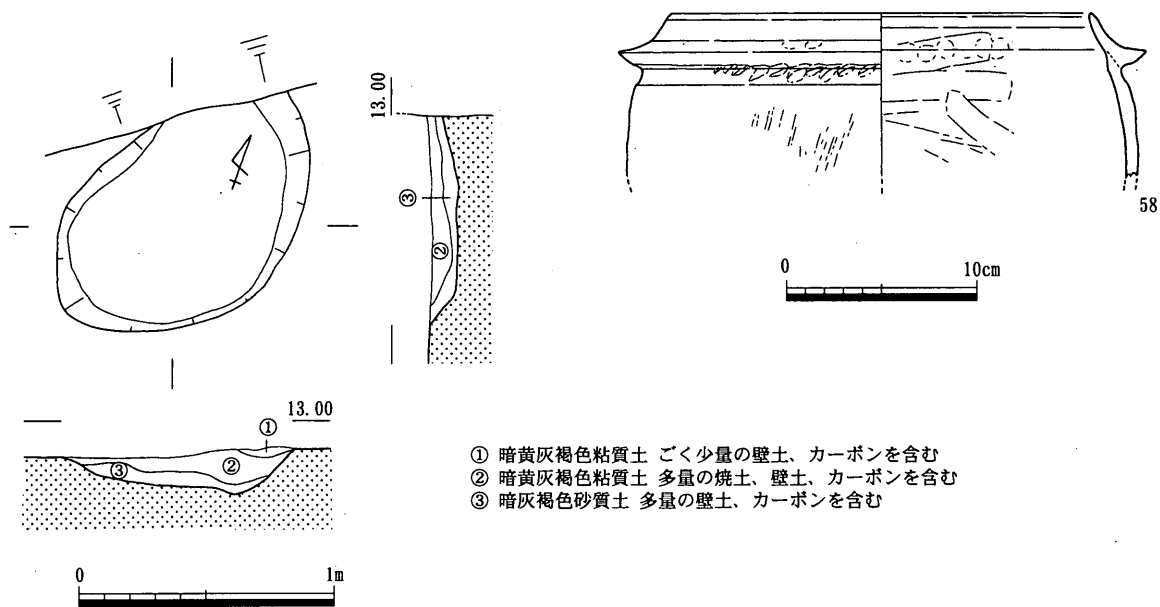
旧 G1 区中央西部で検出した土坑である。平面形はいびつな長径 1.23 m、短径 90 cm、深さ 18 cm を測る。主軸方向は N - 45° - E である。土坑長軸に沿う方向で礫が並んで出土した。いずれも全面被熱している。被熱範囲が限定されず、程度に差が無いこと、土層に被熱面が見られないことから目的は不明だが、土坑外で被熱した礫を人為的に配置したと考える。出土遺物はふいごの羽口 (60)、壁土、焼礫などがある。製鉄に伴う遺物として他に鉄滓が SK10 で出土している。土坑の時期は 14 世紀代の SK13 を切るので 14 世紀代以降と考えられる。

S K 09 (第 323 図)

旧 G1 区北部で検出した土坑である。平面形はややいびつな長方形である。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 1.95 m、短径 1.23 m、深さ 24 cm を測る。主軸方向は N - 48° - W である。中央部で拳大 ~ 50 cm 程度の礫がかたまって出土した。出土遺物は青磁碗 (61)、皿 (62)、土師質土器土釜 (63 ~ 66)、把手付鍋 (67)、土鍋 (68)、茶釜 (69)、砥石 (70) などがある。61 は口縁部外面に雷文帯を施す。62 は断面三角形の高台をもち、高台内の釉をはぐ。63 ~ 65、67 は矮小なつばをもつ。16 世紀代と考える。また 66、67 は底部を格子目叩きする。68 は外内面とも煤が付着する。69 は口縁端部に丸みをもつ。内面はハケ目後板ナデを施す。70 は中央部が凹み、平坦面がある。また敲打痕が 2ヶ所に見られる。土坑の時期は 63 ~ 65、67 より 16 世紀代と考える。



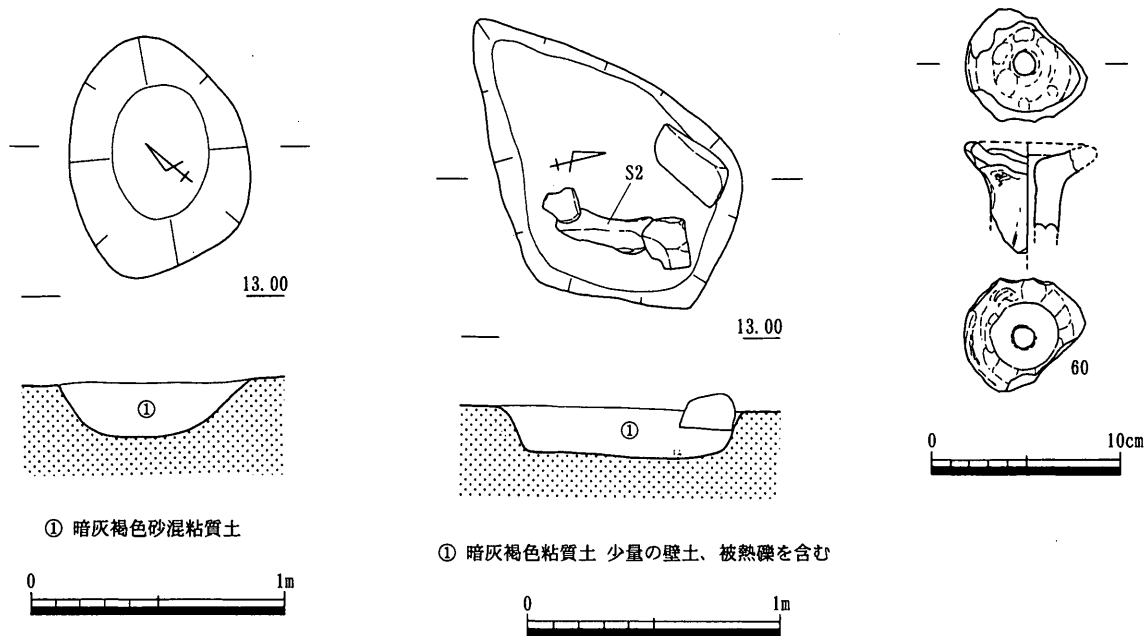
第319図 V区 第1面SK05平・断面図(1/30), 出土遺物(1/4, 1/2)



第320図 V区 第1面SK06平・断面図(1/30), 出土遺物(1/4)

SK 10 (第 324 図)

旧 G1 区中央部で検出した土坑である。平面形は楕円形である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1.38 m、短径 1.02 m、深さ 18 cm を測る。主軸方向は N-0、1° - E である。中央部で拳大 ~ 30 cm 程度の礫が出土した。大ぶりの礫は被熱しているものが多い。出土遺物は土師器杯 (71、72)、刀子 (73)、鉄滓 (74)、銭 (75) がある。71 は口縁部の傾きが強く、器高が低い。底部をへら切りする。72 は器壁が薄く、底部をへら切りする。14 世紀代と考える。75 は聖宋元宝である。土坑の時期は 72 より 14 世紀代と考える。



第322図 V区 第1面SK08平・断面図(1/30), 出土遺物(1/4)

第321図 V区 第1面SK07平・断面図(1/30), 出土遺物(1/4)

SK 11 (第 325 図)

調査区南壁付近のやや西寄りの旧G 7区で検出した土坑である。平面形は不整形で、最大長 1.62 m、幅は 0.86 ~ 1.34 mあり、深さは 0.18 mある。底面は平坦で、50cm × 20cmの大型の石が1個底面に張り付くように出土した。埋土は暗茶色系の粘質土である。

遺物が少量出土しているが、図化できたのは 76のみである。76は土師器杯であるが上部を欠損している。底部はヘラ切りである。

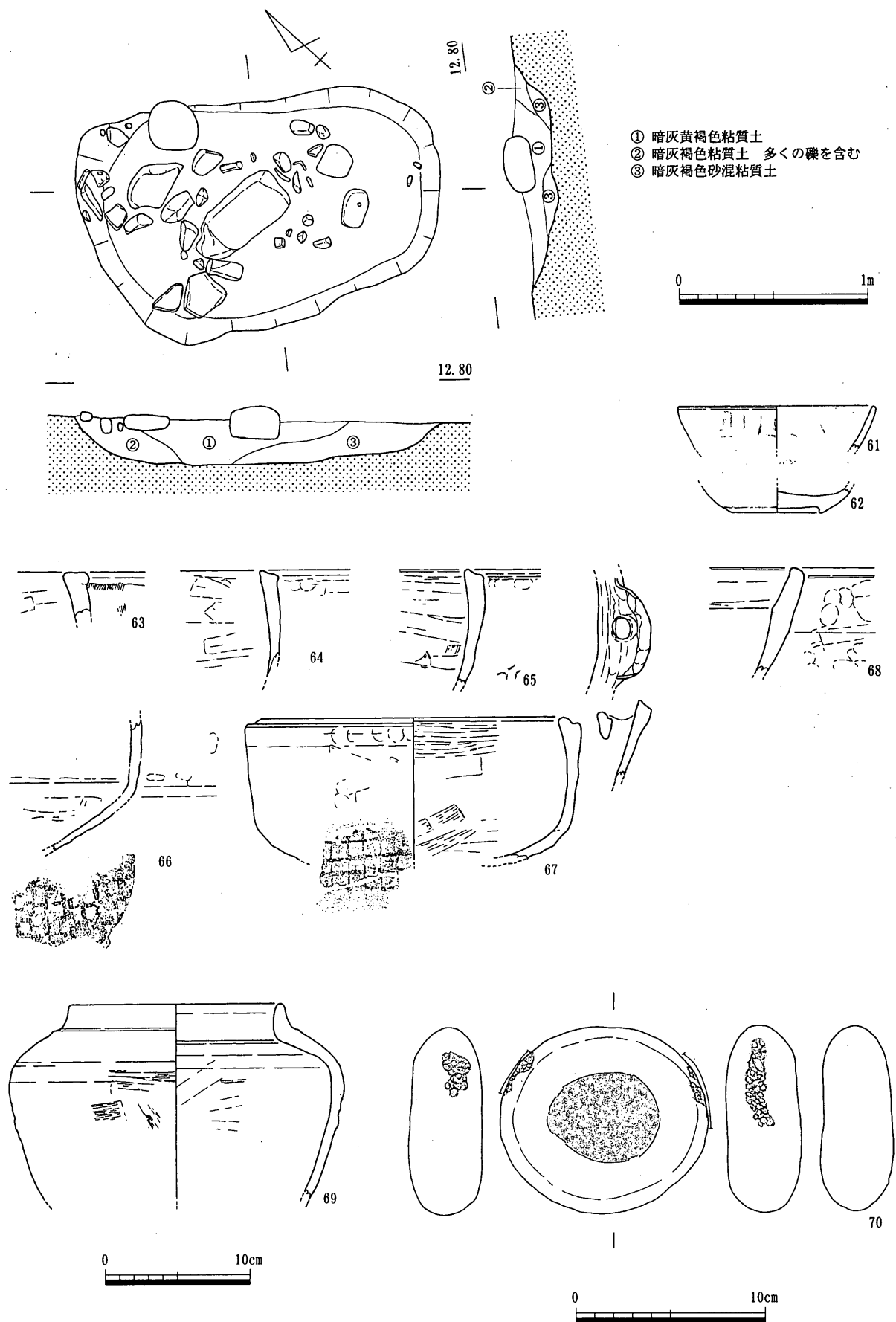
SK 12 (第 326 図)

旧G1区中央西部で検出した土坑である。SB 09に切られる。平面形はややいびつな楕円形である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1.77 m、短径 1.29 m、深さ 21 cmを測る。主軸方向はN - 50° - Eである。埋土は2層に分けられるが、2層にも壁土を含む。出土遺物は壁土、焼礫などがある。土坑の時期はSK03、05、06と近接した時期と考えられるので14世紀代と考える。

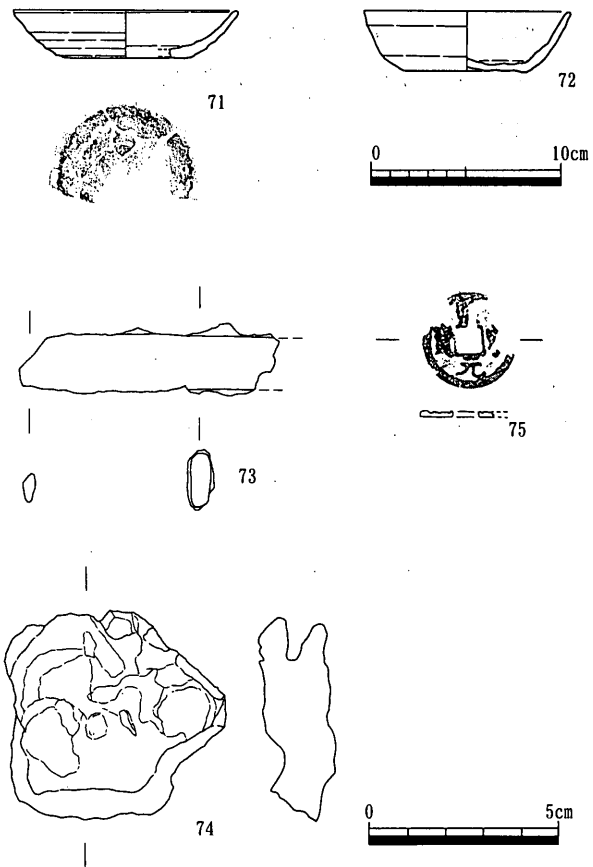
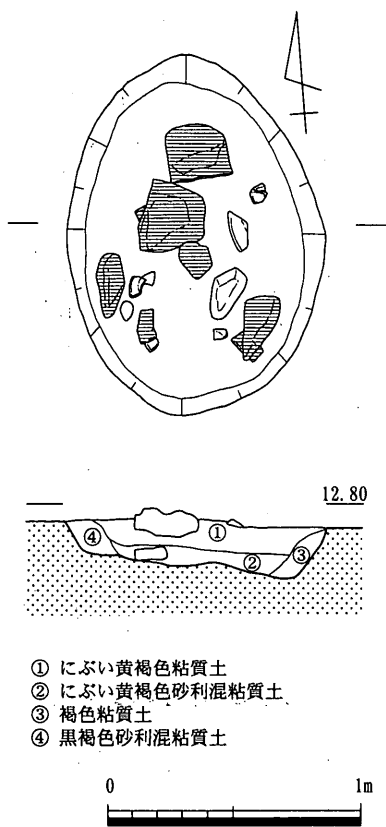
SK 13 (第 327 図)

旧G1区中央西部で検出した土坑である。SK08に切られるが、平面形はややいびつな長方形と考えられる。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 1.83 m、短径 1.11 m、深さ 18 cmを測る。主軸方向はN - 23° - Eである。出土遺物は壁土、焼礫などがある。土坑の時期はSK03、05、06と近接した時期と考えられるので14世紀代と考える。





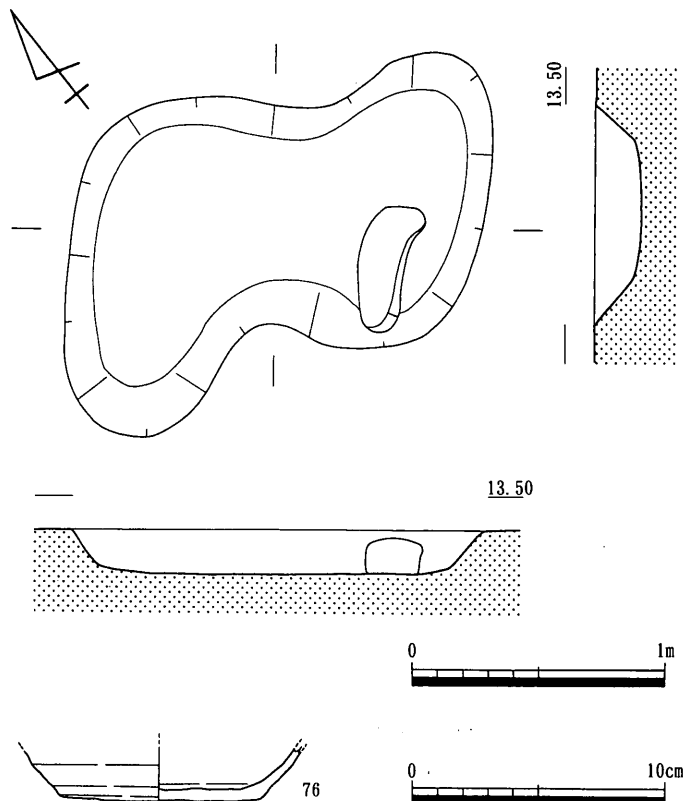
第323図 V区 第1面SK09平・断面図(1/30), 出土遺物(1/4, 1/3)



第324図 V区 第1面SK10平・断面図(1/30), 出土遺物(1/4, 1/2)

SK 14 (第328図)

旧G1区北部で検出した土坑である。平面形はややいびつな円形である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径1.02m、短径81cm、深さ18cmを測る。主軸方向はN-35°-Wである。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より中世と考える。



SK 15 (第329図)

旧G1区北部で検出した土坑である。平面形はやや角張る円形である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径1.32m、短径1.14m、深さ15cmを測る。主軸方向はN-2°-Wである。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より中世と考える。

SK 16 (第330図)

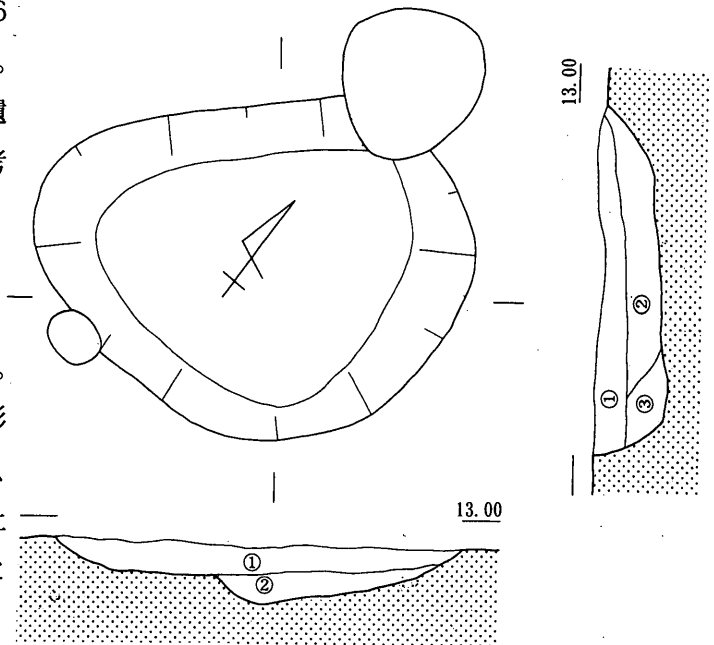
旧G1区中央東部で検出した土坑である。平面形はややいびつな楕円形である。断面

第325図 V区 第1面 SK11平・断面図(1/30), 出土遺物(1/3)

形は浅い皿状を呈する。規模は長径 1.56 m、短径 1.08 m、深さ 27 cm を測る。主軸方向は N - 39° - E である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より中世と考える。

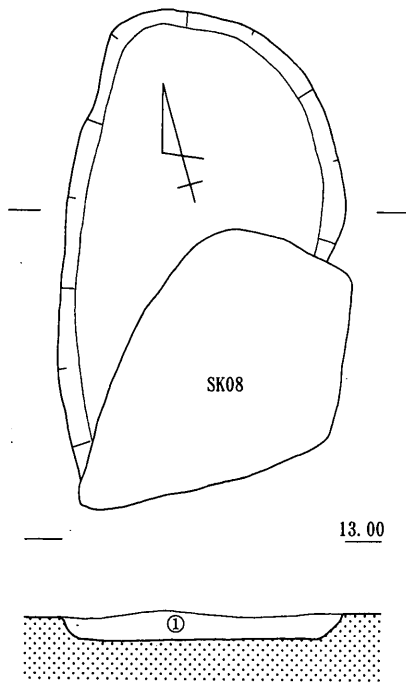
SK 17 (第 331 図)

旧 G1 区中央東部で検出した土坑である。平面形はややいびつな方形である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1.05 m、短径 96 cm、深さ 27 cm を測る。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より中世と考える。



- ① 暗灰褐色砂質土 多量の壁土、カーボンを含む
- ② 暗灰褐色砂質土 ごく少量の壁土を含む

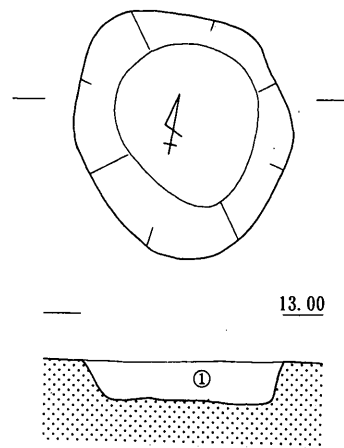
第326図 V区 第1面SK12平・断面図(1/30)



- ① 暗灰褐色砂混粘質土



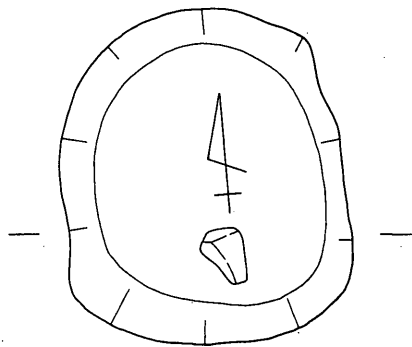
第327図 V区 第1面SK13平・断面図(1/30)



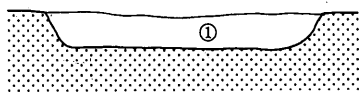
- ① 暗灰褐色砂質土



第328図 V区 第1面SK14平・断面図(1/30)



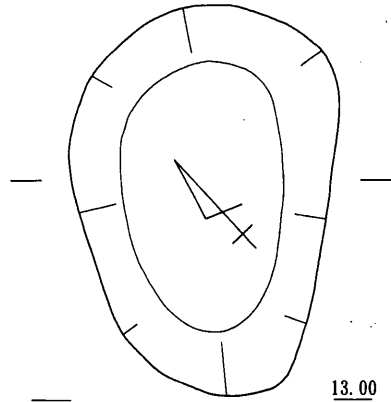
12.60



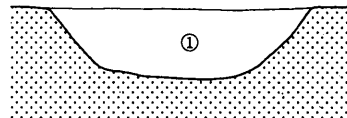
① 暗灰褐色砂質土



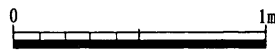
第329図 V区 第1面SK15  
平・断面図(1/30)



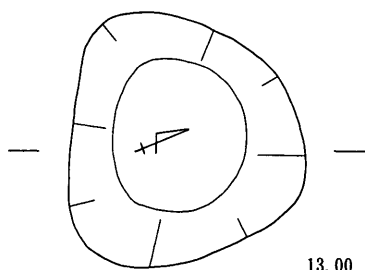
13.00



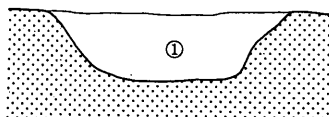
① 褐色粘質土



第330図 V区 第1面SK16  
平・断面図(1/30)



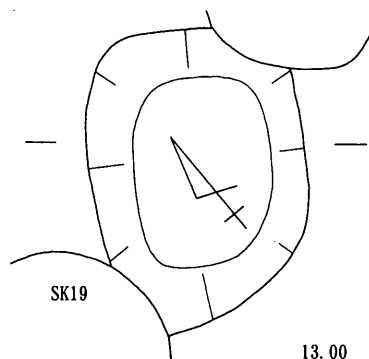
13.00



① 褐色粘質土

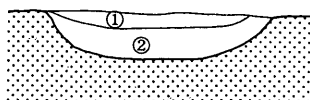


第331図 V区 第1面SK17  
平・断面図(1/30)



SK19

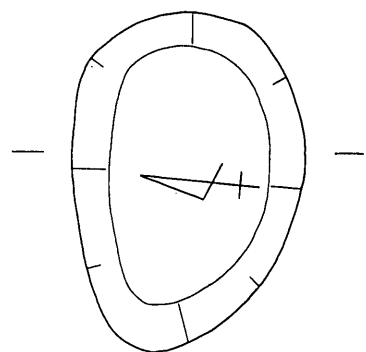
13.00



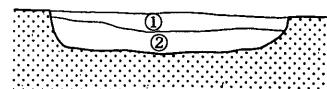
① 暗灰褐色粘質土  
ごく少量の焼土、カーボンを含む  
② 茶褐色粘質土



第332図 V区 第1面SK18  
平・断面図(1/30)



13.00



① 暗黄褐色粘質土  
② 暗黄茶褐色粘質土



第333図 V区 第1面SK19  
平・断面図(1/30)

S K 18 (第 332 図)

旧 G1 区南東部で検出した土坑である。S K 19 に切られるが、平面形はやや角張る円形である。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 1.2 m、短径 87 c m、深さ 18 c m を測る。主軸方向は N - 35° - E である。出土遺物はごく少量の壁土がある。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 19 (第 333 図)

旧 G1 区南東部で検出した土坑である。平面形は楕円形である。断面形は浅い皿状を呈する。SK18 を切る。規模は長径 1.35 m、短径 93 c m、深さ 15 c m を測る。主軸方向は N - 87° - E である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 20 (第 334 図)

旧 G1 区北東部で検出した土坑である。平面形はやや角張る円形である。断面形は浅い皿状を呈する。SX01 を切る。規模は長径 1.23 m、短径 1.14 m、深さ 21 c m を測る。出土遺物はない。土坑の時期は切り合いから 16 世紀代と考える。

S K 21 (第 335 図)

旧 G1 区南部で検出した土坑である。平面形は円形である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1.02 m、短径 87 c m、深さ 18 c m を測る。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 22 (第 337 図)

旧 G1 区東部で検出した土坑である。平面形は楕円形である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 2.13 m、短径 1.65 m、深さ 36 c m を測る。1 層の中央西側で人頭大～ 30 c m 程度の礫が出土した。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 23 (第 336 図)

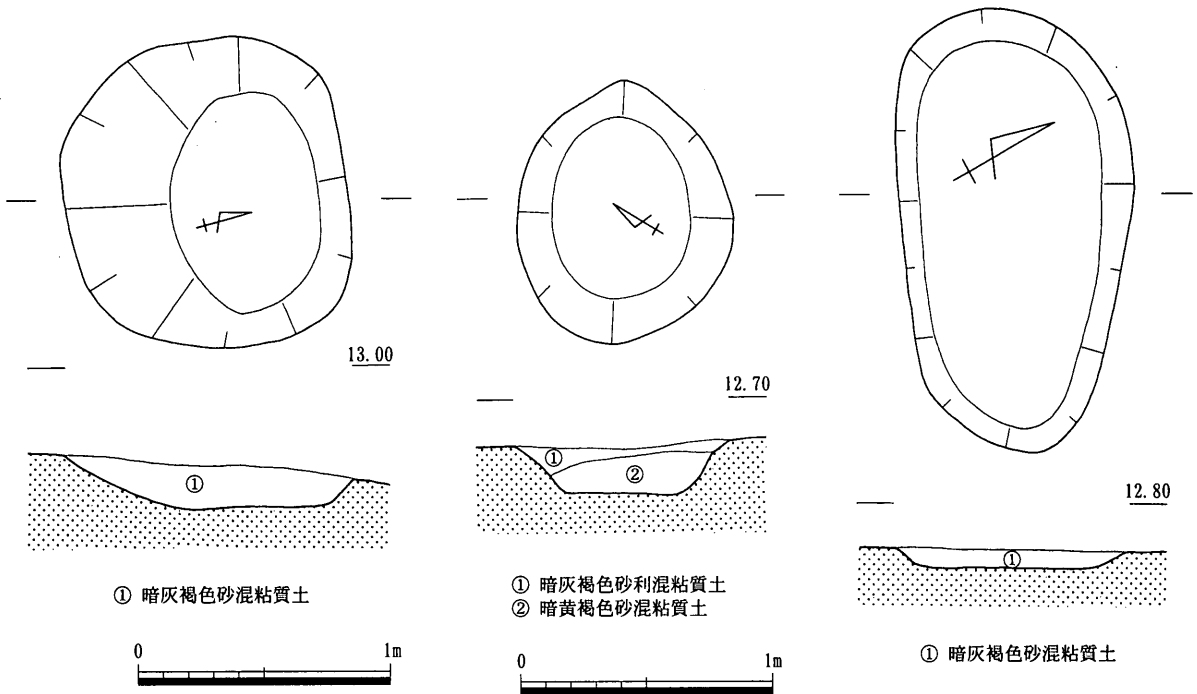
旧 G1 区南西部で検出した土坑である。平面形は楕円形である。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 1.74 m、短径 96 c m、深さ 9 c m を測る。主軸方向は N - 63° - W である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 24 (第 338 図)

旧 G1 区南西部で検出した土坑である。平面形は北側ですぼまる楕円形である。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 1.41 m、短径 93 c m、深さ 9 c m を測る。主軸方向は N - 23° - E である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 25 (第 339 図)

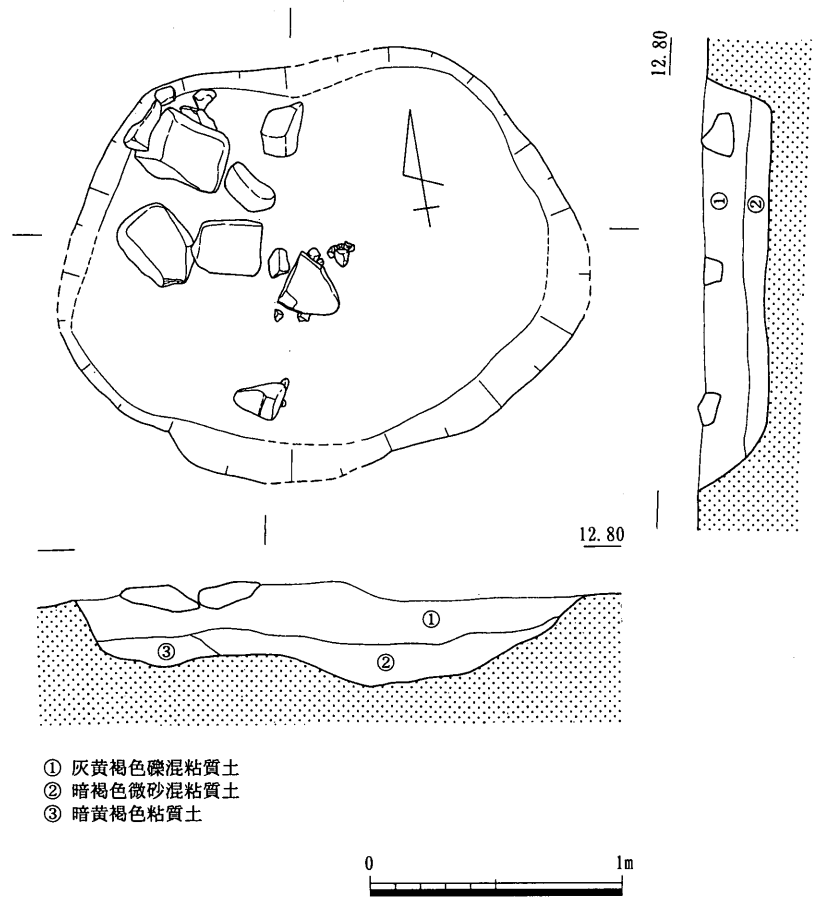
旧 G2 区東部で検出した土坑である。平面形は細長い長方形である。断面形は浅い皿状を呈する。SK26、SX04 を切る。規模は長径 2.73 m、短径 69 c m、深さ 15 c m を測る。主軸方向は N - 55° - W である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より中世と考える。



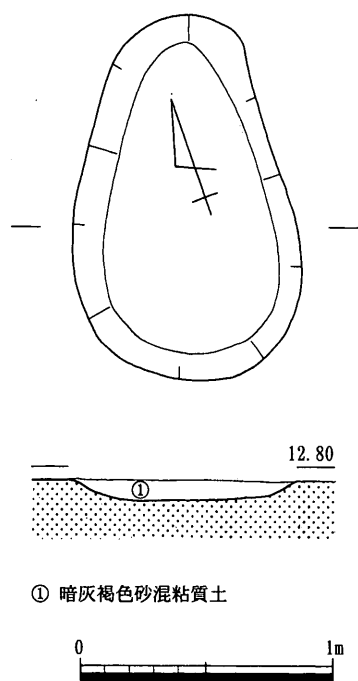
第334图 V区 第1面SK20  
平·断面图(1/30)

第335图 V区 第1面SK21  
平·断面图(1/30)

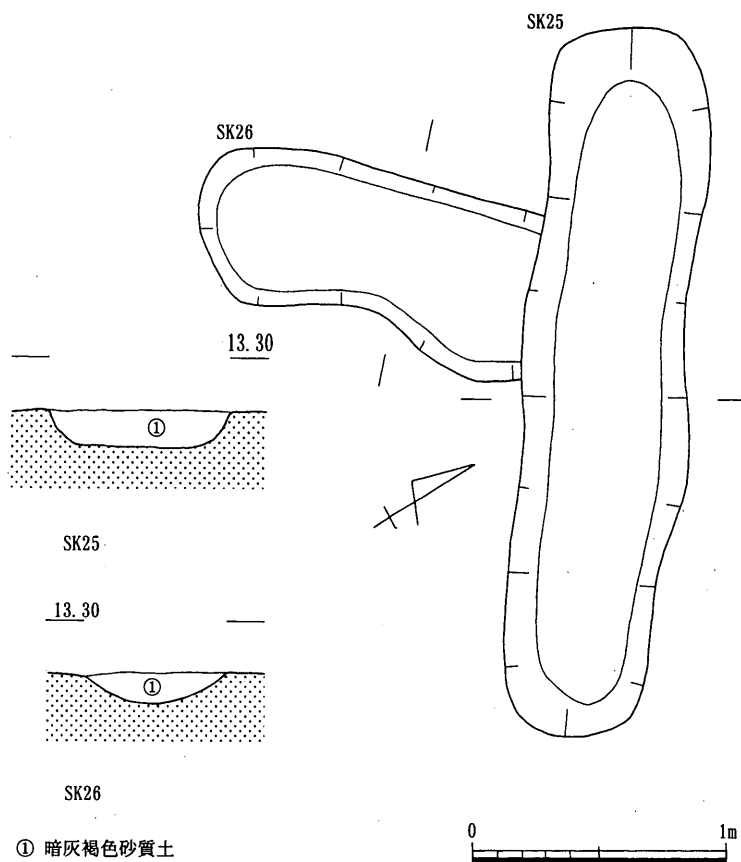
第336图 V区 第1面SK23  
平·断面图(1/30)



第337图 V区 第1面SK22平·断面图(1/30)



第338図 V区 第1面SK24  
平・断面図(1/30)



第339図 V区 第1面SK25・26平・断面図(1/30)

S K 26 (第 339 図)

旧G2区東部で検出した土坑である。平面形は細長い長方形である。断面形は浅い皿状を呈する。SK25に切れ、SX04を切る。規模は長径1.35m以上、短径69cm、深さ15cmを測る。主軸方向はN-45°-Eである。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より中世と考える。

S K 27 (第 340 図)

調査区中央部の旧G3区で検出した土坑である。一部を後述するS K 38によって壊されているため、全体の形は不明であるが、隅丸の長方形と考えられる。長さは検出出来た部分で1.9m、幅は0.8~1.0mあり、深さは0.08mと浅い。褐色系の埋土が堆積していた。

S K 28 (第 341 図)

調査区中央部の旧G3区で検出した土坑である。一部を柱穴によって壊されている。平面形はほぼ長方形であるが、南東部分の短辺は一部が抉れたように不整形である。長さは2.0m、幅は1.0~1.1mで南東部分がやや広がっている。深い部分で0.17mあり、南東部分が浅くなっている。茶褐色系の埋土をもつ。

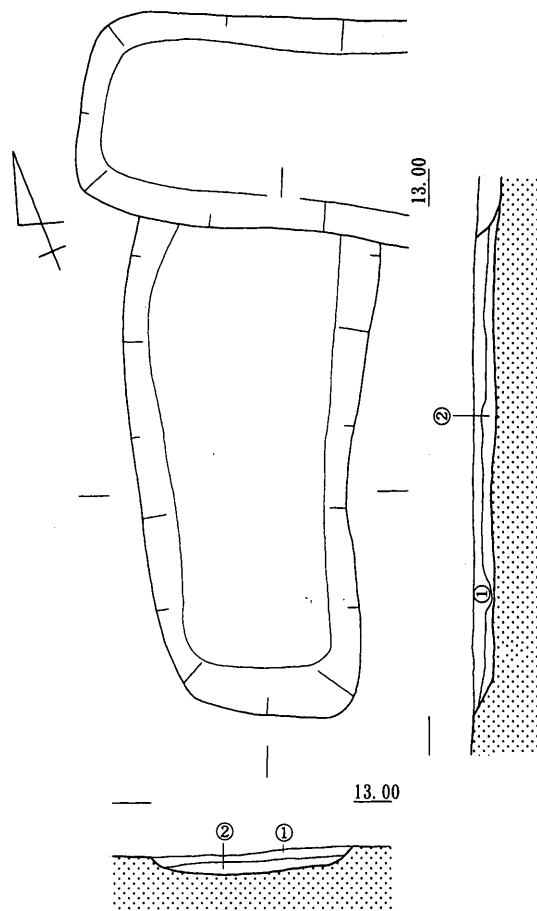
柱穴

S P 03 (第 342 図)

旧 G 1 区北部で検出した柱穴である。平面形は円形である。径 53 cm、深さ 19 cm を測る。埋土上面の中央から西村産須恵器碗 (77) が口縁部を上位に向けて出土した。77 はへら磨きを施さず、断面三角形の小さな高台をもつ。13 世紀と考えられる。77 より柱穴の時期は 13 世紀と考える。

S P 04 (第 342 図)

旧 G 1 区北部で検出した柱穴である。平面形は円形である。径 41 cm、深さ 18 cm を測る。埋土上位で土師器杯を 2 枚並べて配置し、その中に銭を置いている。掘立柱建物を構成せず地鎮遺構と考えられる。78、79 は土師器杯である。ともに口径約 13 cm を測り、底部をへら切りする。80 は青磁碗である。口縁部が外反し、D 類 (註) に該当する。14 世紀後半と考えられる。80 より柱穴の時期は 14 世紀後半と考える。



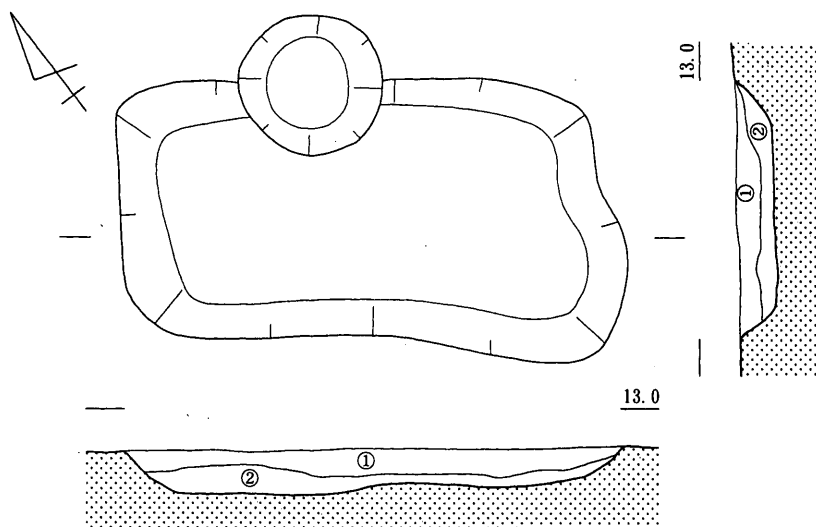
- ① 褐色砂質土  
0.5~2cm大の礫多く含む
- ② 暗褐色粘質土  
暗黄色粘土ブロック少々含む



S P 06 (第 342 図)

旧 G 1 区北部で検出した柱穴である。平面形は円形である。径 46 cm を測る。土師器杯を南北方向に並べて配置し、中央の杯に銭を置いている。掘立柱建物を構成せず地鎮遺構と考えられる。82~85 は土師器杯である。全て底部をへら切りする。82、85 が口径 13.5 cm と大ぶりであるため 13 世紀代と考える。82、85 より柱穴の時期は 13 世紀代と考える。

第340図 V区 第1面SK27平・断面図(1/30)



- ① 暗茶褐色砂質土  
上部に0.5~2cm大の礫多く含む
- ② 茶褐色粘質土

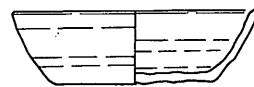
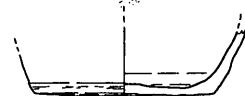
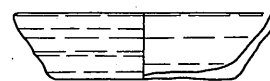
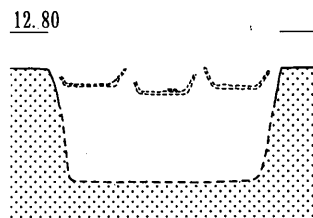
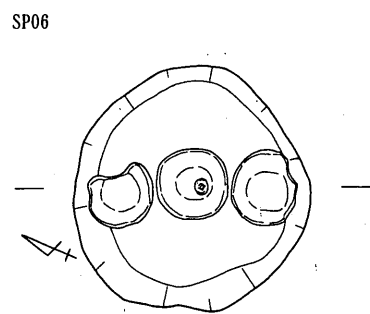
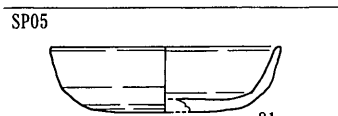
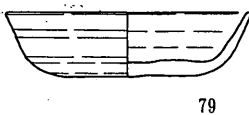
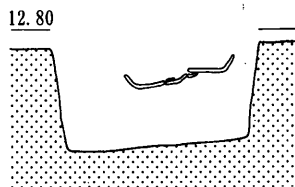
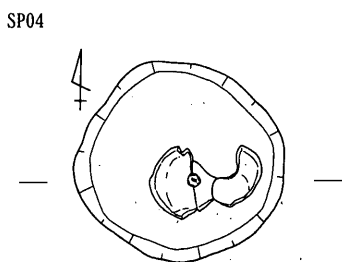
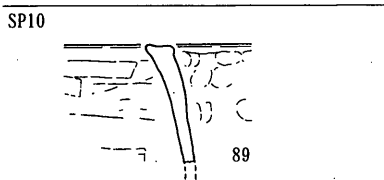
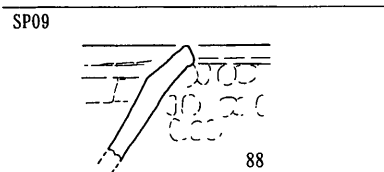
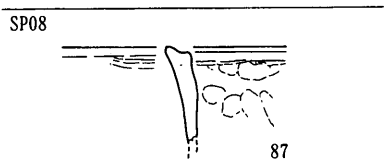
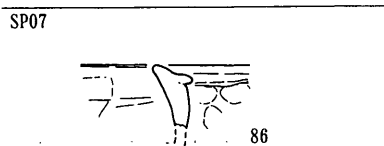
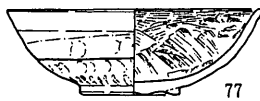
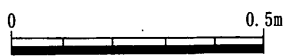
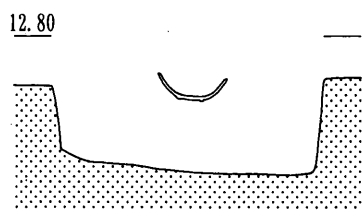
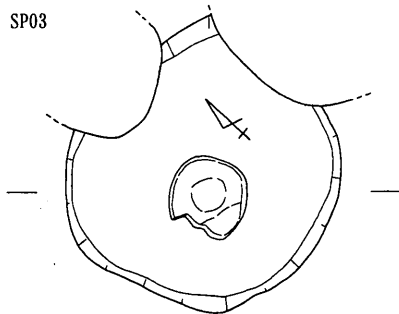


S P 05, 07~16 (第 342, 343 図)

平・断面図を掲載していない柱穴出土遺物を図化した。81 は土師器杯である。口縁部が直立気味であり、底部との境に丸みをもつ。86、87、89、90 は土師質土器土釜である。いずれも矮小なつ

第341図 V区 第1面SK28平・断面図(1/30)





第342図 V区 第1面SP03・04・06平・断面図(1/15), SP03~10出土遺物(1/4)

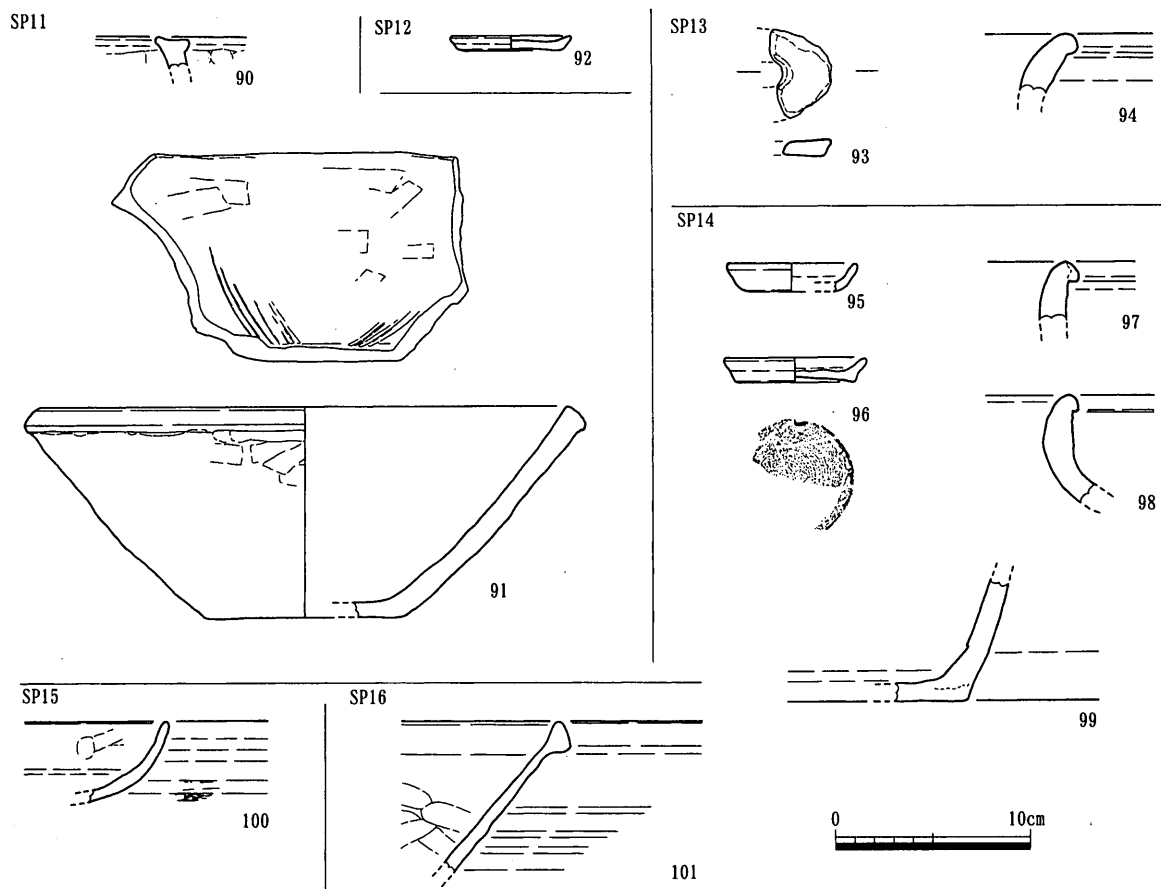
ばをもつが、87、89、90は口縁部もきわめて短い。86が15世紀後半～16世紀前半、87、89、90が16世紀代と考える。88は土師質土器土鍋である。内面の屈曲がなだらかである。91は土師質土器播鉢である。口縁端部が器壁に直交する。外内面ともに板ナデを施す。92は土師器小皿である。口径6cmと小振りで口縁部の立ち上がりも低い。93、94、97、98、99は須恵器の鉢である。いずれも焼成不良のため赤味を帯びた乳白色を呈する。同一個体と考えられる。93は体部破片に穿孔している。95、96は土師器小皿である。ともに口縁部が外反気味であり、底部を糸切りする。100は土師器の杯である。本来は古墳に副葬された土器と考えられるが、埋土より中世と判断する柱穴から出土した。外内面に板ナデを施す。101は東播系の捏鉢である。口縁端部が大きく肥厚する。13世紀後半から14世紀初頭と考えられる。

S P 17 (第344図)

S B 15とS B 17の中間の旧G3区で検出した柱穴である。平面形は円形で直径50cm、深さ26cmで暗茶褐色粘質土の埋土をもつ。102は土師器甕で、口縁部端部は外面を向き強くナデている。口縁部内面には指押さえが顕著である。埋土から考えて中世の柱穴に混入した遺物である。

S P 18 (第345図)

調査区中央の旧G3区で検出した柱穴である。平面形は楕円形で長径57cm、短径30cm、深さ14cmで暗茶褐色粘質土の埋土をもつ。103は土師質の鍋で肥厚する短い口縁部の内面にはハケ目を施



第343図 V区 第1面SP11～16出土遺物(1/4)

す。吉備系の鍋である。104は土師器小皿の細片である。

#### S P 19 (第 346 図)

S B 16 と S B 19 の中間の旧 G 3 区で検出した柱穴である。平面形は円形で直径 27cm、深さ 23cm で暗茶褐色粘質土の埋土をもつ。105 は壺であるが、混入したものである。

#### 性格不明遺構

#### S X 01 (第 347 図)

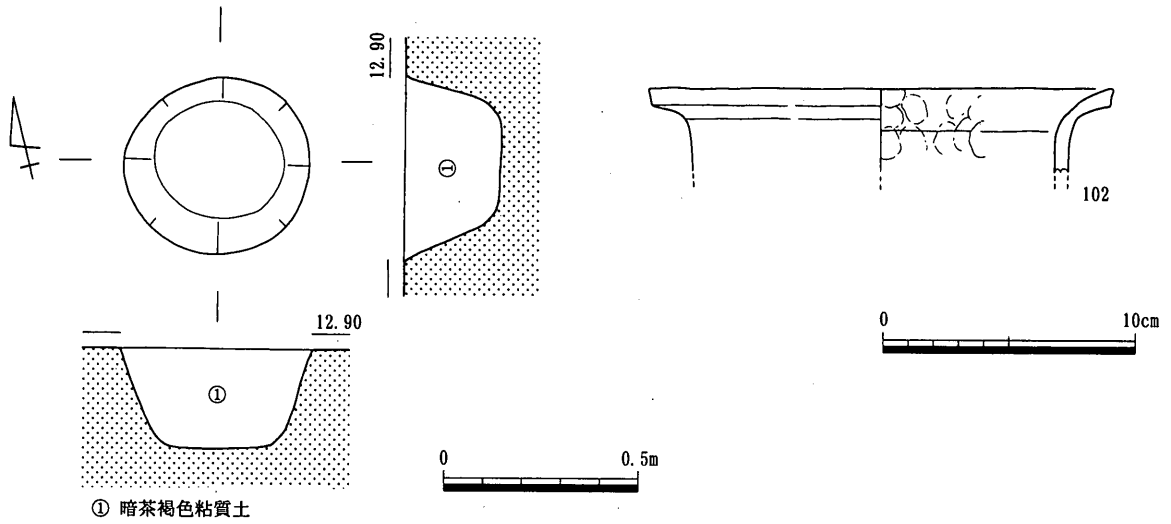
旧 G1 区北東部で検出した性格不明遺構である。東部が調査区外に延びるが平面形は隅丸方形であると推定される。断面形は逆台形を呈するが、中央部がやや盛り上がる。規模は長径 4.2 m、短径 3.24 m 以上、深さ 30 cm を測る。主軸方向は N - 14° - E である。埋土は 2 層に分けられるが 1 層からは拳大の礫が多量に出土した。中には 30 cm 大のものも含む。整った配置は見られないもの特に西側では帯状にかたまり、人為性が窺える。また須恵器杯身 2 点 (114、115) が相互に近接した位置で 1 層より出土した。ともに口径約 10 cm を測り、底部をヘラ切りする。T K 217 併行期と考えられる。この時期の遺物は付近では 1、2 号墳でしか見られないこと、ほぼ完形であること、中世期に古墳の破壊が著しく行われたと考えられることから本来は古墳の副葬品であった可能性が高い。

他の出土遺物は瓦器椀 (106)、青磁椀 (107)、肥前系陶器碗 (108)、土師質土器土釜 (109、110)、土鍋 (111、112)、茶釜 (113)、鉄釘 (116 ~ 119) がある。106 は外面にまばらにヘラミガキを施す。尾上編年 (註) の II - 3 ~ III - 1 に該当し、12 世紀後半と考えられる。107 は口縁部が外方に屈曲する。108 は見込みに胎土目が見られる。16 世紀末 ~ 17 世紀前葉と考えられる。109、110 は短いつば、口縁部をもつ。16 世紀代と考えられる。111 は内面に横ハケを施す。113 は体部に穿孔する。遺構の時期は 108 ~ 110、113 より 16 世紀末ごろと考える。

#### S X 02 (第 348、349 図)

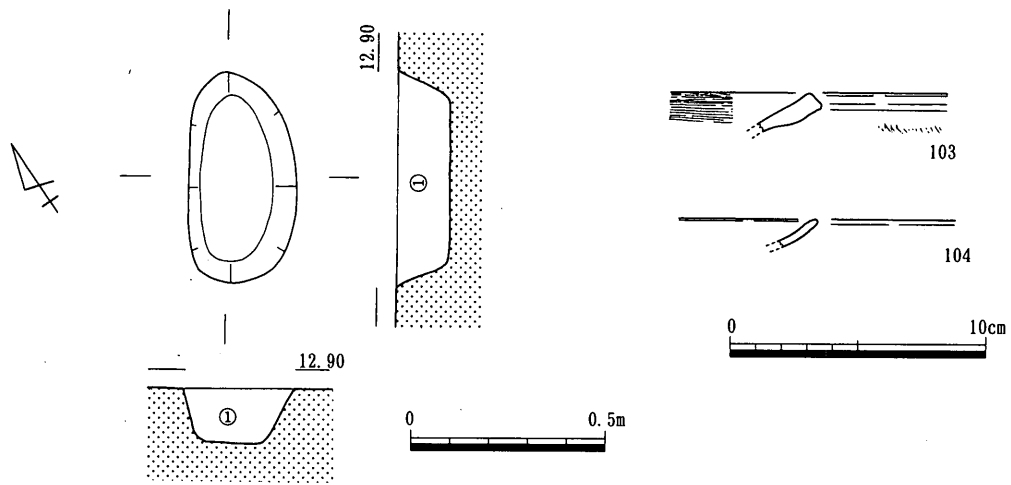
旧 G1 区中央部で検出した性格不明遺構である。平面形は溝状を呈し、東側で狭まる。断面形でも東側ではゆるく傾斜し、西側ではほぼ平坦である。S X 03 を切る。規模は長径 9.78 m、短径 3.42 m 以上、深さ 36 cm を測る。主軸方向は N - 53° - W である。西端部の浅くなっている部分では拳大 ~ 人頭大の礫が集中して出土した。人為的な配置は認められない。西側の土坑部に東側の溝部がとりつく平面形は水ための可能性を示すが、壁面の崩落や埋土のグライ化は見られない。

出土遺物は土師器小皿 (120、121)、杯 (122、123)、青磁椀 (124 ~ 126)、瀬戸美濃系陶器灯明皿 (127)、須恵器鉢 (128)、土師質土器土釜 (129 ~ 138)、土鍋 (139、140)、茶釜 (141)、銭 (142)、器種不明鉄製品 (143) がある。120 は短く分厚い口縁部をもつ。121 は口縁部が大きく外反し、底部をヘラ切りする。122、123 は口径が 14 cm 前後あり、器高が低い。124、125 は連弁文をもつ。鋳が消滅しており、124 は弱く口縁部を外反させる。14 世紀半ばから末と考えられる。126 は見込みに蓮花の陰刻を施す。127 は内外面の口縁部付近に鉄釉を施し、外面に重ね焼きによる付着物が見られる。底部を糸切りする。129 は短い口縁部、つばを持つ。内外面には板ナデが見られる。15 世紀後半 ~ 16 世紀前半と考えられる。130 ~ 137 は 129 よりさらに口縁部、つばが短く、口縁部はほとんど



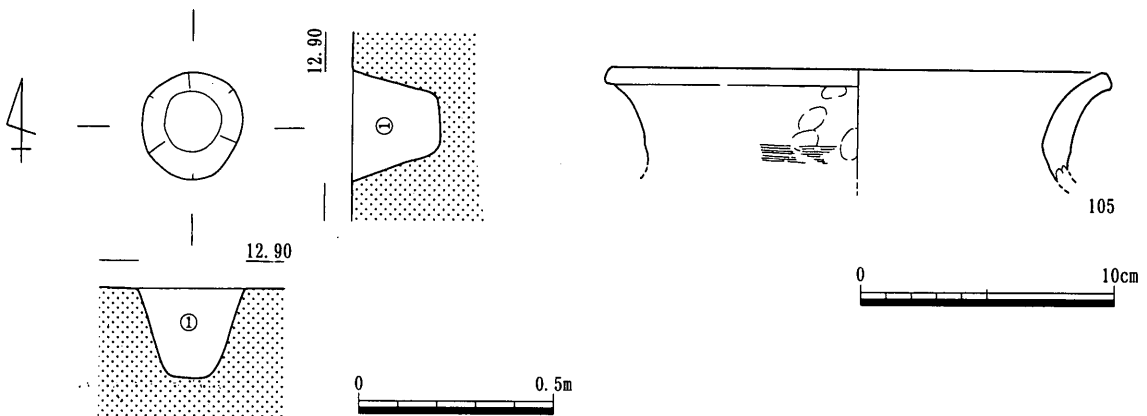
① 暗茶褐色粘質土

第344图 V区 第1面SP17平·断面图(1/20), 出土遺物(1/3)



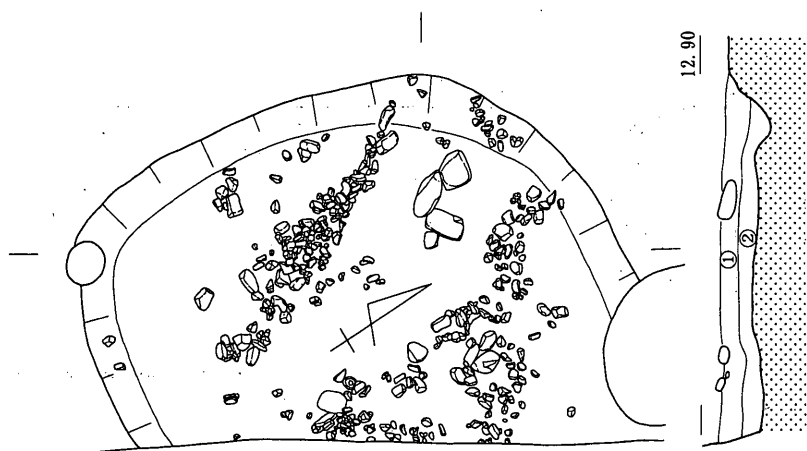
① 暗茶褐色粘質土

第345图 V区 第1面SP18平·断面图(1/20), 出土遺物(1/3)

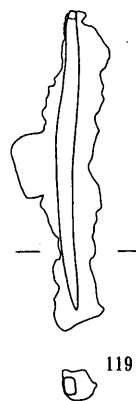
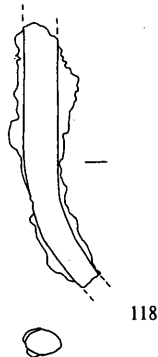
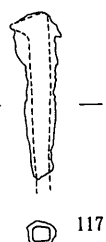
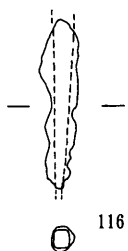
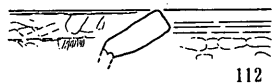
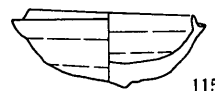
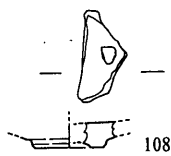
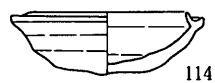
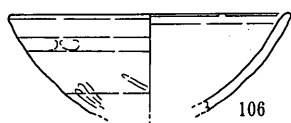
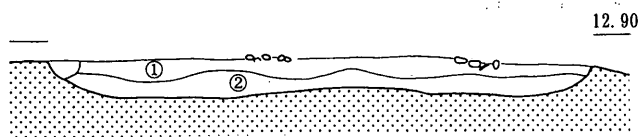


① 暗茶褐色粘質土

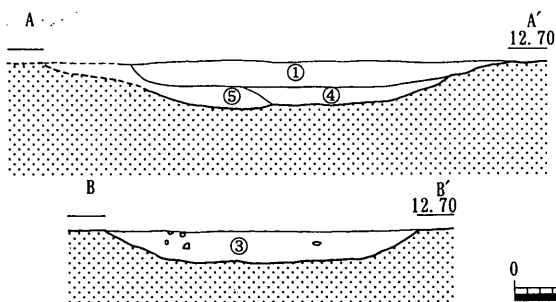
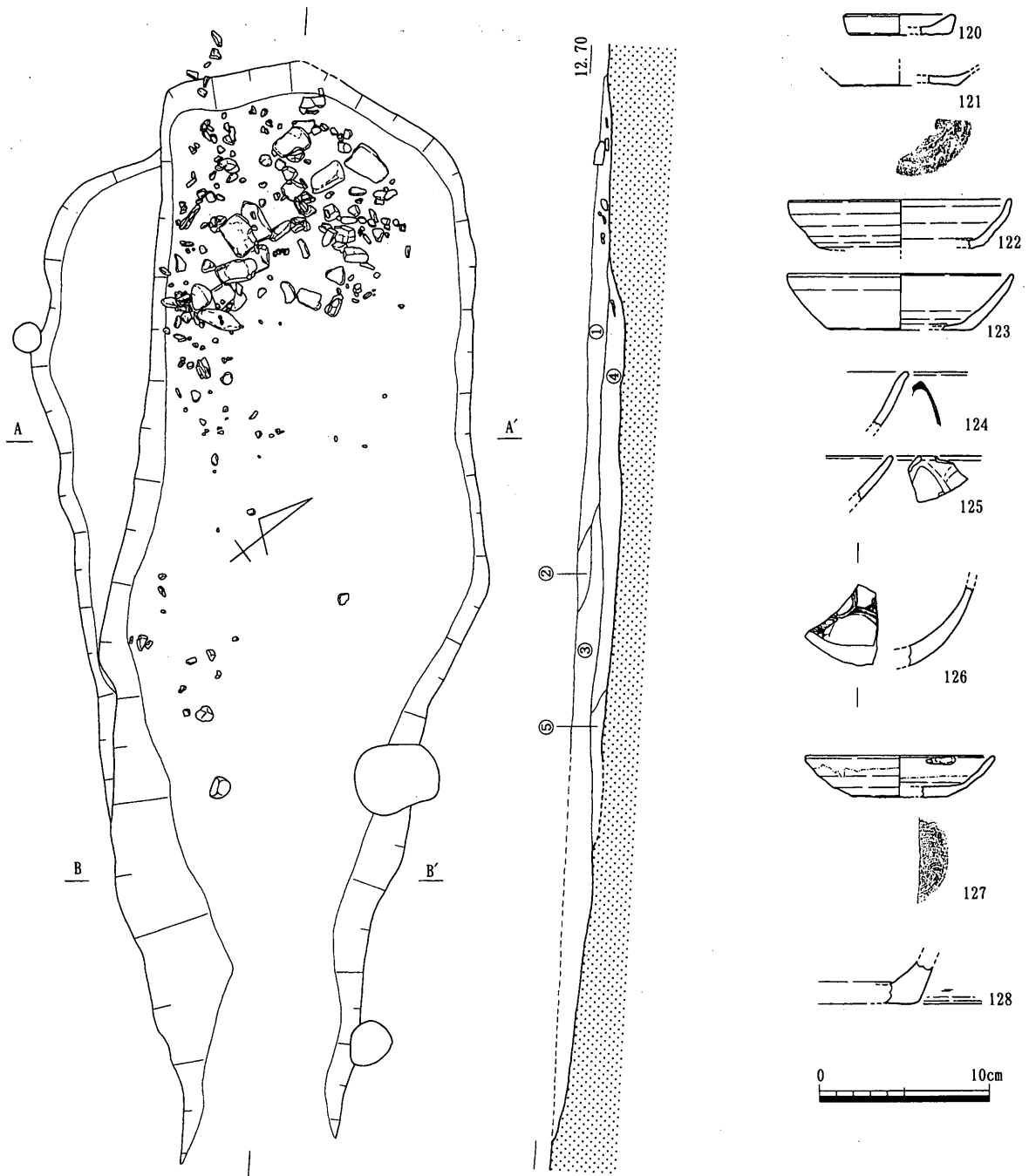
第346图 V区 第1面SP19平·断面图(1/20), 出土遺物(1/3)



- ① 灰色礫、砂利混粘質土
- ② 暗褐色微砂、砂利混粘質土

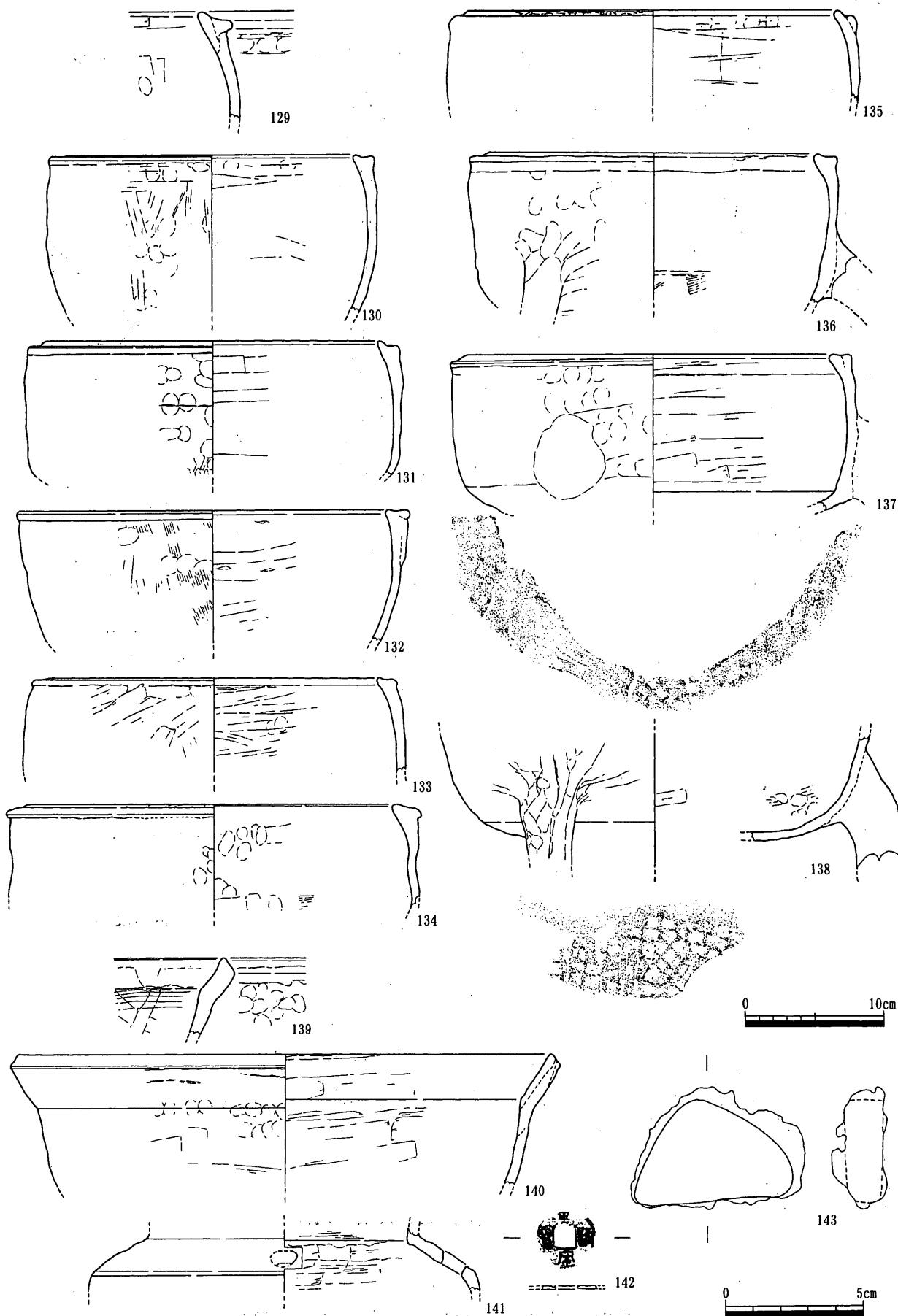


第347图 V区 第1面SX01平·断面图(1/60), 出土遺物(1/4, 1/2)



- ① 灰黄褐色礫、砂利混粘土 (SX02)
- ② 灰褐色砂利混粘質土 (SX02)
- ③ 灰褐色砂利混粘土 (SX02)
- ④ 灰褐色砂利混粘質土 (茶味がかる) (SX03)
- ⑤ 褐色粘土 (SX03)

第348図 V区 第1面SX02・03平・断面図(1/60), 出土遺物(1/4)



第349图 V区 第1面SX02出土遗物(1/4, 1/2)

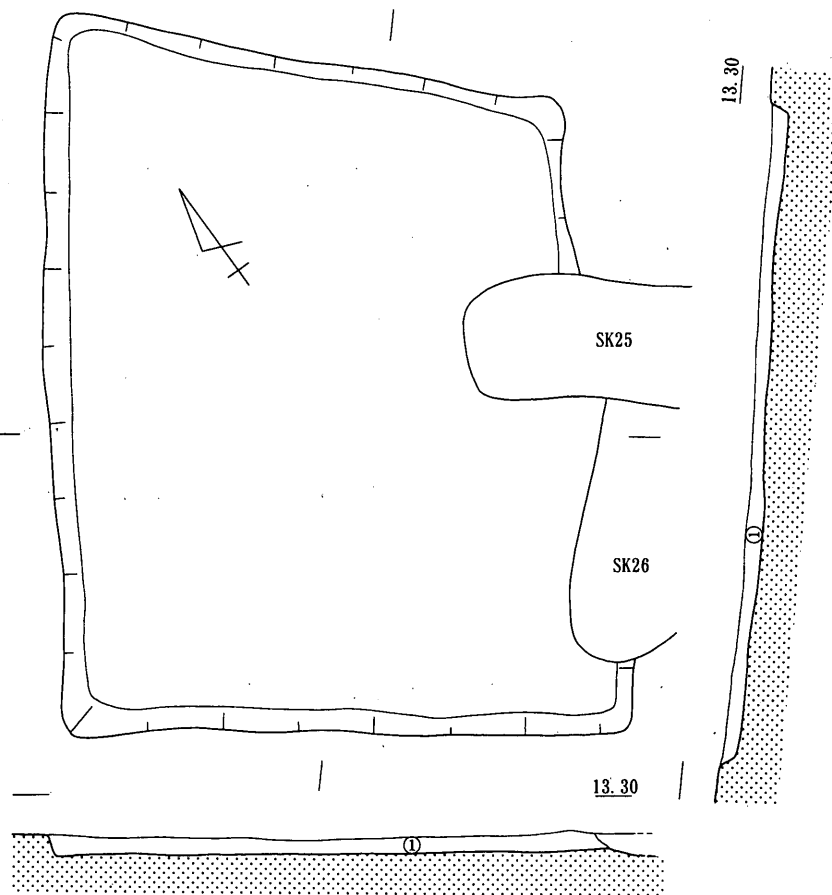
ど消滅している。内外面には板ナデ、ハケ目を施す。137、138は外面に粗い格子目タタキが見られる。139、140は口縁部から体部にかけて直線的に延びる器形である。口縁、体部境界外面には顕著な指オサエが見られ、内面には板ナデを施す。141は体部上位に穿孔する。内面には粗い板ナデを施す。142は皇?宋通宝である。

S X 03 (第 348 図)

旧 G1 区中央部で検出した性格不明遺構である。S X 02 に大部分が切られるため平面形は不明である。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 5.88 m、短径 1.08 m 以上、深さ 34 c m を測る。出土遺物はない。遺構の時期は埋土より中世と考える。

S X 04 (第 350 図)

旧 G2 区東部で検出した性格不明遺構である。平面形はややいびつな方形である。断面形は浅い皿状を呈し、床面はほぼ平坦である。S K 25、26 に切られる。規模は長径 3.88 m、短径 3.04 m 以上、



第350図 V区 第1面SX04平・断面図(1/40)



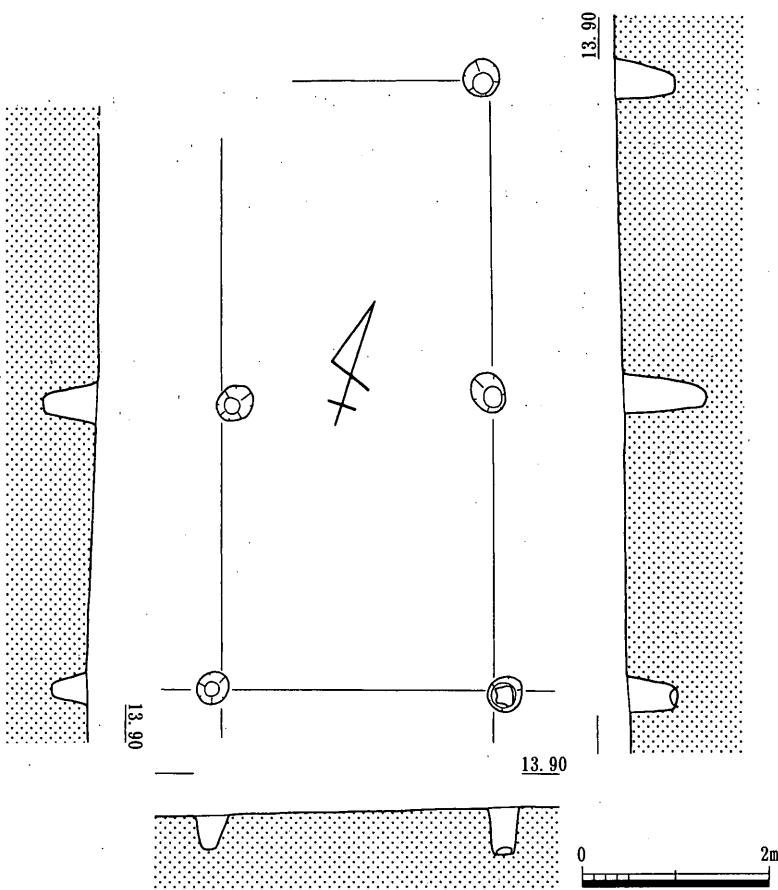
深さ 12 c m を測る。主軸方向は N - 37° - E である。出土遺物は図化に耐えない瓦器碗の小片がある。遺構の時期は瓦器碗片から中世前半と考える。

### (5) 近世の遺構・遺物

#### 建物

#### S B 20 (第 351 図)

調査区の西壁沿いの中央やや南寄りの旧 G. 6. 区で検出した掘立柱建物跡である。調査区壁際で検出されたため全体は不明であるが、調査区内では梁行 1 間×桁行 2 間で建物の主軸方位は N - 21° - W である。建物の平面形は長方形で、梁行 1 間で 3.0 m、桁行 2 間で 6.2 m、建物面積は 18.6 m<sup>2</sup> ≒ 5.6 坪の規模である。柱穴の平面形は円形で、南東隅の柱穴には根石が据えられていた。柱穴から遺物は出土しておらず、埋土や周辺の遺構との関係で近世の建物跡としたが、中世の掘立柱建物跡である S B 01・07・18 と建物の主軸が近いことから、中世段階の建物跡と考えても良いものである。しかし中世と考えると他の建物群から 1 棟だけ離れていることになる。



第351図 V区 第1面SB20平・断面図(1/80)

#### 溝

S D 02 ~ 05 は旧 G 2 区西部で検出した溝である。埋土はいずれも暗褐色小石混砂質土であり、地形の傾斜方向から北に流水していたことが想定される。時期は S D 02 で 19 世紀代の京・信楽系陶器、備前焼が出土しており、近接した時期と考えられる。

#### S D 02 (第 352 図)

大部分が調査区外に延びる。断面形は浅い皿状を呈する。深さ 20 c m を測る。出土遺物は京・信楽系陶器灯明皿 (144)、堺・明石系播鉢 (145) がある。144 は低い仕切り板をもつ。19 世紀と考えられる。145 は 19 世紀前半と考えられる。土坑の時期はこれらより 19 世紀前半と考える。

#### S D 03 (第 352 図)

北部で幅 78 c m、南部で幅 1.76 m、深さ 20 c m を測る。南側で幅広になるが底面レベルは 12.1

mと同じである。断面形は浅い皿状を呈する。

S D 04 (第 352 図)

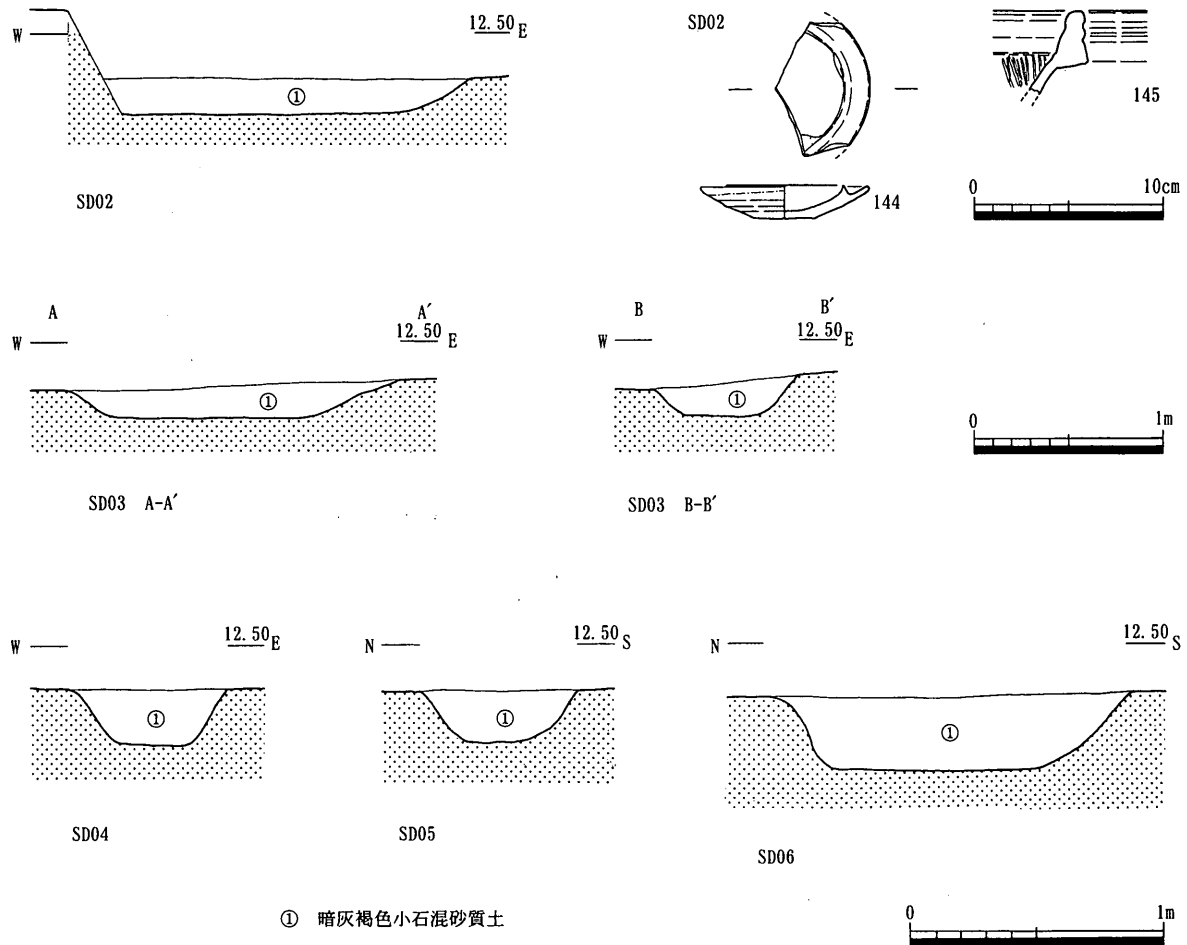
幅 64 c m、深さ 22 c mを測る。断面形は逆台形を呈する。

S D 05 (第 352 図)

幅 64 c m、深さ 21 c mを測る。断面形は逆台形を呈する。

S D 06 (第 352 図)

幅 1.42 m、深さ 29 c mを測る。断面形は逆台形を呈する。



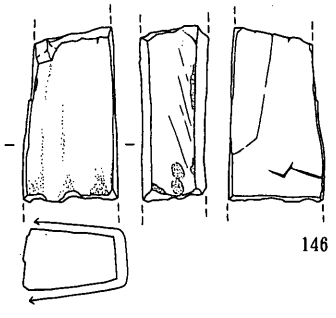
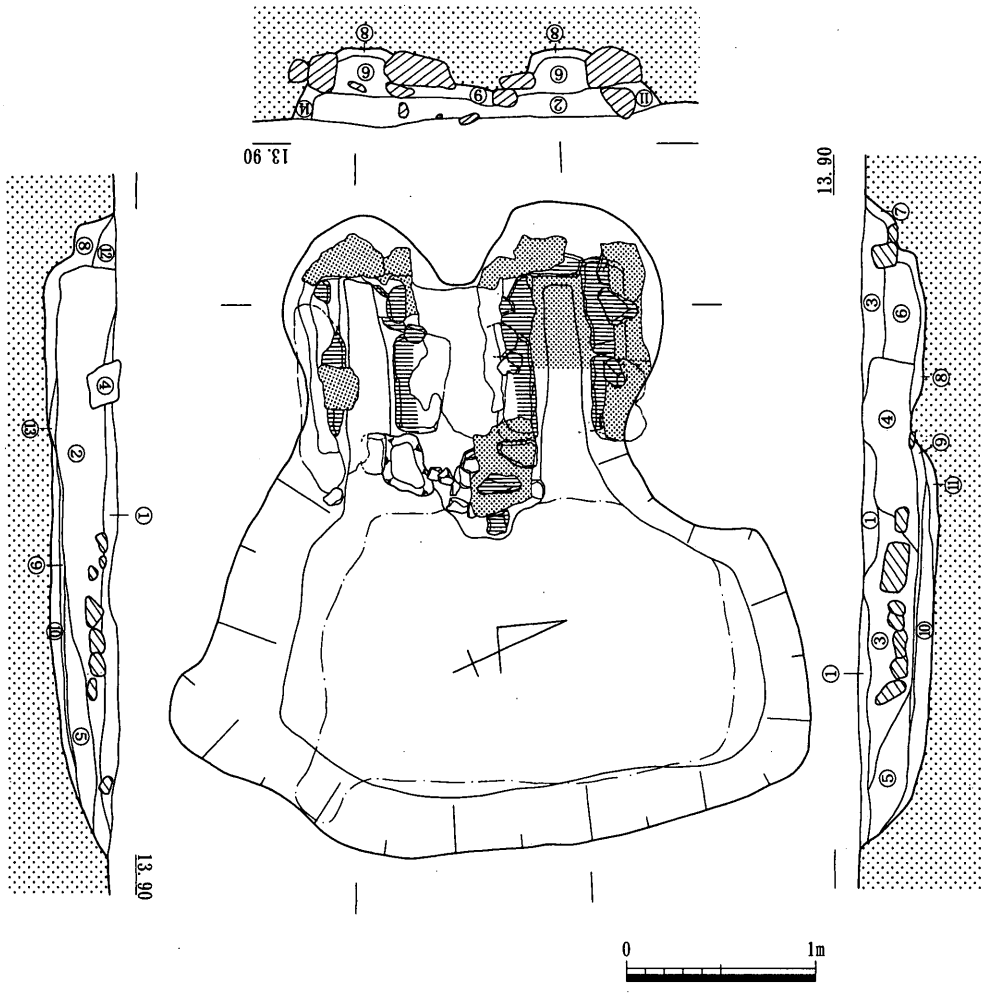
第352図 V区 第1面SD02～06断面図(1/30, 1/40), SD02出土遺物(1/4)

焼成遺構

S F 01 (第 353 図)

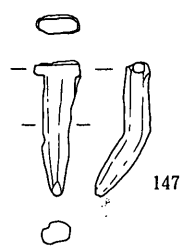
調査区の北西部の旧G 5区で検出した砂糖竈で、円形の竈部を2つ並列させ、焚き口部からそのまま作業場に至るもので、検出面は標高 13.8 mほどである。

作業場の平面形は長方形に近いが南側が不整形である。幅(南北)2.8～3.4 m、奥行き(東西)1.6 mで、焚き口に近い部分で0.3 mの深さがある。床面は焚き口に向かって緩やかに下っており、全面に焚き口部から掻き出した炭が薄く堆積している。焚き口部は床面が若干窪んでおり燃焼室にしているが、明瞭



- ① 暗灰色粘質土
- ② ①+明褐色(焼土)+淡白黄色粘質土のブロックが混ざった土層
- ③ ②+多量の焼土ブロック
- ④ 焼土ブロック
- ⑤ ①に淡白黄色粘質土 細かいブロックを含む
- ⑥ 暗茶灰色粘質土
- ⑦ 暗灰色砂混じり粘質土
- ⑧ 淡赤色砂混じり粘質土(焼土)
- ⑨ 炭層
- ⑩ 黄色砂混じり粘質土
- ⑪ 焼土+炭の混ざった土層
- ⑫ 黄色砂混じり粘質土が変色(焼土)
- ⑬ 暗赤色砂混じり粘質土
- ⑭ 暗灰色砂混じり粘質土

焼土  
 被熱痕跡のある石



0 5cm

第353図 V区 第1面SF01平・断面図(1/40), 出土遺物(1/2)

な被熱の痕跡は認められない。

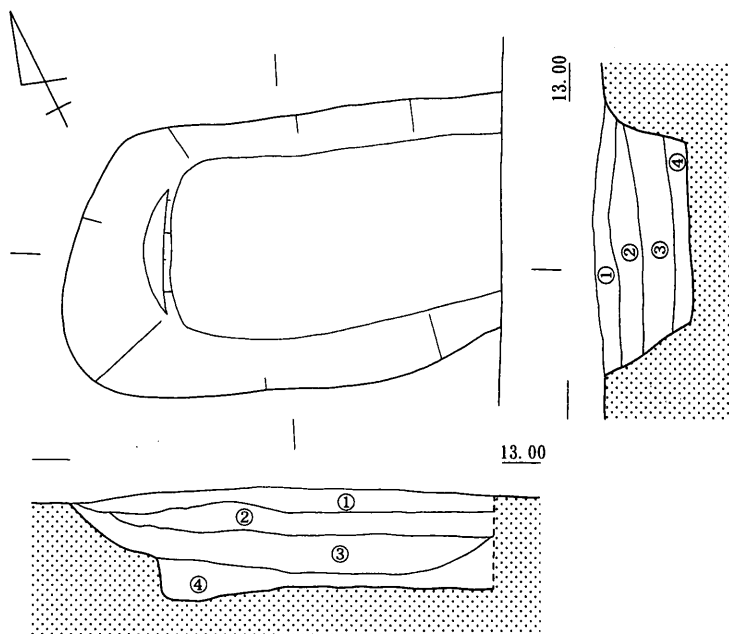
竈部は平面形態が円形のもの2つ並列している。作業場から向かって右側のものは直径1.0 m、0.3 mの深さがあり、向かって左側は直径0.9～1.0 mでやや東西に長く、0.30～0.34 mの深さがある。側壁は左右の竈部とも40cm前後の長方形の石を1段並べている。奥壁部分には右側の竈部には石を使用しているが、左側の竈部は粘土造りである。竈部の床面は焚き口部から溝状になり、右側の竈部は幅0.3 m、長さ1.1 m、左側の竈部は幅0.25 m、長さ1.0 mである。床面には左右竈部ともに粘土を2～4 cmほど敷いている。竈部は焼成室であるため、左側竈部の床面と右側竈部床面の焚き口側半分以外は側壁の石も含めて全体に被熱し赤変していた。

また左側竈部の焚き口側の石の上部には厚さ0.17 mの赤変した粘土が乗っているが、これは竈部の天井の一部であり、この部分の高さが0.18 mであることが分かる。

竈部は左右で若干の規模の差と奥壁の構造の差が見られる。これはしぼり汁を保温する揚げ釜と灰汁を抜き取りながら水分を蒸発させる荒釜の機能による差である。

この砂糖竈の周囲には柱穴を数基礎確認したが明瞭な建物に復元は出来ず、従って上屋構造は不明である。

埋土中から少量の遺物が出土した。幕末から明治時代にかけての陶磁器・瓦質土器の細片と石器・鉄器である。146は流紋岩製の砥石で一部に鉄器の角が当たった痕跡がある。147は鉄釘であるが、両者とも直接砂糖竈に関する遺物ではない。

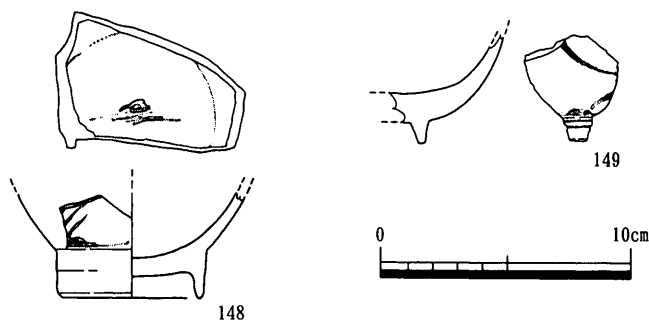


- ① 暗褐色砂質土
- ② 暗褐色砂混じり粘質土
- ③ 暗茶褐色砂質土 暗黄褐色粘土ブロックが帯状に少々入る
- ④ 暗褐色粘質土

土坑

S K 29 (第 354 図)

調査区中央部のS B 17部分の旧G 3区で検出した土坑である。旧調査区境にあるため東側部分は検出出来なかった。検出した部分ではやや不整形な長方形である。検出部分で東西1.7 mあり、南北の幅は1.2 mある。掘り込みは急で、西側部分は緩い傾斜の後に急激に落ち込む。底面はほぼ平坦で0.4 m前後の深さがある。暗褐色系の埋土を持ち、下部では粘土ブロックが



第354図 V区 第1面SK29  
平・断面図(1/30), 出土遺物(1/3)

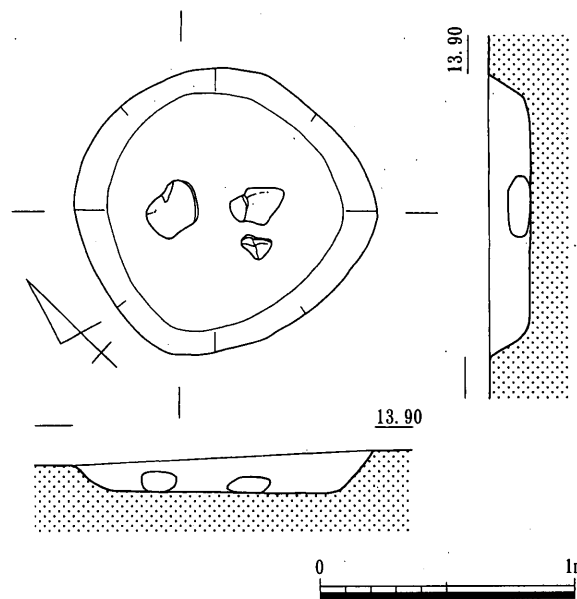
混じっている。

148・149 とともに肥前系磁器の碗で、148 は足高の高台をもつ広東碗である。

#### S K 30 (第 355 図)

調査区の北西部の旧 G 5 区で、砂糖竈 S F 01 に隣接して検出した土坑である。平面形は円形であるが、南東側が少し突出している。直径 1.1 m、深さ 0.15 m であるが西側部分が浅めになっている。底部から 10～20cm 大の礫が 3 点出土している。

150 は陶器の鉢の底部で、厚手の高台をもつ。見込みには目跡がある。産地は不明である。



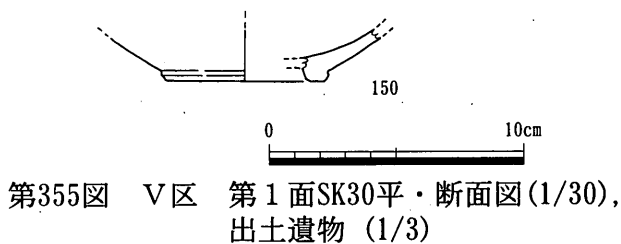
#### S K 31 (第 356～362 図)

調査区西端部の旧 G 6 区で検出した土坑である。現有の道路部分にかかる調査区境にあたるため全体を検出することは出来なかった。検出部分では平面形は半円形で、東西幅は 85cm で 18cm の深さがある。東側部分の掘り込みのほうが西側部分に比べて緩やかである。土坑内からは多量の陶磁器が出土しているが、出土遺物は 18 世紀前半から 19 世紀後半までのものが多く時期幅あるが、端反形碗、広東碗や堺・明石産播鉢などから 19 世紀前半から中頃にかけてのものが多い。

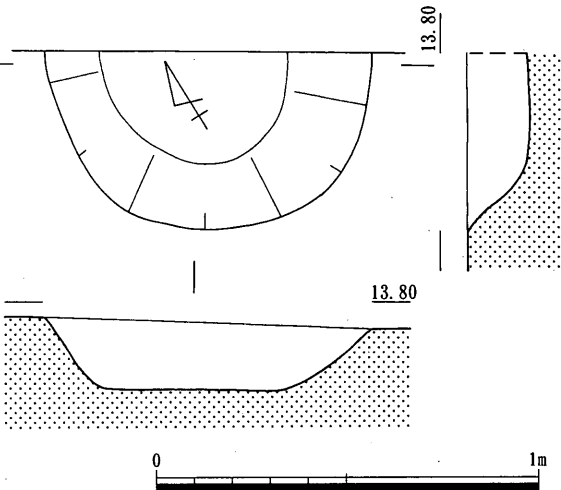
151～164 は肥前系磁器の碗である。151 は型紙摺によるもので明治以降の新しいものである。152 は丸碗と言えるもので、体部外面にはコンニャク印判により施文している。154・155 は端反形であるが口縁部の反りは弱い。157 の内面にはアルミナ砂が塗布されている。160～163 は足高の高台をもつ広東碗である。164 は口縁部端部は欠損しているが端反形の碗である。165 は肥前系磁器の酒杯で小型品である。現存部分で文様は認められない。

166～174 は瀬戸・美濃系磁器の碗である。167・171・173 は端反形である。168・169 の口縁部は欠損しているが体部下半の状況から端反形になると考えられる。174 は小型で外面に陰刻沈線により施文している。

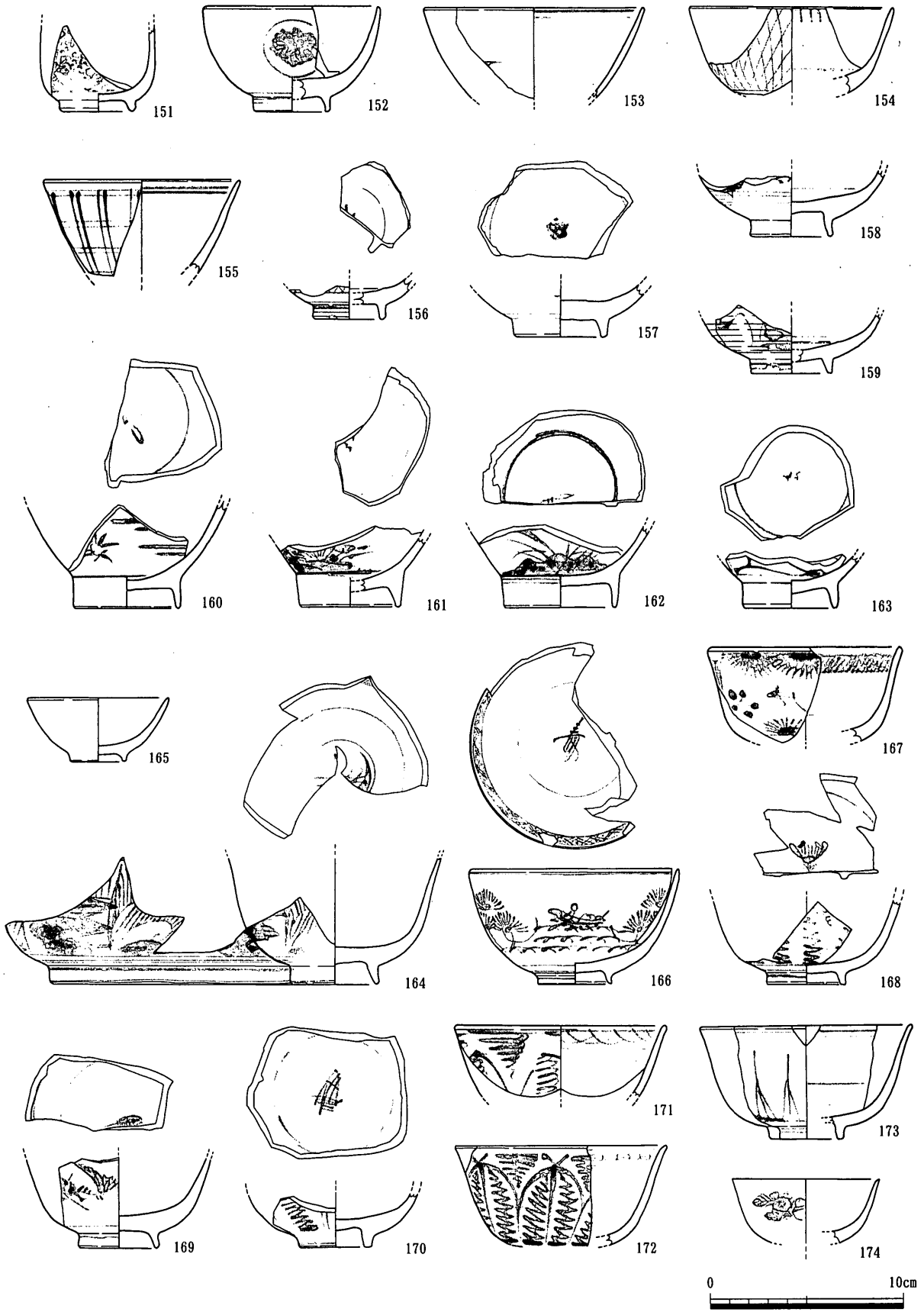
175～179 は肥前系磁器の皿である。175・179 は見込み蛇の目釉剥ぎでアルミナ砂が塗布されている。176 の口縁部は外側に折り返して玉縁にしている。177 の底部は低い蛇の目凹形高台で、見込



第355図 V区 第1面SK30平・断面図(1/30),  
出土遺物(1/3)



第356図 V区 第1面SK31平・断面図(1/20)



第357图 V区 第1面SK31出土遗物(1) (1/3)

みは蛇の目釉剥ぎになっておりアルミナ砂が塗布されている。

180 は京・信楽系磁器の灯明皿で見込みに目跡を残し、口縁部には煤が付着している。

181 は肥前系磁器の紅猪口、182 は肥前系磁器の瓶で白磁である。

183 は瀬戸・美濃系磁器の蓋で、つまみ部は高台を反転させた形である。

184 は磁器の大型の鉢で、見込み蛇の目釉剥ぎでアルミナ砂を塗布している。産地は不明である。

185・186 は京・信楽系陶器の碗である。185 は体部下半の形状から端反形になるものとする。186 は端反形である。

187 は瀬戸・美濃系陶器の皿で、見込みに胎土目が残っている。また底部外面の中央部をヘラで抉り取っている。

188・189 は磁器の皿で産地は不明である。188 の口縁部は強く外反しており、五弁花形になる。189 の体部は薄手で口縁部を強くナデている。

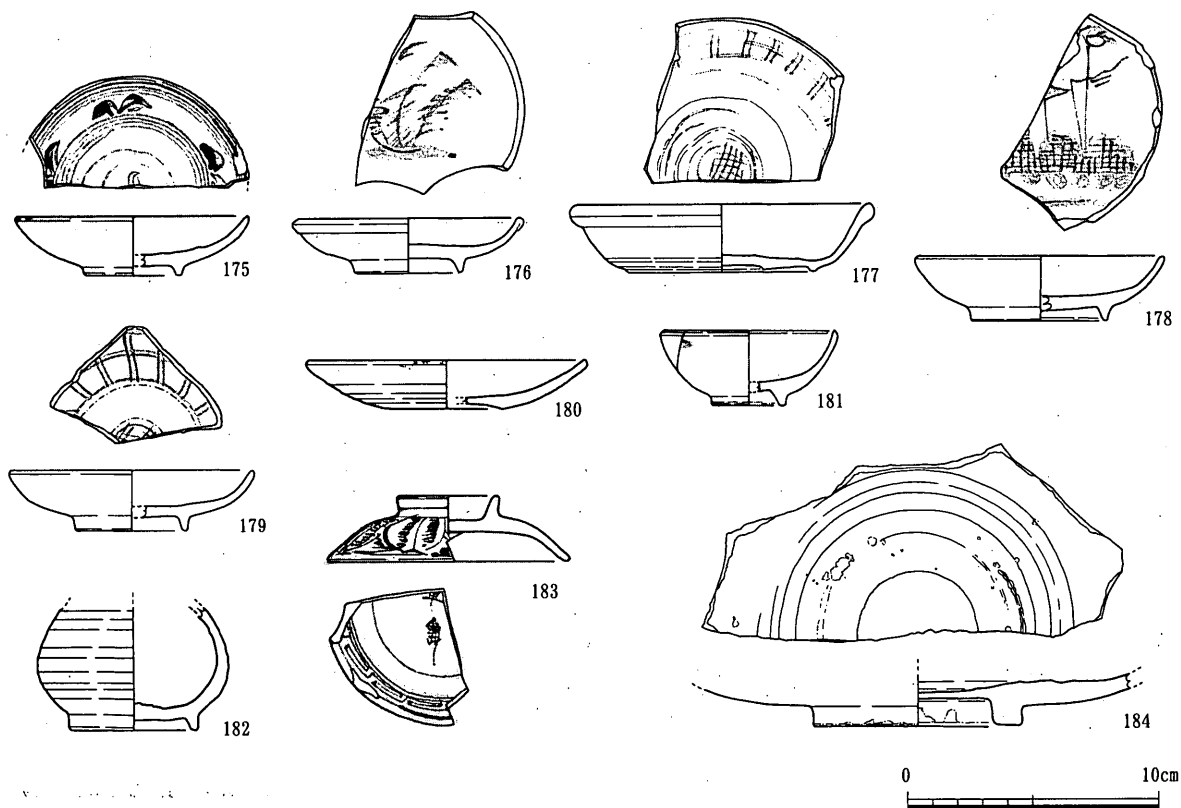
190 は京・信楽系陶器の灯明皿で見込みに目跡がある。191 は大谷焼の灯明具で口縁部端部を上方向につまみ上げている。底部は欠損している。

192～194 は京・信楽系陶器の瓶で、いずれも底部立ち上がり部外面に面取りを行っている。194 の底部外面には墨書が認められるが字は不明である。

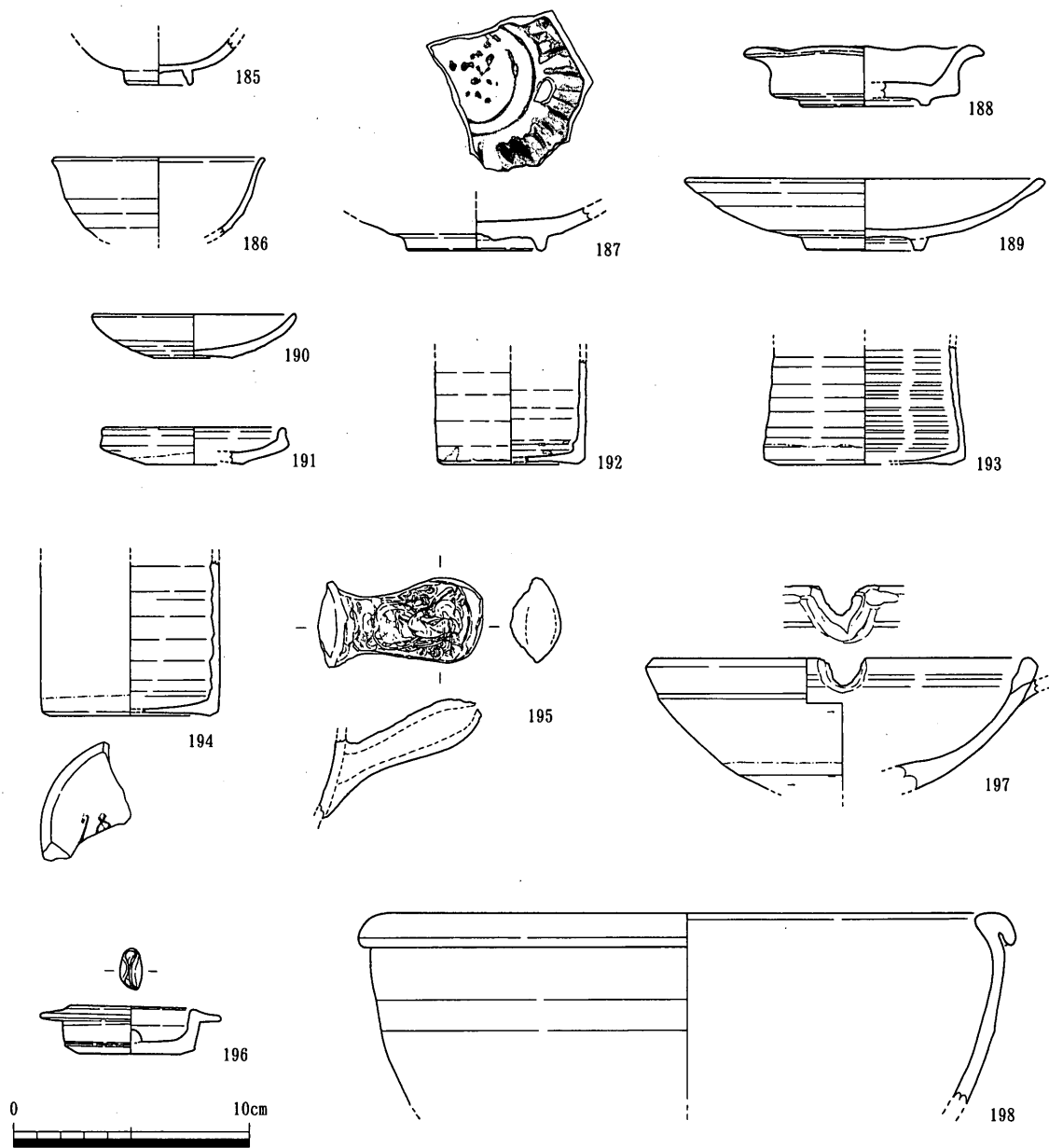
195 は行平鍋の把手部分で中は空洞になっており、上面に施文している。産地は不明である。

196 は大谷焼の落とし蓋で、つまみ部分は両端が内側に折れ曲がっている。

197・198 は瀬戸・美濃系陶器の鉢である。197 は片口の注ぎ口があり、口縁部は内側に肥厚した部



第358図 V区 第1面SK31出土遺物(2)(1/3)



第359図 V区 第1面SK31出土遺物(3) (1/3)

分を強くナデている。198は口縁部端部を外側に折り曲げており、緑釉を点掛けしている。

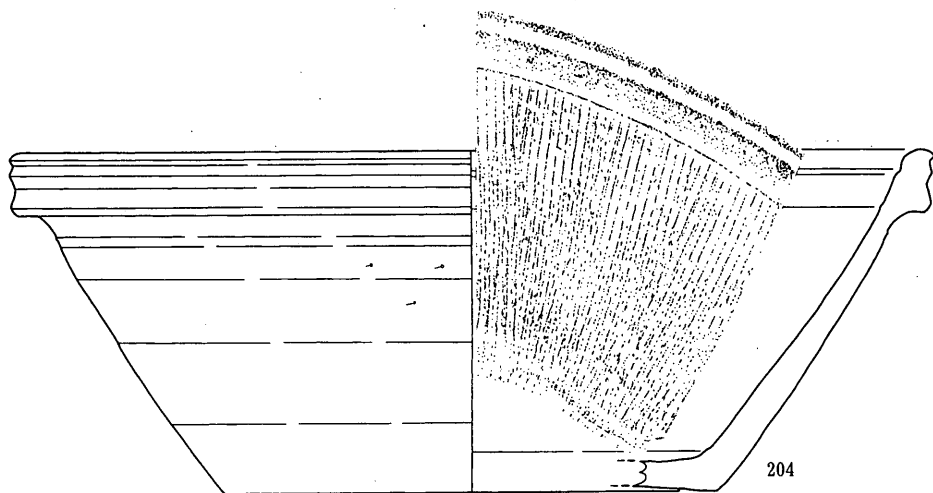
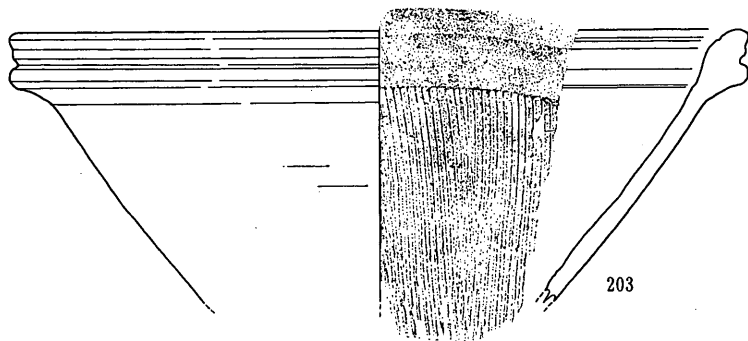
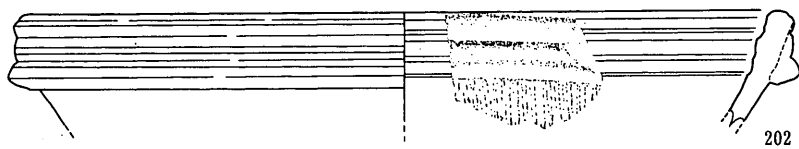
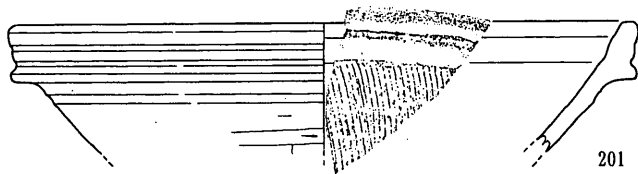
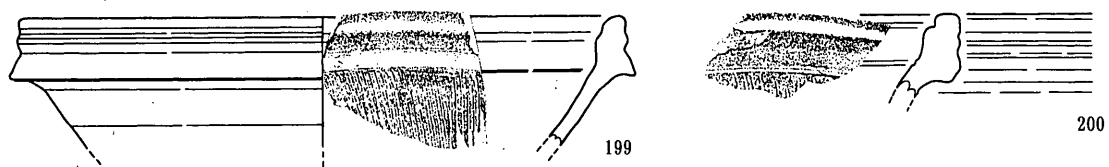
199～207は堺・明石産の播鉢で、いずれも体部外面には回転ヘラ削りを施している。内面は卸し目を入れた後に口縁部内面をナデており、段を形成しているものが多い。口縁部はいずれも大きく肥厚し外面にナデによる凹線が認められるが、206の口縁部外面は沈線に近づいている。205は底部外面に粗い板ナデを施し一部に木目が残っている。

208は土師質の羽釜で鏝は下方を向く。209は瓦質の鍋、210～212は瓦質の焙烙である。210は外型により成形している。212は土師質に近づいている。

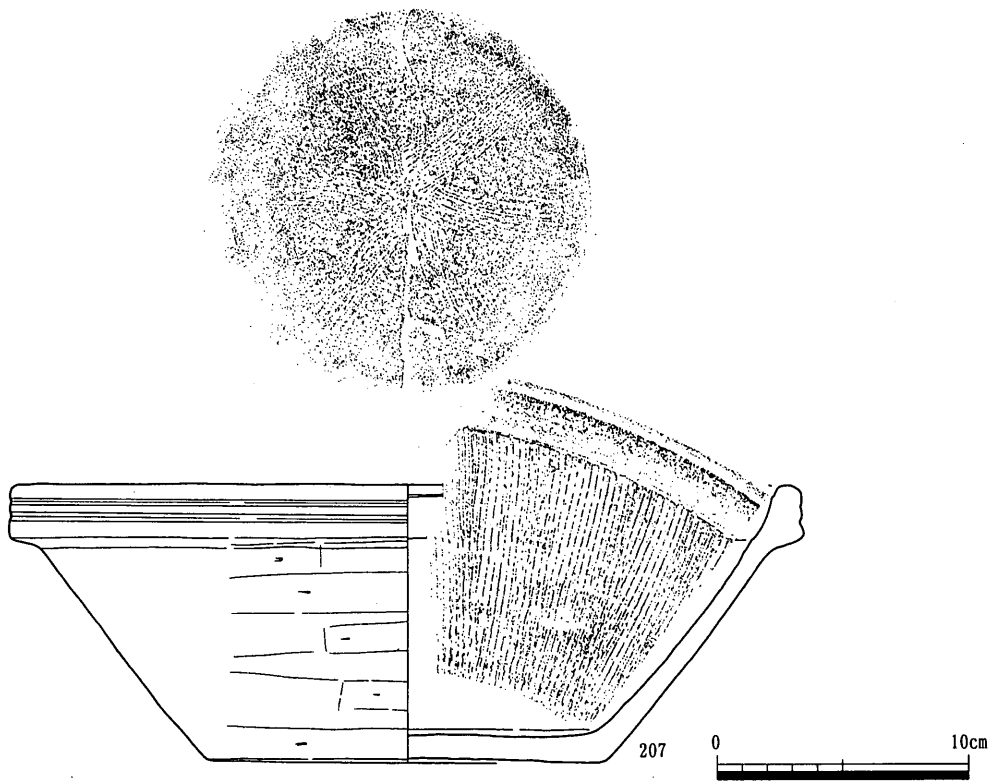
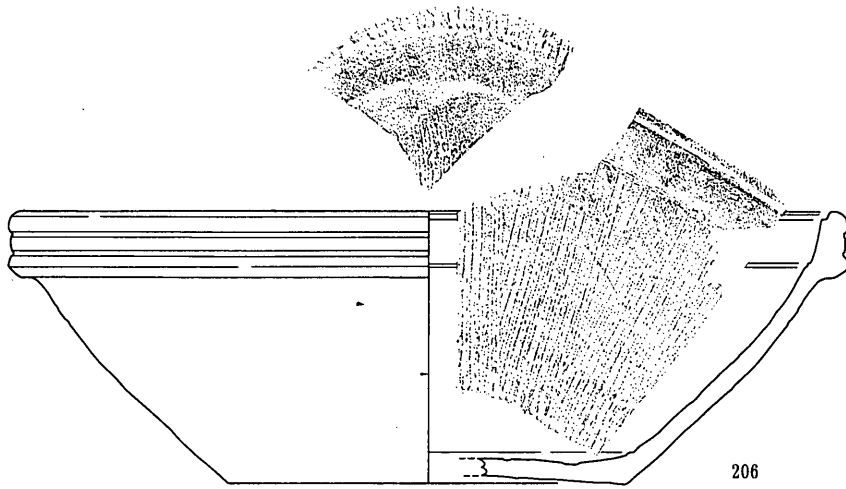
S K 32 (第363・364図)

調査区中央部南寄りの旧G7区で検出した土坑である。平面形は楕円形に近く、西側が少し突出している。長さ(北西—南東)は1.7m、幅(北東—南西)は1.4m、深さは0.46mである。

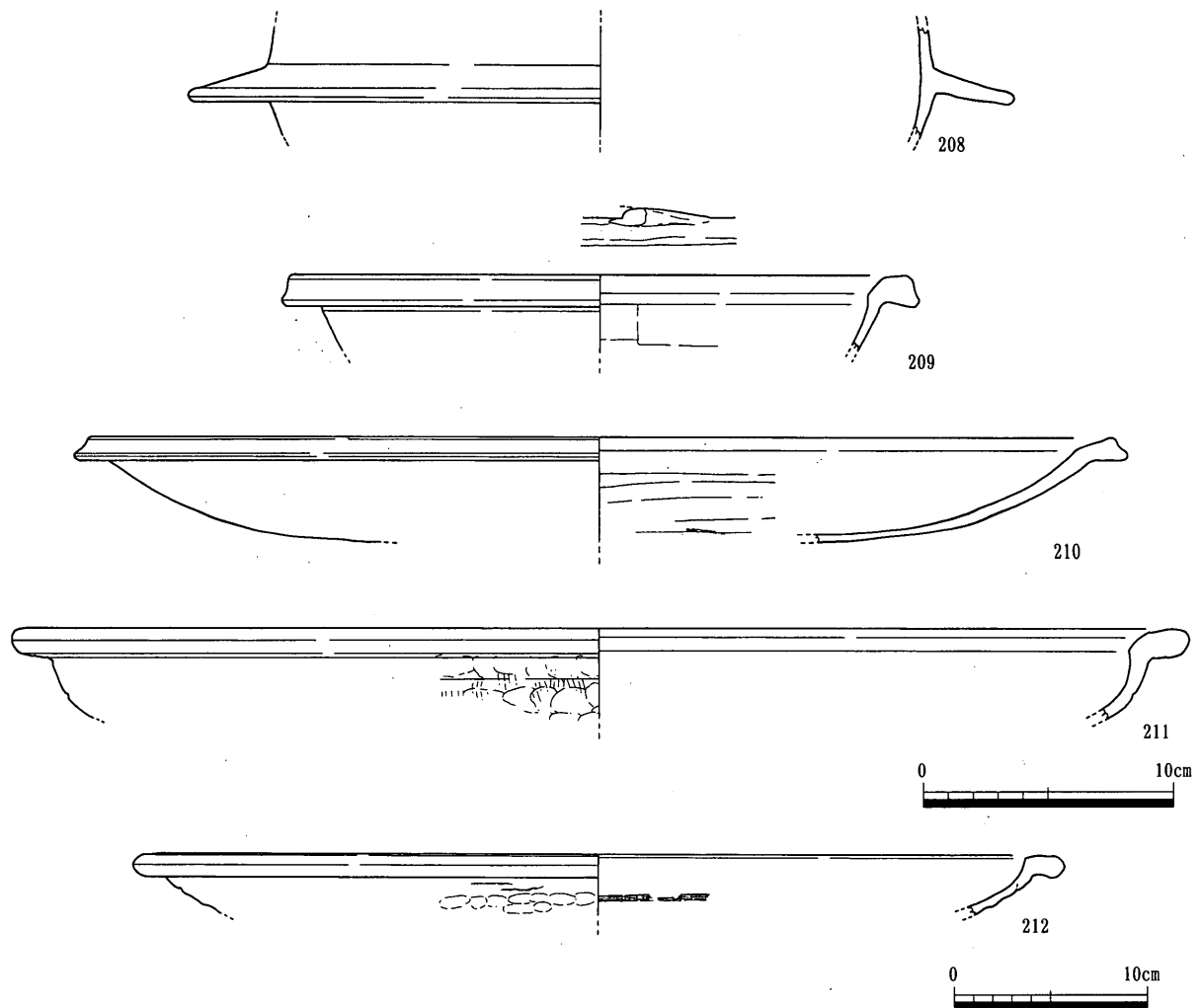




第360图 V区 第1面SK31出土遺物(4) (1/3)



第361图 V区 第1面SK31出土遺物(5) (1/3)



第362図 V区 第1面SK31出土遺物(6) (1/3、1/4)

213は瀬戸・美濃系陶器の鉢で、口縁部を外側に折り曲げている。214は瀬戸・美濃系陶器の水甕で、口縁部内面に粘土を継ぎ足しており、内側に受け部のような突帯を巡らせている。215・216は堺・明石産の播鉢で、体部外面に回転ヘラ削りを施している。216は口縁部の張りは鋭く、内面には段がある。両者とも内面に卸し目を施した後に口縁部内面をナデている。217は瓦質の羽釜で、鏝は欠損しているが鏝を付着させた内面には指押さえが顕著である。

S K 33 (第365図)

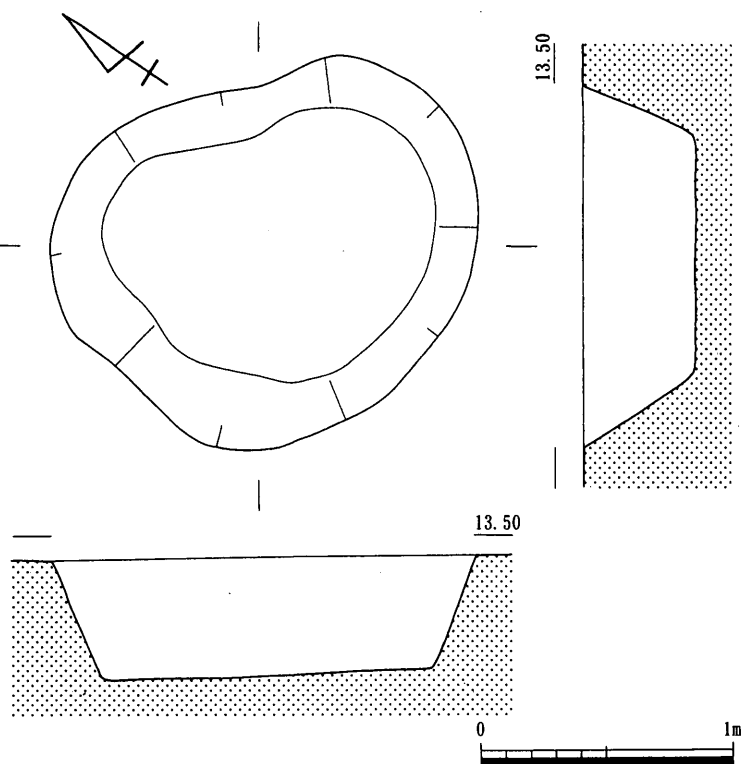
調査区中央部南寄りの旧G7区で検出した土坑である。平面形は楕円形であるが、北西部分がやや角張っている。長径1.38m、短径0.84m、深さ0.12mと浅いものである。底部は平坦になっている。

218～220は肥前系磁器である。218は碗で底部は高い蛇の目凹形高台で、見込みには目跡が残る。219は蓋。220は仏飯器で底部は中央を抉ることにより高台状に仕上げている。221は京・信楽系陶器の灯明皿で、見込みに櫛目を施し目跡が残る。口縁部外面に煤が付着している。222は鉄釘であるが上部で折れ曲がっている。223は寛永通宝。

S K 34 (第366・367図)

調査区中央部南寄りの旧G7区で検出した土坑である。平面形は概ね円形であるが東側が窪んでいる。直径1.3m、深さ0.4m前後である。

224・225は肥前系磁器の皿である。225は底部付近は厚手で高台には砂が付着している。226は陶胎染付の碗で、肥前系であるが富田・吉金窯産と考えられるものである。227は京・信楽系陶器の灯明皿で、内面に断面三角形の環状の仕切りが付く。228は産地不明の陶器の蓋で、端部は上方を向く。229は陶器土瓶の注ぎ口である。230～232は瓦質の羽釜で、231は型成形によるもので外面にキラコを塗布している。233・234は瓦質の焙烙である。



第363図 V区 第1面SK32平・断面図(1/30)

S K 35 (第368図)

調査区南壁沿い中央部の旧G3区でS B 15に重なって検出した土坑である。平面形は隅丸長方形に近い

が、東側が丸みを帯びている。長さ1.55 m、幅0.88～1.08 m、深さは0.15～0.20 mある。底部は西半分が一段深くなっている。埋土中層の褐灰色粘質土は西半分では認められない。

S K 36 (第370図)

調査区南壁沿い中央部の旧G3区で検出した土坑である。平面形は概ね長方形であるが、部分的に膨らんだり窪んだりしている。長辺1.72 m、短辺1.06 m、深さ0.1 mである。北東から南にかけての部分の掘り込みは緩やかになっている。埋土は上下2層に分かれたが、上層の暗褐色砂質土には0.5～2cm大の小礫が多数含まれていた。

S K 37 (第369図)

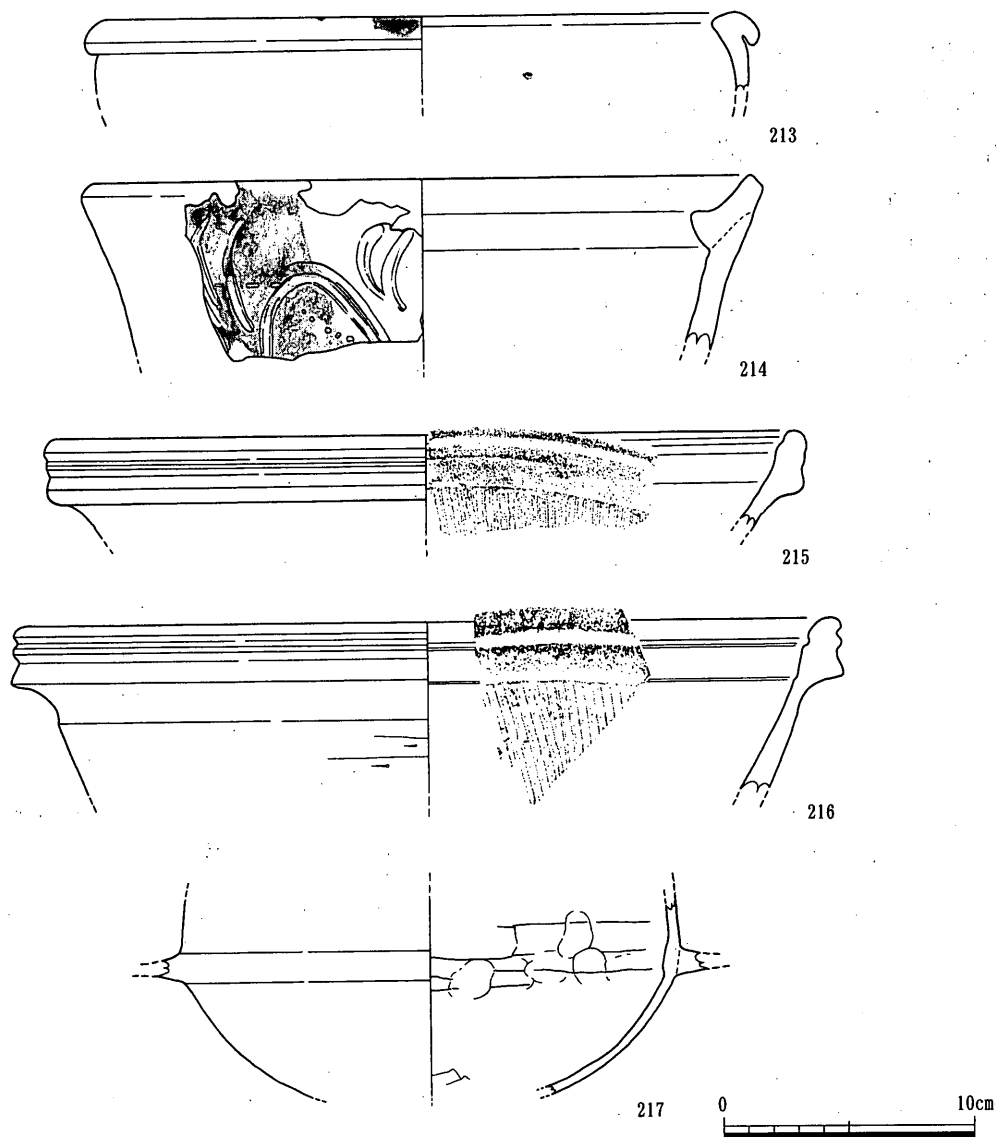
調査区南壁沿い中央部の旧G3区で検出した土坑である。平面形は長楕円形で、南西部分は柱穴により一部が壊されている。長径2.3 m、短径0.7 m、深さ0.1～0.16 mである。北側部分の掘り込みは緩やかである。また南側の底部は一段低くなっており、この部分に暗灰褐色砂が局所的に堆積している。

S K 38 (第371図)

調査区南壁沿い中央部の旧G3区で検出した土坑で、S K 27の一部を壊している。平面形は長方形で長辺2.0 m、短辺0.8～0.9 m、深さ0.1 mである。埋土は上下2層に分かれたが、上層の暗褐色砂質土には0.5～2cm大の小礫が多数含まれていた。

S K 39 (第372図)

調査区南壁沿い中央部の旧G3区で検出した土坑である。平面形は長方形で、長辺0.96 m、短辺0.6～



第364図 V区 第1面SK32出土遺物(1/3)

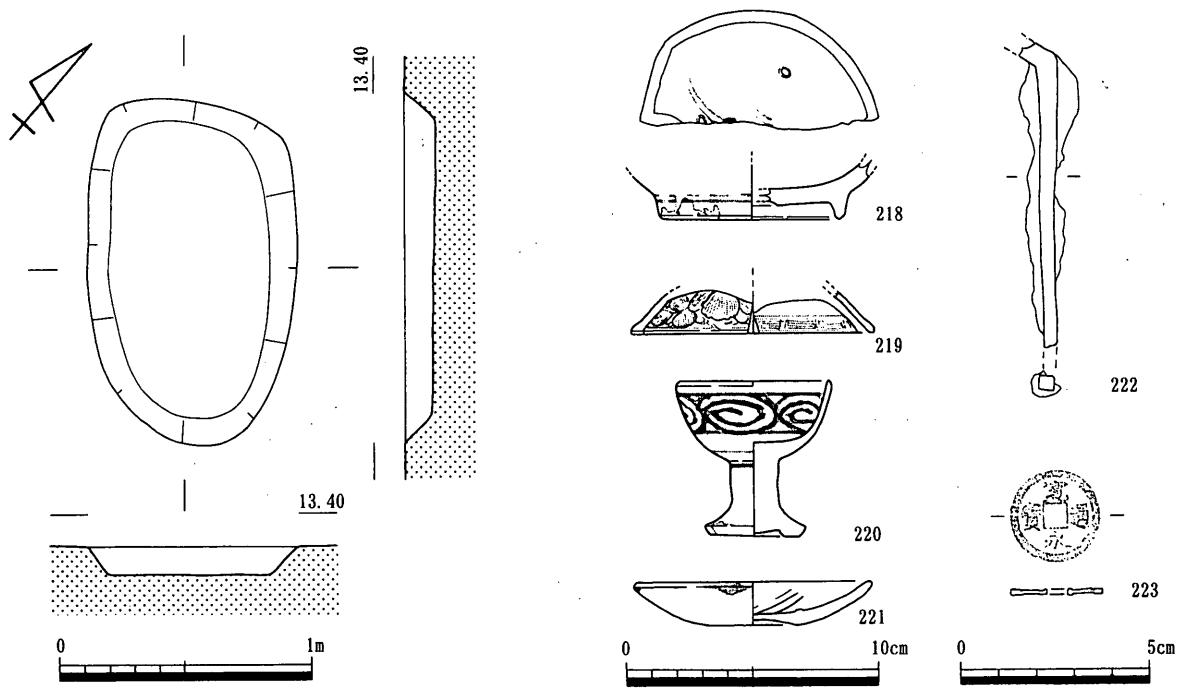
0.75 m、深さ 0.16 ~ 0.2 m である。中央部分の下部に暗灰褐色粘土が堆積しているが、北西と南東の短辺部分には及んでいない。

S K 40 (第 373 図)

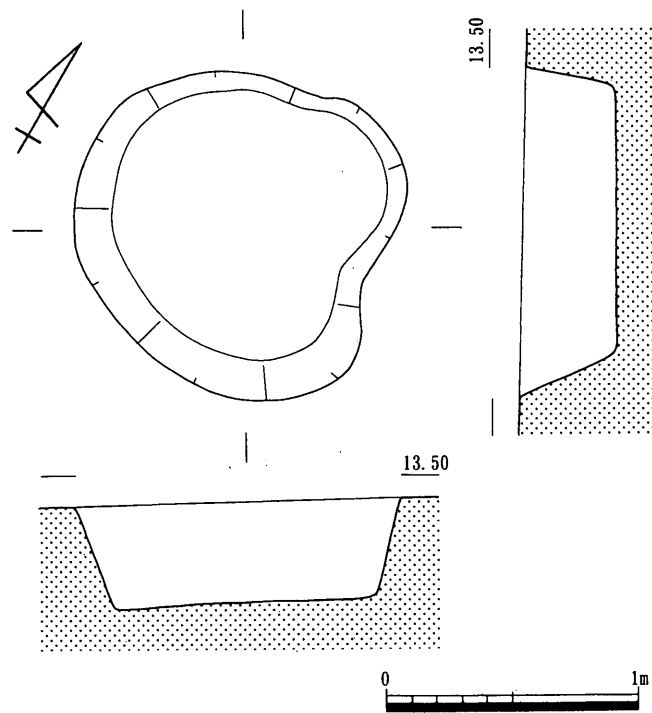
調査区西端中央部の旧 G 5 区で検出した土坑である。調査区の壁際で検出しており、一部は調査区外に広がるため全体形は不明である。平面形は長方形になるものと考えられ、長辺は検出部分で 1.2 m、短辺 0.58 m、深さ 0.18 m である。北側部分の掘り込みは緩やかになっている。

S K 41 (第 373 図)

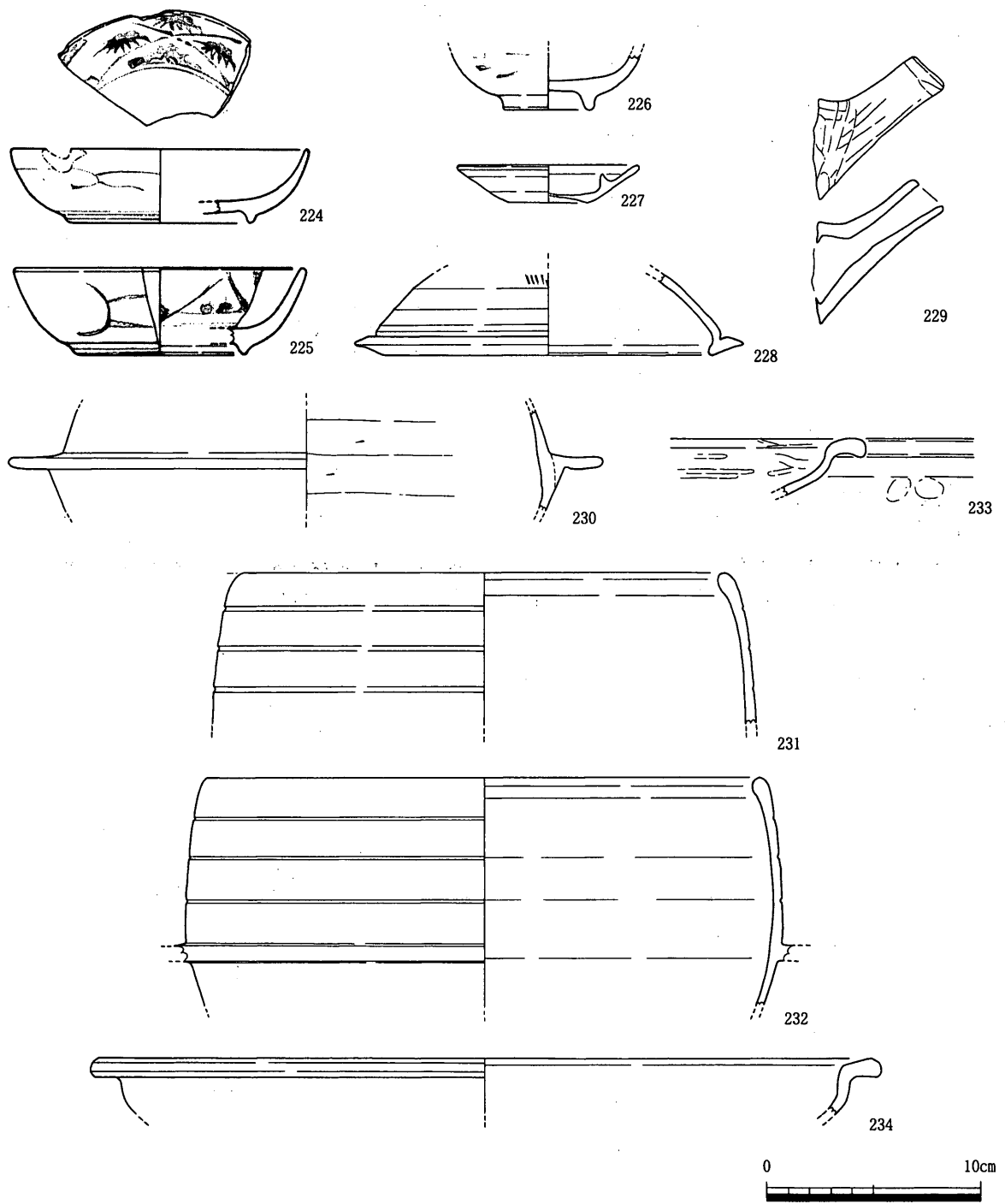
調査区西端中央部の旧 G 5 区で検出した土坑である。北西部分を S K 40 に壊されており、また一部は調査区外に広がるため全体形は不明である。規模は検出部分で 0.96 m と 0.30 m で、深さは 0.26 m である。



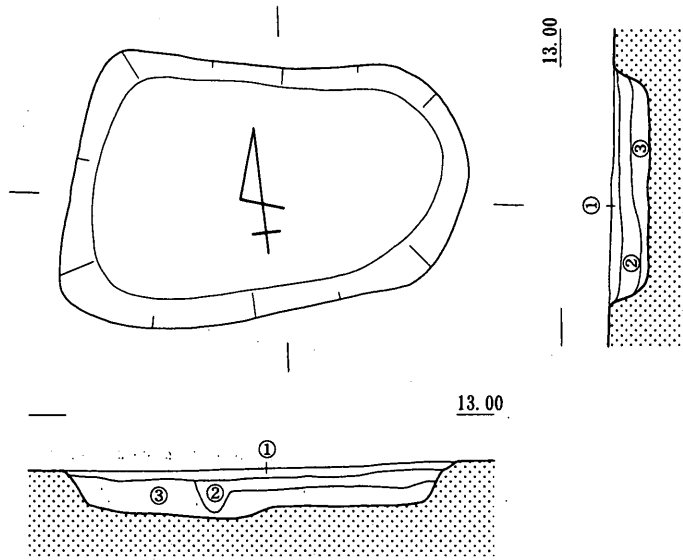
第365图 V区 第1面SK33平·断面图(1/30), 出土遗物(1/3, 1/2)



第366图 V区 第1面SK34平·断面图(1/30)



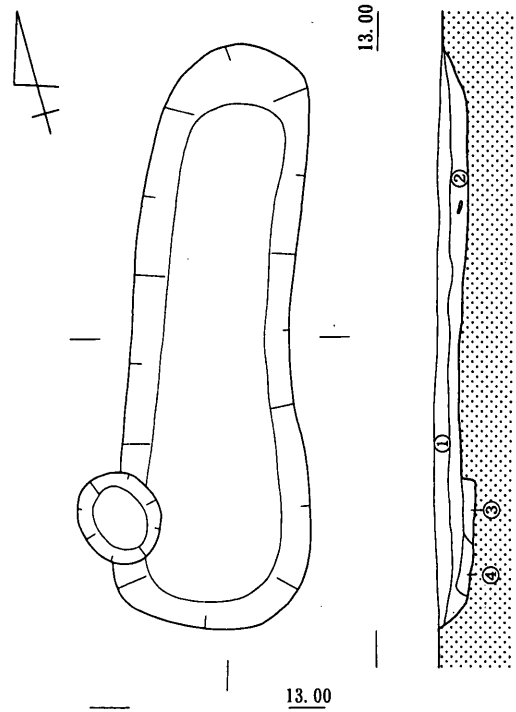
第367图 V区 第1面SK34出土遺物(1/3)



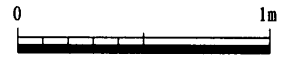
- ① 暗褐色砂質土  
0.5~2cm大の礫多く含む
- ② 暗灰色粘質土
- ③ 暗黄褐色砂混じり粘質土



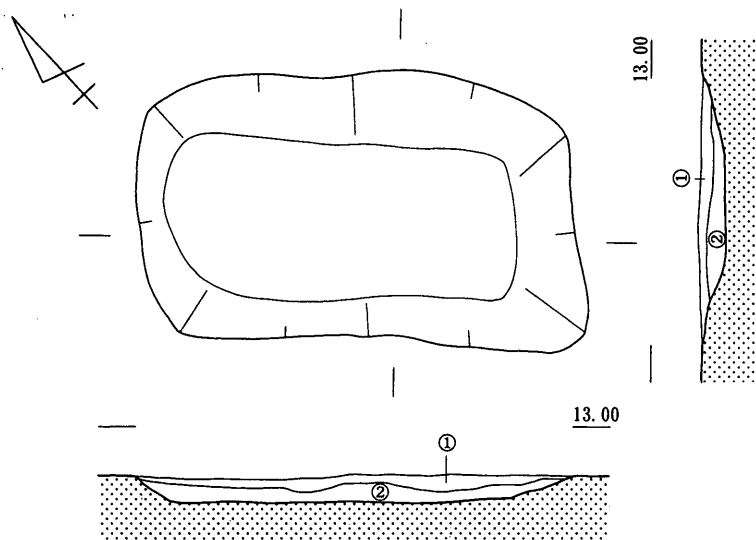
第368図 V区 第1面SK35平・断面図(1/30)



- ① 暗褐色砂質土
- ② 暗茶褐色粘質土
- ③ 暗褐色粘質土
- ④ 暗灰褐色砂



第369図 V区 第1面SK37平・断面図(1/30)



- ① 暗褐色砂質土  
0.5~2cm大の礫多く含む
- ② 暗黄褐色砂混じり粘質土

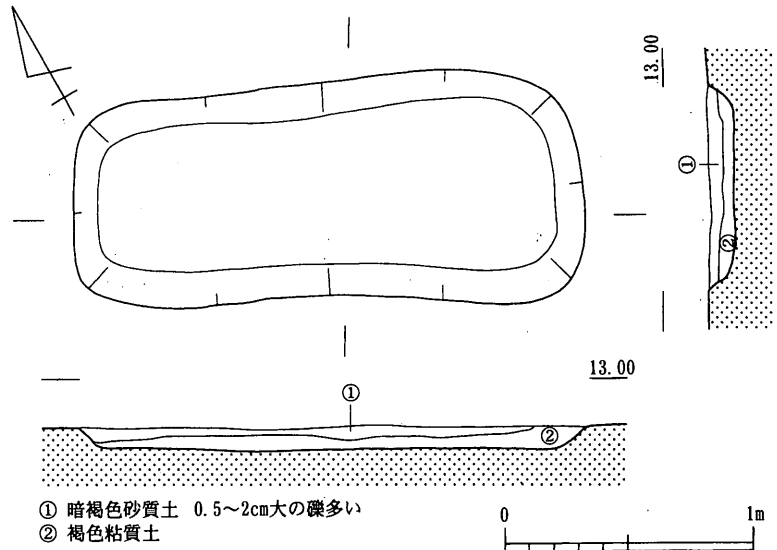


第370図 V区 第1面SK36平・断面図(1/30)



S K 42 (第 374 図)

調査区南壁際のやや西寄りの旧G7区で検出した土坑である。平面形は楕円形であるが、北西部分がやや平坦になっている。底部は南東から北西に向かって緩やかに下っている。長径 1.6 m、短径 0.95 m、深さ 0.14 m である。

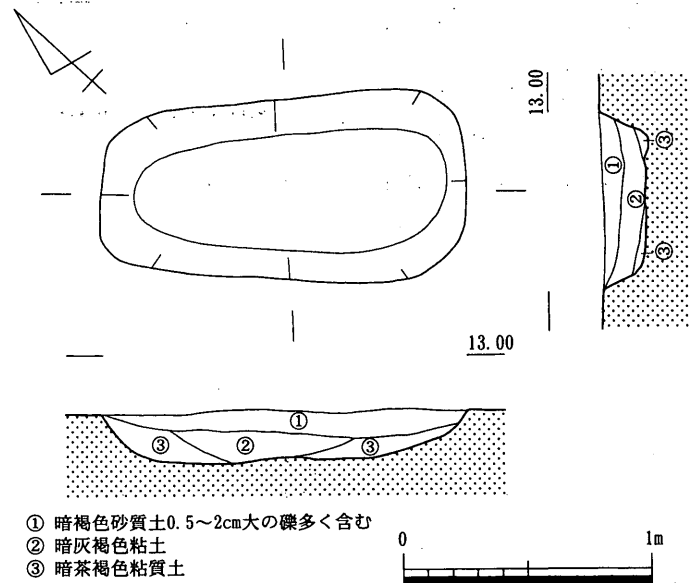


第371図 V区 第1面SK38平・断面図(1/30)

柱穴

S P 20 (第 375・376 図)

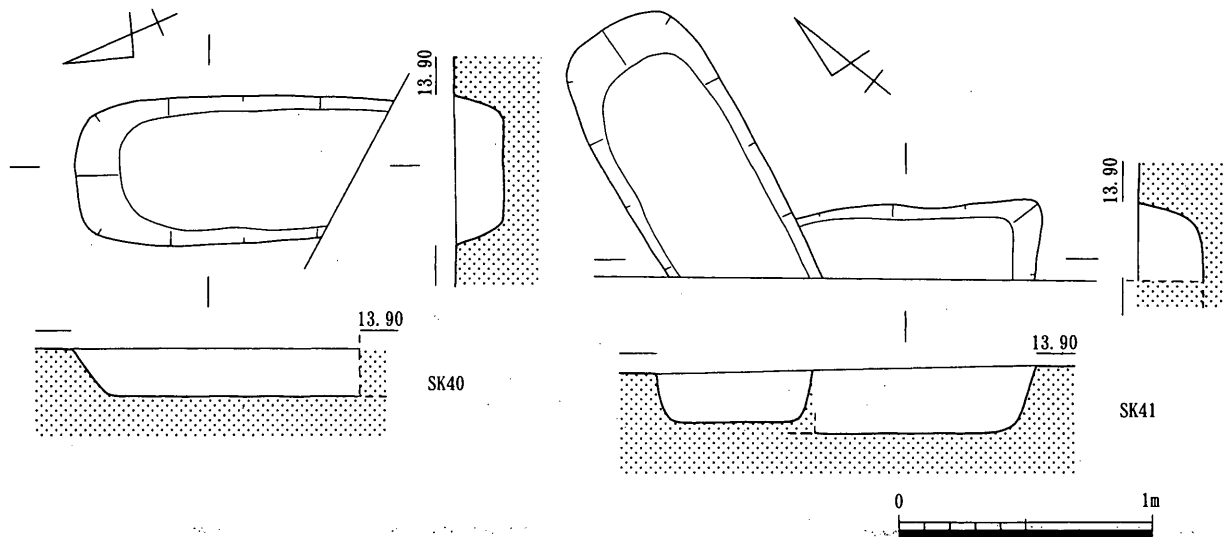
調査区中央部北寄りの旧G4区で検出した柱穴である。平面形は円形で、直径 24cm、深さ 16cm である。235 は瓦質の焙烙である。折り曲げた口縁部の上面は丁寧に調整している。内面にはハケ目が残っている。



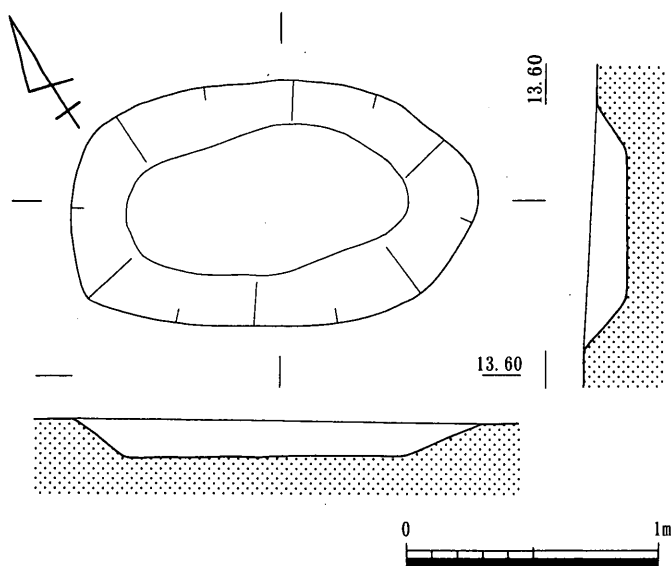
第372図 V区 第1面SK39平・断面図(1/30)

S P 21 (第 377 図)

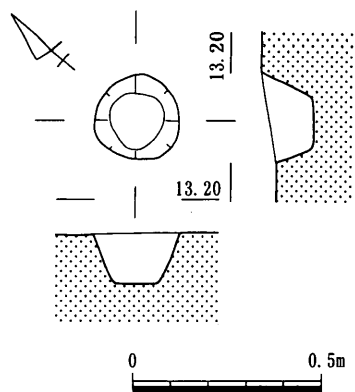
調査区西端部の北寄りの旧G5区で検出した柱穴である。平面形は柱の抜き取り痕



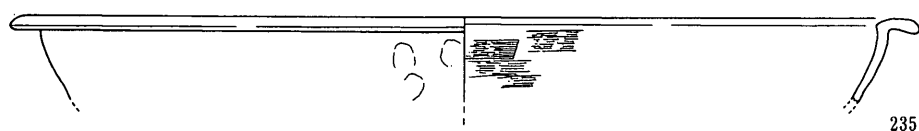
第373図 V区 第1面SK40・41平・断面図(1/30)



第374図 V区 第1面SK42平・断面図(1/30)



第375図 V区 第1面SP20  
平・断面図(1/20)

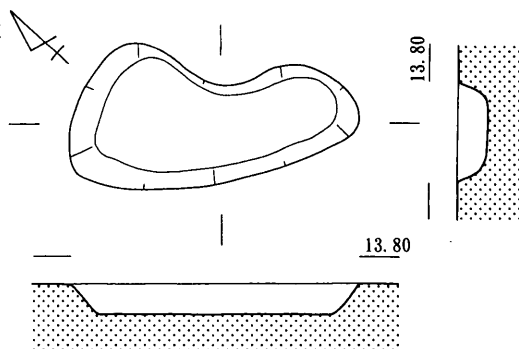


第376図 V区 第1面SP20出土遺物(1/4)



のため全体に歪んでいる。北側部分が柱穴、東側部分が抜き取り痕であるが断面図には反映していない。本来の柱穴の平面形は一辺が70cmほどの隅丸方形で、深さは16cmである。

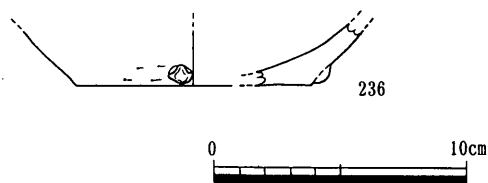
236は土師質の鉢で、底部立ち上がり部外面にヘラ削りを施しており、現存で1つの脚状の突起が付いている。



性格不明遺構

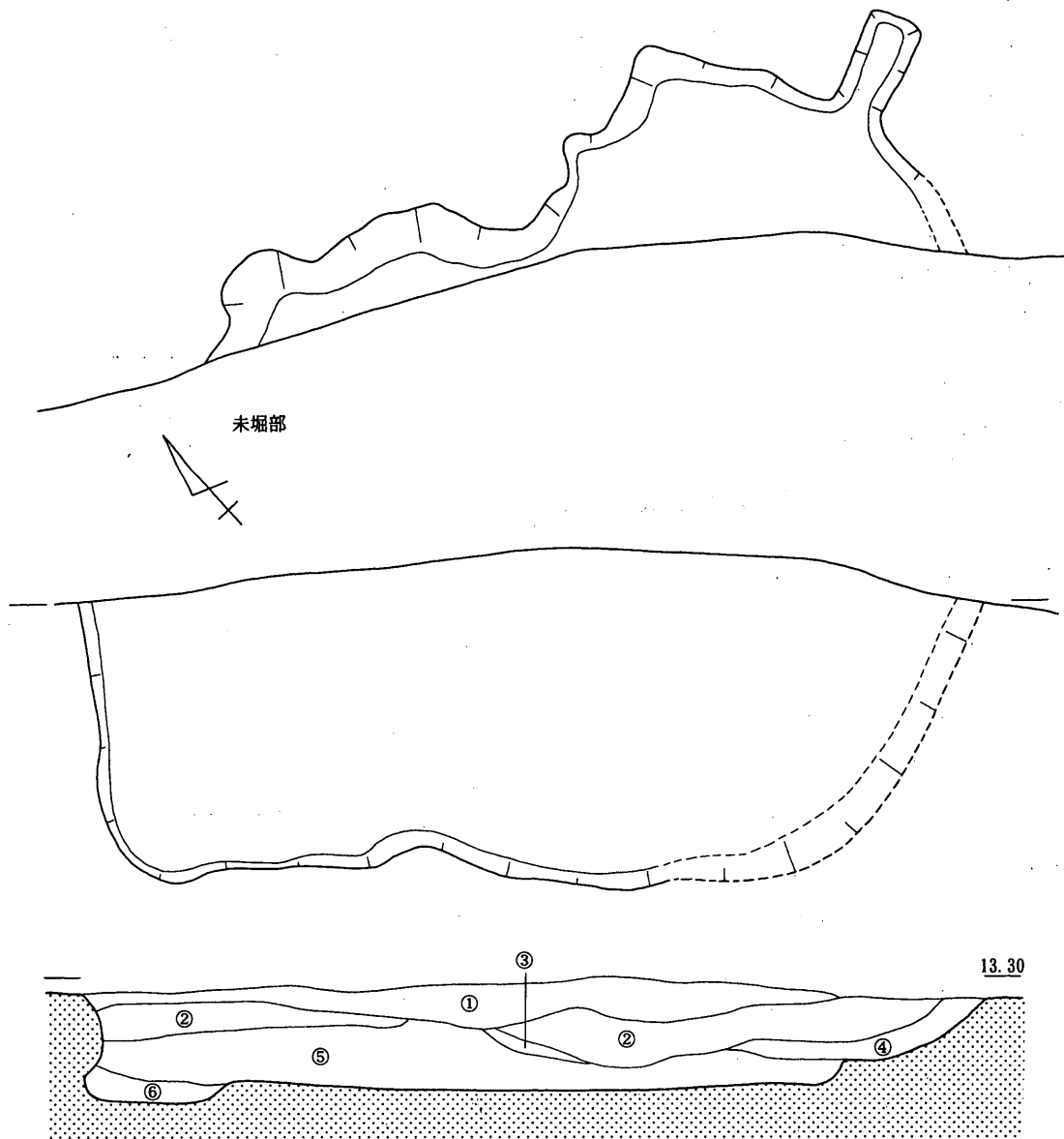
S X 05 (第378・379図)

旧G2区東部で検出した性格不明遺構である。G3区に北部が延びる。平面形は不整な隅丸方形であり、東側でくちばし状に突出する部分がある。断面形は東側ではなだらかに下るが、西側ではえぐれる。規模は長径10.08m、短径8.96m、深さ1.2mを測る。主軸方向はN-52°-Eである。断面で見られたえぐれから埋土にグライ化は見られないものの水ため状の遺構かもしれない。

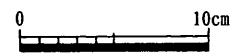
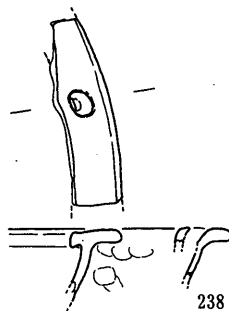
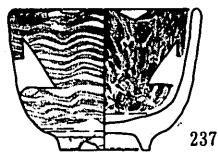


第377図 V区 第1面SP21  
平・断面図(1/30), 出土遺物(1/3)

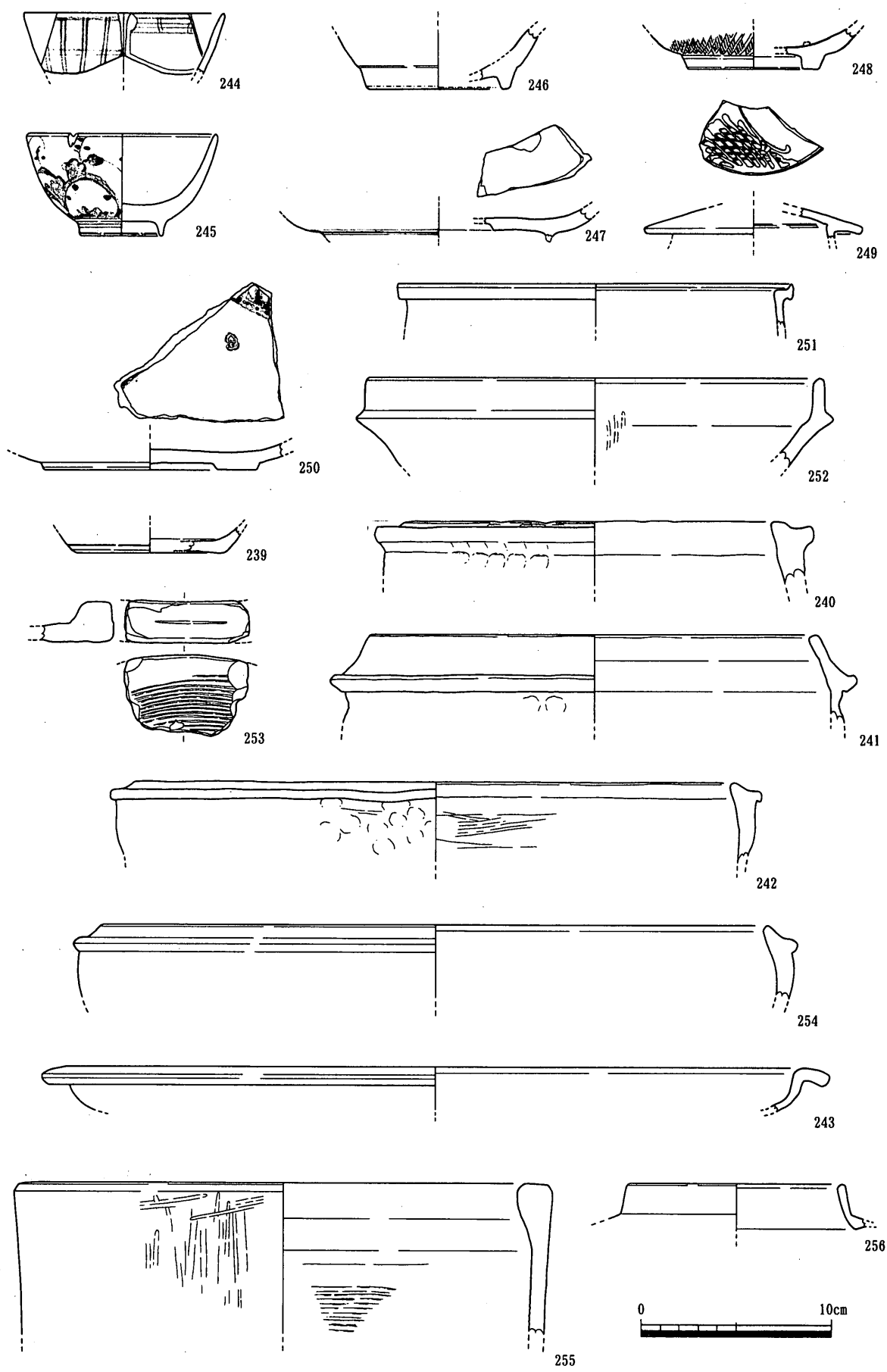
出土遺物は肥前系陶器碗(237)、亀山系鍋(238)がある。237は外面に波状の刷毛目を施す。18世紀前半と考えられる。238は体部がほぼ直立する。16世紀末~17世紀前葉と考えられる。239は



- ① にぶい黄褐色砂利混粘質土
- ② 褐色砂利混粘質土
- ③ 橙色砂利混粘質土
- ④ 暗黄褐色砂利混粘質土
- ⑤ 褐色砂質土
- ⑥ 褐色粘質土



第378図 V区 第1面SX05平・断面図(1/80), 出土遺物(1/4)



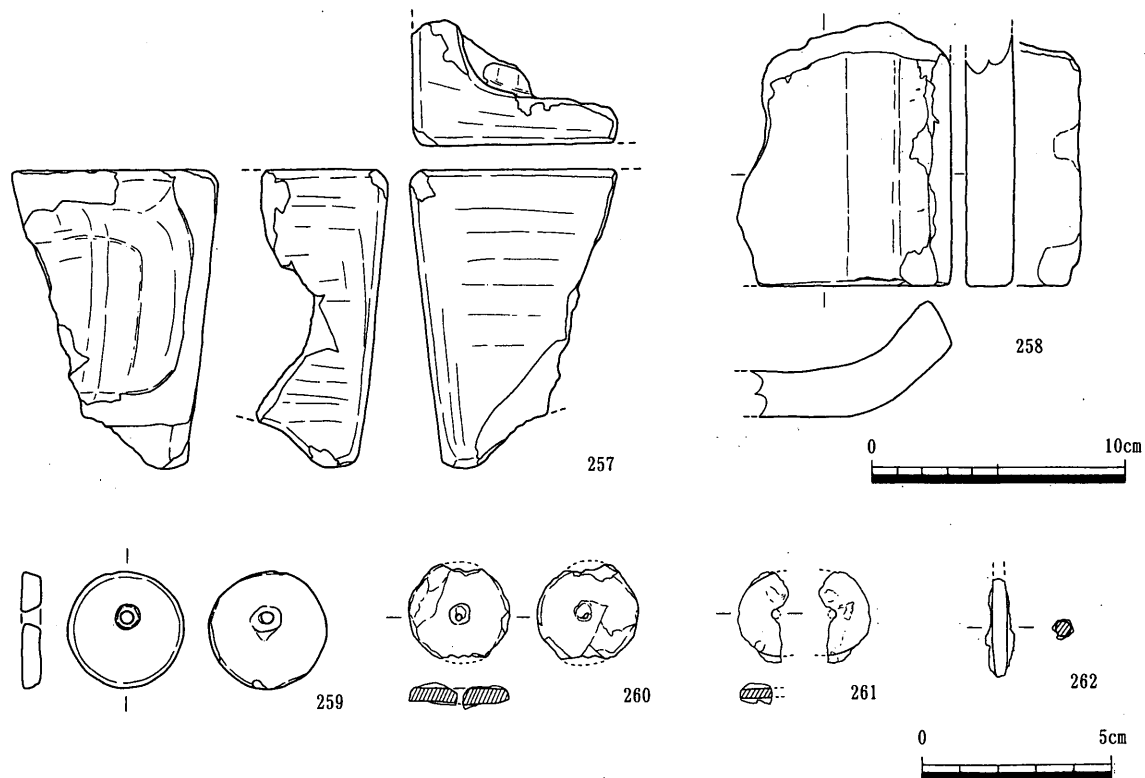
第379图 V区 第1面SX05·06出土遗物(1) (1/3)

土師器杯で、底部はヘラ切りである。241は土師質の羽釜で、鏝は短く上方を向く。内面は強くナデている。242は外面に指押さえが顕著である。内面の板ナデは一部ハケ目になる。243は瓦質の焙烙である。遺構の時期は237から18世紀前半と考えられる。

S X 06 (第379・380図)

調査区中央部北壁付近の旧G4区で検出した落ち込み状遺構である。平面形は不整形で南西部分が溝状に突出している。溝状突出部を含んだ最大長は8.5m、最大幅は3.7m、溝状突出部は最大長2.0m、最大幅1.1mである。溝状の突出部分は皿状の落ち込みで深さは5cm程度であるが、それ以外の中央部分は30cm程度の深さがある。

244・245は肥前系磁器の碗で、245の底部は厚手である。246は肥前系磁器の瓶で、断面方形の厚手の高台をもつ。247は肥前系磁器の皿である。248は肥前系陶器の鉢で見込みに目跡が残る。249は陶器の蓋であるが産地は不明。250は瀬戸・美濃系陶器の鉢で、見込みに胎土目が残る。また鉄絵により施文している。251は陶器の鉢で、口縁部は短く外側に屈曲し、端部を上下に拡張している。産地は不明である。252は備前焼の播鉢で口縁部の立ち上がり部の外面は段になっている。整形した後内面に卸し目を施している。内・外面に自然釉が付着している。253は火鉢の口の部分の下部の破片と考える。底部外面にはハケ目となっている。255は瓦質の深鉢で口縁部は内側に肥厚している。



第380図 V区 第1面SX06出土遺物(2) (1/3, 1/2)

外面にはヘラミガキを加えている。256は瓦質の土瓶で短い口縁部が内傾して立ち上がる。257は瓦質の浅鉢のコーナーの脚部である。上部から脚部にかけては斜めになっている。258は平瓦であるが、中央部分が平坦で、広端部側が大きく反っている。製作時に変形したのであろうか。259は土製紡錘車、260・261は鉄製の紡錘車である。262は鉄釘の破片である。

S X 07 (第 381 図)

調査区の南西隅の旧 G 8 区で検出した遺構である。調査区外に広がるため全体形は不明であるが、検出した部分から考えると長方形に近いものであろう。また北東部分は抉れたようになっている。検出した部分で長さ(北西—南東) 1.25 m、幅(北東—南西) 2.0 ~ 2.2 m、深さ 0.25 m である。

263 は肥前系陶器の碗で、いわゆる刷毛目碗である。

(6) 包含層出土遺物(第 382 図~第 397 図)

成重遺跡では V 区を中心に近世の陶磁器が多量に出土している。しかし大多数は包含層出土で時期幅もあり、また成重遺跡が近世で特に重要な遺跡とは言い難い。だが、成重遺跡の東に隣接する谷遺跡で江戸時代の連房式の陶器窯を検出していること、四国横断自

動車道の津田~引田間の調査を含めて東讃地域で発掘調査による近世遺物の出土が少ないこと、また近年のサンポート高松事業に伴う高松城跡関連の調査で近世陶磁器が多量に出土していることなど、県内の近世陶磁器の生産と流通の視点に関する資料になりうると判断して多めに掲載した。

ここで包含層出土とした遺物は、機械掘削時、包含層人力掘削時、調査区整形時、上面精査時など遺構外からの出土遺物である。

264 ~ 267・269 ~ 272 は旧 G 1 区部分から出土した遺物である。264・265 は土師器杯で、265 の底部は突出気味である。269 は開元通宝、270 は元豊通宝、271 は聖宋元宝、272 は不明である。

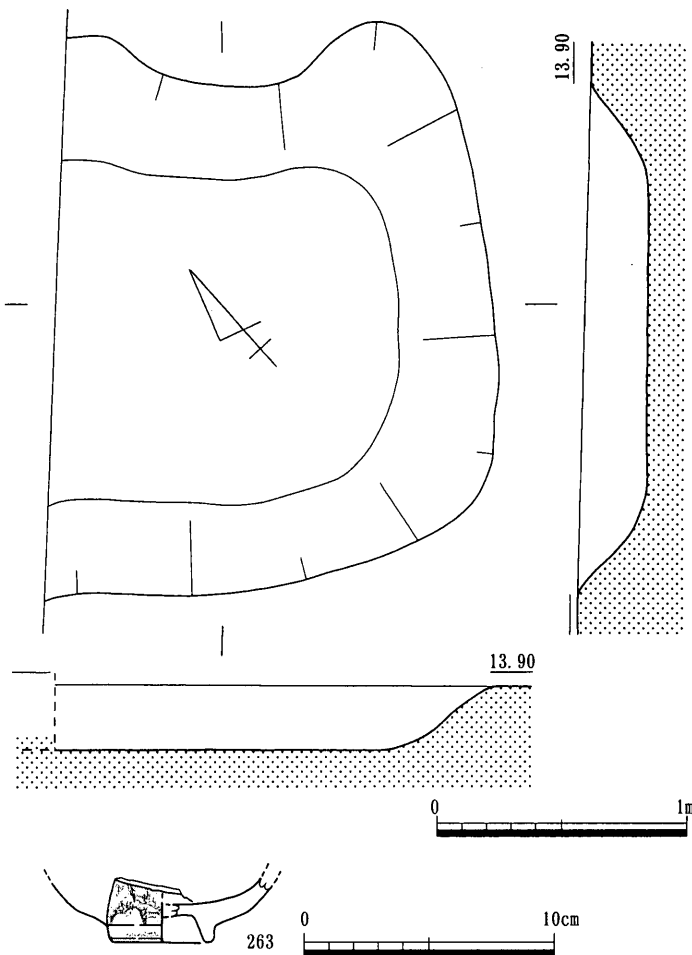
268・273 は旧 G 2 区部分から出土した遺物である。268 は瓦器碗で外面に指押さえが顕著で、内面は全体にヘラミガキを施す。273 は永楽通宝、

274・275 は旧 G 3 区部分から出土した遺物である。275 の底部にはヘラ切りの後に板状圧痕がある。

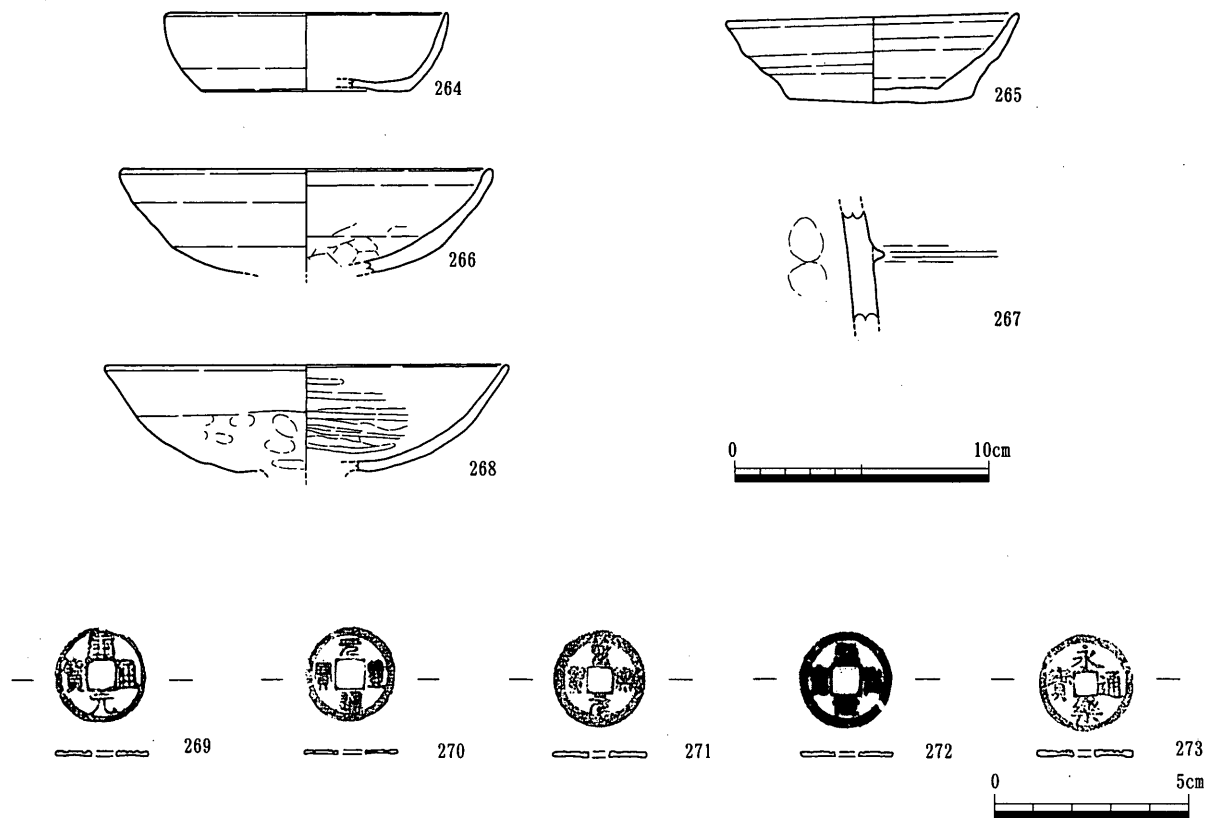
276 ~ 360 は旧 G 4 区部分の東側で、調査前に塚状に盛り上がっていた部分からの出土である。最初は塚として調査を行ったが、下部で現代の祠の基壇が検出されたことから、この祠の造営に伴う整地によって集積した遺物と判断した。また周囲の田畑の開墾中に出土したものを祠周辺に廃棄したという話も聞く。遺物には近世~近代の時期幅があり、周囲にはかつて当該期の遺構があったと考えられる。

276 ~ 283 は肥前系磁器の碗である。このうち 277・278・281 は足高の高台の広東碗である。279 は所謂くらわんか碗である。280 と 283 は見込み蛇の目釉剥ぎである。

284・285 は瀬戸・美濃系磁器の碗である。284 は陰刻沈線による文様をもつ。285 は端反形で、



第381図 V区 第1面SX07平・断面図(1/30),  
出土遺物(1/3)



第382図 V区 第1面(旧G1・G2区)包含層出土遺物(1/3, 1/2)

蛇の目高台をもつ。

286～292は肥前系磁器の皿である。286は見込みに砂目痕が2箇所ある。287と289の内面の文様は銅板転写によるものである。290・291は菊花皿で両者とも高い蛇の目凹形高台である。293は瀬戸・美濃系磁器の皿である。口縁部は輪花になり、内面に蓮弁状の文様を施している。

294・295は肥前系陶器の碗で、295は陶胎染付である。

296は京・信楽系陶器の碗で、内面全体に細かい貫入が見られる。

297・298は瀬戸・美濃系陶器の碗である。両者とも陶胎染付で、足高の高台の広東碗である。

299は肥前系陶器の皿で、見込みに砂目が見られる。

300は京・信楽系陶器の灯明皿で、見込みに櫛目を施している。

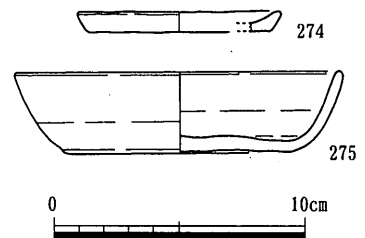
301～305は陶器の鉢で、301は瀬戸・美濃系、302は見込みに目跡をもつもので京・信楽系、304は刷毛目施文の肥前系、305は大谷焼、303は口縁部内面に受け部を持つもので産地は不明である。

306は陶器の蓋で外面に飛び鉋文様がある。産地は不明である。

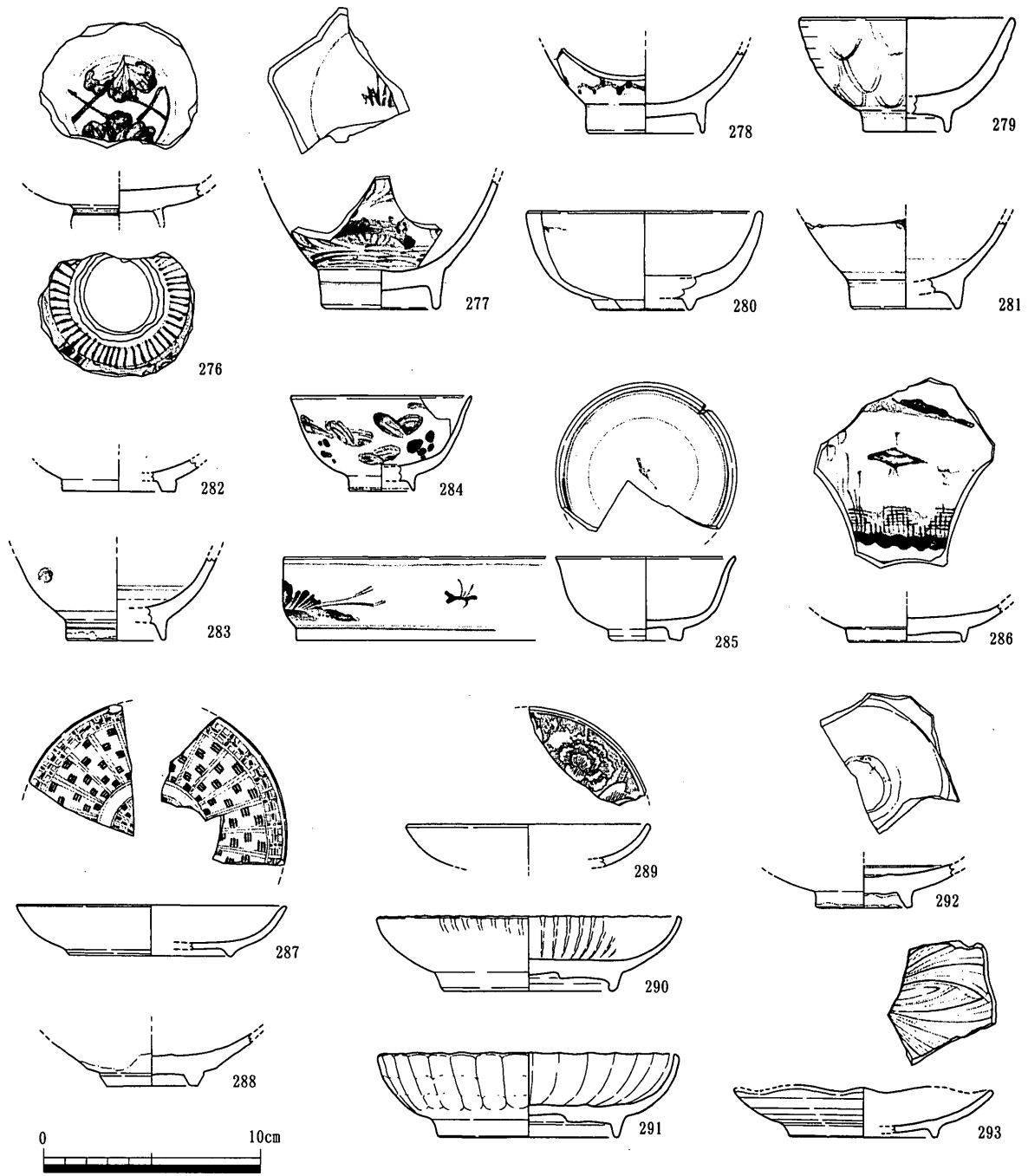
309～313は陶器の瓶であるが、このうち産地不明の313以外は大谷焼である。310と312は底部立ち上がり部の外面に面取りを行っている。

314は瀬戸・美濃系陶器の燭台で、底部は糸切りで中央に穿孔されている。

315～323・325・326は堺・明石産の播鉢である。いずれも体部外面に回転ヘラ削りを行い、内

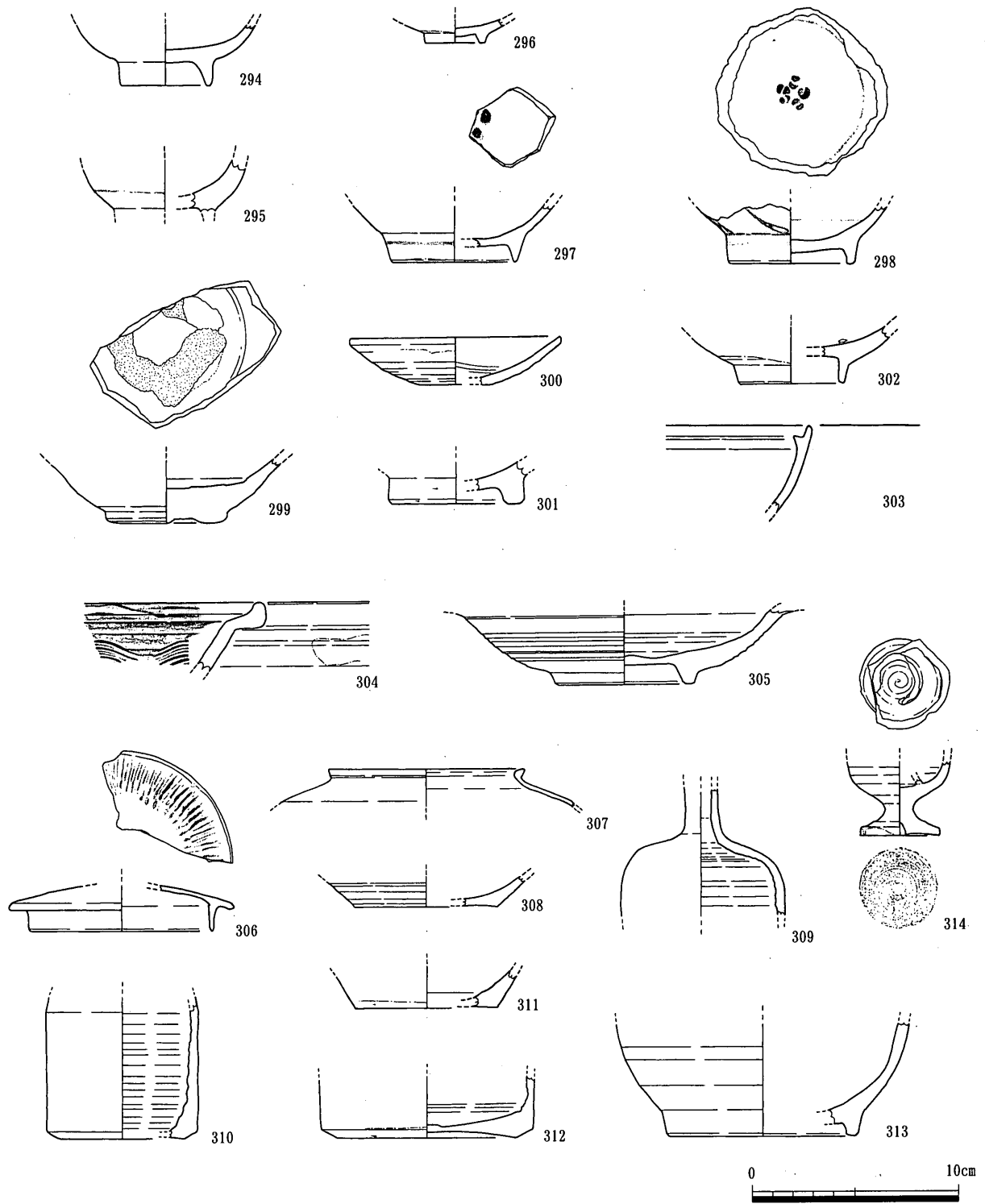


第383図 V区 第1面(旧G3区)包含層出土遺物(1/3)

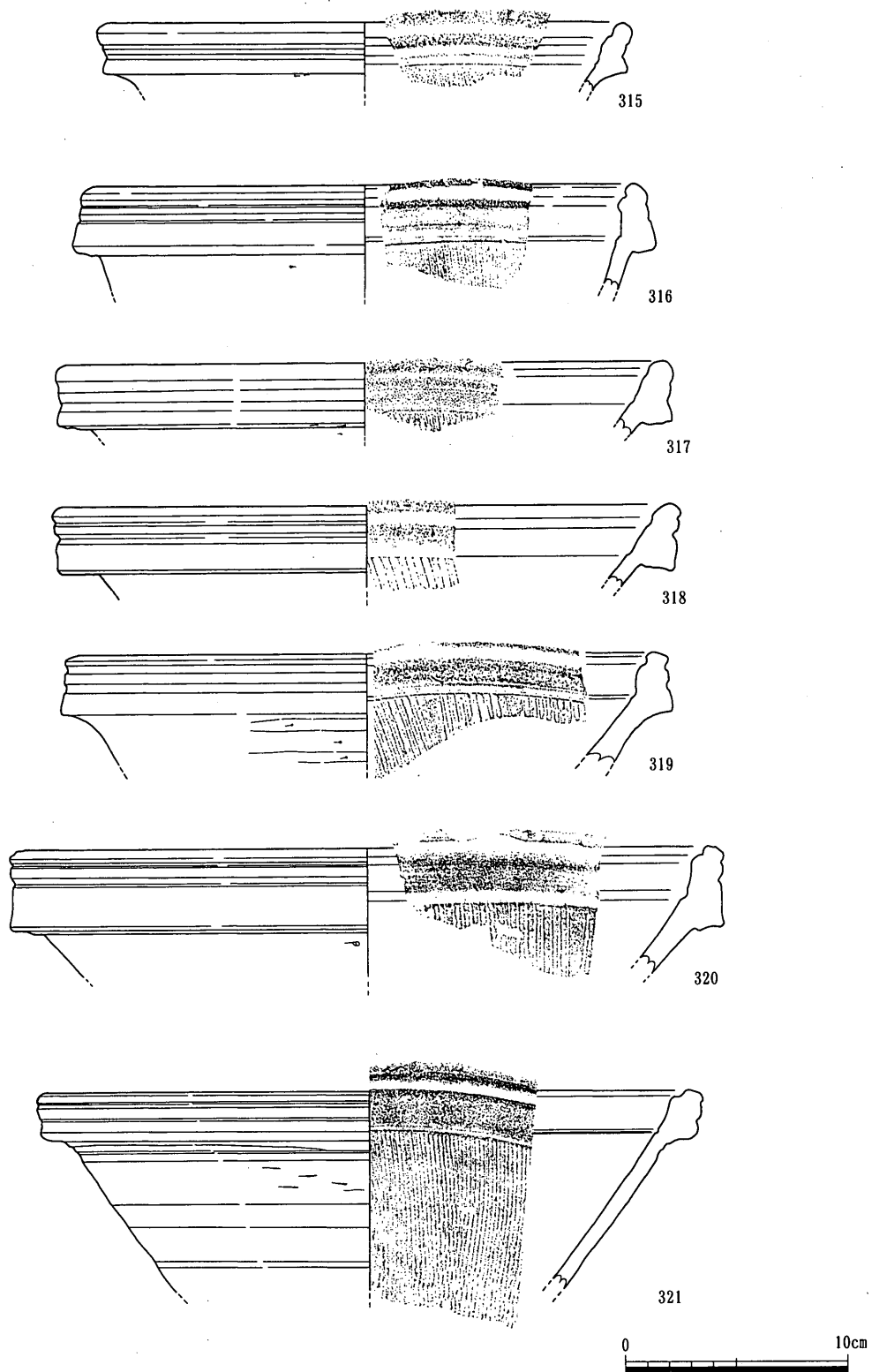


第384图 V区 第1面(旧G4区)包合层出土遗物(1) (1/3)





第385图 V区 第1面(旧G4区)包含层出土遗物(2) (1/3)



第386图 V区 第1面(旧G 4区)包合层出土遗物(3) (1/3)

面に卸し目を施した後に口縁部内面をナデている。

324 は備前焼播鉢で、口縁部をナデなどにより成形した後に内面に卸し目を施している。

327 は大谷焼の播鉢で体部下半は湾曲しており、内面には細かい卸し目がある。

328 は土師器小皿であるが、底部は糸切りになっている。

338 は鉢と考えられるもので、浅い皿状の体部にやや内湾する高い高台が付く。口縁部は大きく横につまみ出している。底部の外面はヘラ削りになっている。

340・341 は信楽焼陶器の甕で、口縁部上面に幅広の面をもつ。341 は体部外面に墨書が認められるが文字は不明である。

343～345 は瓦質の鍋で、口縁部は段を持つ二重口縁で、344 と 345 には把手が見られる。また 343 と 344 は接合しなかったが同一個体の可能性がある。

346～348 は瓦質の焙烙である。いずれも外面には指押さえが顕著である。

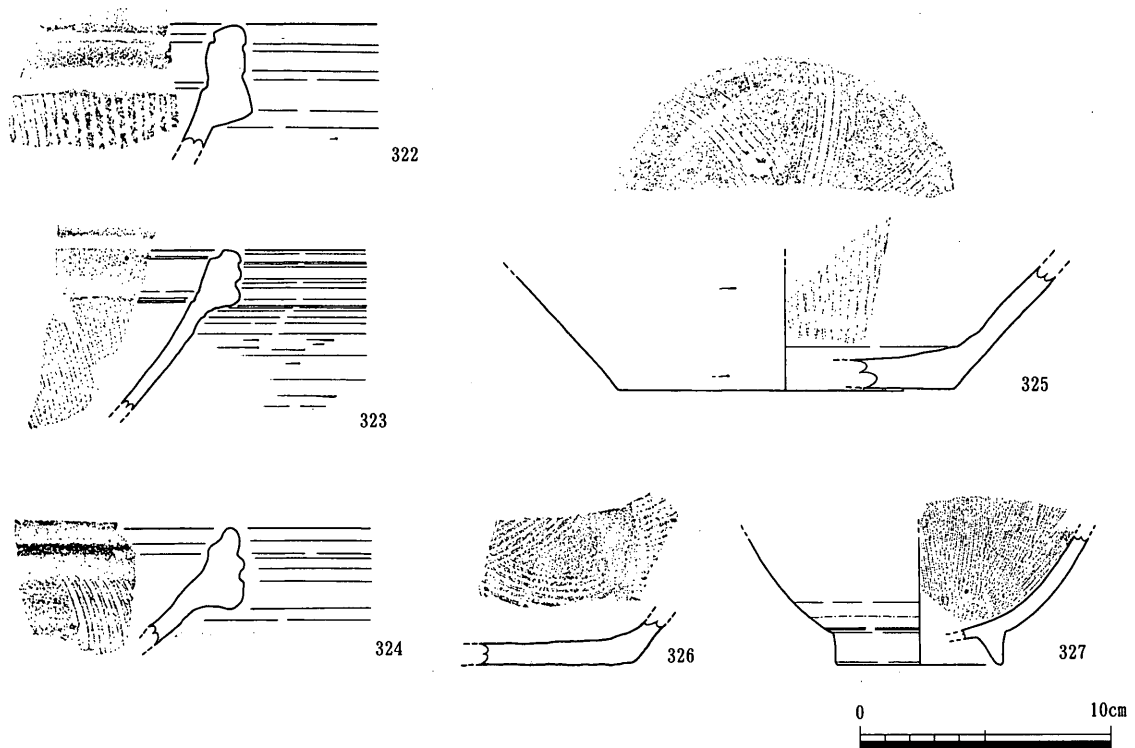
349 は瓦質の鉢の体部片で、内面にはカキ目が認められる。外面には型押し成形による亀を貼り付けており、亀の下部にやや蛇行する沈線が1条巡っている。

350 は瓦質の蓋で、若干上向きの鏝を貼り付けて受け部にしている。外面には一面に竹管文を施している。351 の壺の蓋になると考える。

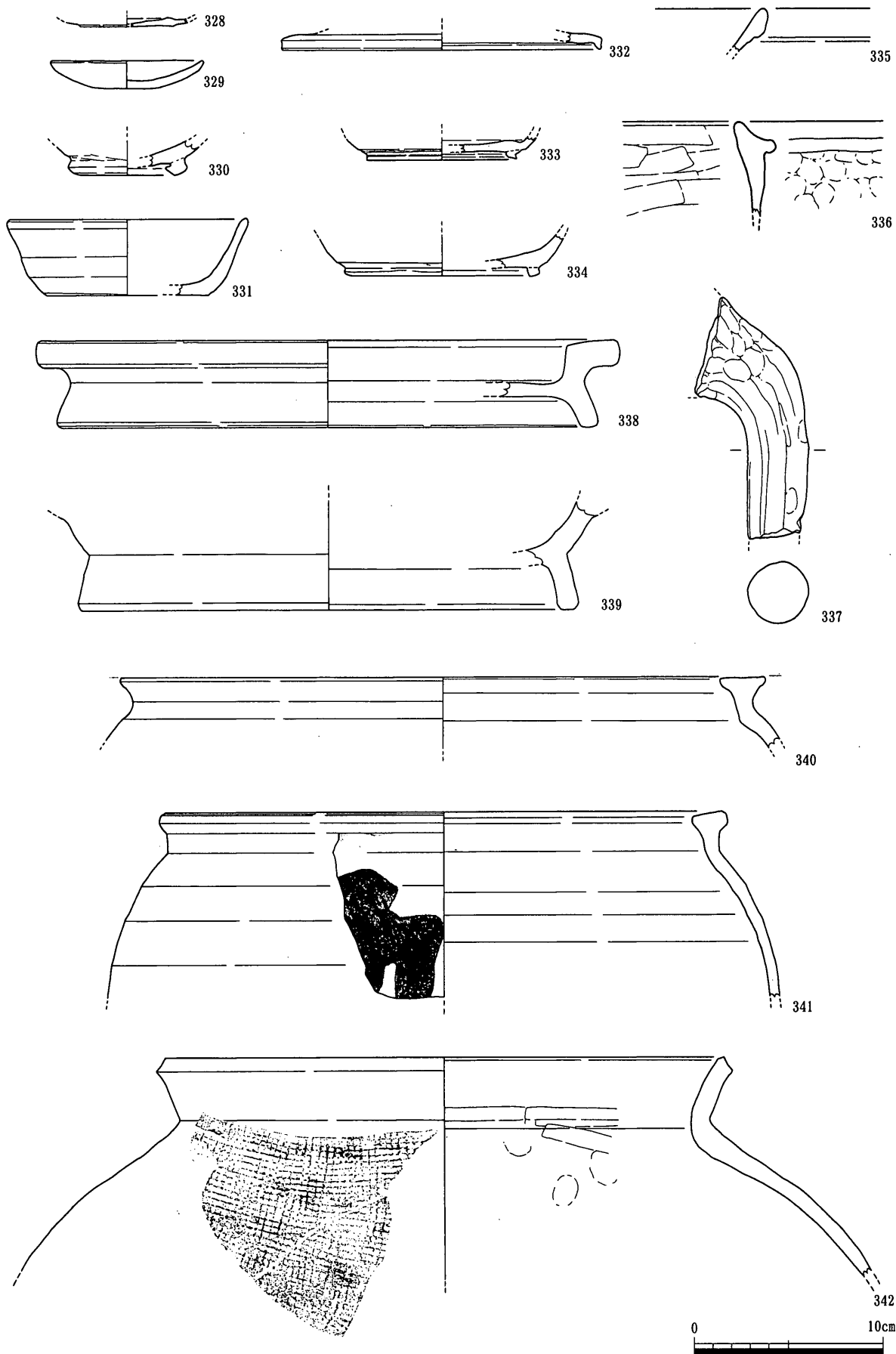
351 は瓦質の壺で短い口縁部が直線的に内傾して立ち上がる。体部上半は大きく膨らみ口縁部近くに沈線が1条巡っている。外面には文様を加えている。

352～356 は瓦質の羽釜である。鏝は 353 が水平である以外はすべて下向きである。353 は鏝から上部は新たに粘土を継ぎ足して成形している。354 の内面は板ナデであるが、ハケ目状になっている。355・356 の口縁部は少し内傾しており、端部が肥厚している。

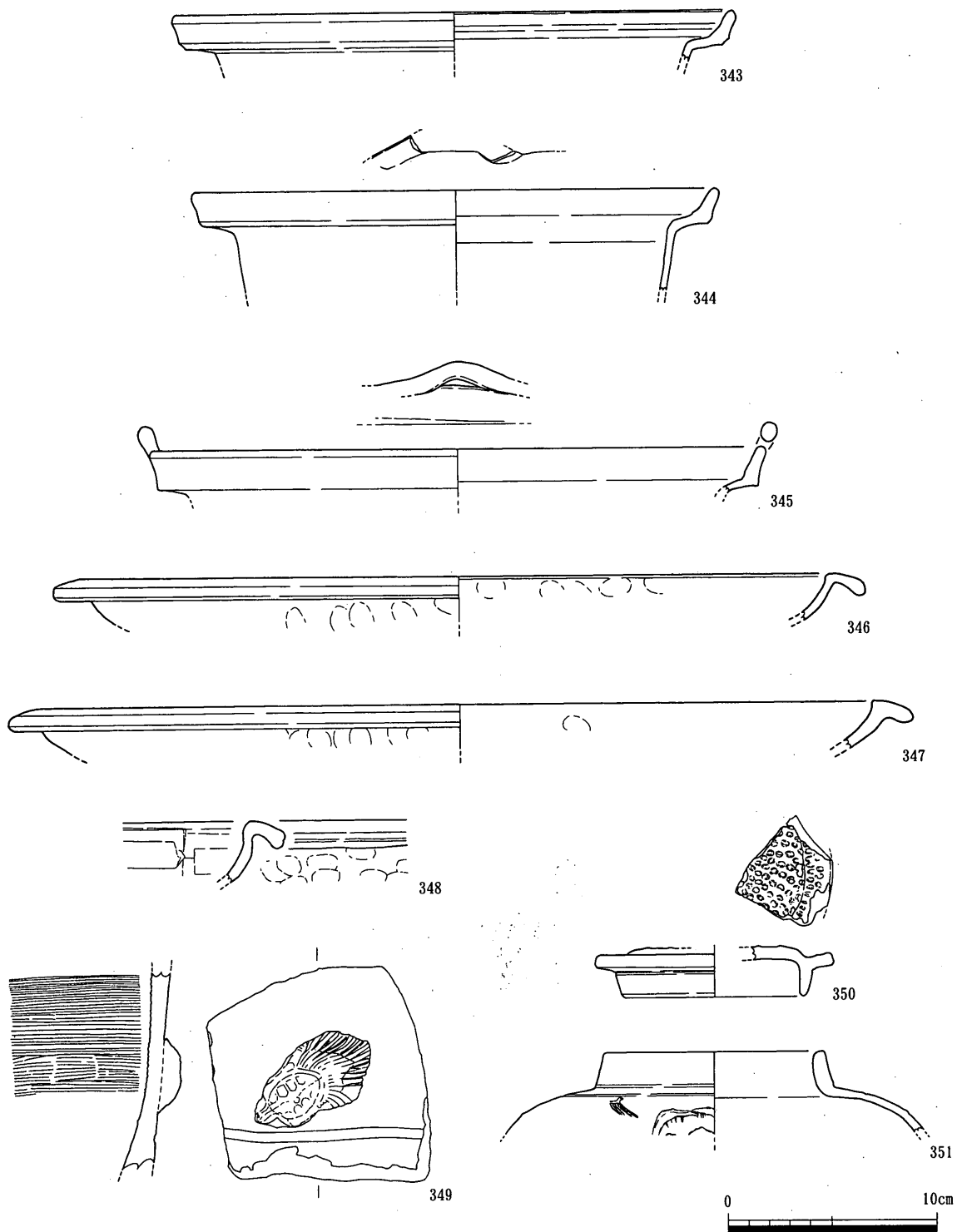
357 は軒丸瓦であるが瓦当部は欠損している。丸瓦部の凹面はコビキB技法の後に板ナデを施して



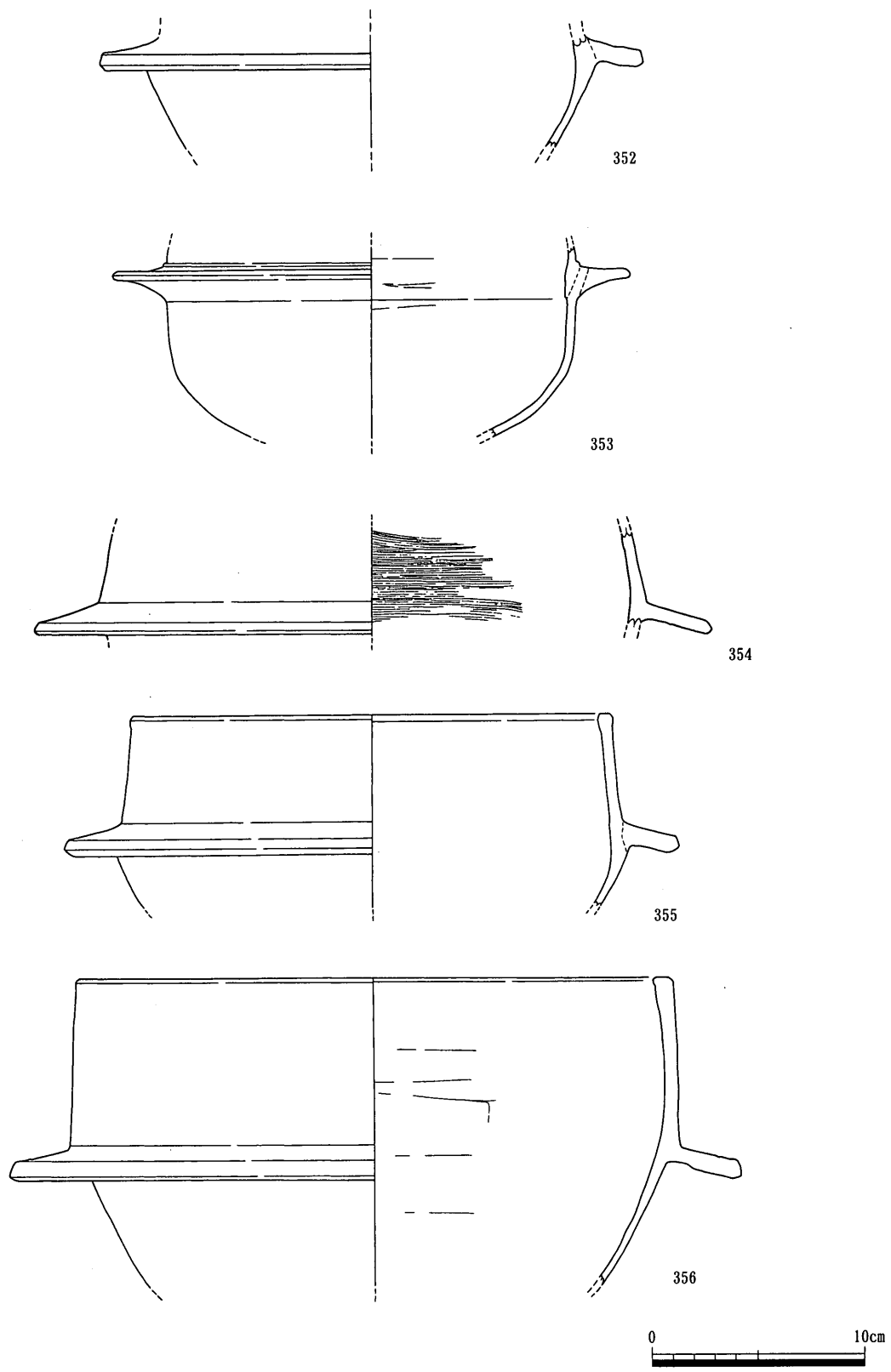
第387図 V区 第1面(旧G4区)包含層出土遺物(4)(1/3)



第388图 V区 第1面(旧G4区)包含层出土遗物(5)(1/3)



第389图 V区 第1面(旧G4区)包合层出土遗物(6) (1/3)



第390图 V区 第1面(旧G 4区)包合層出土遺物(7) (1/3)

いる。358は玉縁式の丸瓦で、凹面に布のしぼり痕がある。

359は寛永通宝、360は種類は不明である。

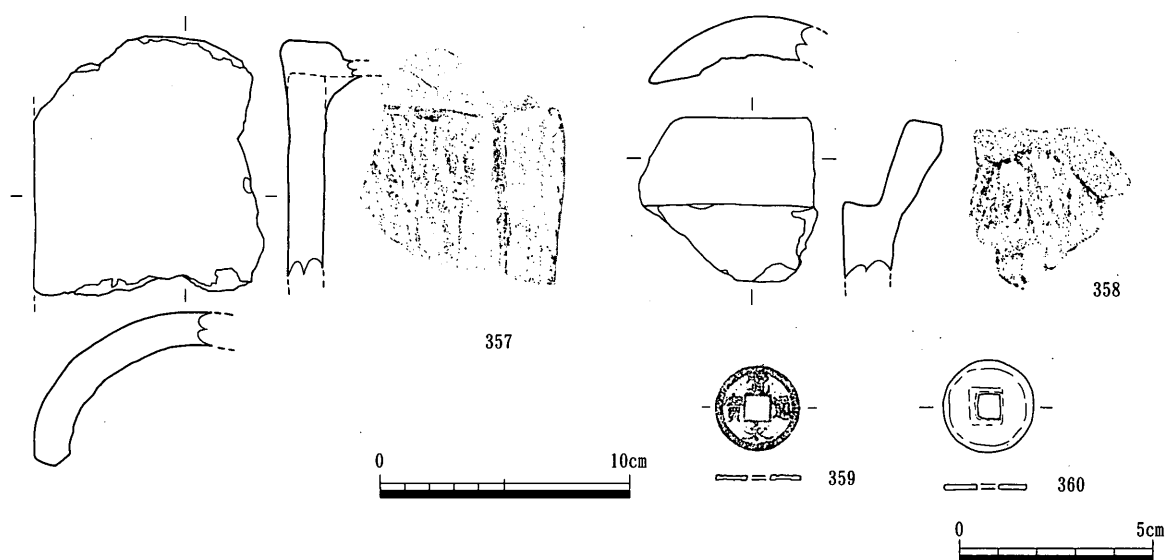
361～369は旧G4区部分の塚状隆起部分以外の箇所出土した遺物である。

361～363は土師器で底部はすべてヘラ切りである。363は小皿を灯明皿として使用しているもので、口縁部の一部分の内・外面に煤が付着している。

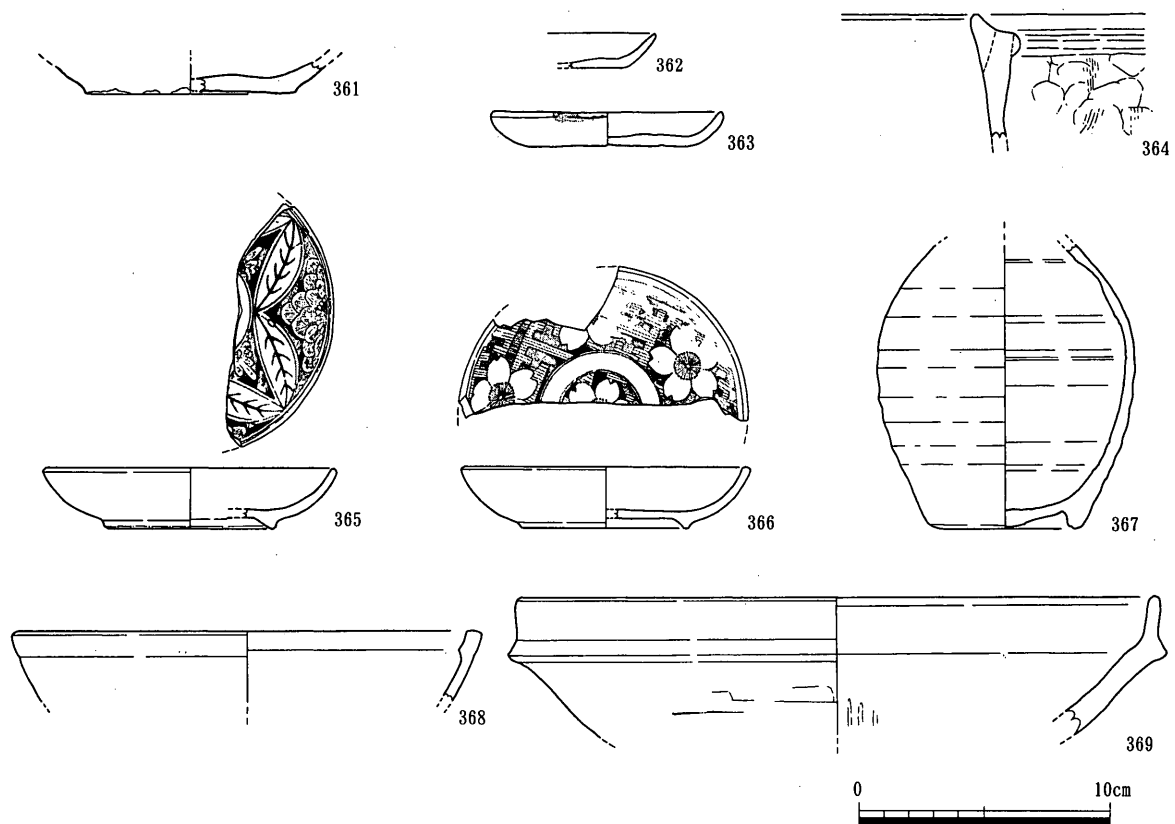
365・366は肥前系磁器の皿で、銅板転写により文様を施している。

368は瀬戸・美濃系陶器の鉢で、内面に肥厚する口縁部をもち、肥厚した部分を強くナデている。

369は備前焼の播鉢で、口縁部は直立し外面の凹線は見られない。内面には焼成時の自然釉が付着している。



第391図 V区 第1面(旧G4区)包含層出土遺物(8) (1/3, 1/2)



第392図 V区 第1面(旧G4区)包含層出土遺物(9) (1/3)

370～373は旧G 5区部分で出土した遺物である。

370・371は備前焼の灯明皿で、体部外面に回転ヘラ削りを施し、内面には塗り土を行っている。口縁部には煤が付着している。

372・373は肥前系陶器の碗で陶胎染付である。富田・吉金窯産のものである。

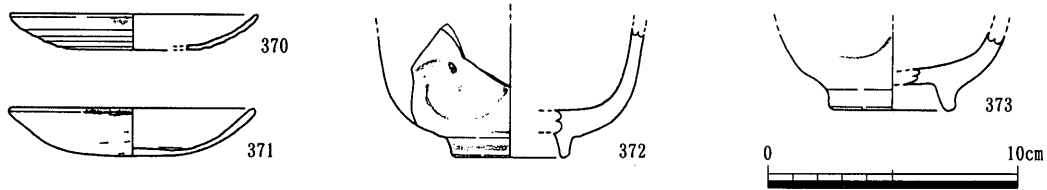
374～389は旧G 6区と8区部分で出土した遺物である。

374・375は肥前系磁器の碗である。375は端反形になるものと考えられ、内面には刷毛による白色の釉が薄くかかる。

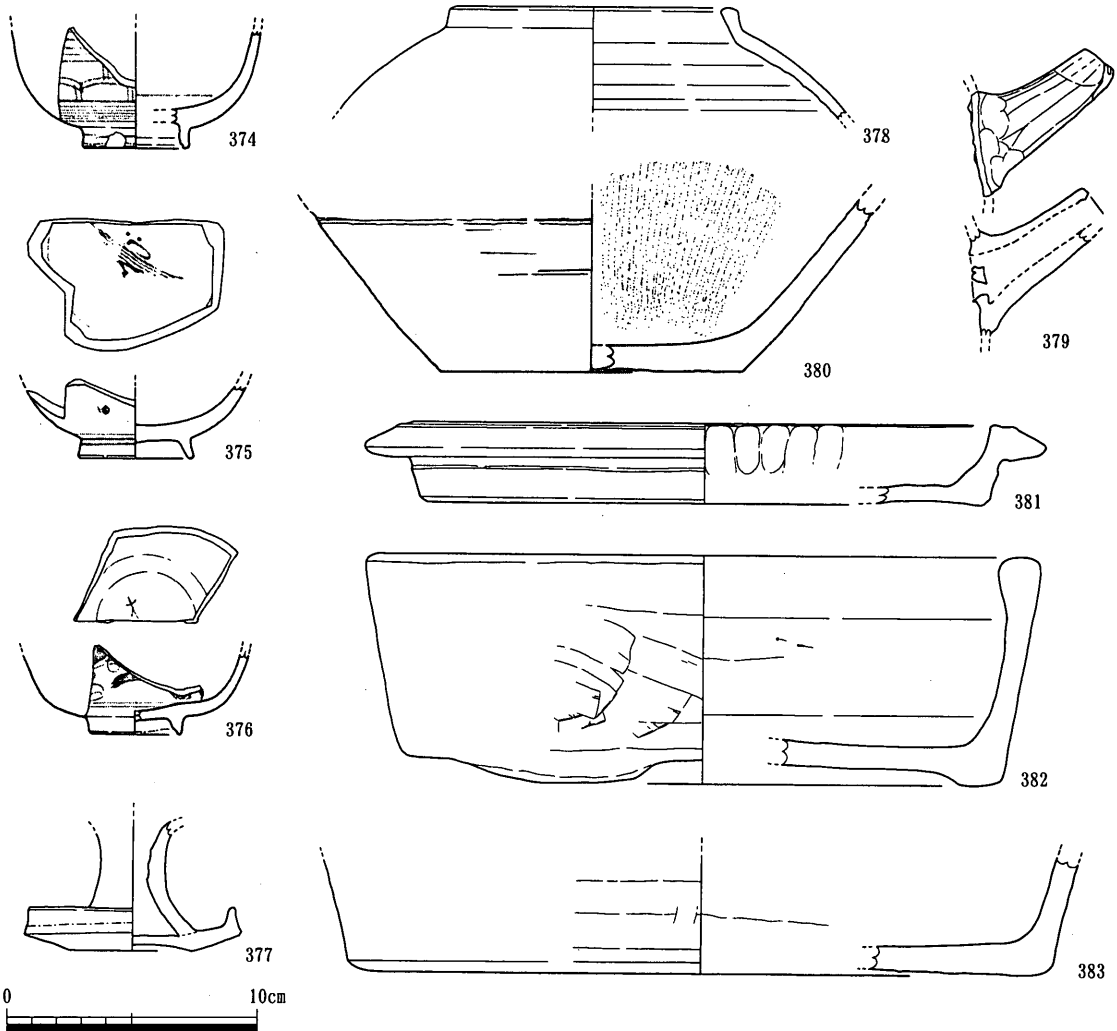
376は瀬戸・美濃系磁器の碗で、上絵を施している。

380は堺・明石産の播鉢で、体部外面に回転ヘラ削りを施している。体部外面には砂が付着している。

381は器高の低い鉢で、口縁部を横につまみ出し端部を先細りにしている。また口縁部の上面を強くナデており、内面には指押さえが顕著である。382は火鉢で口縁部を内側に肥厚させている。底部



第393図 V区 第1面(旧G 5区)包含層出土遺物(1/3)



第394図 V区 第1面(旧G 6・8区)包含層出土遺物(1) (1/3)



には脚が3つ付く。内面には板ナデを強く施している。

385は瓦質の火鉢で高台が付く。外面には棒状工具によりナデておりヘラミガキのようになる。内面は板ナデであるがカキ目状の部分がある。

386は瓦質の香炉の脚部である。獣足で顔と足先を表現している。脚部下面の中央には大きな穿孔があり、側面には小さな穿孔がある。

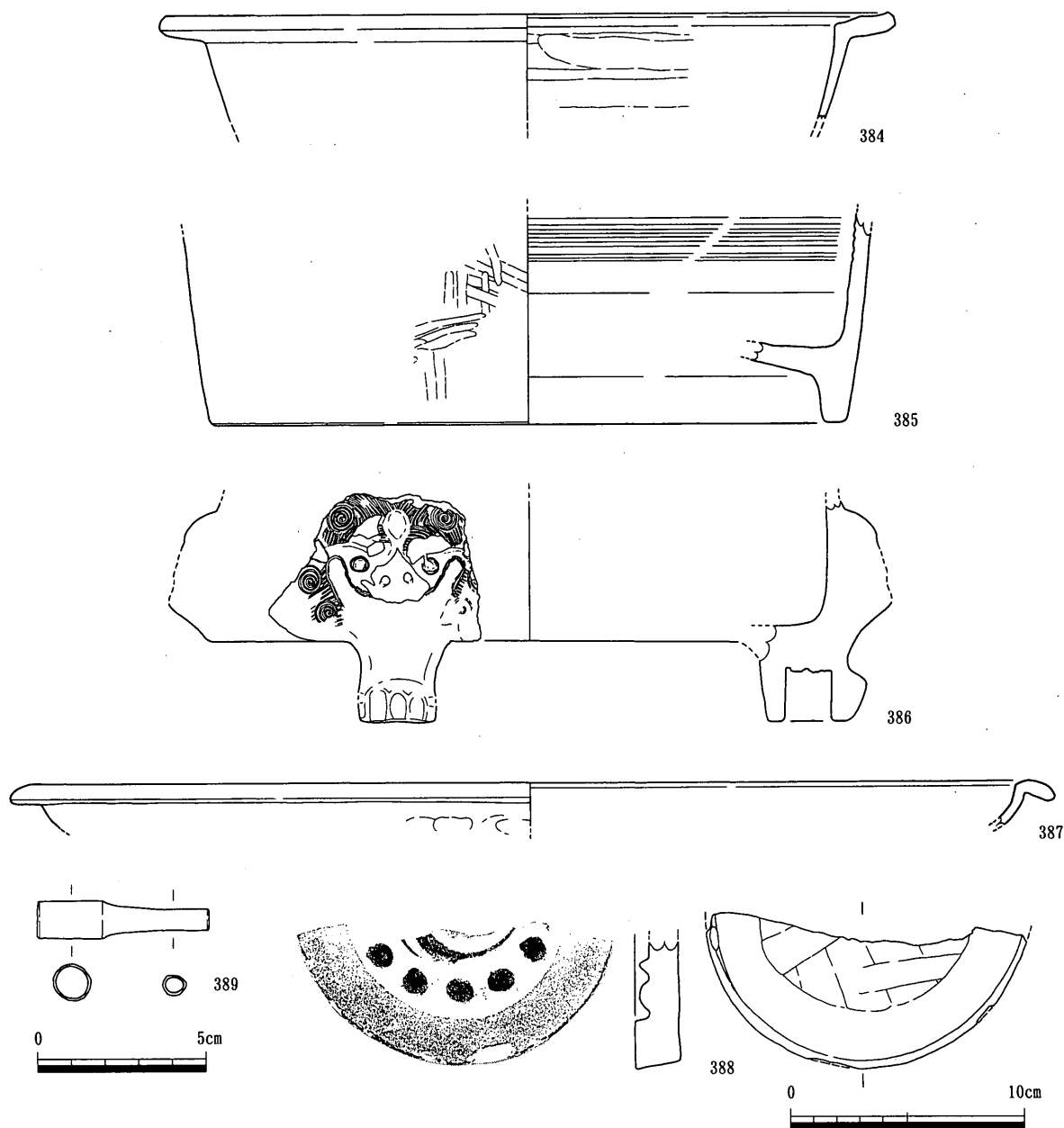
388は軒丸瓦の瓦当部分の破片で珠文が5個現存している。右回りの巴文で尾は長い。

390～419は旧G7区部分で出土した遺物である。

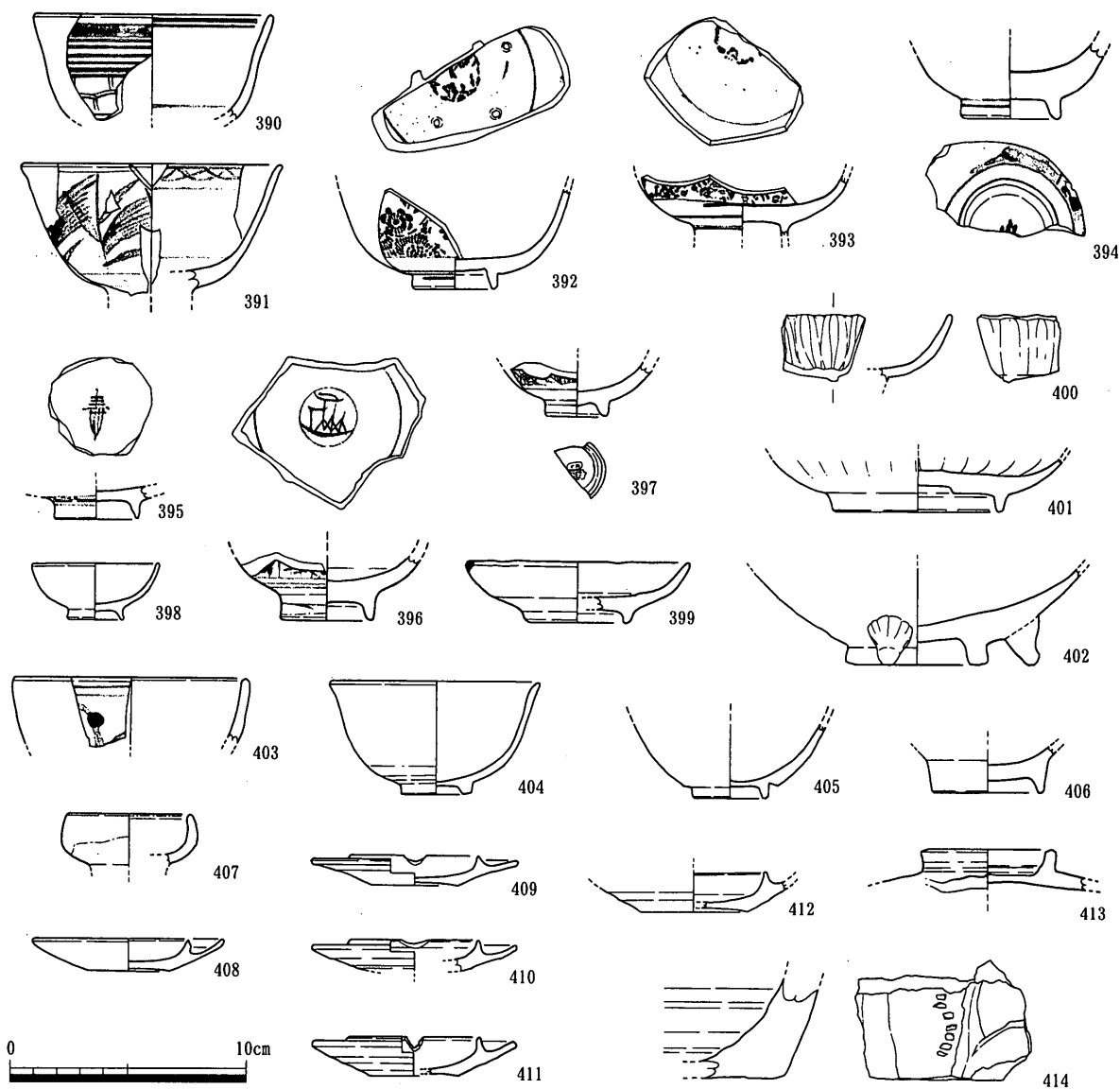
390～395は肥前系磁器の碗である。390は端反形である。391はコバルト呉須を使用している。392は見込みに目跡が現存で3個あり、型紙刷りで施文している。394の体部は厚手である。

396・397は瀬戸・美濃系磁器の碗である。397は底部外面に刻印があるが、字は不明である。銅板転写により施文している。

399～401は肥前系磁器の皿である。399の口縁部は弱い輪花になっている。見込みは蛇の目釉剥



第395図 V区 第1面(旧G6・8区)包含層出土遺物(2)(1/3, 1/2)



第396図 V区 第1面(旧G7区)包含層出土遺物(1) (1/3)

ぎである。400・401は菊皿で401は高い蛇の目凹形高台で、見込みに目跡がある。

402は肥前系磁器の香炉で、高台の外側に根元に輪花状の刻みを入れた、先端の丸い三角形の突起を貼り付けている。

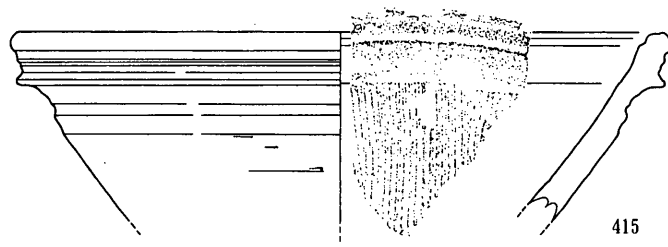
404・405は京・信楽系陶器の碗である。404は端反形で貫入が見られる。405は体部下部の高台付近で鋭利な段がある。

406は瀬戸・美濃系陶器の碗で陶胎染付である。足高の高台の付く広東碗である。

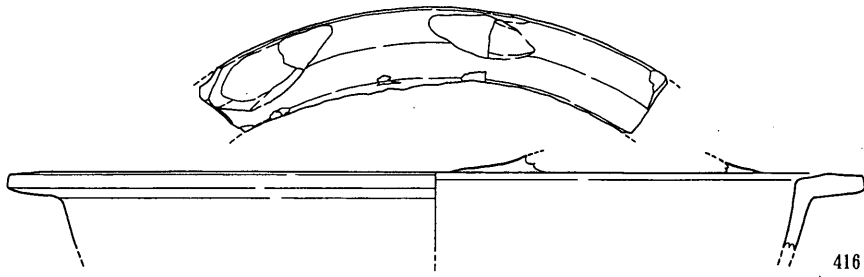
408～412は京・信楽系陶器の灯明皿で内面に仕切りをもつ。仕切りの上に灯明皿を乗せて、垂れた油を受け取る灯明受皿であるが、広義にとって灯明皿に含めた。409～411は半円状の油溝をもつ。

415は堺・明石産の播鉢で、体部外面に回転ヘラ削りを施す。口縁部は上下を強くナデており、突帯のように突出している。

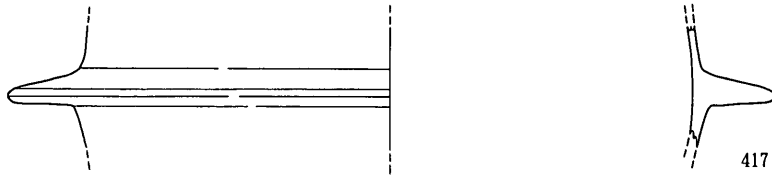
417・418は瓦質の羽釜である。418の鏝はやや下向きで、口縁部の外面には棒状工具によるナデで部分的にヘラミガキのようにになっている。419は寛永通宝である。



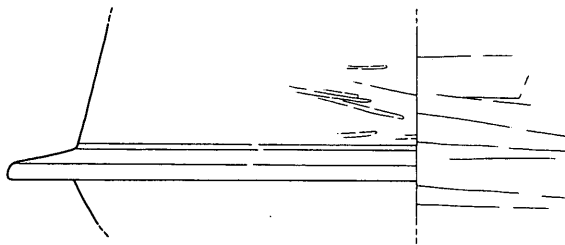
419



416



417



418



第397图 V区 第1面(旧G7区)包含层出土遗物(2) (1/3, 1/2)

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四十七冊

# 成重遺跡 I

## 第一分冊

平成16年3月31日 発行

編集 財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター  
〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4  
TEL 0877-48-2191

発行 香川県教育委員会  
日本道路公団  
香川県土木部

印刷 総合印刷ワークステーション有限公司



四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四十七冊

# 成 重 遺 跡 I

第二分冊

2004. 3

香 川 県 教 育 委 員 会  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター  
日 本 道 路 公 団  
香 川 県 土 木 部

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四十七冊

# 成 重 遺 跡 I

第二分冊

2004. 3

香 川 県 教 育 委 員 会  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター  
日 本 道 路 公 団  
香 川 県 土 木 部

## 第IV章 まとめ

### 第1節 自然化学分析

#### 成重 I 遺跡出土の赤色顔料

志賀智史・本田光子（別府大学）

##### 1. はじめに

香川県大川郡白鳥町成重 I 遺跡出土の赤色顔料について調査する機会を得たので、その方法と結果を報告し、若干の考察を加えたい。

現在までの知見によれば、出土赤色顔料は酸化第二鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 等を主成分とするベンガラと赤色の硫化水銀 ( $\text{HgS}$ ) を主成分とする朱の二種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四酸化三鉛 ( $\text{Pb}_3\text{O}_4$ ) を主成分とする鉛丹がある。これら3種類の赤色顔料を念頭におき分析調査を実施した。

##### 2. 試料

試料は、赤く見える土器4点（試料3,4,6,7）と赤く見える石器1点（試料5）の合計5点である。所属時期は、試料3と4が7世紀後半、試料5～7が弥生時代後期後半と考えられている。

##### 3. 方法

①実体顕微鏡観察 6～40倍の倍率で直接に遺物を観察する。赤色物がある場合は、その付着状態と付着部位を調べる。また、光学顕微鏡および電子顕微鏡用の試料を作成するために針先に付く程度の赤色部分をサンプリングする。三者の赤色顔料はそれぞれ特徴を持った外観を有しているため、この実体顕微鏡による観察と次の生物顕微鏡による観察から、試料の材質や状態などについてはほぼ経験的に見極めがつく。なお、赤く見える土器試料については、土器破片をエポキシ樹脂に包埋し、断面観察用の試料を作成した。

②生物顕微鏡観察 50～400倍の倍率でサンプリングした赤色物ないしは断面試料を観察する。透過光および反射光で粒子の状態、形状、粒度等を精査する。断面試料の場合は赤色物を含む層自体や下地の状態を観察する。ベンガラは多くの場合粒子が $1\mu\text{m}$ 以下と非常に小さいので、粒子形態の把握には次の電子顕微鏡による観察が必須である。なお、粒子径が $1\mu\text{m}$ 以下の朱粒子の場合、光学顕微鏡観察でベンガラ粒子との区別を付けることは非常に難しい。

③電子顕微鏡観察 20～100000倍の倍率でサンプリングした赤色物を観察する。主としてベンガラ粒子の形状を観察する。この顕微鏡での観察は白黒での観察のみとなるので、確実に赤色部分を観察できるように、試料の作成と観察には十分な注意を行っている。

④蛍光X線分析 赤色物の主成分元素の検出を目的に、エネルギー分散型蛍光X線分析装置（堀場製作所製 MESA500 及び電子顕微鏡付属 EDAX 社製）を用い、試料を直接測定した。赤色の由来となる元素として、朱は水銀 ( $\text{Hg}$ ) が、ベンガラは鉄 ( $\text{Fe}$ ) が検出される。ただし、土壌や土器にはもともと元素としての鉄 ( $\text{Fe}$ ) が含まれているので、この方法で検出された元素の種類からだけで朱かベンガラかの判別を行うことは危険である。

以上の工程を適宜ふまえ、分析依頼を受けた赤色物が、考古学的に意味のある赤色物、すなわち赤色



顔料であるか否かを判断した。

試料 No.	遺物種類	出土位置	時期	顕微鏡観察		蛍光X線分析		赤色顔料 の種類	備考	報告 番号
				朱	ベンガラ	Hg	Fe			
3	土師器 蓋	V区第1面1号墳	7C後半	×	×	×	○	確認できない	焼成技術によって赤化	20
4	土師器 鉢	V区第1面1号墳	7C後半	×	×	×	○	確認できない	焼成技術によって赤化	21
5	磨石	II区第2面SH07	弥生時代後期後半	×	×	×	○	確認できない	石自体が赤い	100
6	弥生土器 高杯	II区第2面SX08	弥生時代後期後半	×	○	×	○	ベンガラ	焼成前にスリップの塗布	806
7	弥生土器 高杯	I区SD51	弥生時代後期後半	×	×	×	○	確認できない	土器胎土の酸化鉄粒?	229

第5表 分析結果一覧表

#### 4. 結果と考察 (第6表)

試料3と4について (写真1～6)

土器器面の観察から、外面と内面の両面が赤褐色を呈する。断面の観察では、赤褐色の部分は器壁の中心に向かって徐々に白橙色に変化している (写真3,6)。したがってスリップを塗布して赤くしたのではなく、焼成技術によって赤化した (赤く焼いた) と判断される。

ただし、器面には所々に白色の部分が認められ (写真2,5)、また断面でも橙色を地とするが、赤褐色や白色の層が器壁に平行して認められる。したがって赤褐色に発色させることを目的として鉄分の多い (赤く発色する) 粘土と鉄分が少ない (赤く発色しない) 粘土を混和し、土器作りを行っている可能性が指摘できる。

試料5について (写真7,8)

実体顕微鏡による観察から、石器表面には層状や粉状の赤色顔料は認められず、部分的に石自体が赤い状況が観察された (写真8)。また、このような石を粉砕したとしても、薄いピンク色の粉となるのみであるため、赤色顔料の素材とも考えがたい。

試料6について (写真9～13)

器面はかなり荒れている。肉眼では内面が部分的に赤色を呈するが、顕鏡下では、内外面とも赤色部分が認められる (写真10,11)。断面では、層状の赤色部分の中に透明・半透明鉱物が確認された (写真12,13)。したがって、土器焼成前に、赤くすることを目的として、スリップを塗布し焼成したと判断される。ただ焼成前にすでに赤色であったのか、焼成によって赤色になったのかは不明である。

ベンガラとは厳密には、酸化第二鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) を指し、試料6のような赤く発色したスリップはベンガラではない。しかし、古代の人々にとっては、赤く発色させること自体が目的であり、原料の種類は問わないであろう。したがって、本例も広義の意味でベンガラと判断した。

試料7について (写真14,15)

外面の一部に極微量の赤色部分が認められる。表面の観察から、この赤色部分は部分的であり、層状にはなっていない。したがって、粘土中に含まれる酸化鉄粒が土器成形時に潰れ、拡散したと思われ、赤色顔料とは判断できない。

今回、調査の機会を戴きました財団法人香川県埋蔵文化財調査センターおよび信里芳紀氏に深く感謝いたします。

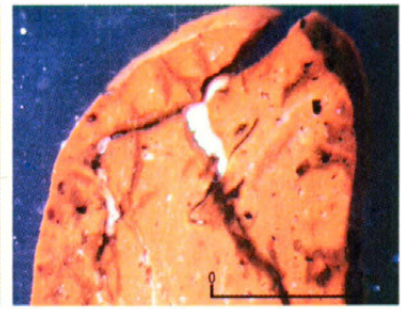
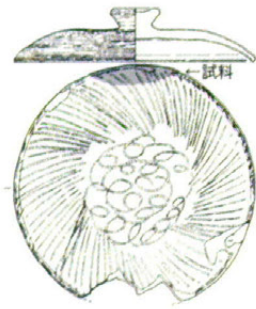


写真1 試料3

写真2 試料3表面 (赤色部分中の白色部分)

写真3 試料3断面

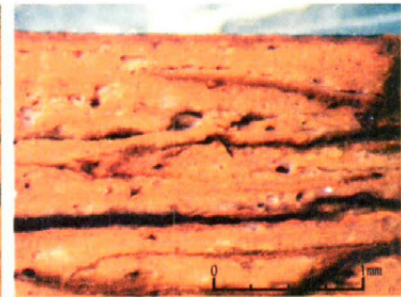
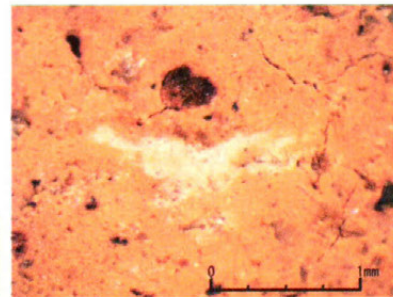
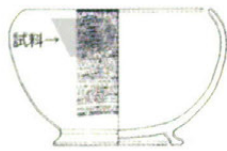


写真4 試料4

写真5 試料4表面 (赤色部分中の白色部分)

写真6 試料4断面

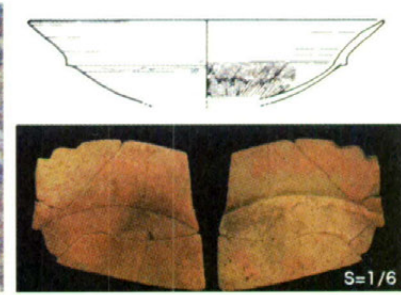
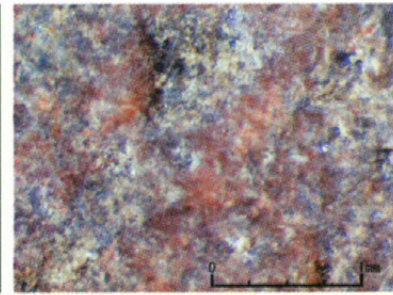


写真7 試料5

写真8 試料5表面

写真9 試料6

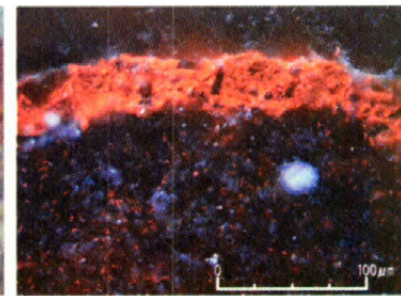
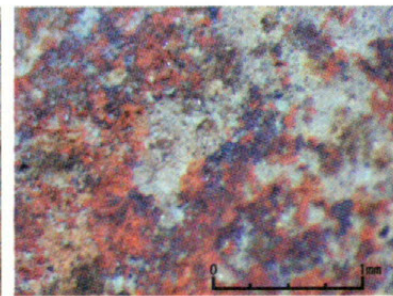
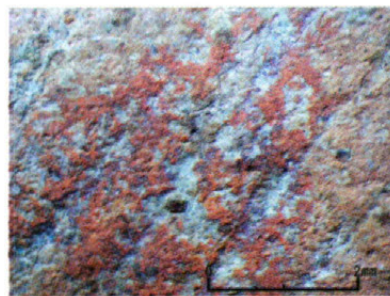


写真10 試料6 外面表面

写真11 試料6 内面表面

写真12 試料6 内面断面

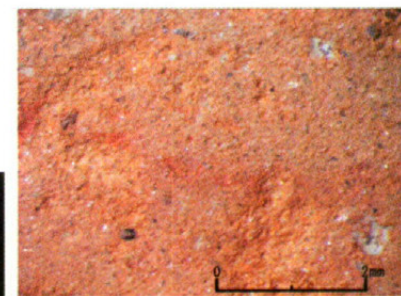
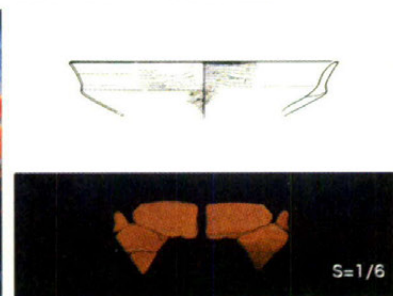
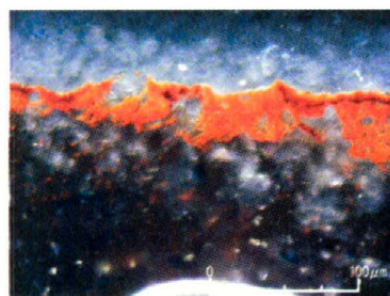


写真13 試料6 内面断面

写真14 試料7

写真15 試料7 表面

第398図 赤色顔料写真

# 成重遺跡出土製鉄関連遺物の分析調査

安来市体育文化振興財団・和鋼博物館

村川 義行

成重遺跡発掘調査で出土した製鉄関連遺物について分析調査した結果を報告する。

## 1. 供試材明細および分析調査方法

### 1-1. 供試材

第7表に資料明細を示す。いずれも鉄滓である。

No.	層位・遺構名		推定年代	重量(g)
NSG-1	Ⅱ区谷2上層	OSN-A-0603	11C	74
NSG-2	Ⅱ区谷2上層	OSN-A-0533	11C	151
NSG-3	Ⅱ区谷2上層	OSN-A-0533	11C	46
NSG-4	Ⅱ区谷2上層	OSN-A-0533	11C	106
NSG-5	Ⅱ区谷2上層	OSN-A-0581	11C	121
NSG-6	Ⅱ区第1面SK42	OSN-A-0657	11C	33
NSG-7	Ⅱ区第1面SK42	OSN-A-0657	11C	63
NSG-8	Ⅱ区第1面ST33	OSN-A-0657	11C	15

第6表 資料明細

### 1-2. 調査項目および方法

#### (1) 目視観察

目視による外観形状、色調などの観察。

#### (2) 顕微鏡組織

実測図に示した位置から切出して樹脂に埋め込み、エメリー研磨紙の# 150、# 240、# 320、# 600、# 1000 と順を追って研磨し、最終はダイヤモンドの $3\mu\sim 1\mu$ で仕上げてから金属組織および鉱物相を観察した。

#### (3) 硬度測定

鉄滓の鉱物相の同定を目的として、ビッカース微小硬度計を用いて硬さを測定した。試料は顕微鏡観察試料を供用した。

#### (4) 化学組成分析

供試材の化学組成分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (T・Fe)、金属鉄 (M・Fe)、酸化第一鉄 (FeO)：容量法。

硫黄 (S)：燃焼赤外線吸収法。

二酸化珪素 (SiO<sub>2</sub>)、酸化アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>)、五酸化リン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)、バナジウム (V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)：誘導結合プラズマ発光分光分析 (ICP 法)。

## 2. 調査結果

### 2-1. NSG-1：鉄滓

#### (1) 目視観察

全体に丸味、一部尖った形状でややハート型をした鉄滓である。赤褐色の酸化土砂に覆われているが尖った部分は土砂が剥離し、赤錆色である。破面はないようである。磁着性は弱い。

## (2) 顕微鏡組織

写真 2 - ①、②に示す。灰白色の分裂した樹枝状晶はウスタイト (FeO)、灰色の細い木ずれ状結晶はファイヤライト ( $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_4$ ) で、それらが暗黒色のガラス質基地中に晶出した組織で鍛冶滓の特徴的を示す。また、灰色でまだら状の球形は残存した金属鉄が錆化したゲーサイトと思われる。

## (3) 硬度測定

ビッカース微小硬度計 (荷重 50 g) 測定の圧痕観察結果を写真 4 ①に示す。灰白色の樹枝状晶は 398HV でウスタイトの文献硬度値<sup>(1)</sup> 450~500HV の下限を外れているが、ウスタイトと思われる。灰色でまだら状の球形は 440HV である。ゲーサイトの文献硬度値は見当たらないが、金属鉄が錆化したゲーサイトと思われる。

## (4) 化学組成分析

資料の化学成分分析値を第 8 表に示す。また、これらをまとめた結果を第 9 表に示す。

金属鉄 (M・Fe) は 0.23% である。全鉄分 (T・Fe) は 48.93% でやや高めであり、大澤正巳氏の分類<sup>(2)</sup> に従えば鍛冶滓の範疇に近い値である。また、ガラス質成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$ ) は 26.45% で前記分類<sup>(2)</sup> によれば製錬滓と鍛冶滓の中間的な数値である。一方、酸化第 1 鉄 (FeO) は 33.19% であるが、酸化第 2 鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) は 32.74% で高い値であることから、酸化性雰囲気下で形成された鍛錬鍛冶滓と推定される。砂鉄特有の二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) は 0.13% で低め、バナジウム ( $\text{V}_2\text{O}_5$ ) も 0.007% で非常に低いが発原料は砂鉄系と思われる。

## 2-2. NSG-2: 鉄滓

### (1) 目視観察

丸形扁平状の重量感のある鉄滓である。全体は土砂に覆われて色調は灰褐色であるが一部露出した内部は黒褐色で気孔が存在する。磁着は弱い。

### (2) 顕微鏡組織

写真 2 - ③、④に示す。灰白色の分裂した樹枝状晶はウスタイト (FeO)、灰色で太めの発達した木ずれ状結晶はファイヤライト ( $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_4$ ) である。暗黒色の角型の結晶は組織観察からは不明であるが、硬度測定および全分析結果から  $\text{SiO}_2$  系の硬い鉱物質でルーサイト ( $\text{K} \cdot \text{Al} \cdot \text{Si}_2\text{O}_6$ ) と思われる。それらを取りまく黒灰色の基地はガラス質である。

### (3) 硬度測定

写真 4 - ②にビッカース微小硬度計 (荷重 50 g) による測定圧痕の観察結果を示す。硬度値は暗黒色の角型の結晶 (a) は 662HV でかなり硬質であるが、全化学成分分析値で  $\text{TiO}_2$  値が低いことから Fe-Ti 化合物とは考え難く、 $\text{SiO}_2$  系でルーサイト ( $\text{K} \cdot \text{Al} \cdot \text{Si}_2\text{O}_6$ ) と思われる。黒灰色の基地 (b) はガラス質で、灰白色の樹枝状晶 (c) は 501HV でウスタイト、灰色の板状結晶 (d) はファイヤライトで 420HV である。

### (4) 化学組成分析

資料の化学成分分析値を第 8 表に示す。また、これらをまとめた結果を第 9 表に示す。

金属鉄 (M・Fe) は 0.40% である。全鉄分 (T・Fe) は 39.71% でやや低めであり製錬滓の範疇に近い値である。また、ガラス質成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$ ) は 41.46% で多く含有し、やはり製錬滓の特徴的な数値である。一方、酸化第 1 鉄 (FeO) は 43.23% であるが、酸化第 2 鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) は 8.16% で低い値であることから、還元性雰囲気下で形成された製錬滓と推定される。砂鉄特有の二酸化チタン

(TiO<sub>2</sub>)は0.19%で低め、バナジウム(V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)も0.008%で非常に低いことから、低Ti砂鉄を始発原料としていると思われる。

### 2-3. NSG-3:鉄滓

#### (1) 目視観察

角型扁平状で縁は三面が自然面、他面の半分が土砂に覆われた破面を有し、表面肌は滑らかで流出滓の先端部とも思われる。色調は灰褐色、地は黒褐色で表裏面には部分的に褐色の錆も点在する。磁着はない。

#### (2) 顕微鏡組織

写真2-⑤、⑥に示す。灰白色球形状のウスタイト(FeO)および灰色木ずれ状結晶のファイヤライト(2FeO・SiO<sub>4</sub>)が黒灰色のガラス質の基地中に晶出している。

#### (3) 硬度測定

写真4-③にビッカース微小硬度測定(荷重50g)による圧痕の観察結果を示す。灰色球形状結晶(c)はウスタイトで365HV、灰色木ずれ状結晶(a)はファイヤライトで565HV、黒灰色の基地(b)はガラス質で453HVである。

#### (4) 化学組成分析

資料の化学成分分析値を第8表に示す。また、これらをまとめた結果を第9表に示す。金属鉄(M・Fe)は0.39%である。全鉄分(T・Fe)は50.88%でやや高めであり鍛冶滓の範疇に近い値であるが、ガラス質成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO)は28.40%で鍛冶滓と製錬滓の中間的な数値である。一方、酸化第1鉄(FeO)は55.19%で高めであるが、酸化第2鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)は10.85%で低い値であることから、還元性雰囲気下で形成された鉄滓と推定される。砂鉄特有の二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)は0.13%で低め、バナジウム(V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)も0.006%で非常に低い、砂鉄を始発原料とした精錬鍛冶滓の可能性が大きい。

### 2-4. NSG-4:鉄滓

#### (1) 目視観察

厚さ約25~30mm、5個所の破面に囲まれ、そのうち1面は新生面である。もとは平板状の鉄滓の1部と思われる。色調は灰褐色、新生破面から観察する地は黒褐色で若干の気孔を有する。磁着はややあり。

#### (2) 顕微鏡組織

写真2-⑦、⑧に示す。資料NSG-3とほぼ似た構成の組織を呈し、良く発達した灰白色球形状のウスタイト(FeO)および灰色板状結晶のファイヤライト(2FeO・SiO<sub>4</sub>)が黒灰色のガラス質の基地中に晶出している。

#### (3) 硬度測定

写真4-④に硬度測定圧痕(ビッカース微小硬度測定:荷重50g)の観察結果を示す。灰色球形状結晶(b)はウスタイトで313HV、灰色板状結晶(c)はファイヤライトで425HV、黒灰色の基地(a)ガラス質は622HVである。

#### (4) 化学組成分析

資料の化学成分分析値を第8表に示す。また、これらをまとめた結果を第9表に示す。金属鉄(M・Fe)は0.35%である。全鉄分(T・Fe)は48.63%でやや高めであり鍛冶滓の範疇に近い

値であるが、ガラス質成分( $\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}$ )は30.47%でやや多く製錬滓的な数値である。一方、酸化第1鉄( $\text{FeO}$ )は51.07%が高めであるが、酸化第2鉄( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )は12.27%でやや低い値であることから、還元性雰囲気下で形成された可能性がある鉄滓である。砂鉄特有の二酸化チタン( $\text{TiO}_2$ )は0.18%で低め、バナジウム( $\text{V}_2\text{O}_5$ )も0.019%で低いが、砂鉄を始発原料としたと精錬鍛冶滓と思われる。

## 2-5. NSG-5 : 鉄滓

### (1) 目視観察

縦横約60mm×約70mm、厚さ約20mmの平板状で上面は平滑で鉄錆が付着している。下面はごつごつの感じで気孔を有し、地は黒褐色である。対角する2面は自然面、他の2面は破面で流出滓の1部分が分断されたと思われる。磁着性は弱い。

### (2) 顕微鏡組織

写真3-①、②に示す。灰白色の樹枝状晶はウスタイト( $\text{FeO}$ )である。灰色木ずれ状結晶はファイヤライト( $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_4$ )、黒灰色の基地はガラス質である。

### (3) 硬度測定

写真4-⑤に硬度測定圧痕(ピッカース微小硬度測定:荷重50g)の観察結果を示す。灰白色樹枝状晶(a)はウスタイトで456HV、灰色板状結晶(b)はファイヤライトで420HVである。

### (4) 化学組成分析

資料の化学成分分析値を第8表に示す。また、これらをまとめた結果を第9表に示す。

金属鉄( $\text{M}\cdot\text{Fe}$ )は0.62%である。全鉄分( $\text{T}\cdot\text{Fe}$ )は42.54%で低く製錬滓の範疇の値である。また、ガラス質成分( $\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}$ )は40.27%で多くやはり製錬滓的な数値である。一方、酸化第1鉄( $\text{FeO}$ )は49.52%が高めであるが、酸化第2鉄( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )は4.90%で非常に低い値であることから、還元性雰囲気下で形成された鉄滓であると推定される。砂鉄特有の二酸化チタン( $\text{TiO}_2$ )は0.25%で低め、バナジウム( $\text{V}_2\text{O}_5$ )も0.015%で低いがやはり砂鉄系を始発原料としたと思われる。

## 2-6. NSG-6 : 鉄滓

### (1) 目視観察

小片ながら椀形滓の1部と思われる。半分は破面で大小の気孔が認められる。全体が灰褐色の土砂に覆われている。磁着性は若干あり。

### (2) 顕微鏡組織

写真3-③、④に示す。灰白色まゆ形状結晶のウスタイト( $\text{FeO}$ )および灰色木ずれ状結晶のファイヤライト( $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_4$ )が黒灰色のガラス質の基地中に晶出している。

### (3) 硬度測定

写真4-⑥に硬度測定圧痕(ピッカース微小硬度測定:荷重50g)の観察結果を示す。灰白色の球形状結晶(b)および(c)はウスタイトで夫々330HVと324HV、灰色木ずれ状結晶(a)はファイヤライトで324HVである。

### (4) 化学組成分析

資料の化学成分分析値を第8表に示す。また、これらをまとめた結果を第9表に示す。

金属鉄( $\text{M}\cdot\text{Fe}$ )は0.42%である。全鉄分( $\text{T}\cdot\text{Fe}$ )は49.98%でやや高めであり鍛冶滓の範疇に近い値である。また、ガラス質成分( $\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}$ )は43.15%で多くことから製錬滓的な数値

である。一方、酸化第1鉄(FeO)は53.26%で高めであるが、酸化第2鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)は11.67%でやや低い値であり、還元性雰囲気下で形成された鉄滓と推定されることから製錬滓と思われるが精錬鍛冶滓も否定できない。砂鉄特有の二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)は0.13%で低め、バナジウム(V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)も0.011%で低いがやはり砂鉄原料を始発としたものと思われる。

## 2-7. NSG-7:鉄滓

### (1) 目視観察

上下面は自然面であるが、側面4箇所は破面と思われる。厚さは約20mm程度であるが、平板状か碗形かの判断は出来ない。全体が灰褐色の土砂に覆われている。地は茶褐色である。磁着は殆どない。

### (2) 顕微鏡組織

写真3-⑤、⑥に示す。灰白色球形状のウスタイト(FeO)および灰色木ずれ状結晶のファイヤライト(2FeO・SiO<sub>4</sub>)が黒灰色のガラス質の基地中に晶出している組織である。

### (3) 硬度測定

写真4-⑦に硬度測定圧痕(ビッカース微小硬度測定:荷重50g)の観察結果を示す。灰白色の球形状結晶(a)はウスタイトで289HV、灰色板状結晶(b)はファイヤライトで489HVである。

### (4) 化学組成分析

資料の化学成分分析値を第8表に示す。また、これらをまとめた結果を第9表に示す。

金属鉄(M・Fe)は0.34%である。全鉄分(T・Fe)は51.20%で高めであり鍛冶滓の範疇に近い値である。また、ガラス質成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO)も23.61%で低いことから鍛冶滓的な数値である。一方、酸化第1鉄(FeO)は57.53%で高めであるが、酸化第2鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)は8.78%で低い値であることから、還元性雰囲気下で形成された可能性がある鉄滓である。砂鉄特有の二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)は0.15%で低め、バナジウム(V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)も0.016%で低めであるが、砂鉄を始発原料とした精錬鍛冶滓と思われる可能性が高い。

## 2-8. NSG-8:鉄滓

### (1) 目視観察

平面の観察では四辺形であるが、側面は三角形をなしている。上下面と薄肉側面は自然面であるが、厚肉部は直角に割れた破面である。全体が灰褐色の土砂に覆われているが、地は黒褐色である。磁着は殆どない。

### (2) 顕微鏡組織

写真3-⑦、⑧に示す。灰白色の球形状のウスタイト(FeO)および灰色の太い木ずれ状結晶のファイヤライト(2FeO・SiO<sub>4</sub>)が黒灰色のガラス質の基地中に晶出している組織である。

### (3) 硬度測定

写真4-⑧に硬度測定圧痕(ビッカース微小硬度測定:荷重50g)の観察結果を示す。灰白色の球形状結晶(b)はウスタイトで356HV、灰色板状結晶(a)はファイヤライトで558HVである。

### (4) 化学組成分析

資料の化学成分分析値を第8表に示す。また、これらをまとめた結果を第9表に示す。

金属鉄(M・Fe)は0.55%である。全鉄分(T・Fe)は62.71%で高めであり鍛冶滓範疇の値である。また、ガラス質成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO)も17.06%で低いことから鍛冶滓的な数値である。一方、酸化第2鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)は13.47%でやや低く、酸化第1鉄(FeO)は67.85%で高いことから、やや還

元性雰囲気下で形成されたと判断されることから精錬鍛冶滓の可能性が高い。砂鉄特有の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は 0.34% を含むが、バナジウム (V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) も 0.06% で低い値であるが砂鉄を始発原料としたと思われる。

NSG	SiO <sub>2</sub>	MnO	P	S	CaO	MgO	V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	T・Fe	M・Fe
1	20.89	0.45	0.065	0.038	1.18	0.30	0.007	0.13	4.08	33.19	32.74	48.93	0.23
2	32.97	0.19	0.100	0.031	2.57	0.64	0.008	0.19	5.28	43.23	8.16	39.71	0.40
3	21.91	0.07	0.097	0.026	1.60	0.48	0.006	0.13	4.41	55.19	10.85	50.88	0.39
4	24.14	0.16	0.096	0.027	1.62	0.50	0.019	0.18	4.21	51.07	12.27	48.63	0.35
5	32.08	0.09	0.047	0.023	1.51	0.49	0.015	0.25	6.19	49.52	4.90	42.54	0.62
6	17.32	0.14	0.11	0.020	3.91	0.67	0.011	0.13	3.93	53.26	11.67	49.98	0.42
7	16.49	0.14	0.090	0.042	3.28	0.58	0.016	0.15	3.26	57.53	8.78	51.20	0.34
8	13.44	0.04	0.041	0.0018	0.56	0.16	0.060	0.34	2.90	67.85	13.47	62.71	0.55

第 7 表 化学成分分析値 (wt%)

No.	顕微鏡組織	化学組成 (wt%)							ガラス質成分	所見
		T・Fe	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO	TiO <sub>2</sub>	V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	TiO <sub>2</sub> T・Fe			
NSG-1	W+F	48.93	32.74	33.19	0.13	0.007	0.0026	26.45	鍛錬鍛冶滓	
NSG-2	W+F+L	39.71	8.16	43.23	0.19	0.008	0.0048	41.46	鍛錬滓	
NSG-3	W+F	50.88	10.85	55.19	0.13	0.006	0.0025	28.40	鍛錬鍛冶滓	
NSG-4	W+F	48.63	12.27	51.07	0.18	0.019	0.0037	30.47	鍛錬鍛冶滓	
NSG-5	W+F	42.54	4.90	49.52	0.25	0.015	0.0058	40.27	鍛錬滓	
NSG-6	W+F	49.98	11.67	53.26	0.13	0.011	0.0026	43.15	鍛錬滓	
NSG-7	W+F	51.20	8.78	57.53	0.15	0.016	0.0029	23.61	鍛錬鍛冶滓	
NSG-8	W+F	62.71	13.47	67.85	0.34	0.060	0.0054	17.06	鍛錬鍛冶滓	

W:ウスタイト (Wüstite: FeO)、F:ファイライト (Fayalite: 2FeO・SiO<sub>2</sub>)、L:ルサイト (Leucite: K・Al・Si<sub>2</sub>O<sub>6</sub>)

第 8 表 鉄滓の調査結果まとめ

### 3. まとめ

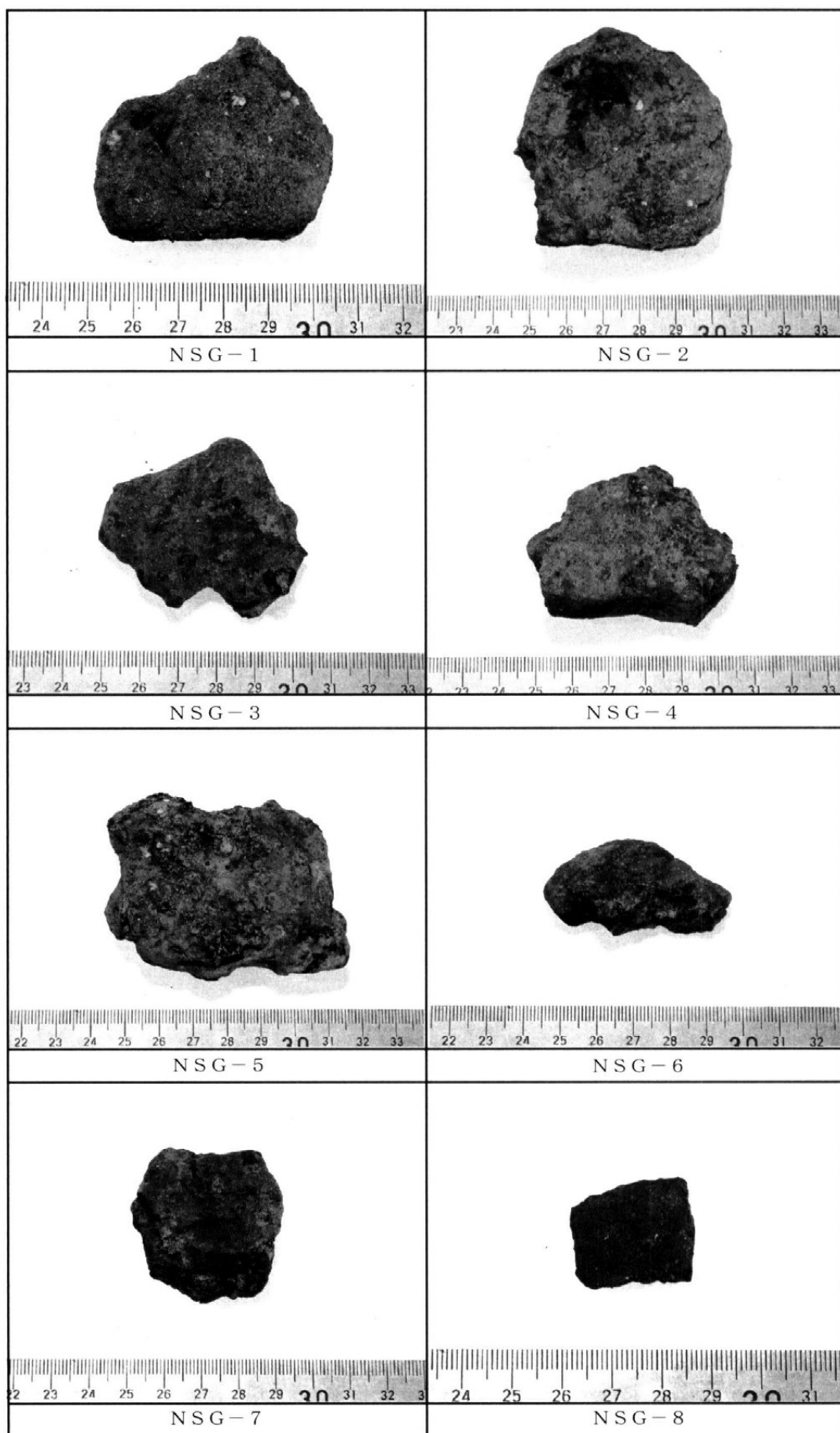
鉄滓が製錬滓であるか鍛冶滓であるかの判別方法は、大澤正巳氏<sup>(2)</sup>の判定方法が広く引用されているが、この方法は一定の条件下では有効であるが拡大適用には注意を要すとの指摘もあり、滓中の FeO と Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> の存在量で示される鉄の酸化状態の差による判定が有力な方法になり得るとする提案<sup>(3)</sup>もある。今回の調査は両者を参考にして判断したが、中間的範疇にあたり判別法で相反する滓もあった。結果は製錬滓と判断される滓が 3 点 (NSG-2, 5, 6)、鍛錬鍛冶滓と判断される滓が 1 点 (NSG-1)、精錬鍛冶滓と思われる滓が 4 点 (NSG-3, 4, 7, 8) であった。また、使用された鉄原料についてみると、いずれの鉄滓も砂鉄特有元素の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) およびバナジウム (V<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) が非常に少ない特徴がある。鉄原料中のチタン分は製錬によってほとんどが鉄滓中に移行するので、鉄原料が砂鉄系の場合にはチタン分は製錬滓に濃縮され、鍛冶滓中のチタン分は微量になる傾向があるが、今回の調査では、製錬滓と判定される場合でも、従来報告されている鉍石系鉄滓<sup>(4, 5, 6)</sup>のレベル以下である。日本列島内での鉄精錬の原料は、6 世紀末～8 世紀の 1 時期に岡山、広島、滋賀、福岡などで鉄鉍石が使用されたが、その後は全面的に砂鉄原料に代ったとされている。従って、始発原料を鉄鉍石とするには、さらに綿密な調査検討が必要で、やはり極低 Ti の砂鉄 (MnO, P が低いことも砂鉄の可能性が高い) を原料に使用したと考えるのが妥当である。

本調査の分析は日立金属 (株) 冶金研究所およびハイメック (株) 中国事業所で実施した。

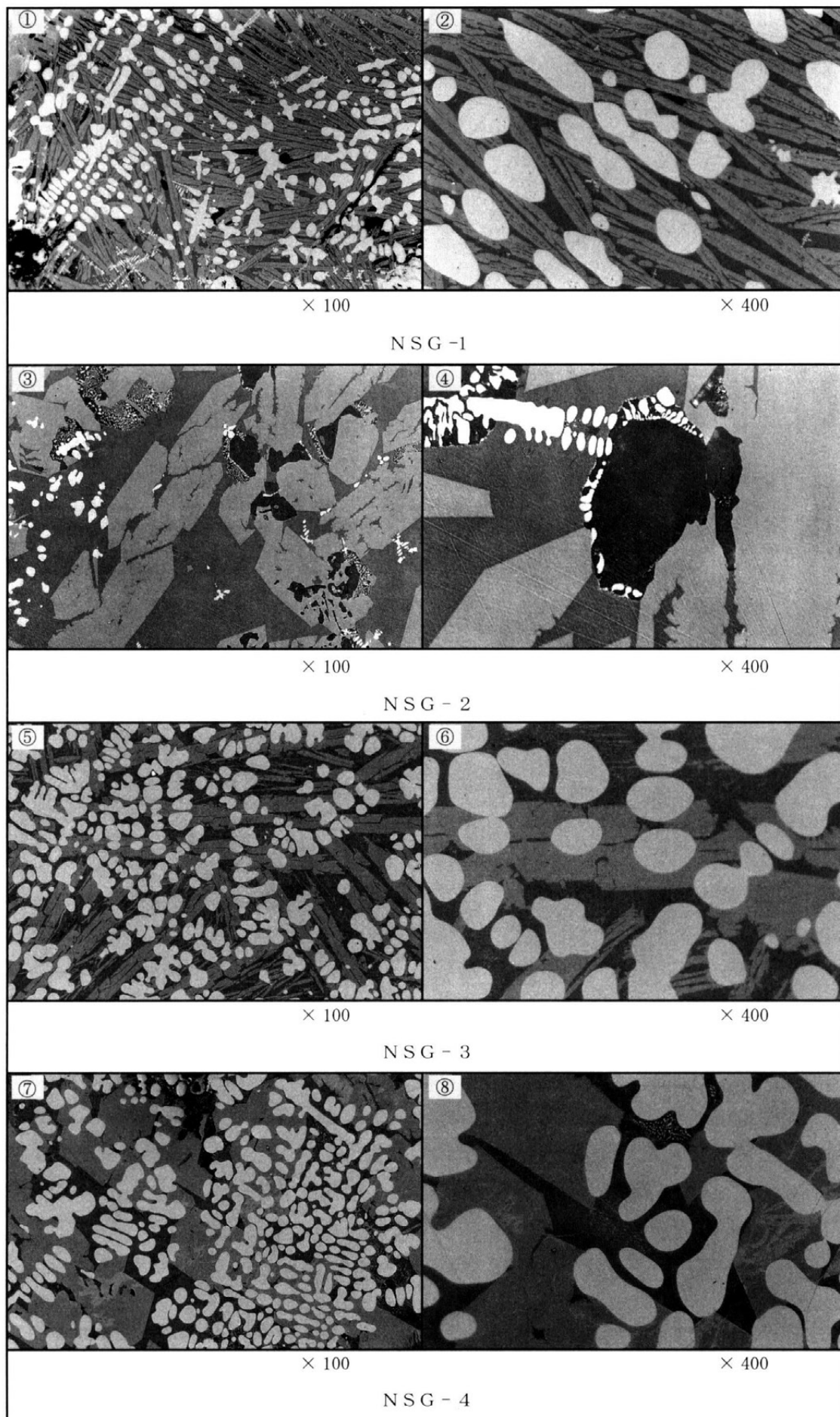


#### 4. 参考文献

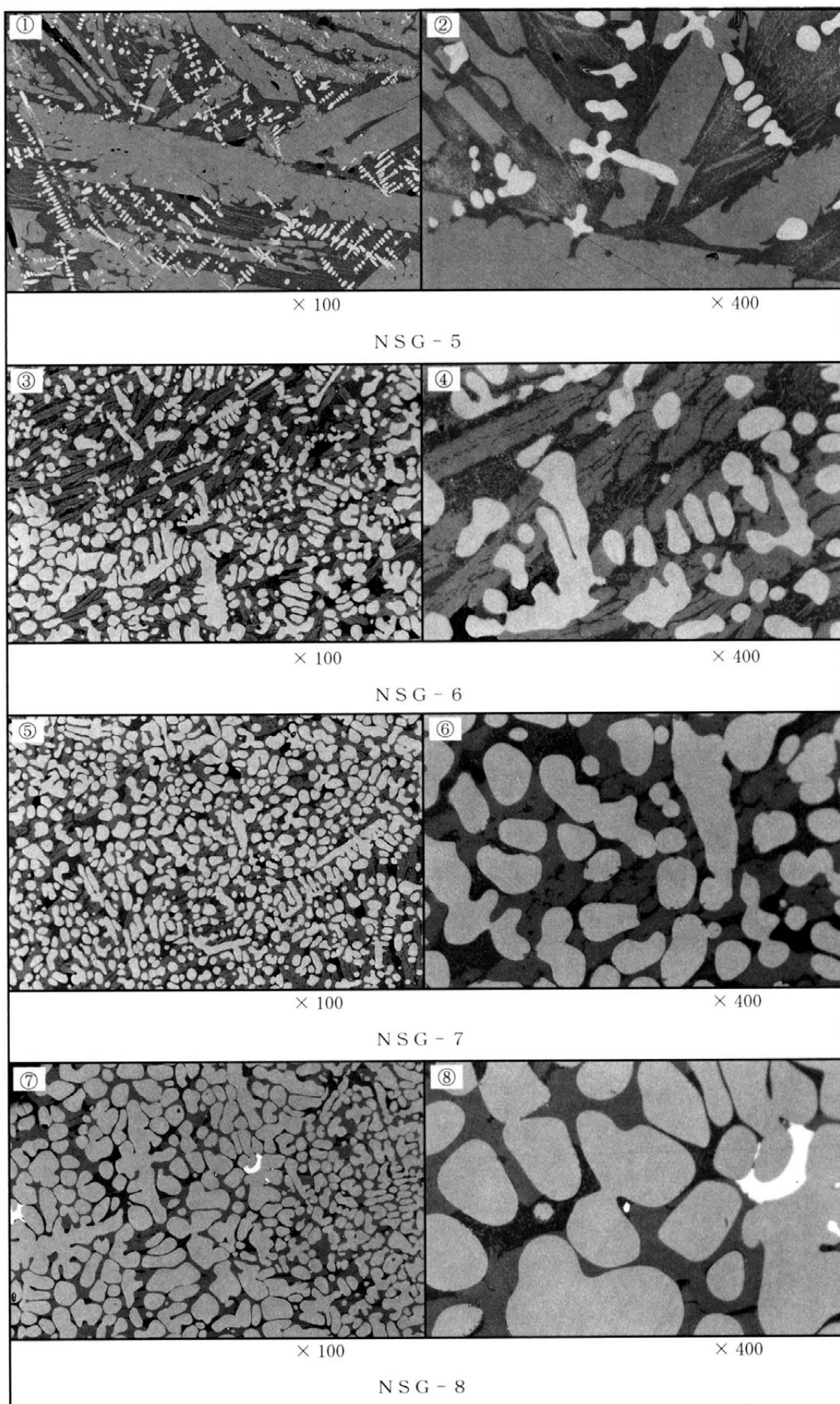
- (1) 日刊工業新聞社「焼結鉍組織写真および識別法」1968
- (2) 大澤正巳「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」日本製鉄史論集、たたら研究会 1983
- (3) 新井 宏「金属を通して歴史を観る」BOUNDARY 2001.2
- (4) 高塚秀治「古代近江製鉄関連遺物の自然科学的研究」日本文化財科学雑誌 35 1997
- (5) 国立歴史民俗博物館研究報告」第58集 平成6年
- (6) 大澤正巳「日本古代製錬遺構出土鉄滓の金属学調査」たたら研究 第29号 1988



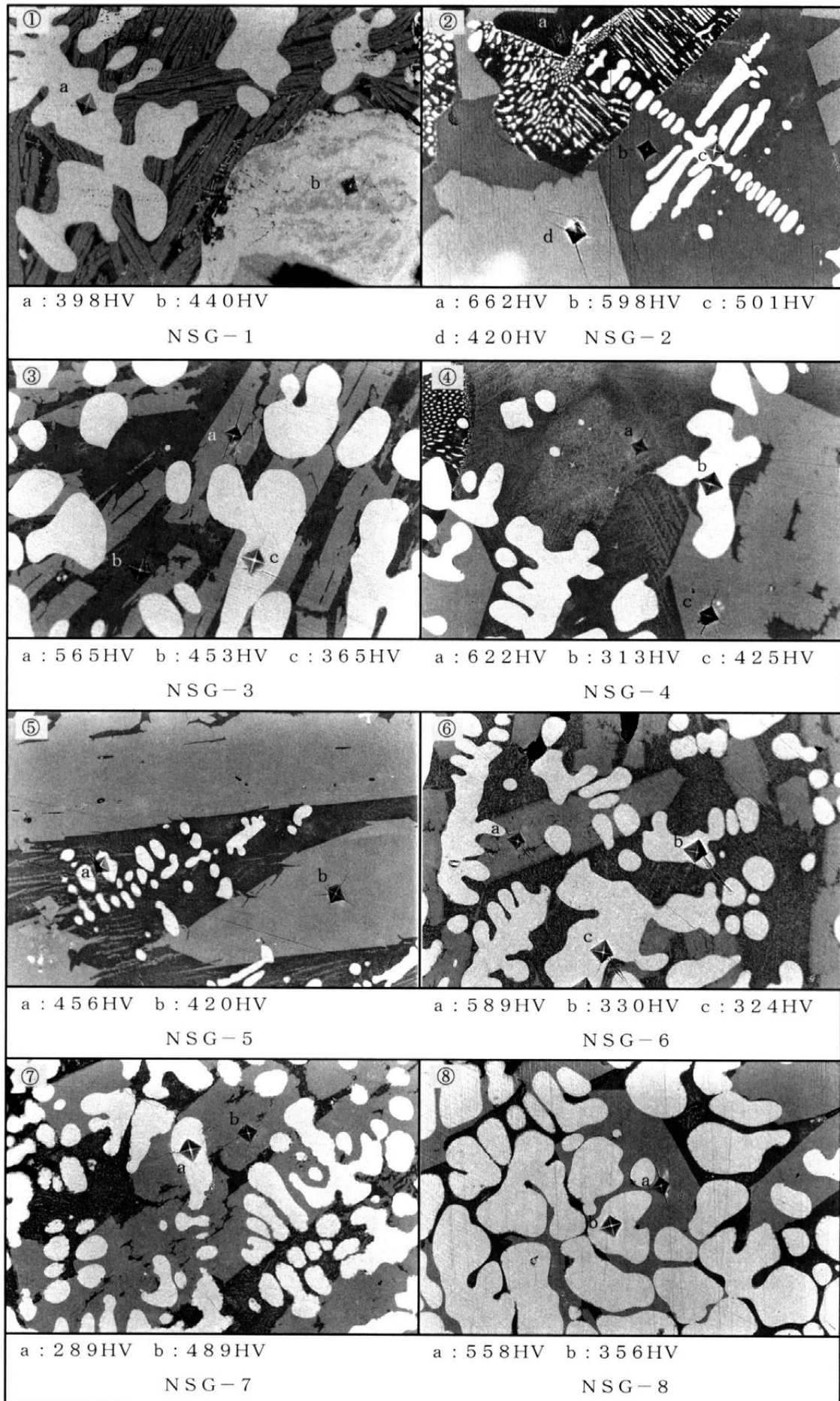
第 399 図 調査資料の外観



第 400 図 資料の顕微鏡観察組織



第 401 図 資料の顕微鏡観察組織



第 402 図 資料の硬度測定圧痕観察 (荷重 50g)

× 300

## 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

## 2. 試料

試料は、成重遺跡より出土した炭化材 11 点である。

## 3. 方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって 75 ～ 750 倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

## 4. 結果

結果を第 10 表に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

### 第 403 図 1

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科

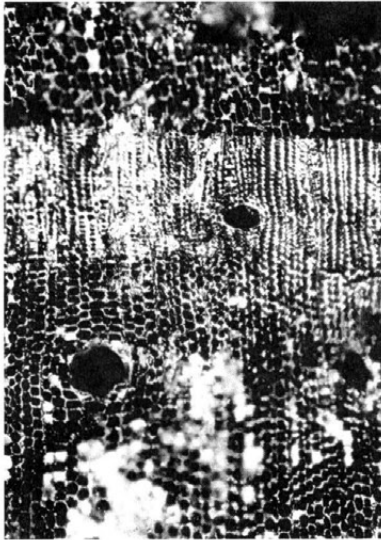
### 第 403 図 2

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ 20m、径 1.5m に達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。



横断面 ————— : 0.4mm



放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.2mm

1. 11 I区SH04上位No.4 炭化材

マツ属複維管束亜属



横断面 ————— : 0.4mm



放射断面 ————— : 0.2mm

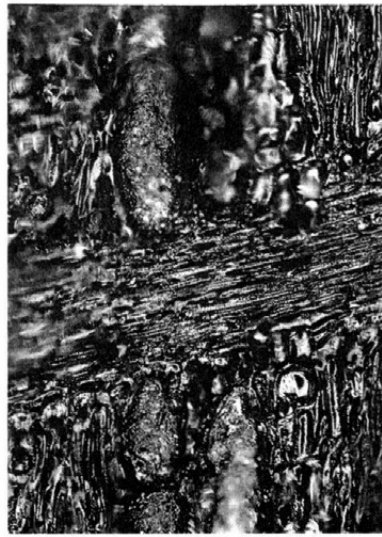


接線断面 ————— : 0.4mm

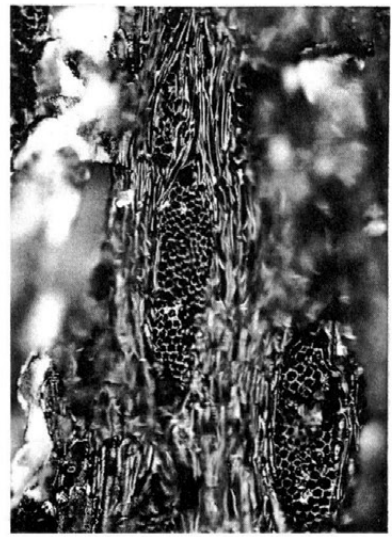
2. I区SH04上位No.1 炭化材 ツブラジイ



横断面 ————— : 0.4mm



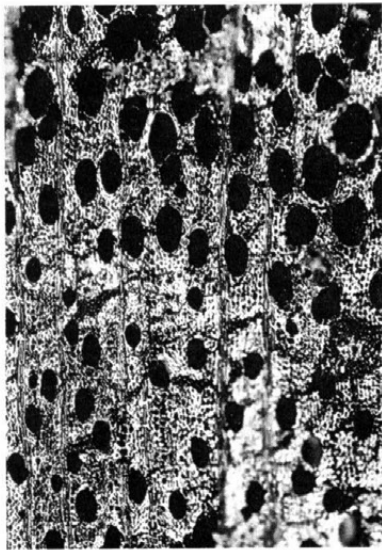
放射断面 ————— : 0.2mm



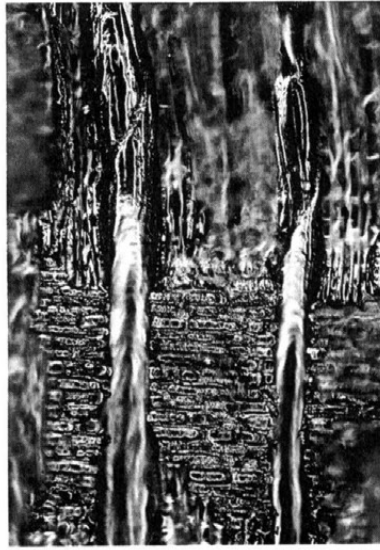
接線断面 ————— : 0.2mm

3. 2 II区第2面SK69 炭化材 ケヤキ

第 403 図 成重遺跡の炭化材 I



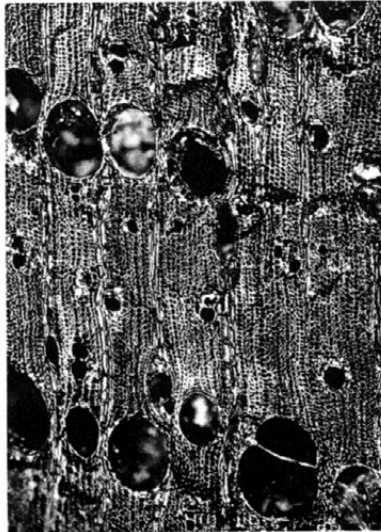
横断面 ————— : 0.4mm  
4. 6 I区SH04上位No.2 炭化材



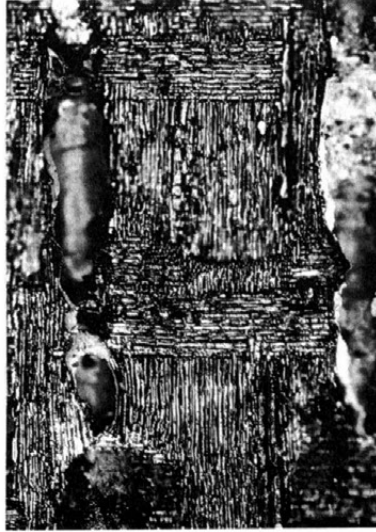
放射断面 ————— : 0.2mm  
ミズキ属



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm  
5. 8 I区SH04上位No.3 炭化材



放射断面 ————— : 0.4mm  
トネリコ属



接線断面 ————— : 0.2mm

第 404 図 成重遺跡の炭化材Ⅱ



ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科

第 403 図 3

横断面：年輪のはじめに大型の道管が 1～2 列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらんでいる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は 1～7 細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ 20～25m、径 60～70cm ぐらいであるが、大きいものは高さ 50m、径 3m に達する。材は強靱で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

ミズキ属 *Cornus* ウコギ科

第 404 図 4

横断面：小型で丸い道管が、ほぼ単独でややまばらに散在する散孔材である。早材から晩材にかけて道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は 20～30 本ぐらいである。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～4 細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりミズキ属に同定される。ミズキ属にはミズキ、クマノミズキなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。材は建築、器具、彫刻、旋作、薪炭などに用いられる。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科

第 404 図 5

横断面：年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で 1～2 列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまるい厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に 2～3 個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。木部柔組織は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～3 細胞幅である。

以上の形質よりトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築、家具、運道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

## 5. 所見

同定の結果、成重遺跡の炭化材は、マツ属複維管束亜属 2 点、ツブラジイ 1 点、ケヤキ 4 点、ミズキ属 2 点、トネリコ属 2 点であった。マツ属複維管束亜属は針葉樹、ツブラジイは照葉樹、ケヤキ、ミズ

キ属、トネリコ属は広葉樹であるが、いずれも二次林性あるいは人為環境の周辺に生育する樹木ばかりであり、周辺に生育していたものが利用されたと考えられる。

#### 参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, 296p.

No.	出土位置	種類		結果 (和名/学名)
1	Ⅱ区第2面 SK69	炭化材	ケヤキ	<i>Zelkova serrata Makino</i>
2	Ⅱ区第2面 SK69	炭化材	ケヤキ	<i>Zelkova serrata Makino</i>
3	Ⅱ区第2面 SK69	炭化材	ケヤキ	<i>Zelkova serrata Makino</i>
4	Ⅱ区第2面 SK69	炭化材	ケヤキ	<i>Zelkova serrata Makino</i>
5	I区 SH04 上位 No.1	炭化材	ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata Schottky</i>
6	I区 SH04 上位 No.2	炭化材	ミズキ属	<i>Cornus</i>
7	I区 SH04 上位 No.2	炭化材	ミズキ属	<i>Cornus</i>
8	I区 SH04 上位 No.3	炭化材	トネリコ属	<i>Fraxinus</i>
9	I区 SH04 上位 No.3	炭化材	トネリコ属	<i>Fraxinus</i>
10	I区 SH04 上位 No.4	炭化材	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus subgen.Diploxylon</i>
11	I区 SH04 上位 No.4	炭化材	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus subgen.Diploxylon</i>

第9表 樹種鑑定表

## 成重遺跡における花粉分析及び放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

成重遺跡は香川県大川郡白鳥町の所在し、阿讃山地から瀬戸内海へ流れる湊川により形成された扇状地性の谷底低地に立地する。調査区は湊川に近い自然堤防状の微高地部分から、東側の丘陵を控えた土石流扇状地までが対象となっている。本遺跡からは弥生時代中期～後期にかけての集積墓をはじめとする墳墓群、弥生時代後期を中心とする竪穴住居群などが検出されている。

これらの調査区の内、ほぼ中央に位置するⅡ－６区東端に位置するⅠ－６区・中央北側の国道部分の１トレンチ・２トレンチの試料を分析の対象とする。なお、本遺跡における自然科学分析は以前にも行っており、Ⅱ－６区の約 200m 西方に位置する G4 区において植物珪酸体分析を実施している。その結果、弥生時代中期に稲作が行われていた可能性が指摘されている。

本報告では、年代観に関する情報を得ることを目的として放射性炭素年代測定を、集落形成前および形成後の古環境に関する情報を得ることを目的として花粉分析をそれぞれ実施する。

### 1. 試料

Ⅱ－６区は最下位に旧中州と考えられている粗粒砂～砂礫層が存在し、その上位に埋没旧河道とされるシルト層が堆積する。さらに、その上位に遺構検出面を含む弥生時代中期～中世 14C までのシルト～粘土層が堆積する。

Ⅰ－６区は最下位に扇状地堆積物からなるシルト層が存在し、その上位に扇状地を構成する土石流堆積物が堆積する。この土石流堆積物の下位から、縄文時代後期ないしは晩期の石鏃・楔形石器が出土している。その上位の土壌化層は弥生時代後期～中世とされ、下位の砂礫層との境界面が弥生時代後期の遺構検出面である。

国道部分の 1・2 トレンチでは同一と思われる谷地形（旧河道）が確認されている。この谷埋積物は上層と下層の 2 層に分けられ、下層が弥生時代中期～古墳時代前期、上層が古墳時代中期～中世後半とされている。

これらの地点より、放射性炭素年代測定を 1 点、花粉分析を 15 点実施する。各地点の模式柱状図、および試料採取位置を第 405 図に示す。

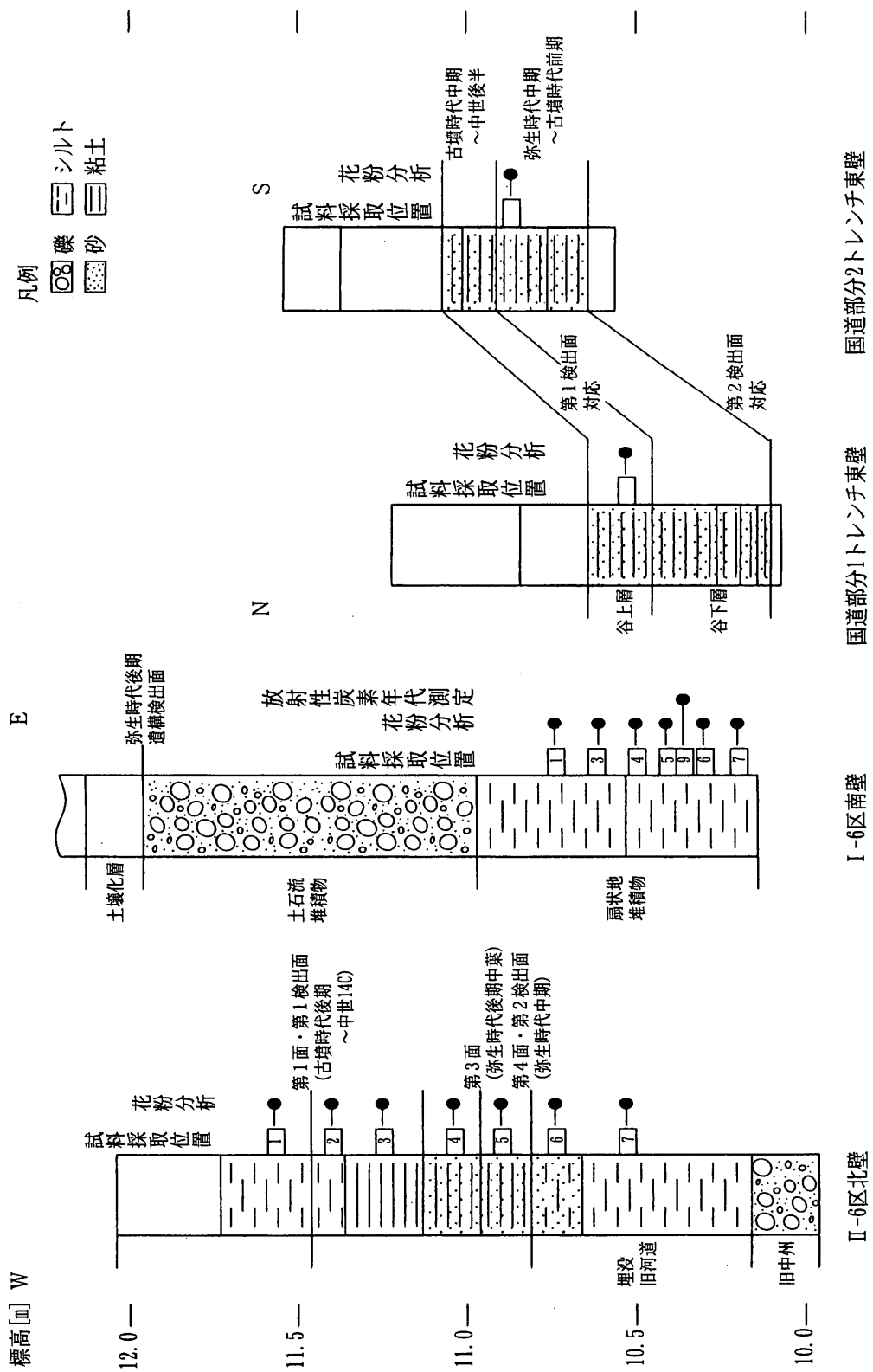
### 2. 分析方法

#### (1) 放射性炭素年代測定

測定は加速器質量分析法（AMS 法）で行う。半減期は LIBBY の 5570 年を使用する。なお、測定は株式会社 加速器分析研究所の協力を得た。

#### (2) 花粉分析

試料約 10 g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比率 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するすべての種類について同定・計数する。



第 405 図 成重遺跡における各地点の模式柱状図および試料採取位置

地点名	層準	試料の質	測定年代	$\delta^{13}\text{C}$	補正年代	Code. No.
			BP	(‰)	BP	
I-6区北壁	遺構面下位	炭化材	6610 ± 50	-25.32 ± 1.34	6600 ± 50	IAAA-30095

- (1) 測定は、加速器質量分析法 (AMS 法) を用いた。  
(2) 測定年代および補正年代は、1950 年を基点に何年前であることを示した値。  
(3) 誤差は、標準偏差 (ONE SIGMA) に相当する年代。  
(4) 放射性炭素の半減期は、LIBBY の 5570 年を使用した。

第 10 表 成重遺跡の放射性炭素年代測定結果

種類	試料番号	II-6区北壁							国道部分・2トレンチ		I-6区南壁						
		1	2	3	4	5	6	7			1	3	4	5	6	7	
木本花粉																	
スギ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉																	
イネ科		3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
不明花粉		1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
シダ類孢子																	
ヒカゲノカズラ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イノモトソウ属		1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のシダ類孢子		8	1	3	-	2	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
合計																	
木木花粉		0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
草本花粉		3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
不明花粉		1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
シダ類孢子		8	2	3	1	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
総計		12	2	3	1	3	1	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0

第 11 表 成重遺跡の花分析結果

### 3. 結果

#### (1) 放射性炭素年代測定

結果を第 11 表に示す。I-6 区南壁の遺構面下位より採取された炭化材の測定年代は、6600 ± 50BP の値を示す。なお、表中の同位体比は標準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表した年代である。 $\delta^{13}\text{C}$  の値は、試料炭素の  $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  原子比を加速器で測定し、標準に PDB (白亜紀のベレムナイト類の化石) を用いて算出した値である。今回の試料の測定年代は、この値に基づいて補正した年代である。

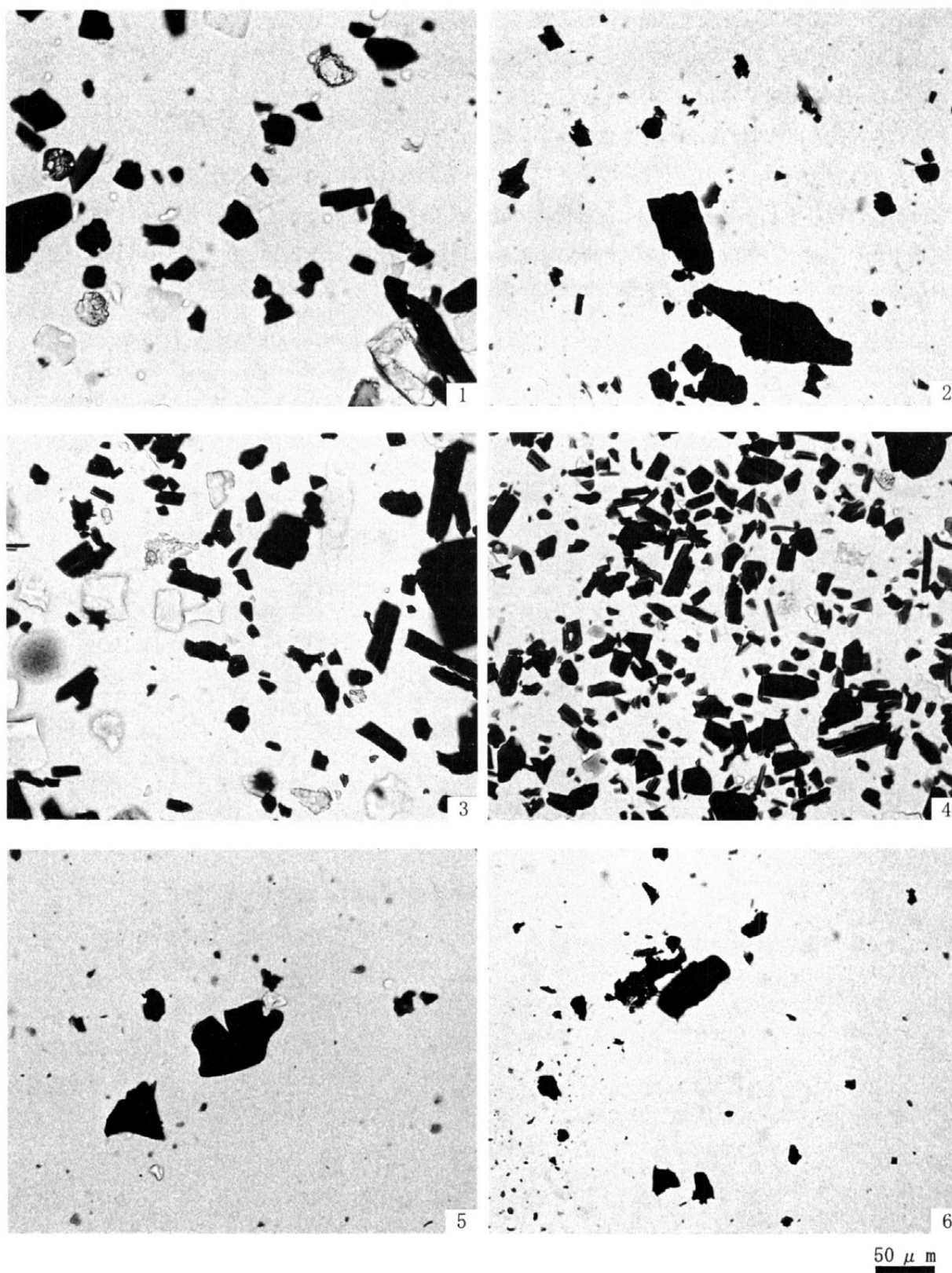
#### (2) 花粉分析

結果を第 12 表に示す。

いずれの試料においても花粉化石はほとんど検出されず、わずかにシダ類孢子などが認められるにすぎない。また、無化石の試料も多く認められる。また、わずかに検出された花粉化石の保存状態は悪く、そのほとんどが、花粉外幕が壊れている状態で産出される。プレパラート内の状況写真を図版 1 に示す。

### 4. 考察

I-6 区南壁における下位の扇状地堆積物からは、約 6600 年前の放射性炭素年代値が得られた。これは、一般的な年代観に照らし合わせると、縄文時代早期頃に相当する。本層の直上には扇状地を構成する土石流堆積物が堆積しており、その下位から縄文時代後期ないしは晩期の石鏃・楔形石器が出土



1. 状況写真(Ⅱ-6区北壁;1)  
 3. 状況写真(国道部分1トレンチ)  
 5. 状況写真(Ⅰ-6南壁;3)

2. 状況写真(Ⅱ-6区北壁;7)  
 4. 状況写真(国道部分2トレンチ)  
 6. 状況写真(Ⅰ-6区南壁;5)

第 406 図 成重遺跡花粉分析プレパラートの状況写真

している。これは得られた測定結果と矛盾しない。よって、得られた測定年代は堆積年代を示していると考えられ、その年代は約 6600 年前と推測される。

花粉分析の結果では、花粉化石がほとんど産出せず、比較的風化に強いとされるシダ類孢子もほとんど認められなかった。一般的に花粉・シダ類孢子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている（中村，1967；徳永・山内，1971）。本層準は扇状地堆積物とされることから、堆積後に好氣的環境に晒された可能性がある。よって、今回花粉が検出されなかった理由としては、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類孢子が、その後の経年変化により分解・消失したためと考えられる。

## 第2節 調査成果のまとめ

### 1. I・II区の遺構変遷

I・II区では、縄文後・晩期から中世期までの遺構が確認された。ここでは、主要時期別の遺構変遷をトレースすることで調査区単位でのまとめとする。

#### 縄文時代後期

I区の扇状地を構成する弥生期の基盤層下位の堆積層中から、サヌカイト製の凹基無茎式石鏃、同楔形石器、緑色片岩製の磨製石斧片が出土している。斜面地であることと遺物の出土状況から二次的な移動を受けていると考えられる。また、遺物量が少量に留まっているものの、遺跡周辺の集落の存在を暗示するものとして重要である。II区の谷底低地の状況は定かではないが、形成途上の不安定な堆積環境下にあったと想定されることから、より高所の丘陵上が居住適地とされていたと考えられる。

#### 弥生時代前期～中期初頭

確実に弥生前期に遡る遺構は見られない。しかし、後世の遺構に混入する形で数点の如意形口縁の甕が見られることから、周辺に住居群が展開していた可能性がある。櫛描施文が確認できる中期初頭～前葉になると、II区微高地上で竪穴住居（II区SH06）が営まれ、本格的な集落の形成を見る。しかし、面的に当該期の遺構が展開しているわけではない。I区扇状地部分にも包含層資料中に遺物が見られる程度で、遺構密度は極めて希薄である。

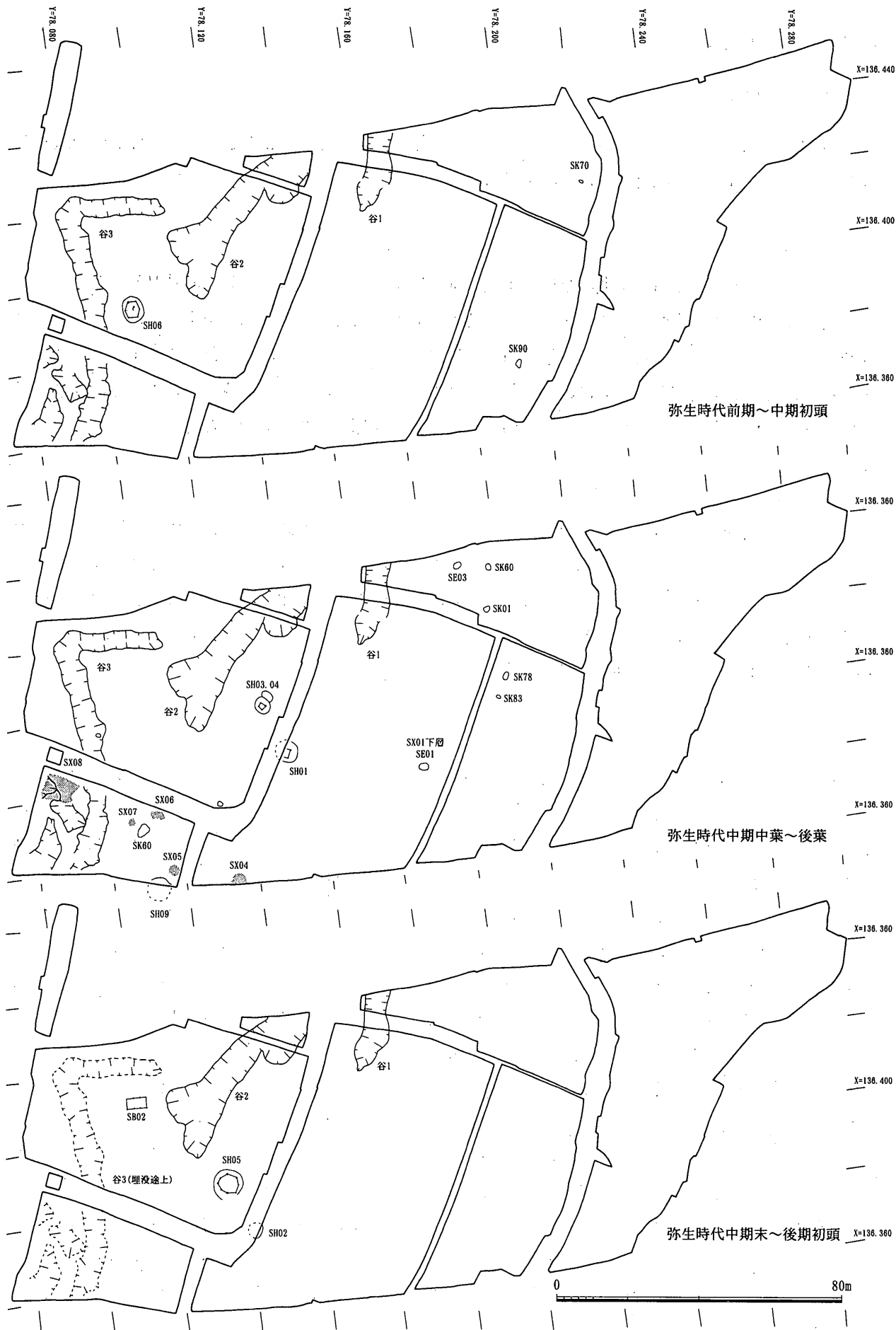
#### 弥生時代中期中葉～後葉

凹線文出現前後には、竪穴住居が増加し安定的な集落が形成される。しかし、出土遺物を見る限り前段階の中期前葉から、1ないし2小様式程度の空白期を挟むことが予想される。従って本段階の住居群を継続的な居住痕跡とすることはできない。主だった住居は、II区微高地上に限られる。II区SH03.04.09は、本段階に帰属する住居であるが、掘立柱建物は確認できない。扇状地の扇端部に相当するI-8区には、井戸と考えられる遺構（I区SE03）が存在することから、調査区外の近隣に住居等が存在していることが予測できる。住居を同時併存で見ると、1～2棟程度が散在する景観が復元できることから、極めて小規模な単位の一つと見える。本遺跡IV～V区や、丘陵を経立てた東側の谷遺跡、池の奥遺跡等で、住居2～3棟程度の住居群が点在して見られることから、一定地域内に間隔を保ちながら分散的に居住地を設定する遺跡群のような景観が展開していたようだ。

住居群が明確化してくる本段階には、礫・土器が混在して検出されている集石遺構（SX01下層、SX04,05,06,07）が形成され始める。I・II区で検出された集石遺構について簡単に触れておく。

立地を見てみると、集石遺構の多くが住居群の存在する微高地上かその縁辺に位置していることが分かる。出土遺物は土器・石器類を中心として構成されている。土器は細片化したものが目立つとともに石鏃や石庖丁などの石器類や剥片などを伴う。これらの組成は、通常、集落内の日用品を廃棄した遺構に見かけるものである。礫群は、粒径10～20cm程の砂岩・花崗岩であり、基本的に基盤層に含まれるもので構成され、意図的に石材を選択・搬入している様子はうかがえない。また、その配置に関しても規則性は見られない。





第 407 図 I・II区遺構変遷図 その1

廃絶した井戸の上層の窪みに形成されたⅡ区第1面S X 01下層をはじめとして、落ち込み上層に形成されるⅡ区第2面S X 04.05～07は、平面プラン・規模等において共通性が乏しく、他に明確な施設を伴わない。つまり、一貫して何らかの施設(遺構)を形成しようとした形跡が見られない。

時期的点では、居住遺構が安定的に形成されると同時に形成されている点は注意しなければならない。また、礫群を構成する石材が、上述のとおり基盤層に包含される砂岩・花崗岩礫で構成されていることを考慮すると、住居等の掘削を伴う遺構形成に伴って排出した礫を、土器などの日用品とともに廃棄している可能性も考えられる。事実、Ⅱ区微高地上では、旧中州と考えられる礫層が、検出面上に露出している箇所が見受けられる。

通常、廃棄場所として選択される場合が多い谷地形(Ⅱ区谷1～3)に遺物投棄が希薄であることから、廃棄行為や場所の選定に関して、何らかの意味を伴っていた可能性は考えられるが、現時点で厳密に遺構の性格を断定することは困難である。

#### 弥生時代中期末～後期初頭

本段階の居住遺構として、Ⅱ区微高地上のS H 02.05とS B 02が挙げられる。高位段丘上での明確な居住遺構は確認できない。S H 05からは、石鏃・石錐を中心としたサヌカイト製の石器及び製作に関わる未製品や剥片類が多く出土していることから、通有の住居機能に加えて、作業場的な性格をもつ。また、S H 05は直径8.5m程を測り、大形の部類に属する住居である。両住居からやや北へ離れて存在するS B 02は、柱配置や柱穴規模を見ると住居としての機能も考えられる。

谷1～3、落ち込み2～4は埋没が引き続いて進行するが、本段階には谷3、落ち込み2～3はほぼ埋没しており、窪地状を呈していたものと考えられる。

#### 弥生時代後期前葉

扇状地であるⅠ-2区東部にS T 01～04までの壺棺墓・土壙墓が見られる以外は、居住関連の遺構は一切認められず、遺物の出土すら希薄な段階である。前段階の住居群は、移動した可能性が高い。

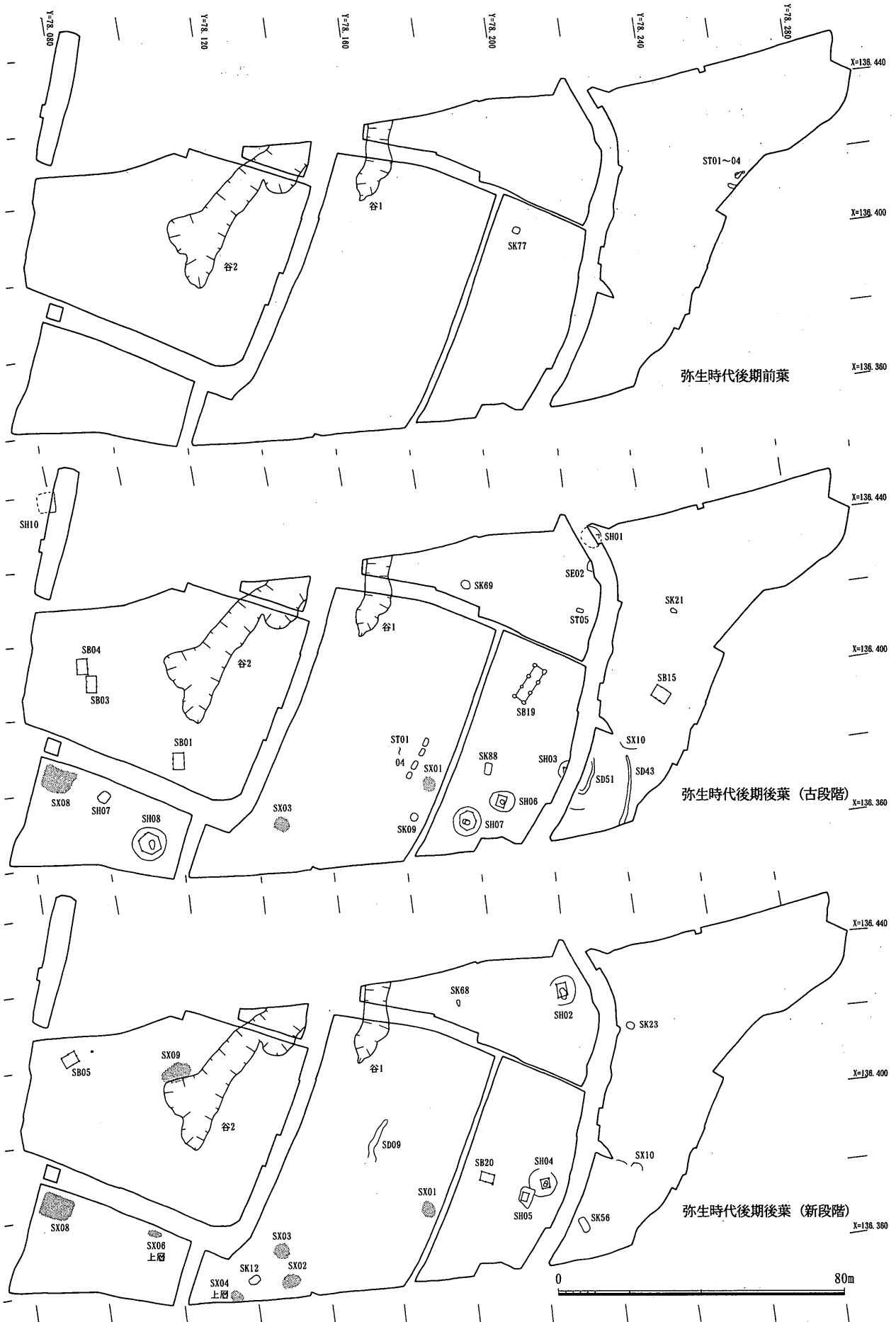
#### 弥生時代後期後葉(古段階)

後期後葉段階は、弥生時代の中で最も遺構数が多い。出土土器様相から、後期後葉を古・新段階に区分し、竪穴住居数や遺構の分布状況を見る。

本段階には、Ⅰ・Ⅱ区に分かれて竪穴住居が分布する。また、Ⅰ区扇状地斜面でも、Ⅰ区S H 01に見られる北側と、S H 03.06.07から成る南側の2群に分けて捉えることができる。北側のⅠ区S H 01周辺は未調査地が多く含まれることから、南側のS H 03.06.07を参考にすると調査地外に2棟程度の住居が存在していた可能性を想定できる。

Ⅱ区微高地上でも、北側に位置するS H 10と南側のS H 07.08の位置関係に見られるように、Ⅰ区同様一定の間隔を空けて2・3棟の竪穴住居が点在する傾向がある。北側に孤立するS H 10周辺にも1・2棟程度の住居の存在が想定できよう。調査範囲では、7棟の竪穴住居の同時併存を確認したが、未調査地を含めると、12棟程度の竪穴住居の存在を想定することができる。

また、それぞれの住居群の間には、Ⅰ区S B 19やⅡ区S B 01.03.04などの掘立柱建物の存在が見られる。掘立柱建物に倉庫的な機能を想定すれば、共有する施設を住居群同士の空閑地に設けていたと



第 408 図 I・II区遺構変遷図 その2

考えられる。

住居群が再び営まれる本段階には、中期後半段階に見られた礫・土器を集中的に廃棄する不明遺構(Ⅱ区S X 01～04.06.08)が形成されている。これらが形成される位置は、中期後半段階とほぼ同一地点で営まれるⅠ区S X 01.04.06を含めて、住居群に隣接した微高地の緑辺部に認められる。投棄される遺物は、自然礫・土器・石器類から構成され、中期後半段階との差異は見られない。遺構形成に伴って排出される地山中の自然礫や、生活残滓である日用品をまとめて投棄したものと考えられる。

墓関係の遺構では、Ⅱ区の東部において4基の土壙墓が等間隔に主軸を揃えて構築されているが、大規模に墓域を形成した様子は見られない。

#### 弥生後期後葉(新段階)

前段階と同様に、住居群はⅠ・Ⅱ区に分かれて分布するが、検出住居数は減少する傾向にある。Ⅰ区扇状地北側ではS H 02、南側ではS H 04・05が分布するが、南側のS H 04・05は切り合い関係を有することから、同時併存では1棟となる。Ⅱ区では本段階に帰属する竪穴住居が見出せない。しかし、前述した住居群に伴う遺物廃棄遺構(Ⅱ区S X 01～04.06.08.09)には継続して遺物の投棄が確認できることから、未調査部分に当該期の住居群が存在するものと考えられる。なお、本段階にも谷1.2は埋没途上にあり、その痕跡を留めているが、遺物の投棄は希薄である。

墓制関係では、Ⅱ区微高地上のS B 05に近接して土器棺墓(S T 01)が検出されている。

#### 古墳時代中期初頭

弥生後期後葉の集落が廃絶・移動し、本段階までの間は空白期となる。Ⅱ区谷1.2に挟まれた微高地上には、方形住居(Ⅱ区第1面S H 01)が存在し、谷1に住居側からの布留系土器群の投棄が確認できる。また、谷2南西部でも土器溜り状の土器廃棄S K 27が見られるが、集落形成が大規模に行われた様子はうかがえない。布留系土器群は、高杯の形態から布留4式新段階併行期の所産と推定されるが、確認した限りでは須恵器の共伴は認められなかった。本段階以降に集落が継続した様子は見られず、谷1.2出土土器は短期間に廃棄されたものと考えられることから、当該期の土器編年上良好な資料群とすることができる。

#### 古代(8c)

古墳時代中期初頭から再び空白期を挟み、遺構が確認されている。しかし、本段階の集落関係の遺構は皆無であり、調査区ほぼ全体が土壙墓を中心とした墓域の様相を呈する。遺構の性格上、共伴遺物が乏しいが、規模や分布状況等から、5群程度のまとまりをもつものと推定される。また、各群は主軸方向を揃えて列状に分布していることから、比較的短期間に順次構築されたものと見られる。

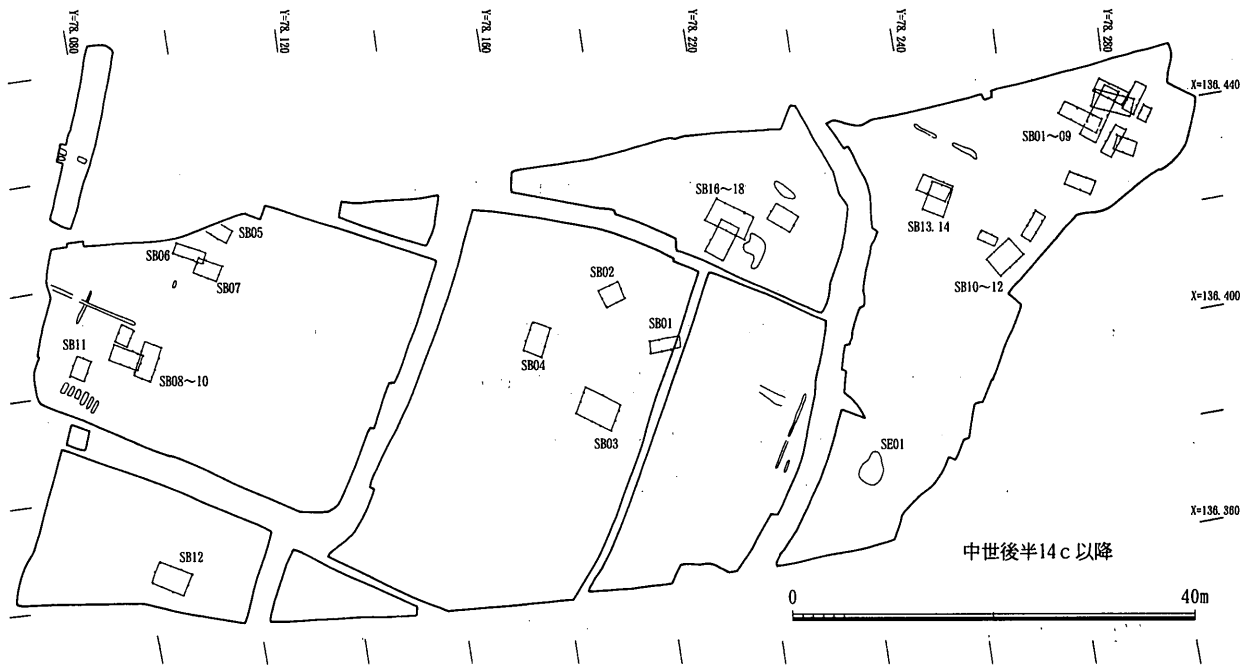
なお、谷1.2は埋積が更に進み微窪地状を呈していたと考えられ、若干量の遺物の投棄が見られるが、集落に関係した遺構は一切検出していない。

#### 中世前半(11c後半～12c)

本段階の遺構として、Ⅱ区G・H群とした土壙墓(S T 33～43)が挙げられる。明確な共伴遺物が少ないことから、時期決定に検討の余地を残すが、S T 33から出土した椀形鍛冶滓が、12前半を下



第 409 図 I・II 区遺構変遷図 その 3



第 410 図 I・II区遺構変遷図 その4

限とする谷2上層に多く含まれることや、先行する8c代の土壇墓と比較して、主軸方向を平行させて構築されていることなどを根拠として本段階の遺構と推定している。また、集落に関係した明確な遺構は確認できていないが、土壇墓群西側のII-10区には、当該期の遺物を含む柱穴が数基確認できることから、集落に付随して形成された土壇墓群の可能性も考えられる。

#### 中世後半(14c以降)

前段階まで微窪地として残存していた谷1.2の埋積はほぼ完全に完了し、調査区全体がほぼ平坦な地形面となる。また、前段階まで低調であった集落構成が再び明確化している段階であり、弥生時代について遺構数も多い。掘立柱建物の分布状況は、I区で北西部の一群(I区SB01~09)、東部の一群(I区SB10~14)、北西部の1群(I区SB16~18)等の3群程度、II区では北東部の一群(II区SB01~04)、北西部の一群(II区SB06~07)、西部の一群(II区SB08~11)、南西部の一群(II区SB12)の4群の単位に分かれて分布している。出土遺物からこれらの建物は、14c後半~15c前半に営まれたものと推定されるが、十分な共伴遺物をもたないものも見られることから、細分を断念した。建物主軸を見ると、一部に座標北より80°前後西へ振る建物(I区SB11, II区SB01.02)も存在するが、巨視的には座標北から30~40°西へ振る建物と、東へ50~60°振る建物で統一されている。遺跡周辺に現存する条里型地割や、検出遺構に地割溝と考えられる遺構は見られないが、建物主軸の一定の規則性から、本段階には何らかの土地区画が存在した可能性が高い。

## 2. Ⅲ～Ⅴ区の遺構変遷

Ⅲ～Ⅴ区第1遺構面では古墳時代～近世にかけての遺構、遺物を確認した。以下ではⅢ～Ⅴ区の各時期の遺構、遺物を時期ごとに説明する。

### 古墳時代

中期には布留Ⅳ式併行期ごろの竪穴住居9基、廃棄土坑などがある。Ⅲ、Ⅳ区とも数基の住居が近接した位置で検出された。また細片であるが、韓式系土器が出土している。

後期には2基の古墳(Ⅴ区1号墳、2号墳)がある。ともにTK 217併行期には埋葬が行われている。1号墳はその後飛鳥Ⅳ式併行期まで追葬が行われる。

### 古代

掘立柱建物3棟(Ⅳ区SB 01～03)、廃棄土坑(Ⅳ区SK 07)を含む土坑などがある。Ⅳ区SB 01、02は詳細な時期比定は行えないが50cm大の方形柱穴をもつ。焼成遺構のうちⅤ区SK 01は炭窯の可能性があり、付近に同時期の遺構は存在しない。

### 中世

掘立柱建物、柵列、土坑墓群、土坑などからなる集落が形成される。Ⅳ区では中世と判断した遺構からの出土遺物が極めて乏しいため第411図の遺構変遷図では全て中世として提示した。立地的には微高地となるⅣ区南部、Ⅴ区に分布の中心があり、大型の建物(Ⅳ区SB 13、Ⅴ区SB 03.15)はこの部分に位置する。集落状況については床面積が約40㎡と大形の建物(Ⅳ区SB 13)に20㎡以下の小型建物(Ⅳ区SB 12.15)が付随するという形態が一部で見られるが、多くは小型建物である。

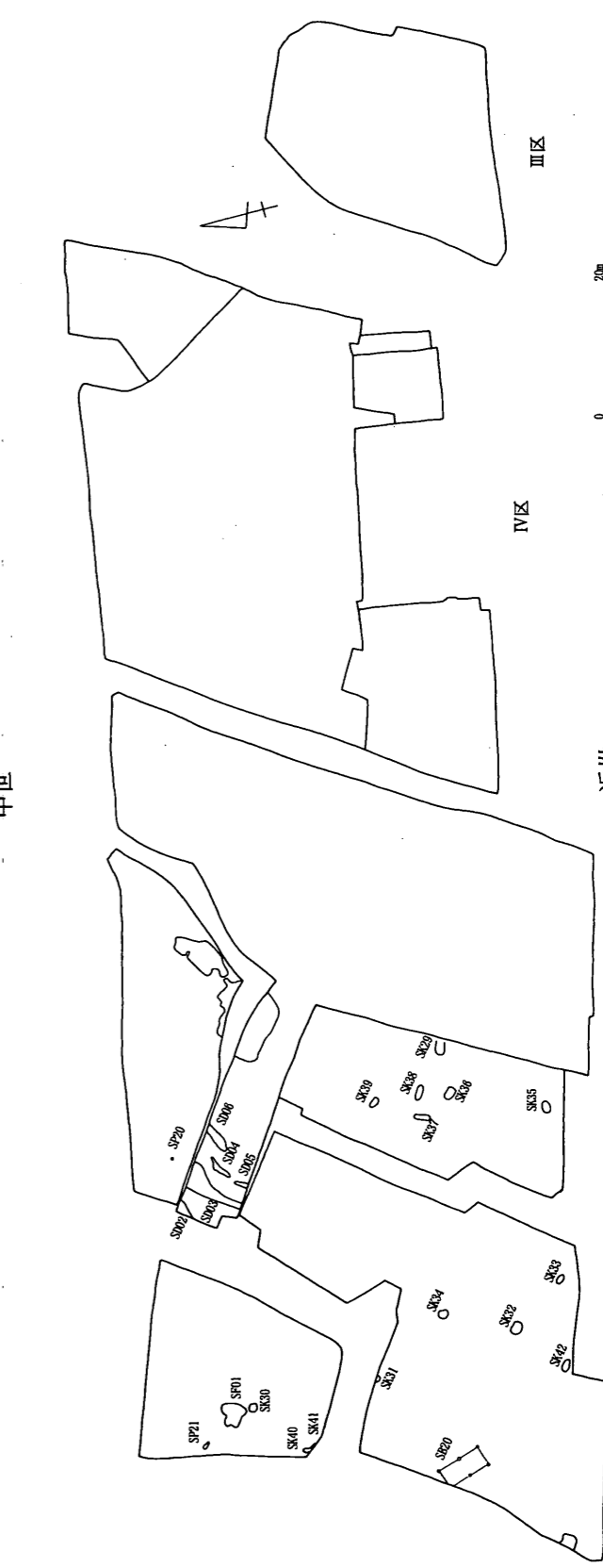
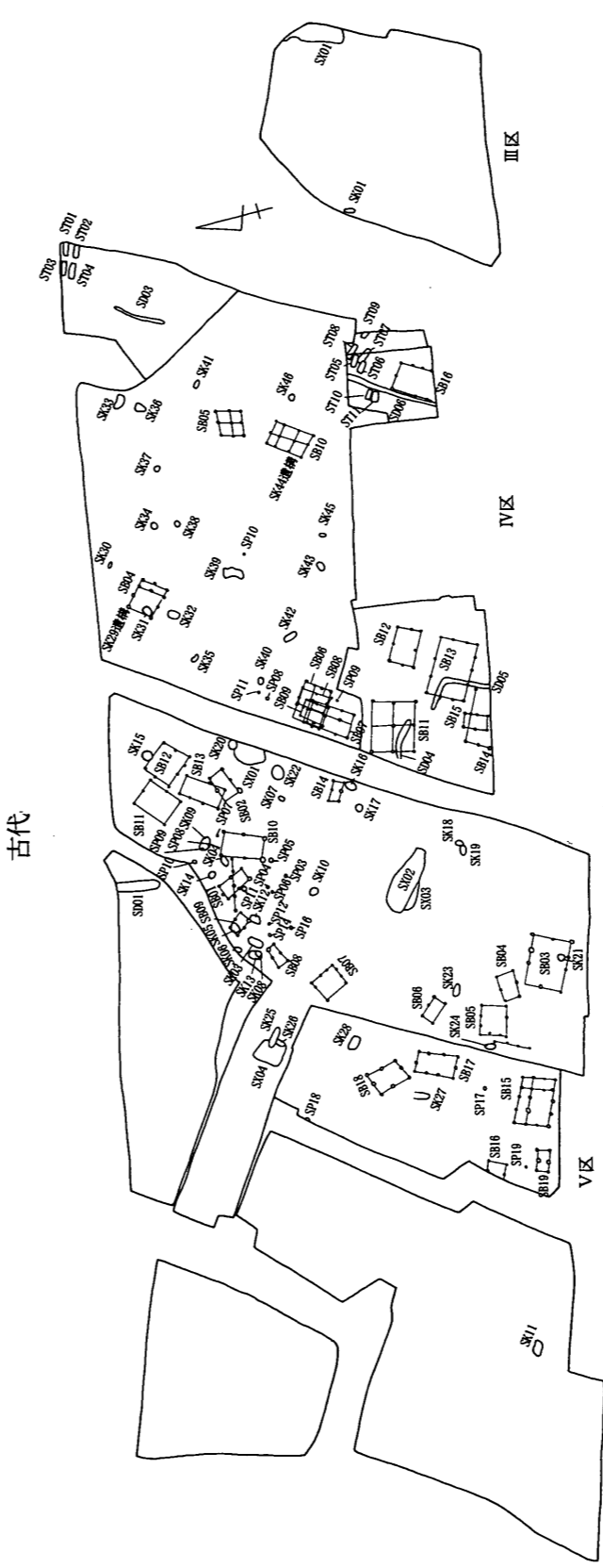
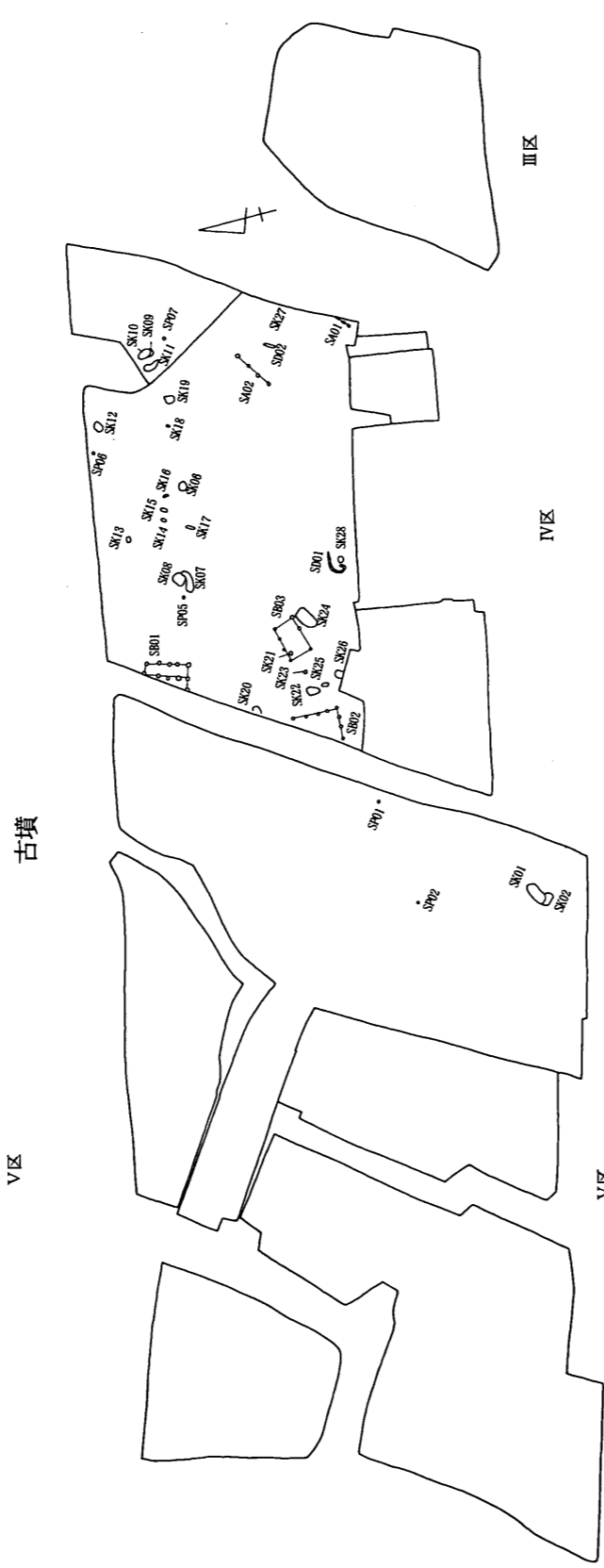
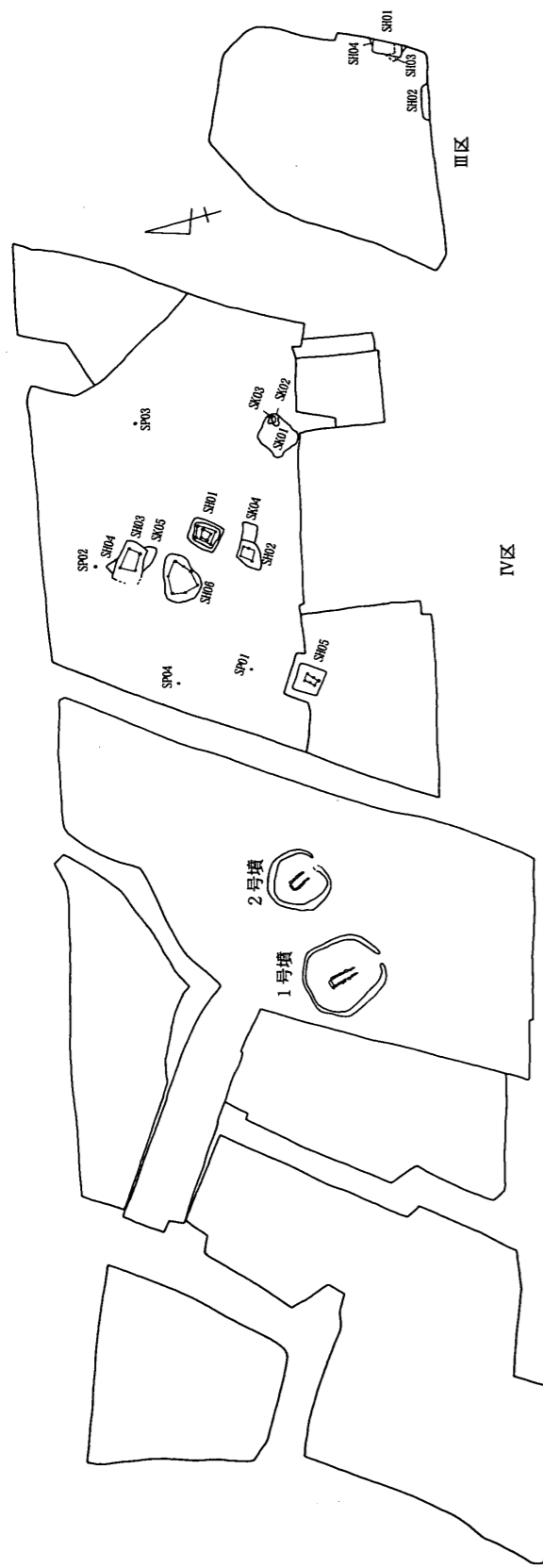
Ⅳ区の土坑墓群は南北2群に分かれる。南群はさらに東西の2群に分かれる。これらはⅡ区で分布するものと主軸方向、規模、形態、列状埋葬に見られる規制の強さなどで類似し、この時期に属すると考える。

建物以外を含めた集落変遷についてはⅤ区(うち旧G 1、2区)の遺構がある程度時期比定が可能であるため以下ではⅤ区の状態を中心に述べる。中世ではⅠ期：12世紀後半～13世紀前半、Ⅱ期：14世紀代、Ⅲ期：16世紀代の3時期の遺構、遺物が見られる。

Ⅰ期では地鎮遺構(Ⅴ区SP 06)があり、遺物には土師器杯、瓦器碗などがごく少量見られる。この時期に比定できる建物はないものの、地鎮遺構の存在から詳細な時期決定できない建物にはこの時期に属するものも含むと推測される。

Ⅱ期ではⅣ区SB 12.13.15、Ⅴ区SB 01、SK 03～06.10.12.13、地鎮遺構(SP 04)がある。Ⅳ区では先述の通り大型建物と小型建物のセットが見られる。Ⅴ区では小型建物や廃棄土坑群が形成される。また出土遺物もⅠ期より増加する。立地や建物群と廃棄土坑群の位置関係から調査対象地外の南部に集落域が広がると考えられる。

Ⅲ期ではSB 10、SK 09.20、SX 01.02がある。Ⅱ期のSB 13のような主屋となる建物は見られないが、土坑、性格不明遺構から比較的まとまった量の土器が出土している。おそらく調査対象地外の南側に集落域が存在すると考えられる。



第411図 Ⅲ～Ⅴ区 第1面遺構変遷図 (1/1000)



## 近世

掘立柱建物、土坑、砂糖竈などが検出された。砂糖竈は近世後半に東讃地域で盛んに行われた砂糖生産を裏付ける遺構であり、大内町三殿出口遺跡、原間遺跡、金毘羅山遺跡でも検出されている。遺物は近代まで陶磁器が多量に出土した。これらは現代の祠造営に伴う整地や耕地の開墾により集積されたと考えられる。周囲に消滅した当該期の遺構が存在したことを示す資料である。

### 3. 東讃地域の弥生集落の動態

#### 1. はじめに

今回の報告した成重遺跡を初めとして、東讃地域東かがわ市の番屋川・与田川・古川・湊川流域の弥生集落の調査事例が増加した。ここでは最も調査事例の蓄積が図られた弥生中・後期集落の特徴について簡単にまとめておくこととしたい。

#### 2. 集落の時間的な動態

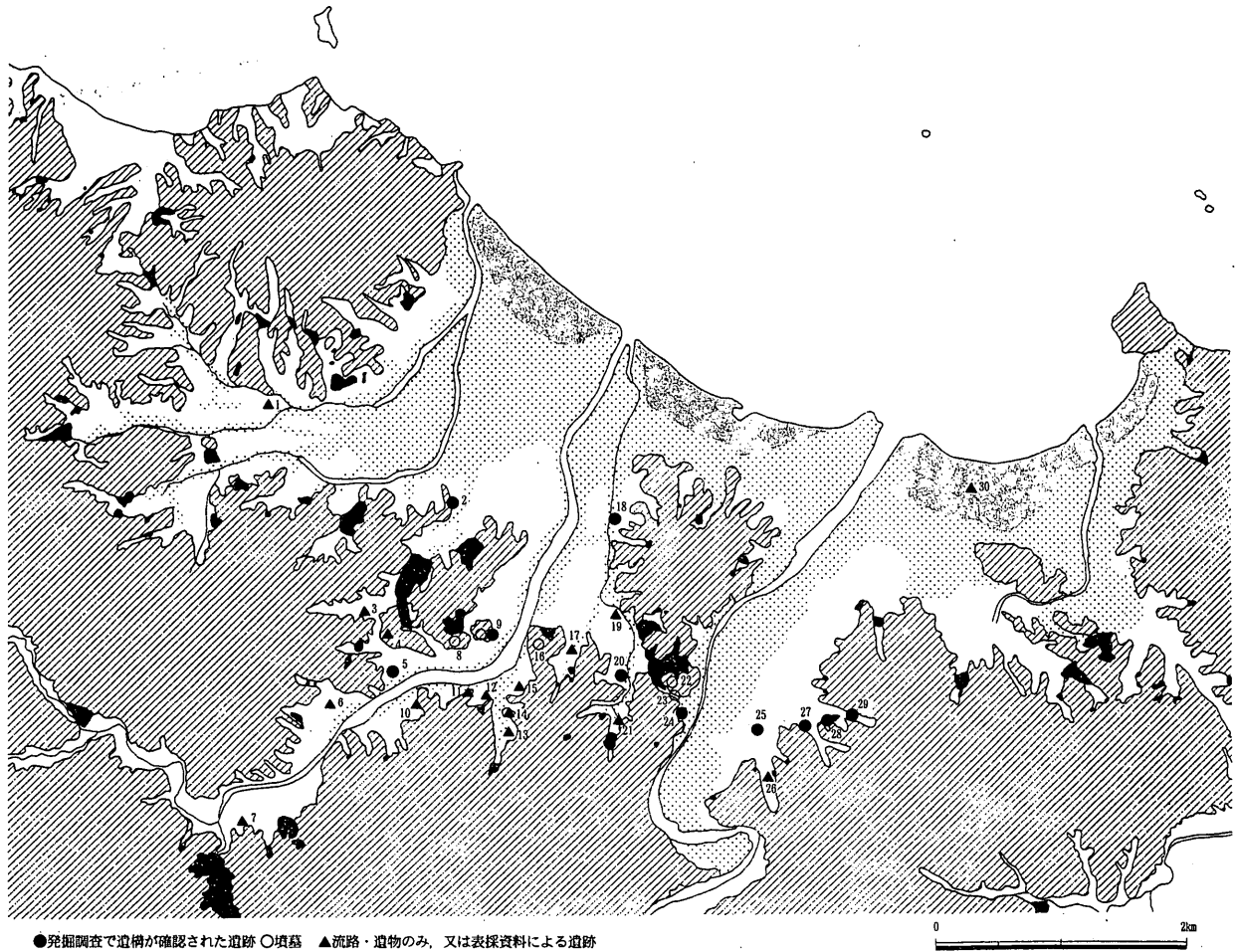
第 412 図には、地形面の概略と遺跡分布を表現してあり、第 13 表には、現在までの表採資料による遺跡や発掘調査成果を基にして作成した遺跡の動態表である。

番号	遺 跡 名	時 期								備 考
		I	II	III	IV	V前	V後	終末	古墳初	
1	土居遺跡						△			
2	落合遺跡	○								
3	楠谷遺跡				○		○			
4	北山遺跡						?	?		
5	仲善寺遺跡					●	○	○		
6	大社遺跡							○		手焙形土器
7	水主神社遺跡				△					
8	高屋遺跡						△			壺棺墓
9	金毘羅山遺跡	○			○		●	○		丘陵上にはV後半～終末の墓地
10	風呂遺跡						△	△		
11	笠塚遺跡						△			壺棺墓
12	城ノ内遺跡				△		△			
13	飛谷遺跡				△		△	△		
14	別所遺跡						△			
15	別所池田遺跡							△		
16	塔ノ山南遺跡							●		石蓋土壙墓・箱式石棺墓・土壙墓
17	西谷遺跡		○							
18	住屋遺跡							●		
19	小僧遺跡	○					○			
20	原間遺跡	○	○		○	○	●	●		終末期鍛冶遺構
21	幸台池西遺跡				△		△			磨製石斧
22	樋端墳丘墓							●		墳丘墓・壺棺墓
23	樋端遺跡							●	●	土壙墓・壺棺墓・墳丘墓
24	神越遺跡							●		
25	成重遺跡	○	●	●	●	●	●	○		
26	成重北遺跡						?	?		
27	谷遺跡				●					
28	善門池西遺跡	○			●		○			
29	池の奥遺跡			●	●		○			磨製石斧
	合計 1	6	3	2	10	3	18	12		
	合計 2	6	3	2	7	3	10	9		

●調査で遺構が確認された遺跡○流路資料及び遺構に伴わない形で遺物が出土した遺跡

△表採資料による遺跡

第 12 表 遺跡動態表



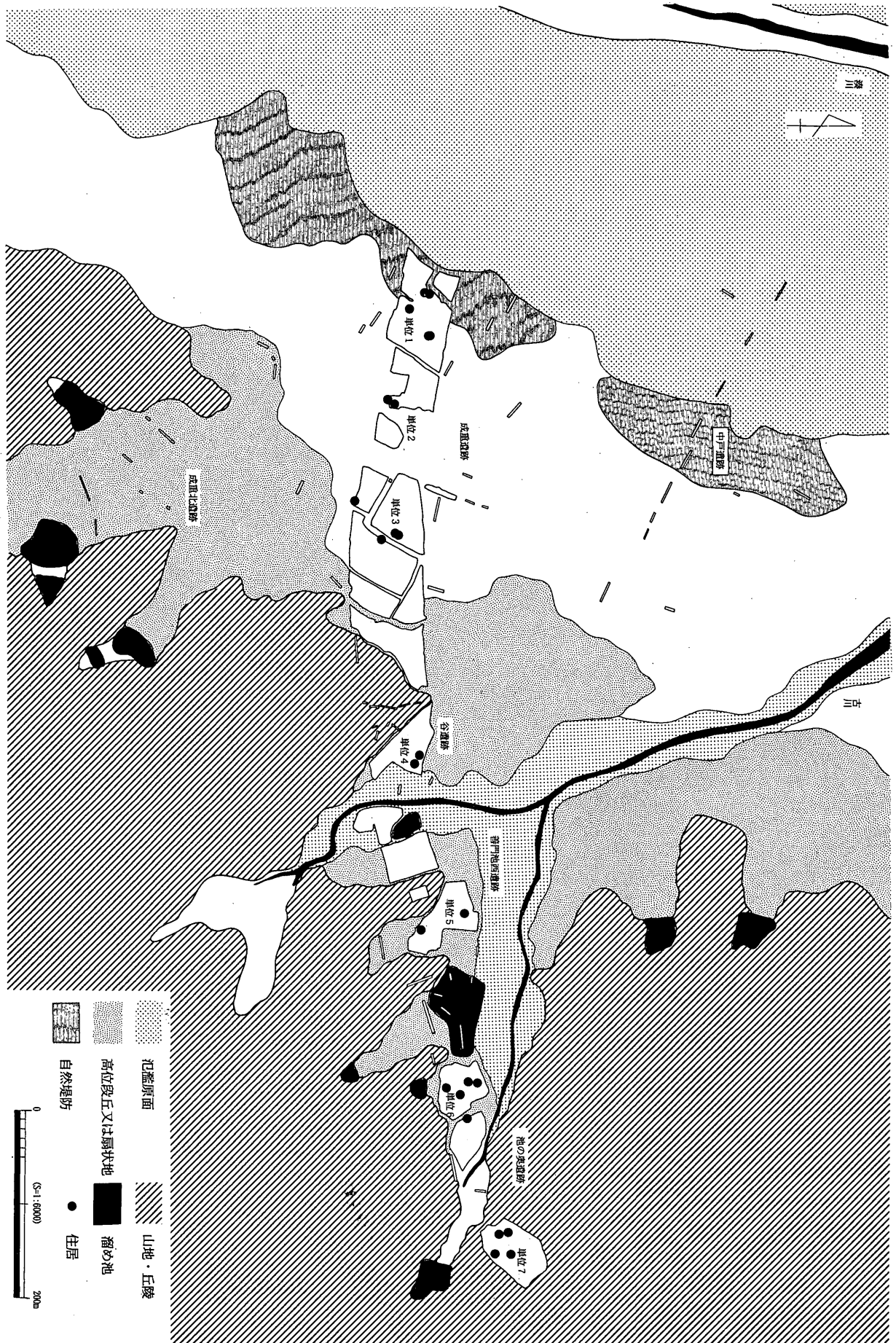
第 412 図 遺跡分布図（番号は第 13 表に対応）

遺跡分布は、主要河川沿いの段丘面上か谷部に多く立地する傾向がある。発掘調査が多く実施されていないことを踏まえると、海浜部における遺跡分布を考慮する必要があるものの、本地域の集落展開の一定の傾向を示している可能性はある。また、詳しくは後述するが、丘陵上に立地するものは、墳丘墓や土器棺墓等から構成される墓地としての性格をもつものが少なくない。

時期別な変遷では、継続型の集落が乏しい。成重遺跡は、動態表ではⅡ期以降継続するよう見られるが、Ⅲ期前半やⅤ期前半などに短い空白期を挟んでおり、必ずしも同一地点に住居群が継続して営まれた訳ではない。全時期を通して移動性に富んだ集落分布と捉えるべきであろう。

また、前期から中期前半までの明確な集落検出事例が殆ど見られない。落合遺跡は、包含層資料であるものの遺物出土状況から、近接する位置に集落を想定できる。前期段階の集落は、最古段階の遠賀川式土器は伴わず、逆L字状口縁甕に代表される前期後半期に属することで共通している。凹線文出現期前後のⅢ～Ⅳ期初頭には、与田川中・上流域の金毘羅山・楠谷遺跡や湊川流域の成重・池の奥遺跡を中心に集落構成が判明する資料が見られる。表採遺物による遺跡を含めれば、Ⅳ期には遺跡数も増加する傾向がうかがえる。

後期前半であるⅤ期前半の遺跡数の落ち込みが激しいが、Ⅴ期後半には遺跡数が再び増加する。特に前段階まで希薄であった古川上流域の原間遺跡を中心に、与田川中流域の金毘羅山遺跡周辺にも集落が多く出現する。先に見た丘陵上に墓地が確認されはじめるのも本段階である。これらは、住居群に近接した丘陵上に占地する傾向がある。終末期に若干の減少が認められるが、Ⅴ期後半段階の集落は維持



第 413 図 成重遺跡周辺の中期後半段階住居群

されている可能性が高く、丘陵上の墓域も継続するものと見られる。そして、古墳初頭にはすべての集落が廃絶・移動するものと考えられる。

### 3. 凹線文出現前後の集落

湊川下流域東岸では凹線文出現前後の集落がまとまりをもって確認されている。第413図には、各遺跡の調査範囲と周辺における試掘調査のトレンチを地形分類図上に示している。

地形面は、南東に存在する山地・丘陵とそれに付着する高位段丘又は扇状地面と、湊川の沖積作用による谷底低地部と自然堤防の微高地から構成されている。本書第2章で検討したように、現湊川の東側には広大な氾濫原面が形成されている。谷底低地の中には、微高地が多く存在しているものと考えられるが、ほぼ完全に埋没していることが予想され、明確な形で提示できない。

住居の分布状況は、池の奥遺跡で多くの住居が存在するように見えるが、同時併存で3棟を越えるものではなく、2～3棟ほどの住居群が東西で1km程の範囲の中に、間隔を空けて7単位程点在している景観が復元できる。

次に、住居群同士の繋がりの実態が問題となる。池の奥遺跡における単位6,7の168点にも及ぶ磨製石斧類の多さが注目されよう(西岡2003)。一定の時間幅を見積もる必要があるが、磨製石斧類を多量に保持している住居単位であることは否定できない。単位3に相当する成重遺跡Ⅱ区では、遺物総体で柱状片刃3点のみであり、伐採用の両刃石斧にいたっては1点も確認できず、池の奥遺跡の単位6,7とのコントラストは強いものとなっている。池の奥遺跡の単位6,7は、谷部の丘陵斜面に立地していることから推測して、原木の伐採・粗加工にやや傾斜した住居群と見ることができると言えよう。この単位6,7からサヌカイト製の板状素材の出土や、打製石庖丁素材と考えられる横長剥片が出土している点も注目される(森下2002)。現状で各単位の様相は明らかにしえないが、他の単位ではこの横長剥片は見られないことから、庖丁などの道具類の生産に関しても各住居群で役割分担がなされていた可能性も考えられる。この点は、各遺跡の本報告を待って更に検討を深めたい。

### 4. 後期の集落

後期後半～終末段階の集落構成を比較的調査が広範囲に行われている原間遺跡中心に見てみよう。原間遺跡は、小規模河川である古川上流域の段丘上に立地する。流路資料に前・中期資料が見られるが、住居群が明確に展開するのは後期中葉から終末の段階であり、これまでの調査で約50棟程度の住居が確認されている。第412図の地形分類は、木下晴一氏の分類案(木下2000)に準拠している。

#### a. 遺構時期決定に関する土器編年案

住居の同時併存を抽出する作業として、原間遺跡出土資料を中心に周辺の遺跡のものを加えて土器編年を検討する。未だ資料不足の観が否めないが、後期中葉から古墳時代初頭を6期に細別する試案を提示する。

**後期中葉** 原間遺跡SRV03土器溜り・原間遺跡SHV01を標識資料とする一群である。長頸部壺の口縁部の外反は弱く、胴部最大径も上位にある。甕の底部は明瞭な平底を有し、胴部最大径も上位に存在する。高杯は、脚部が長く口縁部の外反も顕著なものではない。搬入土器で高松平野北東部地域

産の可能性のある下川津B類系統の甕(以下、下川津B類と記す)は、底部が突出し胴部最大径が上位にある。口縁部の折り返しも顕著ではない。高杯は口縁部の外反が弱く、口縁端部が僅かに拡張されるものが伴う。既往の編年では、大久保氏の讃岐①段階に併行するものと考えられる(大久保2002)。

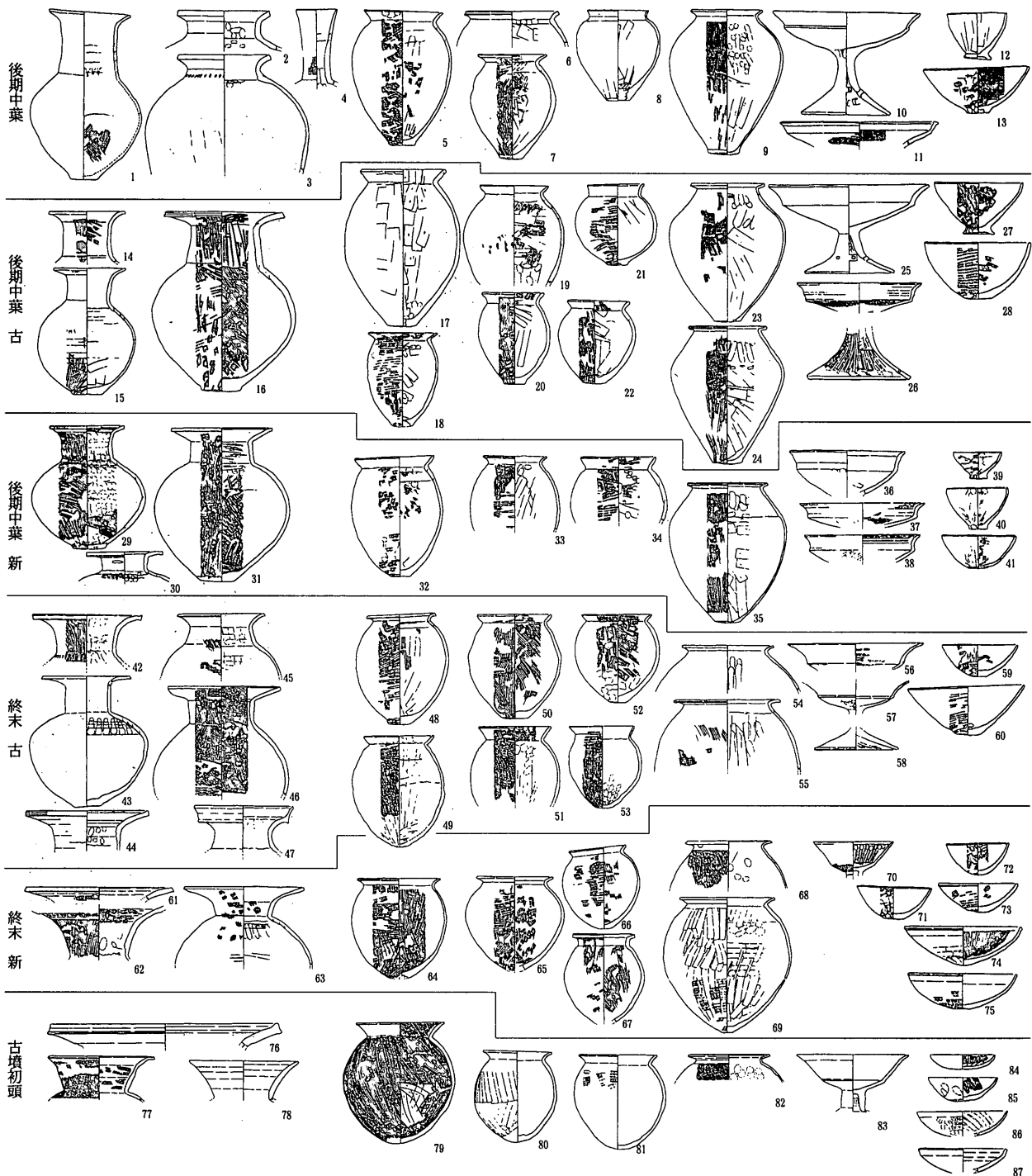
後期後葉 古段階 原間遺跡SKⅢ20・同遺跡SEV01・同遺跡SKV03・同遺跡SRⅢ03⑥層土器溜りを指標とする一群である。長頸壺や広口壺の胴部最大径は下がり、全体が球形化するとともに、口縁部の外反が強くなる。広口壺は頸部が内傾し、口縁部が大きく開くもの(16)が出現する。甕の胴部最大径は下がり、全体的に球形を指向するものの、依然平底をとどめている。鉢には明瞭な変化が見られず、脚台状の鉢も前段階から引き続いて見られる。高杯は、中位で屈曲する短い脚部をもつものが出現し、口縁部の外反もやや強いものとなる。搬入系統の下川津B類土器は、甕の胴部最大径が下がるとともに底部と胴部下半の境が不明瞭となる。口縁部の折り返しもややきついものとなっている。高杯では口縁部の外反が発達し、口縁端部の拡張は見られない。既往の編年では、大久保の讃岐②段階に併行するものと考えられる。

後期後葉 新段階 原間遺跡SHⅢ02・同遺跡SHⅢ04を標識とする一群である。長頸・広口壺ともに胴部の球形化一層進行する。口縁部の外反が顕著となり、頸部はやや短くなる傾向を示す。甕は、主に下半部の球形化と同時に、矮小な平底を呈する。高杯は、杯部径が縮小し、杯部自体が深いものとなる。鉢は、前段階からの脚台状の底部をもつものが残存するが、全体的に小型化するとともに、底部は小型化し丸底に近くなる。搬入系統の下川津B類土器の甕(35)は、胴部下半の球形化が進行するとともに、僅かながら平底を止める底部から連続して立ち上がる。口縁部の折り曲げはあまり変化が見られない。高杯は、口縁部の外反が強くなり、杯部下半が丸みを帯びてくる。既往の大久保編年の讃岐③段階に併行すると考えられる。

終末期 古段階 原間遺跡SEⅢ01・森広遺跡Ⅲ次SH01・寺田産宮通遺跡SH06を典型例とする。広口壺は頸部から連続して外反するもの(42)口縁部が水平に近く屈曲するもの(43)などがあり、頸部が内傾し口縁部が直線的に開くもの(45.46)は胴部最大径が更に下降する。底部形態が判明する資料に乏しいが、頸部のくびれが強くなるとともに、ほぼ丸底化するか矮小な平坦面をとどめる底部となる。中には(49)のような、尖底のものも見られる。高杯は、短脚化と杯部の外反がより進行し、量的にも減少する。鉢は、前段階まで継続した脚台様の底部をもつものが消滅し、底部はほぼ丸底化する。搬入系統の下川津B類甕(54)は、肩部から胴部にかけて球形化が進行し、口縁部の折り曲げもきつくなる。(55)は、下川津B類甕を在地で模倣したものである。

既往の編年では、大久保の讃岐④と⑤段階の一部に併行するものと考えられる。

終末期 新段階 原間遺跡SHⅢ04 石田高校校庭内遺跡SH32出土資料を典型例として設定した。広口壺(61,62)は頸部から連続して大きく外反するようになる。広口壺(63)も頸部と口縁部の境は不明瞭となっている。甕は球形化を更に指向するが、底部は尖底気味の丸底となっている。高杯は、杯部が直線的に外反する(70)が僅かに見られるが、後期後葉のものとは比べて形態的に隔たりが大きく、同一系譜と考えられない。中形鉢は(74,75)は、器高が浅いものとなる。搬入系統では、下川津B類土

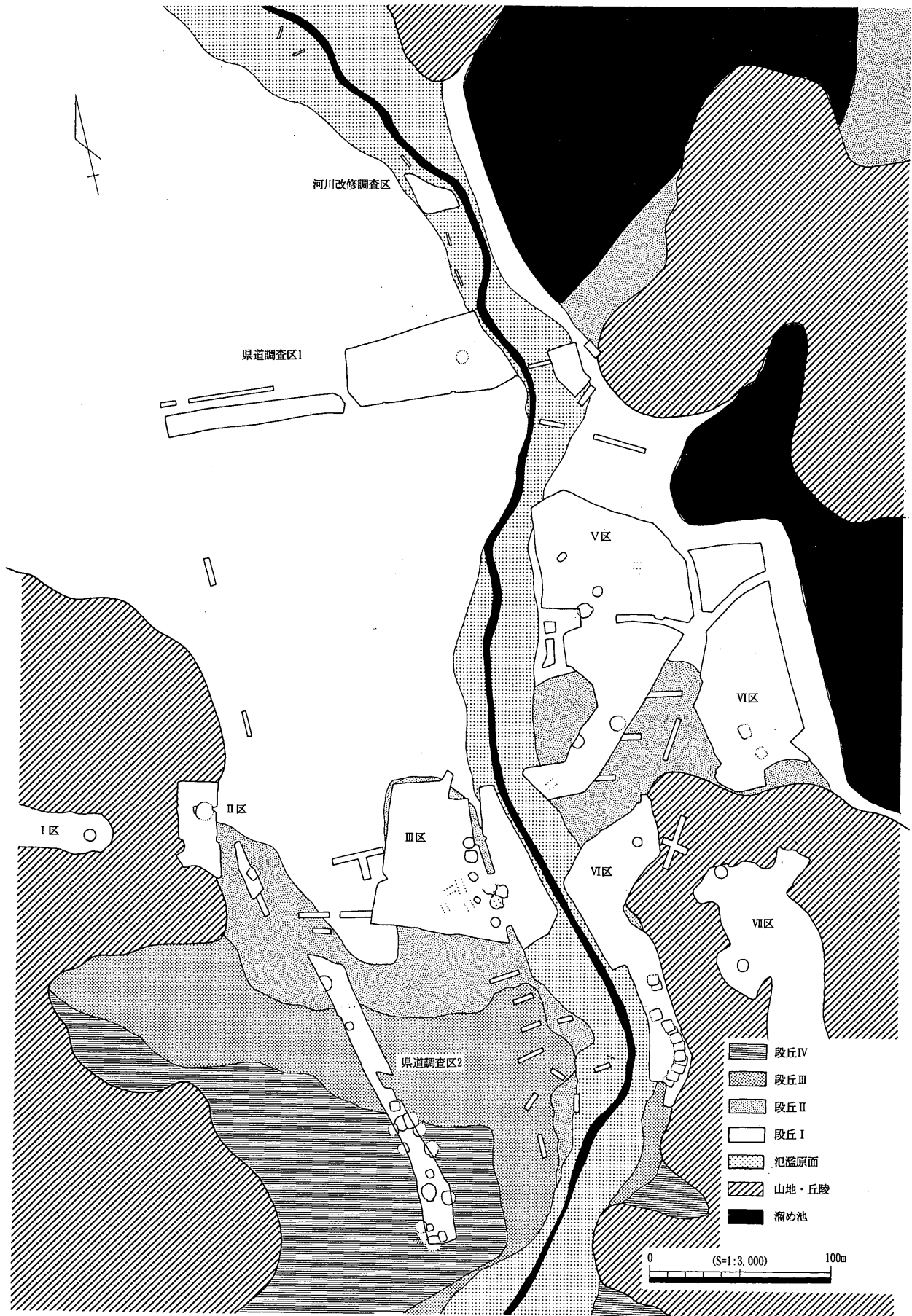


後期中葉：1～13 原間SRV03土器溜り  
 後期後葉 古：14, 19, 23原間SK03 25, 原間SKⅢ20 27, 原間SEV01 15～17, 20～24, 28原間SRⅢ◎厨土器溜り  
 26成重Ⅰ区SE02  
 後期後葉 新：30 原間(県道調査区)Ⅱ区SH01 32, 35～37, 原間SHⅢ02 33, 34原間SHⅢ03 29, 成重Ⅱ区SX08 37, 38成重Ⅰ区  
 SH05 31, 金毘羅山SR01  
 終末 古：44, 原間(県道調査区)Ⅰ区SH05 48, 50, 52, 55, 59, 60原間SEⅢ01 54, 原間SXⅢ03 42, 47, 49森広SH03 45, 53, 56～58,  
 寺田・産普通SH06 43, 森広ST301  
 終末 新：61, 69, 74, 75石田高校校庭内SH32 62, 原間(県道調査区)Ⅰ区SH06 68, 原間(県道調査区)Ⅱ区SH05 70, 原間(県道調査  
 区Ⅰ区SH02) 63, 原間SRⅢ03 64～67, 71～73原間SHⅢ04  
 古墳初頭：76～78, 82, 83～87森広SH208 79, 森広SH316 80, 81森広SH314

第 414 図 東讃地域における弥生後期後半から古墳初頭土器編年

器が減少し、東阿波型の甕(68)が見られる。(69)には片岩粒が認められないものの、胴張りの器形や尖底の底部形態に、東阿波型の強い影響が想定できる。(62)は、下川津B類系統の広口壺である。

既往の編年では、大久保の讃岐⑤段階の一部と⑥段階に併行するものと考えられる。



第 415 図 原間遺跡における弥生後期の後半から終末期の住居配置



古墳初頭 本段階に、集落が廃絶・移動に向かう原間遺跡内には良好な資料は認められないが、森広遺跡に良好な資料が存在する。森広遺跡 S H 208・S H 314・S H 316 を典型とする。(76) の広口壺の口縁部は肉厚なものとなり、端部は確実に面取りされる。(77.78) の広口壺は頸部から口縁端部まで連続して外反する形態となる。甕は全体的に均整のとれた球形化が達成される。高杯は、杯部中位で明瞭に反転する古墳時代的なものとなり、鉢は器高が浅くなり、手づくね様の矮小な小型のもの 84 が出現することが指標となる。

既往の編年では、大久保の讃岐⑦段階に併行するもの考えられる。この編年試案をもとに、原間遺跡の住居群の変遷をトレースして見よう。

#### b. 集落の住居群の在り方とその変遷

後期中葉 比較的低位の段丘上に住居が散在し、4 棟程度の住居から構成されている。段丘 I、II 面上の III・V 区・県道調査区 1 付近に住居が見られ、最大で 1、2 棟程度の小規模なまとまりを示す。

後期後葉古段階 前段階と比較して広範囲に 15 棟程度の住居が展開している。III、V 区に加えて、東西の丘陵上や南側の比較的安定した段丘 III、IV 面上に位置する県道調査区 2 の部分や、古川東岸の IV 区等に新たに住居群が営まれ、全体で 7 群程度の単位が抽出できる。各単位 2～3 棟程度の住居から構成されており、過度に集中する単位は確認できない。

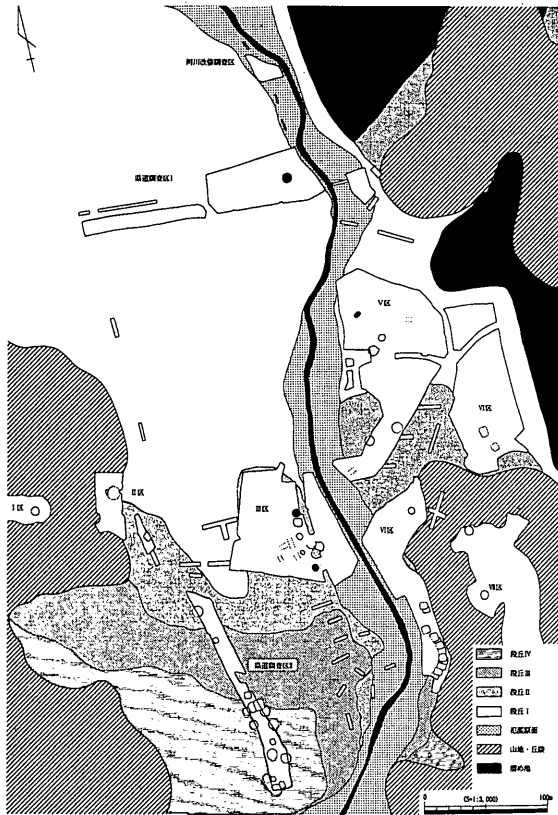
後期後葉新段階 I、VII 区の丘陵上の住居群は廃絶するが、他の住居群は維持されている。県道調査区 2 や IV 区の部分で 4 棟程度の住居が展開するが、前段階と比べて規模的な差異は見られない。なお、張り出し付の円形住居は本段階まで継続して見られる。

終末期古段階 IV 区に 1 棟の住居が確認できるが、県道調査区 2 の段丘 III、IV 面上に住居群が限られるようになり、散在傾向にあった前段階と傾向を異にする。また、未調査地部分にどの程度の住居が存在しているのかは不明であるが、一箇所に集中して居住しているのであれば、各単位が結合した可能性もある。調査範囲内では 3 棟程度の住居から構成されている状況が伺える。

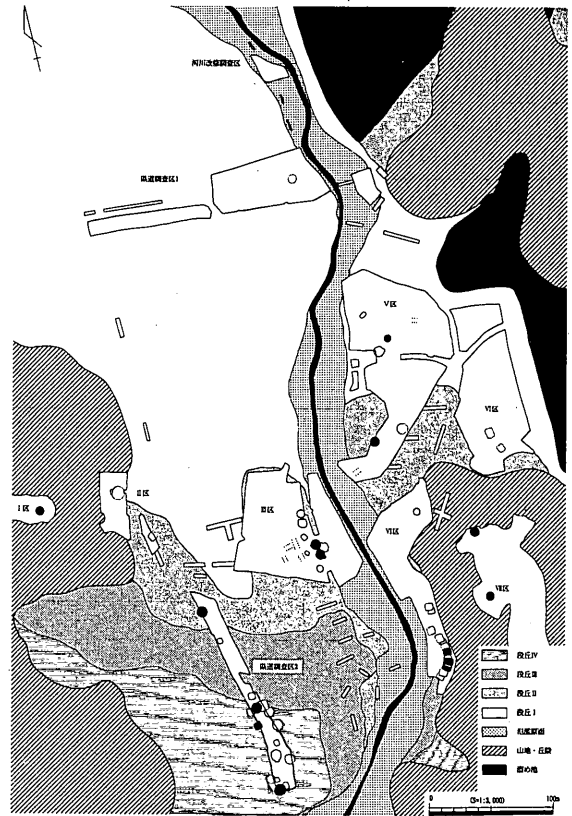
終末期新段階 前段階に引き続いて、住居は県道調査区 2 の部分に集中して見られる傾向は変わらない。この部分では、5 棟程度の方形住居が分布している状況である。

古墳前期に帰属する住居は確認できないことから、集落自体は廃絶するか他の場所へ移動したものと考えられよう。

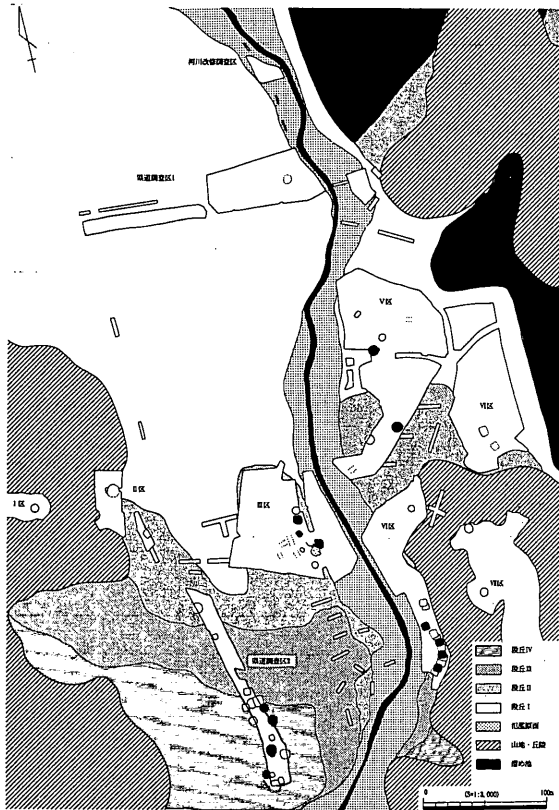
以上のように、全体的としては、一見大規模に見えるが、細かな時期別の変遷では住居群が移動している状況が想定できる。また、最大で 5 棟程度から成る住居群が 4～7 箇所程度に分かれて分布しており、単一箇所に住居が集中する傾向は見られない。また、IV 区の住居群は方形住居で当初から統一されており、出土土器の組成の分析を行った片桐氏によれば、他の住居群に比べて搬入系統である下川津 B 類土器の出土量が多い点が明らかにされており、これをもとに他地域から移動してきた集団の存在が指摘されている(片桐 2002)。住居形態と遺物が集団の出自を反映したものかどうかは今後更に検討する必要があるが、住居群毎で住居形態や出土遺物組成に差異が見られるという指摘は重要である。今回は、同時併存の住居とその変遷の抽出に終始しているが、今後は遺物組成に目配りした検討が必要と思われる。



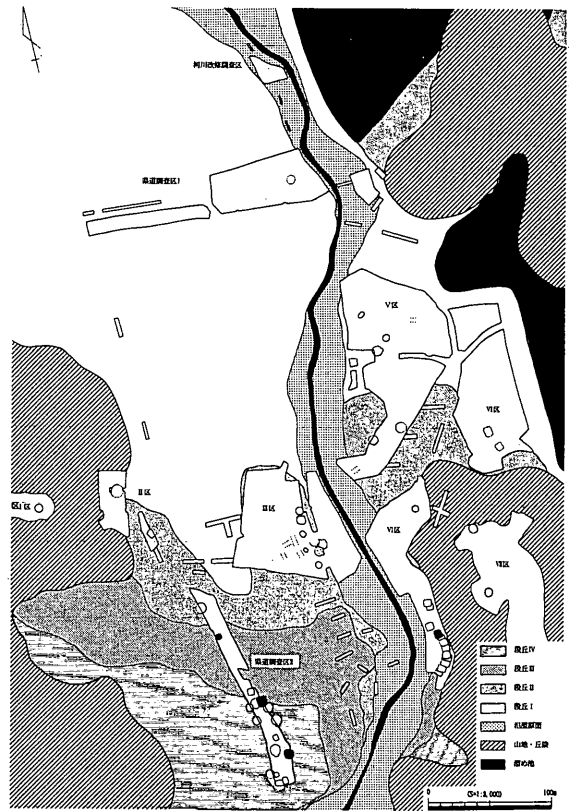
後期中葉



後期後葉 (古)

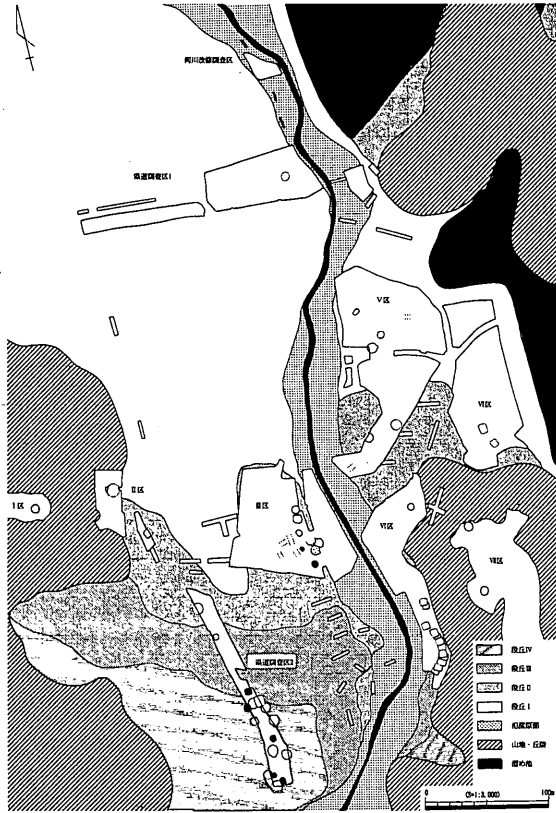


後期後葉 (新)



終末 (古)

第 416 図 原間遺跡における住居群の変遷 その 1



終末 (新)

第 417 図 原間遺跡における住居群の変遷 その 2

### 5. 後期の集落と墓域

遺跡数が増加する後期後半段階には、丘陵上で多くの墓域が確認されている。ここでは、原間遺跡周辺の与田川から湊川までの地域を対象として集落との位置関係を整理する。

調査や表採資料で明らかになった墓制資料は第 14 表のようなものがある。一部、原間遺跡では住居群に隣接して土器棺墓が見られるが、これらは少数に留まっており、集落域とは隔絶した丘陵上に墓域が設定されるのが一般的であったと考えられる。第 418 図には、後期後半から終末までの集落と考えられる遺跡と墓域と考えられる丘陵上の遺跡を示してある。集落と考えられる湊川西岸の神越遺跡と古川上流域の原間遺跡の間には、樋端墳丘墓や樋端遺跡などの墓域が見られる。原間遺跡と与田川西岸の金毘羅山遺跡の間には、塔の山南遺跡等の墓域が存在する。金毘羅山遺跡は、西側の丘陵上やその周辺に高屋遺跡などの墓域を伴っている。他の遺跡は、表採資料であることから断定することが難しいが、笠塚遺跡

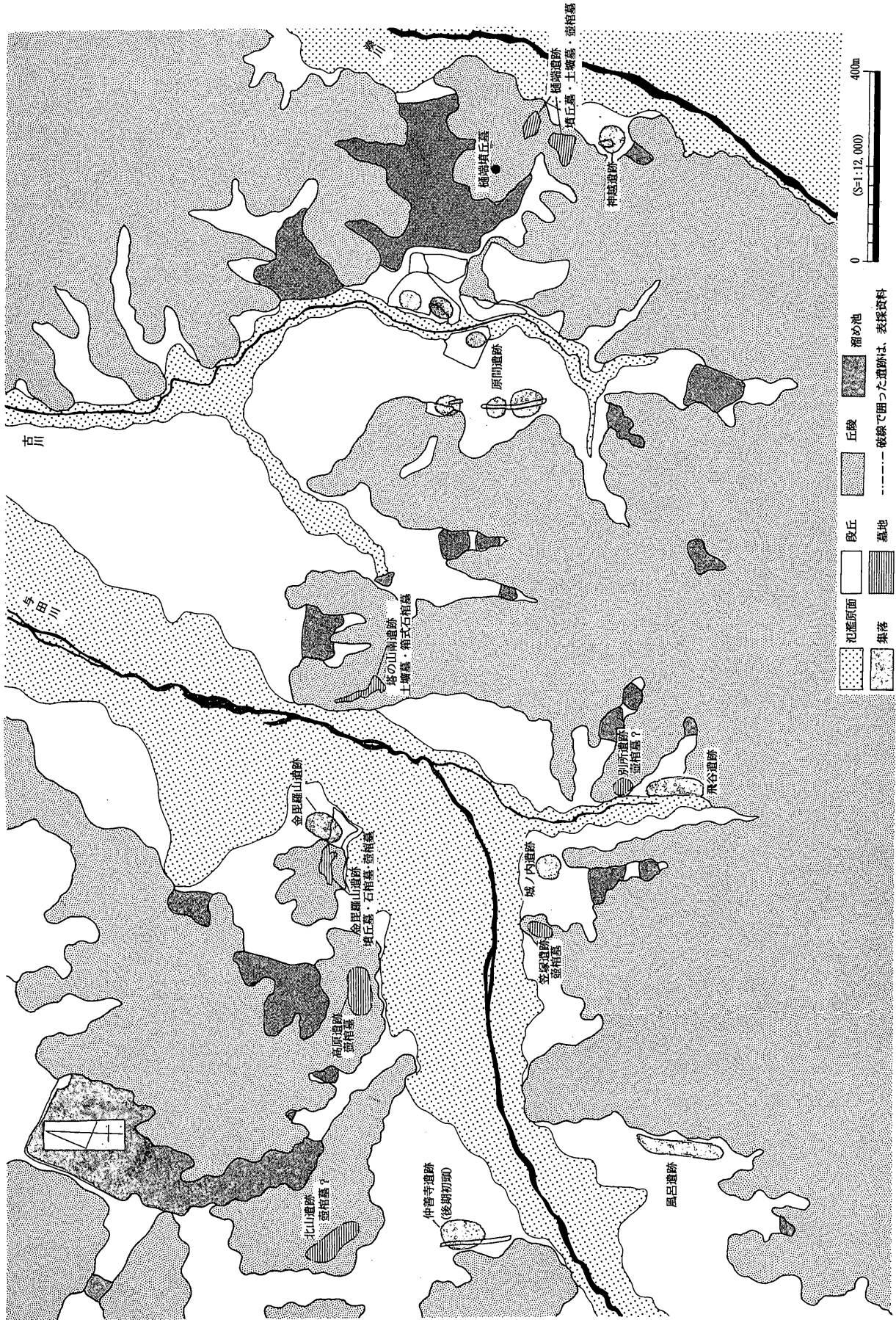
では土器棺片と考えられる大型壺の破片が多く出土していることから、城内内・飛谷遺跡に対応した丘陵上の墓域の可能性が考えられる。原間遺跡で見たような複数の住居群から集落が構成されているのが本地域の一般的な状態とすれば、一つの集落に対応するように周辺の丘陵上に墓域が形成されるが通有であったと考えられる。

遺跡名	内容	時期	備考
樋端墳丘墓	直径 18m 程の円丘墓, 内部主体竪穴式石槨 1	終末 古	
樋端遺跡	墳丘墓 2, 土壙墓 36, 石棺墓 2, 土器棺 26	後期後葉～終末期古	墳丘墓は後期後葉古
塔の山南遺跡	石蓋土壙墓 1, 箱式石棺墓 1, 土壙墓 5,	終末 古	
金毘羅山遺跡	墳丘墓 1, 小型箱式石棺墓 1, 土壙墓 1, 土器棺墓 4	後期後葉～終末期古	
高原遺跡	土器棺墓 1	後期後葉 新	
笠塚遺跡	土器棺墓?	?	大形壺片採集
北山遺跡	土器棺墓?	?	
別所遺跡	土器棺墓?	後期後葉 古	

第 13 表 墓域が確認された遺跡一覧

また、樋端墳丘墓や金毘羅山遺跡墳丘墓に見られる竪穴式石槨の採用や墓域からの破鏡の出土などを考慮すれば、共同墓地の中でも階層差が顕在化している状況が想定できる。

原間遺跡を中心とした住居配置の検討では、このような階層差を示す状況は見られなかったが、後期後半以降終末期まで継続して住居群が形成される原間遺跡の近傍に樋端墳丘墓が出現している点は注意



第 418 図 後期後半から終末にかけての集落と墓地の分布状況

されよう。

## 6. まとめ

今回は中・後期の代表的な遺跡を取り上げて遺構配置・変遷を検討するとどまった。中期後半の凹線文出現期の成重遺跡周辺では2～3棟程度の住居のまとまりを住居群と呼称し、それらが間隔を空けつつ1km程度の範囲の中に7基程存在する状態にあったことを確認した。後期後半から終末にかけての原間遺跡の検討では、2～5棟程度の住居群が移動・消滅を繰り返しながら、2～7基程存在することが明らかになった。中期後半と後期後半から終末の比較では、集落景観自体に大きな変化は見られない。しかし、後期後半以降、遺跡数は確実に増加しており、何らかの変化を想定できる。また、中期段階で不明瞭であった墓域が丘陵上に固定的に営まれ、墳丘墓の出現など墓地の在り方の変化が見られるのも本段階である。現時点では、この変化の内実を明らかにしえないが、今後、遺物論を加味した分析を進めれば、各集落における住居群同士の繋がりの実態や、墳丘墓に示された階層差の発現について明らかになるものと考えられる。今後の検討課題としておきたい。

- 西岡達哉 2003『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四十六冊 池の奥遺跡・金毘羅山遺跡Ⅱ』香川県教育委員会 (財)香川県埋蔵文化財調査センター他
- 森下英治 2002「石器の生産と流通」『第16回古代学協会四国支部研究大会 弥生時代前期末・中期初頭の動態—研究発表要旨集—』古代学協会四国支部
- 大久保徹也 2002「四国北東地域における地域的首長埋葬儀礼様式の成立時期をめぐって」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会
- 木下晴一 2000『埋蔵文化財試掘調査報告XⅠ』香川県教育委員会
- 片桐孝浩 2002「第4章まとめ3. 弥生集落について」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三十九冊 原間遺跡Ⅰ』香川県教育委員会 (財)香川県埋蔵文化財調査センター他

#### 4. 古墳時代の土器

成重遺跡では古墳時代の主な遺構としてⅡ区第1面SH01、Ⅱ区谷1、Ⅲ区第1面SH01・02・03・04、Ⅳ区第1面SH01・02・03・04、Ⅳ区第1面SK01・02がある。これらに加えてⅤ区では終末期の横穴式石室墳が2基検出されている。これらのうち、成重遺跡ではまだ資料的に少ない古墳時代中期の須恵器出現期の土器が竪穴住居跡を中心にまとまって出土しているため、その特徴を簡単にまとめておく。ただし須恵器は全く出土していない。

##### Ⅲ区第1面SH01

上面が削平されて残りは良くなく、全体の半分しか検出できなかった竪穴住居跡である。壺・甕・高杯・小形丸底壺・韓式系土器が出土している。

壺は直口壺で、いずれも口縁部のみの出土である。いずれも口縁部の開きは弱い。端部は平坦なものと同く収めるものがある。

甕は4を除いて「く」字形口縁である。口縁部は直線的なものと外反するものがある。直線的なものの端部はそのまま丸く収めるものが多く、内側に肥厚させるものはその度合いは弱く9の1点である。外反するものの端部は丸い。体部は球形で、内面は上位までヘラ削り、外面は縦方向の後上部に横方向のハケ目を加える。

高杯は口径21.4cmの14が最大で、これ以外は20cm以下である。杯部は上部で外反気味に開き、立ち上がり部の屈曲は鈍く、明瞭な稜や段を持たないものもある。なかには18のように杯部が深く底部が丸みを帯びているものもある。脚部には透かしはなく、下部で屈曲する。脚柱部分の内面はヘラ削りとなる。杯部と脚部には両者の接合時の充填粘土を残すものが多い。

小形丸底壺の体部は扁平な球形で最大径は口径と同じくらいになり、全体に指押さえで整形している。

韓式系土器は甕の底部付近の破片が出土している。底部はナデているが、体部外面には細い長方形の格子目タタキを施している。

##### Ⅲ区第1面SH03

Ⅲ区第1面SH01に重なった位置で上面をSH01により削平されており、さらにSH04にも壊されている竪穴住居跡で焼失したものである。他の住居に壊されていることと調査区際のため全体は検出していない。甕・高杯・小形丸底壺・鉢が出土している。

甕は「く」字形口縁で端部は丸く収める。体部は球形であるが肩の張りは弱い。外面には縦方向のハケ目の後に上下に横方向のハケ目を加える。

高杯は口径20cmに満たないものである。杯部はまだ稜や段をもって立ち上がり、大きく直線的に立ち上がるものと外反気味のものがある。内・外面にはハケ目を施している。脚部は下部で鋭く屈曲しており、脚柱部分の内面はヘラ削りとなる。杯部と脚部には接合時に充填した粘土が残る。

小形丸底壺の口縁部は短い。体部は扁平で最大径は口径を少し上回る。底部は平底に近いものがある。

鉢は精製のものではなく、指押さえが顕著な雑な作りである。体部は口縁部付近で緩く屈曲し、外面には僅かだがヘラ削りが認められる。

### Ⅲ区第1面SH04

Ⅲ区第1面SH01に重なった位置で上面をSH01により削平されており、調査区壁際に位置するため全体は検出できなかった。SH03と同様に焼失している。壺・甕・高杯・小形丸底壺・鉢・韓式系土器が出土している。

壺は二重口縁のもの、外反する口縁をもつものがある。二重口縁のものは、口縁部の屈曲は弱く内面はなだらかである。

甕は「く」字形口縁で、端部は丸いものと先細りのものがあり、内側に肥厚させるものはない。体部は上半の張りが弱い。内面はヘラ削りを施し、外面は縦方向のハケ目である。

高杯は口径25cm程度の大形品と15cm前後の小形品がある。大形高杯の杯部は外反しながら大きく開く。立ち上がり部は明瞭に稜や段が残る。脚部は下部で屈曲し脚柱部内面はヘラ削りである。小形の高杯の杯部は直線的に開くものが多く、立ち上がり部の屈曲は鈍く稜や段がないものもある。脚部に透かしはなく、脚柱部内面はヘラ削りである。杯部と脚部には接合時に充填した粘土が残る。

小形丸底壺の口縁部は短く直線的で、体部は扁平で最大径が口径を上回るものが多い。

鉢は高杯の杯部をそのまま脚を付けずに転用した形のもので、普遍的な形状のものではない。底部は緩やかな丸底である。

韓式系土器は甕の体部小片で、いずれも外面に細い長方形の格子目タタキを施し、内面はナデている。

### Ⅳ区第1面SH01

方形で周囲にテラス状の高まりをもつ竪穴住居跡で、全体を検出したが遺物量は少ない。

甕・高杯・小形丸底壺が出土している。

甕は「く」字形口縁で、上部で外反しており、立ち上がり部の内面は鋭く屈曲している。体部上半部は張っており、内面はヘラ削りである。

高杯の杯部の立ち上がり部は明瞭に稜をもつ。脚部に透かしはなく、脚柱部内面はヘラ削りである。

小形丸底壺は全体を現すものはないが、体部は扁平で平底に近い。

### Ⅳ区第1面SH03

長方形の竪穴住居跡で部分的に土坑に壊されている。土器の出土量は少なく、甕・高杯が出土している。

甕は「く」字形口縁であるが、口縁部はあまり開かず端部は丸い。体部は球形であるが最大径は中央やや上にある。内面はヘラ削り、外面は縦方向のハケ目の後に横方向のハケ目を加えている。

高杯の杯部は屈曲してから大きく開く。屈曲部は鈍く稜はない。

### Ⅳ区第1面SK01

出土量はあまり多くなく、破片のものが多い。甕・高杯・小形器台が出土している。

甕は「く」字形口縁で、直線的に開くものと外反するものがある。端部は丸いものと先細りのものがある。

高杯は、杯部が直線的に開くものと、端部付近で外反するものがある。立ち上がり部の屈曲は鈍く僅かに稜や段を残す。脚部は透かしはなく、脚柱部内面はヘラ削りである。

小形器台は、口縁部端部を上方につまみ出し、受け部は内・外面ともにハケ目を施す。

#### IV区第1面SK02

竪穴住居状の遺構の上から掘り込んでいる土坑である。壺・甕・高杯が出土している。

壺は直口壺で、口縁部は直線的に開くものと、直立に近いものがある。両者とも口縁部端部は先細りである。体部は肩が大きく張るものと、張らないものがある。

甕は「く」字形口縁で、口縁部は若干内湾しており、端部は内側に傾斜している。体部は球形で、内面は指で縦方向にナデている。外面はハケ目をナデ消している。

高杯の杯部の屈曲は鈍く、稜や段は持たずにそのまま、杯部の器高は低く浅い作りである。脚部は透かしはなく、下部で屈曲する。脚柱部の内面はヘラ削りである。

以上、古墳時代の遺構から出土した主な土器の概略を説明した。これらの遺物の時期的な位置を考えてみる。Ⅲ区第1面では竪穴住居跡が3棟前後関係をもって検出された。それによるとSH03→SH04→SH01の順になる。

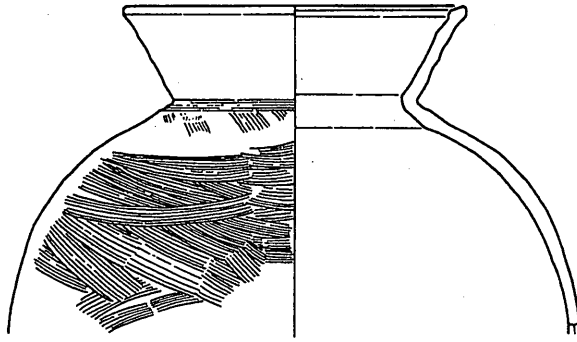
これら3棟の竪穴住居跡出土の土器群の器種組成をみると、壺・甕・高杯・小形丸底壺が主となり、小形器台や小形の精製鉢は欠如している。壺は直口壺が多く、SH04には退化した二重口縁壺を伴う。甕は「く」字形口縁で、口縁部端部の内側への肥厚はほとんど見られない。体部の上半部の張りは弱いものが多く、長胴化を志向している。高杯は杯部の立ち上がり部がSH03ではまだ明瞭な稜や段をもっているが、SH04、SH01に向かうほど鈍くなり丸みを帯びてくるものが多くなる。しかしまだ杯部が椀形になるものは出現していない。しかしSH01では18のように椀形に近いものがすでにある。また量的には少ないが大形高杯もSH04で見られる。また新しい器種としてSH03で浅い鉢が出現している。小形丸底壺は体部が口径を上回るようになっている。これらの特徴から遺構の前後関係と特に矛盾することはなく、SH03→SH04→SH01へと緩やかに変化しており、全体で寺沢編年の布留4式の中に納まるものである。しかし量的に出土している高杯の中で椀形の杯部をもった高杯が出現していないことから布留4式でも古段階と考えられる。IV区第1面SH01・03、SK02も同時期である。一方、IV区第1面SK01では、高杯は稜をもって立ち上がっていることと、まだ小形器台が残っていることから、Ⅲ区第1面SH03より先行すると言える。

これらの竪穴住居跡では須恵器は1点も出土していない。すでに椀形杯部の高杯が出現している原間6号墳ではTK216型式の須恵器が相伴している。現在のところ最古級の須恵器窯として知られている大庭寺遺跡のTG232号窯の灰原下層で出土した土師器は、その特徴から布留4式古段階と考えてよいが、甕の口縁部端部の内側への肥厚はまだ大部分のものに認められる。このことから甕口縁部端部の内側への肥厚がほとんど見られなくなる成重遺跡のⅢ区第1面の竪穴住居群の土師器は、大庭寺遺跡のTG232号窯の灰原下層土師器よりやや後出する要素をもっている。寺沢編年が提出された時点では布留4式の新段階ではTK73型式やTK216型式の初期須恵器を伴い、布留4式古段階ではまだ須恵器は伴わないとされていた段階であった。しかし近年の調査成果でTG232号窯やON231号窯などTK73型式以前の須恵器窯が発見されている。従って成重遺跡のⅢ区第1面の竪穴住居群の土師器は、まさに須恵器生産開始期のものといえ、当然須恵器が定着する以前であるため大多数の集落がまだ須恵器を持たないのである。

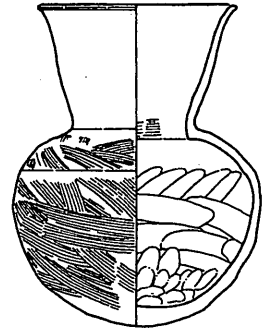


<参考文献>

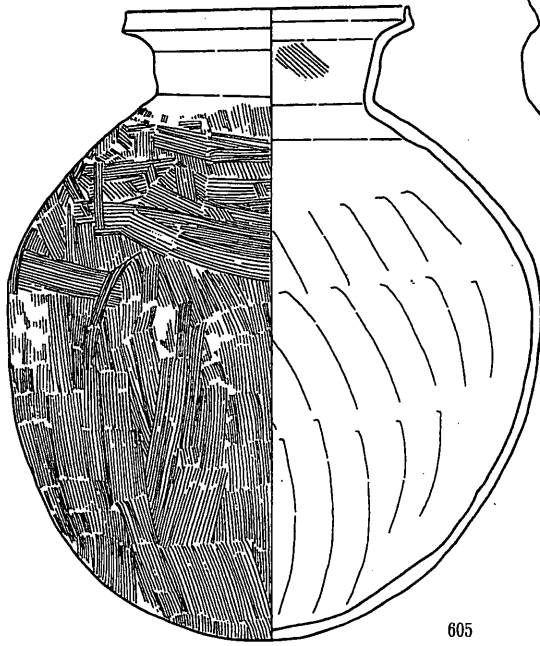
- 岡戸哲紀編『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1995
- 岡戸哲紀『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1996
- 寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 片桐孝浩『原間遺跡Ⅱ』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2002
- 片桐孝浩『樋端遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2002



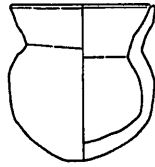
604



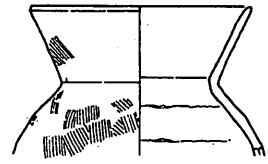
420



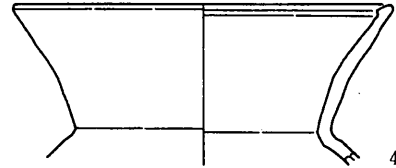
605



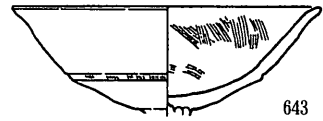
418



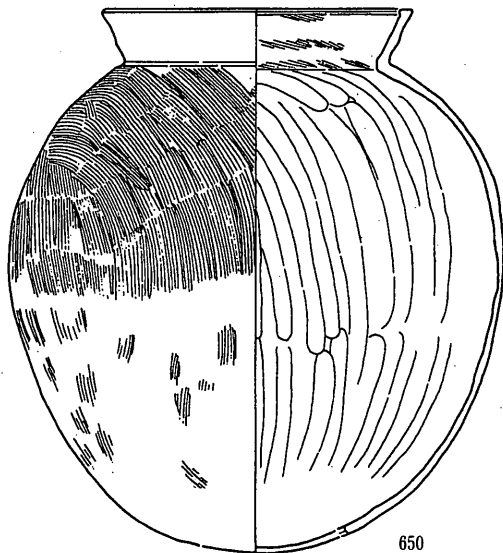
419



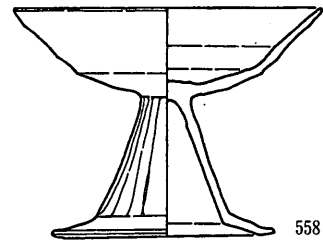
444



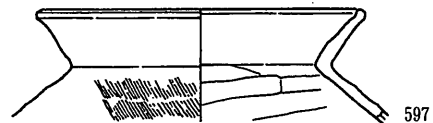
643



650



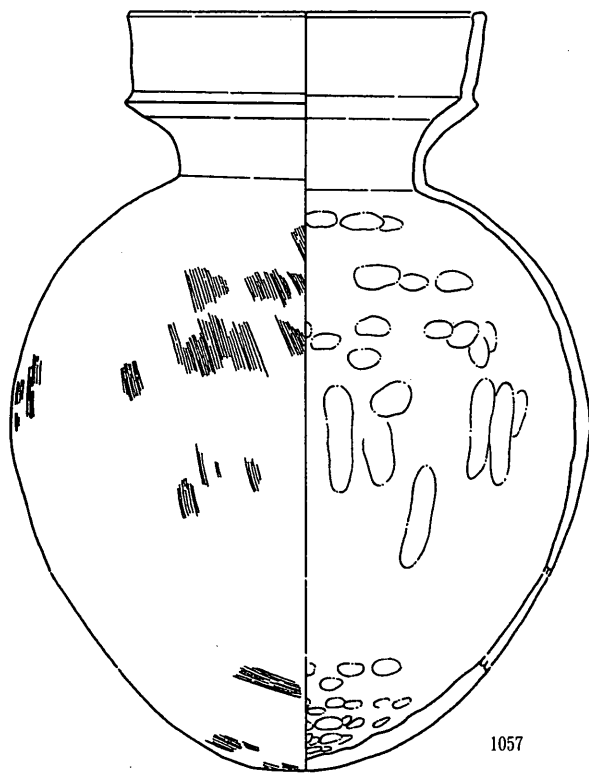
558



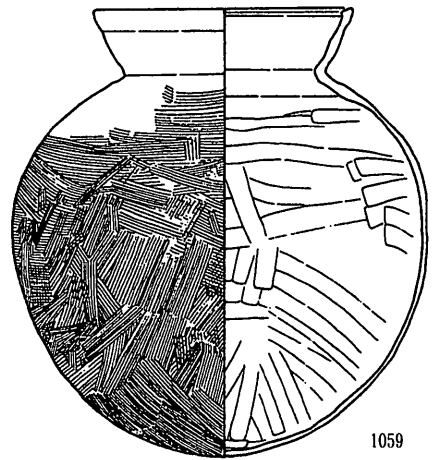
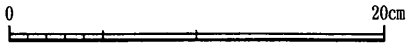
597



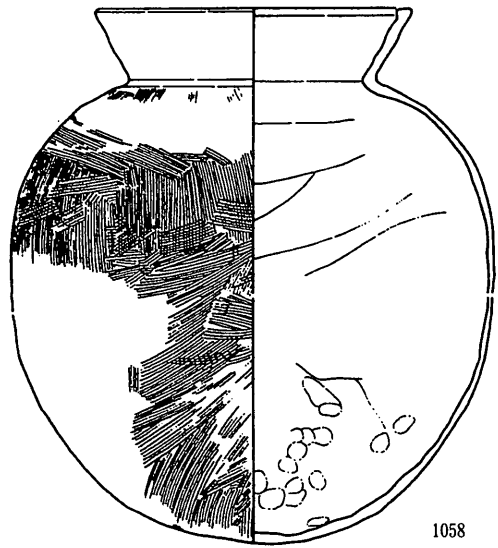
第 419 図 大庭寺遺跡出土土師器 その 1



1057



1059



1058

第 420 図 大庭寺遺跡出土土師器 その 2



1. 遺跡遠景 (南から)



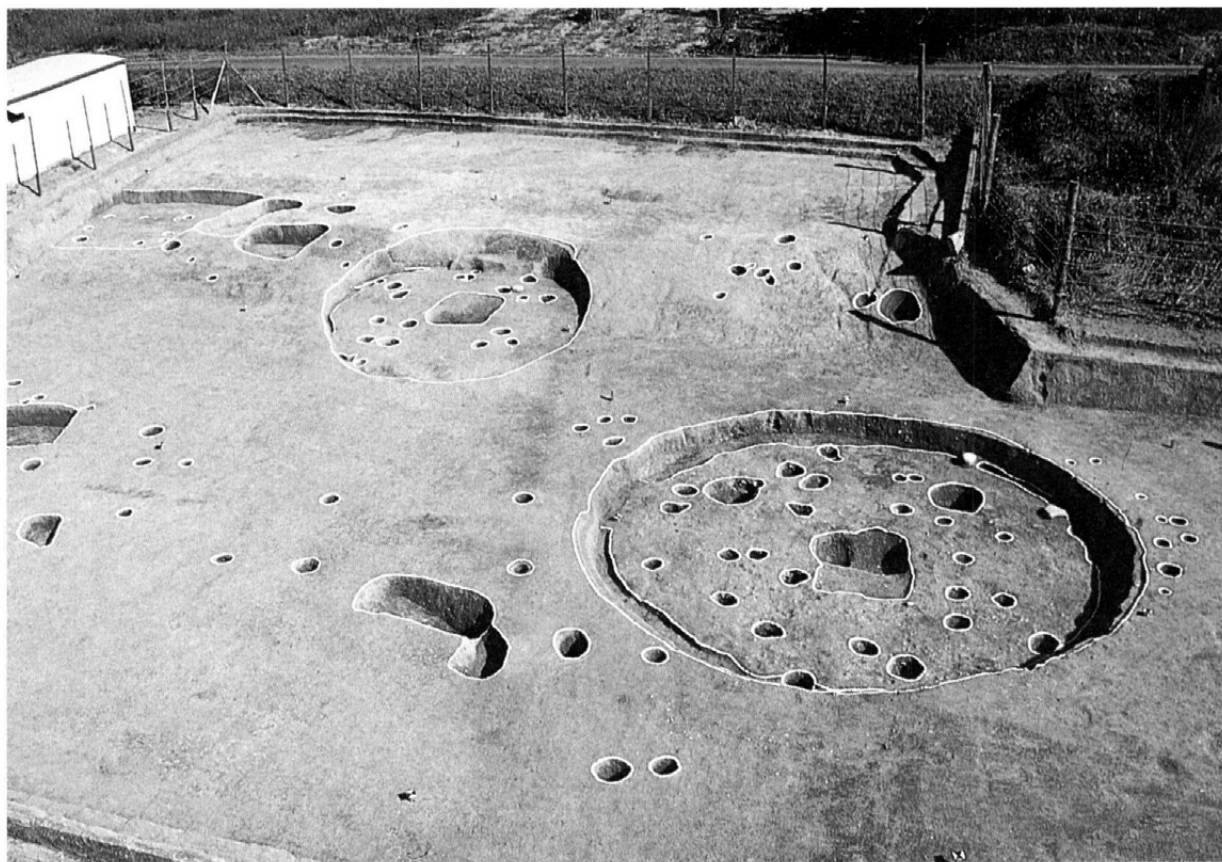
2. 遺跡遠景 (東から)



1. I-1区全景(北から)



2. I-2区東半部全景(北東から)



1. I-11区南半部全景(西から)



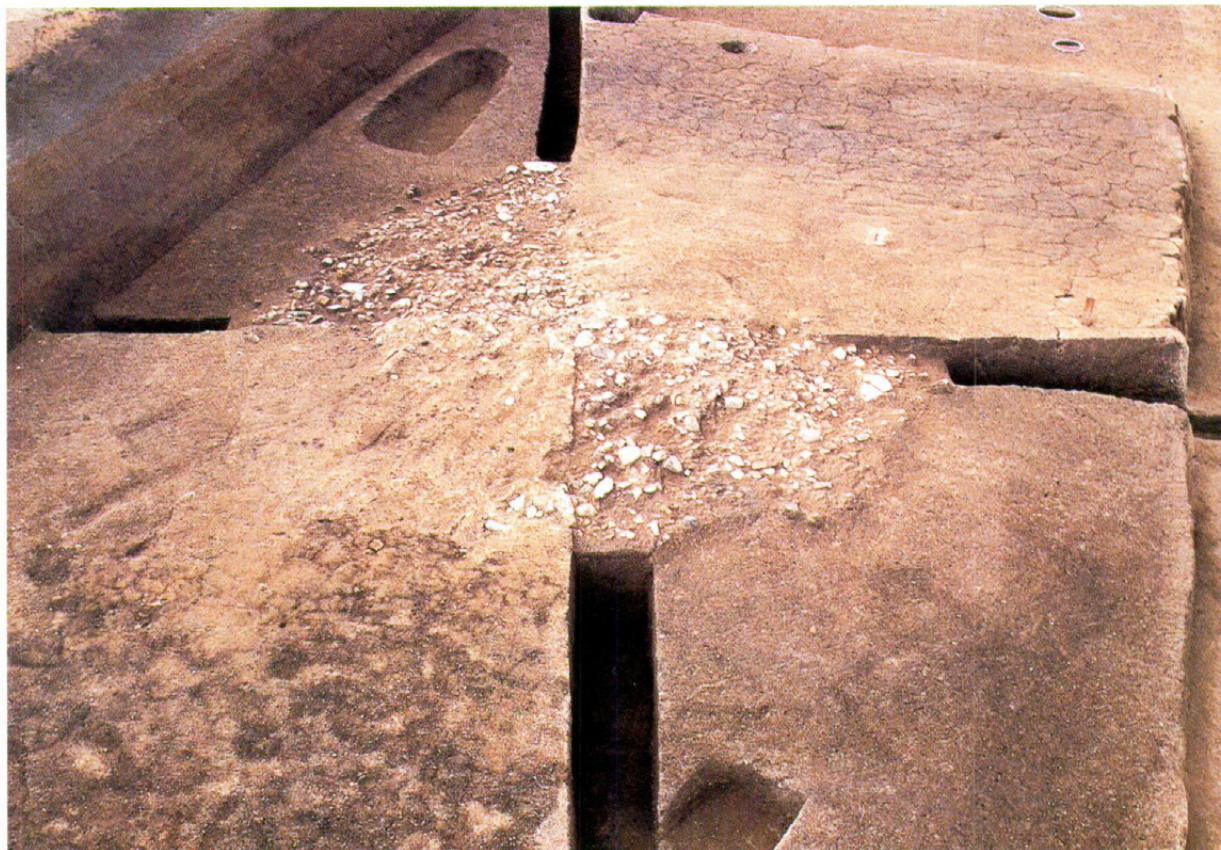
2. II-4区第2面全景(東から)



1. II-6区第2面全景(南西から)



2. II-5区第2面全景(東から)



1. II区第2面S X 0 1上層検出状況(北から)



2. II区第2面S X 0 1上層全景(北から)





1. II区第2面SX01上層全景(西から)



2. II区第2面SX01上層全景(南西から)



3. II区第2面SX01上層の礫群(東から)



4. II区第2面SX01断面(東から)



1. II区第2面SX01断面(南から)



2. II区第2面SX01断面(東から)



3. II区第2面SX01上・下層間の堆積層(南から)



4. II区第2面SX01上層と下層の礫群(南から)



1. II区第2面SX01下層SE01検出状況(南から)



2. II区第2面SX01下層SE01検出状況(南から)



3. II区第2面SX01下層SE01上層断面(西から)



4. II区第2面SX01下層SE01下層断面(西から)



1. II区第2面SX01下層SE01全景(西から)



2. II区第2面SX01下層SE01全景(南から)



3. II区第2面SX05全景(西から)



4. II区第2面SX05断面(北東から)



1. II区第2面S X 0 5断面(北から)



2. II区第2面S X 0 6・0 7全景(南から)



3. II区第2面S X 0 6上層全景(南から)



4. II区第2面S X 0 6下層検出状況(西から)



1. II区第2面SX06下層全景(南西から)



2. II区第2面SX06下層全景(西から)



3. II区第2面SX06下層断面(南から)



4. II区第2面SX06下層断面(東から)



2. II区第2面S X 07全景(北から)



4. II区第2面S X 08検出状況(北から)



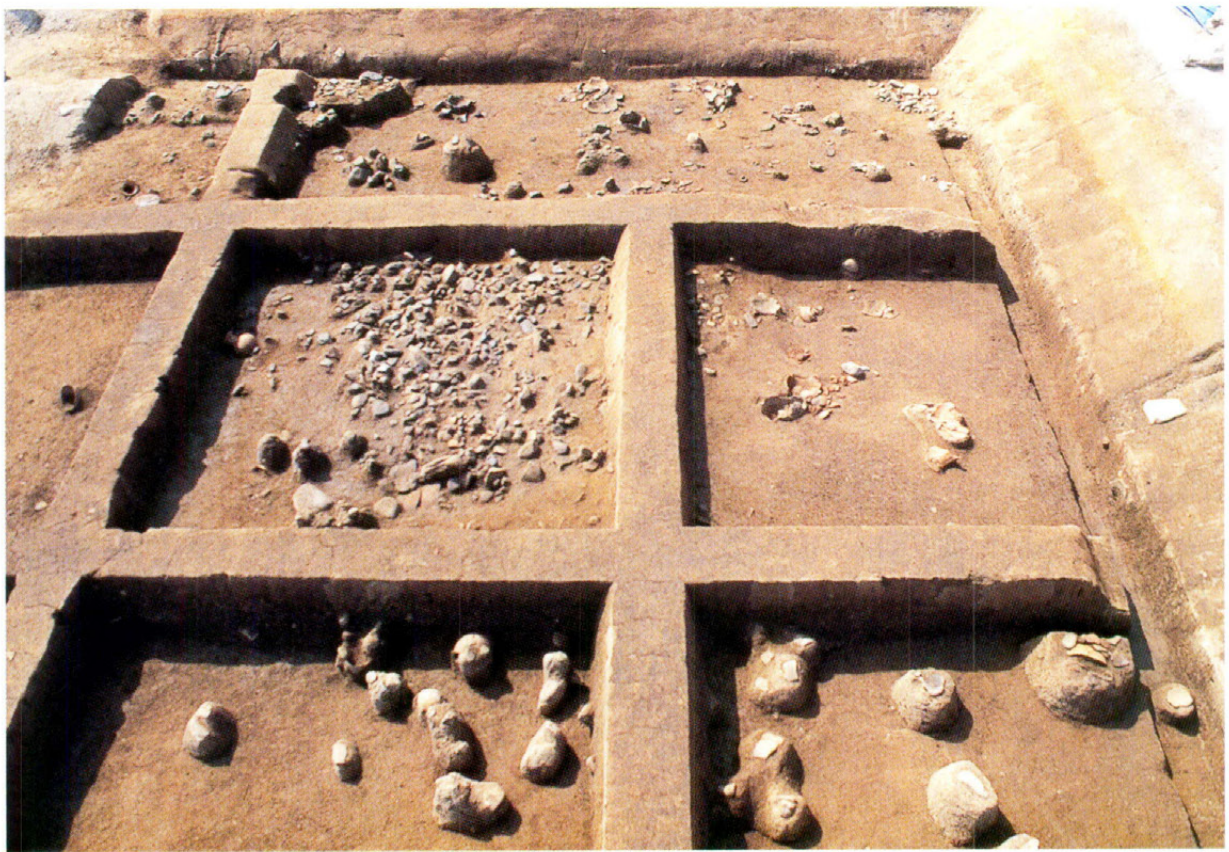
1. II区第2面S X 06完掘状況(西から)



3. II区第2面S X 07断面(東から)



1. II区第2面S X 08全景(北西から)



2. II区第2面S X 08全景(東から)





2. II区第2面SX08磔集中部断面(南から)



4. II区第2面SX08断面(東から)



1. II区第2面SX08磔集中部(東から)



3. II区第2面SX08断面(南西から)



1. II区第2面SX08断面(南から)



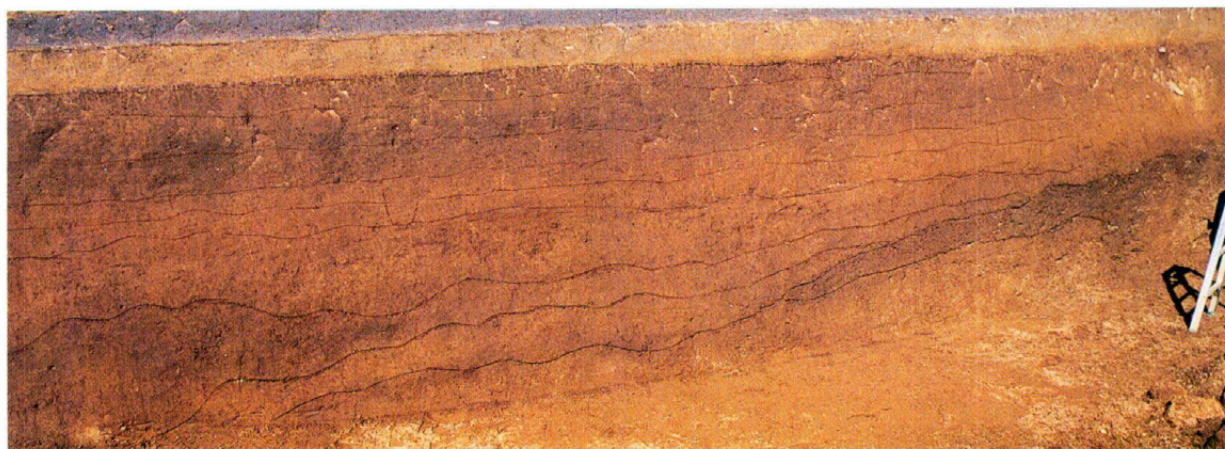
2. II区第2面SX08遺物出土状況(北から)



3. II区第2面SX08遺物出土状況(西から)



4. II区第2面SX08遺物出土状況(南から)



5. II-6区北壁断面(南西から)



6. II-5区北壁断面(南から)



1. II-8区北壁断面(南から)



2. II-2区北壁断面(南から)



3. II区第2面谷2断面(南から)



I-1.2区全景